井原市埋蔵文化財発掘調査報告　2

高越遺跡

高越城址整備事業に伴う発掘調査

2004

岡山県井原市教育委員会

井原市埋蔵文化財発掘調査報告　2

高越遺跡

高越城址整備事業に伴う発掘調査

2004

岡山県井原市教育委員会

１　高越遺跡空撮遠景（北東から）

２　高越遺跡空撮全景（南から）

１　焼失住居（竪穴住居５）全景（西から）

２　竪穴住居11全景（北から）

主な出土鉄器

序

井原市は、岡山県の南西部に位置し、西は広島県に接します。市内のほぼ中央を小田川が西から東へ流れ、北は吉備高原の南端の丘陵が広がり、南は標高100m前後の低丘陵が笠岡まで広がっています。これらの山々に囲まれた本市は、温暖な気候と豊かな自然にはぐくまれ、古くから発展していました。

高越遺跡は、本遺跡の南に所在する高越城址整備事業に伴う駐車場及び広場の造成計画がもちあがり、関係当局と協議、調整の結果、記録保存のための発掘調査をおこなうこととなり、平成10・11年度にかけて発掘調査を実施しました。

調査の結果、市内では初めてとなる弥生時代の集落跡を確認したほか、豊富な鉄器の出土など貴重な資料が発見されました。

本報告書は、今回、発掘調査した成果をまとめたものです。本書が今後の文化財保護、保存に活用されますとともに、学術研究のための資料として、また郷土の歴史研究の資料として役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査をはじめ、出土品の整理、本書の編集に至りますまで、ご指導ご協力を賜りました関係各位に対しまして衷心より厚くお礼申し上げます。

平成16年３月31日

井原市教育委員会

教育長　　三　宅　興太郎

例　言

1．本書は、井原市教育委員会が高越城址整備事業に伴い、井原市の依頼を受け、井原市教育委員会が実施した高越遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡は、井原市東江原町字小丸1745－1外に所在する。

3．発掘調査は、平成11年1月21日から12月28日まで実施した。調査面積は3,600㎡である。整理作業および報告書作成は、平成12年4月1日から平成16年3月31日まで行った。整理作業にあたっては、玉木秀幸・細羽千枝・小牧多恵の協力を得た。

4．調査及び報告書の編集は、井原市教育委員会文化スポーツ課主任学芸員高田知樹が担当した。

5．遺構・遺物写真については、高田が撮影したが、航空写真については㈱アイシーに委託した。

6．出土遺物の分析を下記の専門家に依頼し、有益な成果報告をいただくとともに、多くの御教示と御指導を賜った。記して深謝する。

・土器の胎土分析　　白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）

7．発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等は、すべて井原市教育委員会文化スポーツ課にて保管している。

凡　例

1．報告書に記載された高度値は海抜高であり、方位は、第３章第４図は平面直角座標第Ⅴ系の座標北を、残りはいずれも磁北を示す。

2．本書の第２図に使用した地形図は、井原市発行の都市計画図25,000分の１地形図を複製し、加筆したものである。

3．本書の遺構ならびに遺物の実測図の縮尺率については各図面に図示または明記している。

4．土層断面図等の土色および土器の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修）を参考に記述している。

5．遺構番号の標記にあたって、次に略号を付している。
竪穴住居：**住**　　段状遺構：**段**　　溝状遺構：**溝**　　土壙：**土**　　不明遺構：**不**

6．遺物番号については、土器以外のものについては材質等により下記に示すように頭に略号を付した。
土製品：**C**　　石器：**S**　　金属器：**M**　　玉類：**J**

7．土器実測図中で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があるものを示す。

8．遺物名については、壷形土器、甕形土器、高杯形土器などを壷、甕、高杯のように省略して用いる。

9．報告書中に用いる時代区分は、岡山県教育委員会が発行する『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』で通常使われている概念による。

10．写真図版のうち、遺物写真の番号は掲載遺物番号と一致する。

目　次

序

例　言

凡　例

目　次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1

第２章　発掘調査の経緯と経過 …… 5

第１節　発掘調査にいたる経緯 …… 5

第２節　発掘調査の経過 …… 6

第３章　発掘調査の概要 …… 8

第１節　遺跡の概要 …… 8

第２節　遺構と遺物 …… 8

1　竪穴住居 …… 8

2　段状遺構 …… 37

3　土壙 …… 38

4　溝 …… 109

5　不明遺構 …… 110

6　遺構に伴わない遺物 …… 111

第４章　まとめ …… 114

附　載　高越遺跡出土土器の胎土分析 …… （白石） 118

報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 1

第２図　周辺遺跡分布図 …… 2

第３図　確認調査トレンチ配置図及び調査区域図 …… 5

第４図　遺跡全体図 …… 9

第５図　竪穴住居１・出土遺物 …… 10

第６図　竪穴住居２・３ …… 11

第７図　竪穴住居２・３出土遺物 …… 12

第８図　竪穴住居４ …… 13

第９図　竪穴住居4出土遺物 …… 14

第10図　竪穴住居５・６ …… 15

第11図　竪穴住居５・６炭化材出土状況 …… 16

第12図　竪穴住居５・６出土遺物① …… 17

第13図　竪穴住居５・６出土遺物② …… 18

第14図　竪穴住居７ …… 18

第15図　竪穴住居7出土遺物① …… 19

第16図　竪穴住居７出土遺物② …… 20

第17図　竪穴住居８・９・出土遺物 …… 21

第18図　竪穴住居８・９出土鉄器 …… 22

第19図　竪穴住居10変遷 …… 23

第20図　竪穴住居10 …… 24

第21図　竪穴住居10土層・出土遺物① …… 25

第22図　竪穴住居10出土遺物② …… 26

第23図　竪穴住居10出土遺物③ …… 27

第24図　竪穴住居10出土遺物④ …… 28
第25図　竪穴住居11・出土遺物 …… 29
第26図　竪穴住居12・出土遺物 …… 29
第27図　竪穴住居13 …… 30
第28図　竪穴住居13出土遺物① …… 30
第29図　竪穴住居13出土遺物② …… 31
第30図　竪穴住居14 …… 32
第31図　竪穴住居14出土遺物 …… 33
第32図　竪穴住居15 …… 34
第33図　竪穴住居15出土遺物① …… 35
第34図　竪穴住居15出土遺物② …… 36
第35図　段状遺構１・出土遺物 …… 37
第36図　段状遺構２・出土遺物 …… 38
第37図　土壙１・２・出土遺物① …… 39
第38図　土壙１・2出土遺物② …… 40
第39図　土壙３・出土遺物 …… 41
第40図　土壙４・５・出土遺物 …… 42
第41図　土壙６・７・出土遺物 …… 43
第42図　土壙８・出土遺物 …… 44
第43図　土壙９・出土遺物① …… 45
第44図　土壙9出土遺物② …… 46
第45図　土壙10・出土遺物 …… 46
第46図　土壙11・出土遺物 …… 47
第47図　土壙12・13 …… 48
第48図　土壙13出土遺物 …… 49
第49図　土壙14・15 …… 50
第50図　土壙16・出土遺物 …… 50
第51図　土壙17・出土遺物 …… 51
第52図　土壙18・19・20・出土遺物 …… 52
第53図　土壙20・出土遺物 …… 53
第54図　土壙21・出土遺物 …… 53
第55図　土壙22・23・出土遺物 …… 54
第56図　土壙24・25・26・出土遺物 …… 55
第57図　土壙26出土遺物 …… 56
第58図　土壙27・出土遺物 …… 56
第59図　土壙28・29・30・31・出土遺物 …… 57
第60図　土壙32・33・34 …… 58
第61図　土壙34・出土遺物 …… 59
第62図　土壙35・36・37・38 …… 60
第63図　土壙39・40・41・出土遺物 …… 61
第64図　土壙42・出土遺物 …… 62
第65図　土壙43・出土遺物 …… 63
第66図　土壙44 …… 63
第67図　土壙45・出土遺物 …… 64
第68図　土壙46・47・48 …… 65
第69図　土壙49・50・出土遺物 …… 66
第70図　土壙51・52・出土遺物 …… 67
第71図　土壙53・54・出土遺物 …… 68
第72図　土壙55・56・出土遺物 …… 69
第73図　土壙56出土遺物 …… 70
第74図　土壙57 …… 70
第75図　土壙58・59・出土遺物 …… 71
第76図　土壙60・出土遺物 …… 72
第77図　土壙61・出土遺物① …… 73
第78図　土壙61出土遺物② …… 74
第79図　土壙61出土遺物③ …… 75
第80図　土壙61出土遺物④ …… 76
第81図　土壙62・出土遺物 …… 77
第82図　土壙63・64 …… 78
第83図　土壙64出土遺物① …… 79
第84図　土壙64出土遺物② …… 80
第85図　土壙65・出土遺物 …… 81
第86図　土壙66・67・68・出土遺物 …… 82
第87図　土壙69・70・71・72・出土遺物 …… 83
第88図　土壙73・出土遺物 …… 84
第89図　土壙74・75 …… 85
第90図　土壙76・77・78・出土遺物 …… 86
第91図　土壙79・出土遺物 …… 87
第92図　土壙80・81・出土遺物① …… 88
第93図　土壙80・81出土遺物②・土壙82・83 …… 89
第94図　土壙84・85・出土遺物 …… 90
第95図　土壙86・出土遺物① …… 91
第96図　土壙86出土遺物② …… 92
第97図　土壙86出土遺物③・土壙87・出土遺物 …… 93
第98図　土壙88・89・出土遺物 …… 94
第99図　土壙90・92・出土遺物① …… 95
第100図　土壙90・92出土遺物②・土壙91・出土遺物 …… 96
第101図　土壙93・94・95・出土遺物① …… 97
第102図　土壙95出土遺物②・土壙96・出土遺物 …… 98
第103図　土壙97・98・99・出土遺物 …… 99
第104図　土壙99出土遺物・土壙100 …… 100
第105図　土壙100出土遺物・土壙101・102 …… 101
第106図　土壙103～106 …… 102
第107図　土壙107・出土遺物 …… 103
第108図　土壙108・109・出土遺物 …… 104
第109図　土壙110・111・出土遺物 …… 105

第110図　土壙112～114・出土遺物 106
第111図　土壙115・116・出土遺物 107
第112図　土壙116出土遺物 108
第113図　土壙117・118・出土遺物 109
第114図　溝１・２ 110
第115図　不明遺構１ 111
第116図　遺構に伴わない遺物① 111
第117図　遺構に伴わない遺物② 112
第118図　高越遺跡出土の弥生時代後期土器の変遷 114
第119図　高越遺跡の遺構の変遷 116

図版目次

巻頭図版１－１　高越遺跡空撮遠景
－２　高越遺跡空撮全景
巻頭図版２－１　焼失住居（竪穴住居５）全景
－２　竪穴住居11全景
巻頭図版３　主な出土鉄器

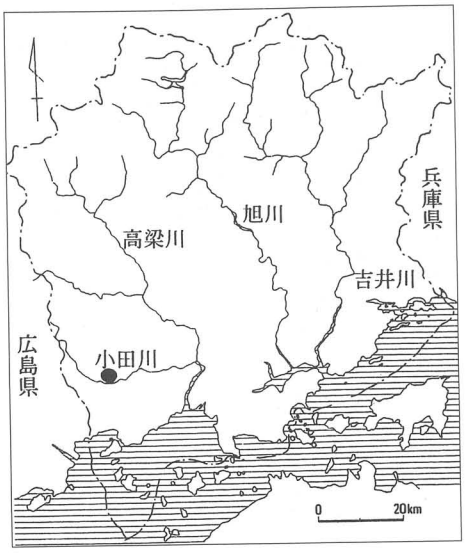
図版１－１　遺跡遠景（西から）
－２　調査区（東）全景
－３　調査区（東）土壙群
図版２－１　調査区（西）全景
－２　竪穴住居１（北東から）
－３　竪穴住居２・３（西から）
図版３－１　竪穴住居２鉄鎌出土状況（東から）
－２　竪穴住居２鉄鎌出土状況（南から）
－３　竪穴住居４（北から）
図版４－１　竪穴住居５（西から）
－２　竪穴住居５炭化材検出状況（東から）
－３　竪穴住居６炭化材検出状況（北東から）
図版５－１　竪穴住居７（東から）
－２　竪穴住居８（北から）
－３　竪穴住居９（北東から）
図版６－１　竪穴住居10作業風景（北から）
－２　竪穴住居10段状遺構検出状況（北から）
－３　竪穴住居10方形住居（北から）
図版７－１　竪穴住居11（西から）
－２　竪穴住居12（南から）
－３　竪穴住居13（北東から）
図版８－１　竪穴住居14（北から）
－２　竪穴住居15（北から）
－３　段上遺構１（東から）
図版９－１　段上遺構２（東から）
－２　土壙１（北東から）
－３　土壙５（北東から）
図版10－１　土壙11（南東から）
－２　土壙13（北から）
－３　土壙30（南から）
図版11－１　土壙34（南から）
－２　土壙50（南から）
－３　土壙52（北から）
図版12－１　土壙60遺物出土状況（南から）
－２　土壙61土層断面（北から）
－３　土壙62遺物出土状況（北東から）
図版13－１　土壙65遺物出土状況（東から）
－２　土壙85遺物出土状況（南から）
－３　土壙86遺物出土状況（北西から）
図版14－１　土壙86炭化米出土状況（北から）
－２　土壙87出土土器入れ子状況
－３　竪穴住居11内土壙群（西から）
図版15－１　土壙96（南から）
－２　土壙103（南から）
－３　土壙117（南から）
図版16－１　竪穴住居出土土器
－２　土壙出土土器①
図版17　土壙出土土器②
図版18　土壙出土土器③
図版19　出土金属器
図版20　出土特殊器台・土製品・石器・玉類

表 図 版

第１表　土製品一覧表 112
第２表　石製品一覧表 112
第３表　金属製品一覧表 113
第４表　小玉一覧表 113

第１章　遺跡の位置と環境

高越遺跡は、井原市東江原町字小丸及び神代町字小丸に所在している。井原市は、岡山県の最西端に位置し、南は笠岡市、西は広島県深安郡神辺町、福山市、北は小田郡美星町、後月郡芳井町、東は小田郡矢掛町に接する。南部は笠岡から広がる標高100ｍ前後の丘陵地帯、北部は吉備高原の南辺部にあたり、その多くが標高200ｍを超える台地となっている。そのほぼ中央を小田川が沖積平野をつくりながら神戸川、雄神川、稲木川などの支流を合わせて西から東へ流れている。この東西に長い沖積平野と並行するように井原線が走り、人口もこの平野に集中し、都市部を形成している。



第１図　遺跡位置図

本遺跡は、市の東端の吉備高原より広がり、南へ派生した標高約140ｍの丘陵南斜面に位置する。すぐ南側には、中世の山城である高越城址が所在し、その南方向の眼下には、小田川が西から東へ流れている。また、その流れに沿うように古代から山陽道が通っており、交通の幹線となっていた。

現在までに知られている市内の遺跡は、旧石器時代、縄文時代のものは確認されていない。弥生時代においても、前期までの遺跡は確認されておらず、中期以降の遺跡が知られている。弥生時代中期の遺跡として注目されるのは、六区袈裟襷文銅鐸が出土した下稲木町の寺屋敷銅鐸出土遺跡（１）、同町の明見銅鐸出土遺跡（２）、十二区袈裟襷文銅鐸が出土した木之子町の猿森銅鐸出土遺跡（３）がある。いずれも標高約100ｍの同一丘陵上のゆるやかな南斜面より出土しており、特に寺屋敷銅鐸出土遺跡、明見銅鐸出土遺跡は出土位置が50メートルしか離れていない。銅鐸の出土した近隣では、同時代の散布地も確認されているため（４）、発掘調査されれば、集落跡が確認されるであろう。しかしながら、本遺跡の周囲では、同時代の遺跡は今のところ確認されていない。

後期になると市内の遺跡数が大幅増加する。本遺跡の周囲では、発掘調査例がないため、集落跡等は確認されていない。しかしながら、本遺跡の西側の沖積地をはさんだ丘陵上には、高岩遺跡、鳥ヶ市遺跡など本遺跡と同じ立地に後期の散布地（５）が点在するため、今後、発掘調査されれば同時代の集落跡が確認されるであろう。また、小田川をはさんだ木之子町西郷の長法寺遺跡では、明治時代に小田川の河川改修をした際、特殊壷が出土している（６）。

弥生時代終末期から古墳時代初頭では、笹賀町に所在する金敷寺裏山墳丘墓（７）が注目される。墳丘は長方形で、中央に竪穴式石室をもち、人骨一体が出土した。また、墳丘からは、特殊器台、特殊壷が出土している。

古墳時代にはいると、ほぼ市内全域で古墳がみられる。古墳時代前期は、箱式石棺を持つ小規模なものが中心ではあるが、東江原町の内挟１号墳（８）は直径が40ｍを超え、市内最大の円墳となる。また、谷をはさんだすぐ西側の丘陵上にも直径30ｍを超える甲山古墳（９）が所在する。発掘調査した例では、大

1	高越遺跡	11	荒神谷遺跡	21	長谷製鉄関連遺跡	31	岡井遺跡
2	高越城跡	12	高木遺跡	22	長谷遺跡	32	明地遺跡
3	西伏村製鉄関連遺跡	13	高塚古墳	23	岱古墳	33	甲山古墳
4	末国(南)遺跡	14	宮ノ峠古墳	24	高岩遺跡	34	長法寺遺跡
5	フジヤ遺跡	15	宮ノ峠遺跡	25	高岩古墳群	35	山手古墳群
6	土井遺跡	16	東山古墳	26	鳥ヶ市遺跡	36	県主神社古墳
7	西天財遺跡	17	久保遺跡	27	坂田古墳	37	福当遺跡
8	西天財古墳	18	有年遺跡	28	米持城跡	38	西山遺跡
9	大下遺跡	19	山崎古墳群	29	内挟古墳群	39	三光寺裏山古墳
10	石原遺跡	20	山崎遺跡	30	明地古墳群	40	道山古墳

第２図　周辺遺跡分布図（1／25,000）

江町の石塔山古墳（10）、下出部町岩崎山３号墳（11）は倉敷考古館によって発掘調査され、いずれも竪穴式石室より人骨及び少量の鉄器が出土している。また、本遺跡の近隣では、西側丘陵山裾の尾根先端に仿製内行花文鏡が出土した高塚古墳（12）が所在するほか、木之子町の高月丘陵から東に延びる丘陵尾根上には、二神二獣鏡や銅鏃が出土した山手古墳群（13）が所在する。

横穴式石室をもつ後期古墳も市内全域に広がる。井原市七日市町から岩倉町にかけて県道笠岡井原線の谷筋には塚原古墳群、権現平古墳など石室の奥壁幅1.5mを超える比較的大きな横穴式石室をもつ古墳が集中する。その中の東大谷１号墳（14）は、発掘調査の結果、金銅装馬具、金銅装大刀金具などが出土している。

また、本遺跡の周囲では、小田川をはさんだ南側の丘陵の北斜面山裾に、石室の形状から市内最古の横穴式石室と考えられる道山古墳（15）が所在する。この古墳からは銅釧が出土している。また、この道山古墳が所在する丘陵山頂には、横穴式石室を並行に２基もつ県内でも珍しい形態をもつ三光寺裏山古墳（16）が所在する。いずれも石室長が８mを超える市内でも大規模な横穴式石室をもつ古墳である。しかしながら、これらの古墳に伴う集落跡であるが、現在のところ市内では確認されていない。これは、市内の調査例が少ないことによるためであり、本遺跡の丘陵山裾にも古墳時代の散布地が、山崎遺跡、宮ノ峠遺跡など所在する（17）ため、今後調査が進めば古墳時代の集落跡が確認されると考えられる。

古代に入ると、本遺跡の所在する丘陵のすぐ南側を、東西に山陽道が通る。しかしながらそのルートは特定できず、稲木川のある沖積平野を通っていたという説もある。また、西江原町寺戸には白鳳期に創建されたと伝えられる寺戸廃寺（18）がある。ここからは複弁蓮華文の軒丸瓦が伝わっており、笠岡市関戸の関戸廃寺（19）と同型で、隣接した地域での豪族同士の結び付きが考えられる。この寺は、平安時代初頭までの瓦が伝わっており、そのころまで存続していたようである。また、奈良時代以降、密教系の山岳寺院が、市内の小田川によって形成された沖積平野を見渡せる丘陵部を中心に建立される。いずれの寺院も現在まで存続しており、この地域の仏教文化を担っていた。

中世にはいると、山陽道を見渡せる丘陵上を中心に山城が築城され、南北朝の騒乱や戦国時代には文献にも現れ、近世にはいるまで利用されていたようである。本遺跡のすぐ南の丘陵に所在する高越城跡は、この地域でも大規模な城跡で、後の北条早雲が出たと伝えられる備中伊勢氏の居城とされている。また、市内のほぼ全域で中世の五輪塔、宝篋印塔が点在しており、土豪層が市域に広く住んでいたことがうかがわれる。

また、時期は不明であるが鉄滓が散布する遺跡が市内全域に確認されている。本遺跡の近隣では、西伏村製鉄関連遺跡（20）があり、平成12年度に確認調査を実施している。製鉄炉などの遺構は確認できなかったが、炉壁も出土しているため、製鉄をおこなっていたと推測される。規模が小さいため中世以前のものと考えられる。

註

（１）　梅原末治　『吉備考古』84号　1952年

（２）　『岡山県埋蔵文化財報告』　25　岡山県教育委員会　1992年

（３）　鎌木義昌　「岡山県猿ノ森遺跡」『日本農耕文化の形成』　杉原荘介編　1961年

（４）　『井原市遺跡地図』　井原市教育委員会　2001年

（５）　註（４）に同じ。

（６）　間壁忠彦　「岡山県井原市木之子町長法寺出土の壷」『倉敷考古館研究集報』第３号　倉敷考古館　1967年

（７）　間壁忠彦・間壁葭子「岡山県井原市金敷寺裏山古墳」『倉敷考古館研究集報』第５号　倉敷考古館　1969年

（８）　高田知樹　「市内古墳の測量調査」『井原市史紀要　井原の歴史』第２号　井原市史編集委員会　2002年

（９）　註（４）に同じ

(10)　鎌木義昌　『岡山の古墳』　岡山文庫４　日本文教出版　1970年

(11)　間壁忠彦　「岡山県下の人骨を出土した古墳六例」『倉敷考古館研究集報』第４号　倉敷考古館　1968年

(12)　註（４）に同じ

(13)　間壁忠彦・間壁葭子　『日本の古代遺跡　23　岡山』　保育社　1985年

(14)　高田知樹　『東大谷１号墳』　井原市教育委員会　2003年

(15)　註（８）に同じ

(16)　註（８）に同じ

(17)　註（４）に同じ

(18)　永山卯三郎　『岡山県通史』　岡山県　1930年

(19)　安東康宏・岩崎仁司　『関戸廃寺』　笠岡市教育委員会　1997年

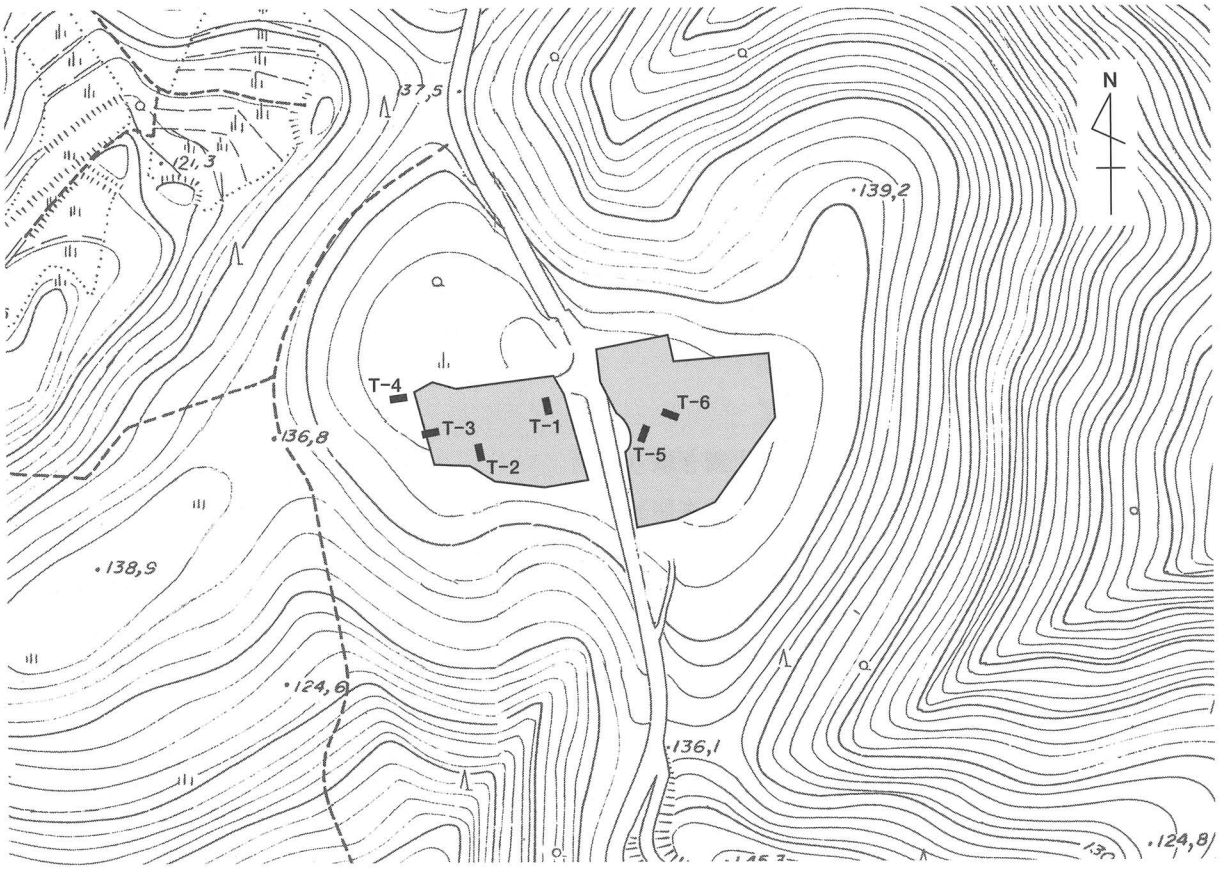
(20)　註（４）に同じ

第２章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査にいたる経緯

平成８年（1997年）、井原市では、井原市指定史跡である高越城跡の観光及び管理を目的とした整備が計画された。城跡へ上がる管理道については、市の担当課である商工観光課及び市教育委員会文化スポーツ課、県文化課と協議を行った結果、工事が城の主郭部分へ影響のないよう計画を変更し、工事の際には、立会調査を実施した。また、城跡の谷をはさんだ北側の丘陵に駐車場及び多目的広場が計画されていた。この計画地内には周知の遺跡は所在していなかったが、城跡のすぐ北側の平坦な丘陵ということで、城の関連施設の存在が予想されたため、確認調査を実施することとなった。確認調査は、平成10年６月１日より実施した。計画予定面積約5,900㎡の内、丘陵頂上部から斜面部を中心にトレンチを設定した。トレンチは、樹木が密集しているため、侵入路付近を中心に、等高線に直行する形で、幅２ｍ、長さ５ｍで合計７ヶ所いれた。調査の結果、設定したトレンチ７ヶ所のうち５ヶ所で弥生時代の遺構及び遺物が確認され、弥生時代の集落跡の存在が予想された。この結果を受け、市担当課及び文化スポーツ課、県文化課と協議をおこなったが、設計変更が困難であることから、発掘調査による記録保存をおこなうこととなった。

この協議をうけ、井原市より平成10年10月５日付けで遺跡発見の通知がおこなわれ、平成11年１月16日より、調査面積3,600㎡の発掘調査を開始した。



第３図　確認調査トレンチ配置図及び調査区域図（１／2,500）

第２節　発掘調査の経過

高越遺跡の発掘調査は、まず、第１次調査として、平成10年６月１日より遺跡の有無、範囲、時代等の確認のためのトレンチ調査を実施し、トレンチは合計７ヶ所いれた。このうち、Ｔ－１～Ｔ－４、Ｔ－６の５ヶ所で、甕や壷、高杯などの弥生土器、ガラス製の小玉が出土し、Ｔ－１・Ｔ－２、Ｔ－６からは土壙、Ｔ－３・Ｔ－４からは竪穴住居が検出された。

この第１次調査をうけ、丘陵中央を通る道路を挟んで東側を駐車場区、西側を広場区とし、平成11年１月16日より、駐車場区の発掘調査に着手した。遺跡が所在する丘陵は、もともと畑地が所在していたが、その後、荒地になっており、樹木等の伐採、重機による表土の剥ぎ取りから取りかかった。表土剥ぎの後、１月21日より遺構検出を開始した。調査にあたっては、10m四方のグリッドを設定し、杭打ちをおこなった。遺構は、全般に分布していたが、丘陵平坦面は、比較的遺構密度が薄く、丘陵斜面に集中している。検出した遺構は、丘陵頂部付近に貯蔵穴と考えられる土壙が多くみられ、その下側の斜面に竪穴住居が確認された。６月２日には、駐車場区の遺構がある程度完掘できたため、ラジコンのヘリコプターによる航空写真を撮影した。また、地元住民を対象とした遺跡の現地説明会を６月12日に実施し、約150人の参加があった。また、完掘した遺構から順次、文化スポーツ課の職員の協力を得て、測量をおこない、７月12日より、道路を挟んだ西隣の広場区の調査を開始した。

広場区も駐車場区と同様に丘陵平坦部の遺構密度は薄く、丘陵斜面に貯蔵穴、竪穴住居が検出された。12月24日には、広場区の遺構が完掘できたため、駐車場区と同様ラジコンのヘリコプターによる航空写真を撮影した。また、完掘した遺構から順次、文化スポーツ課の職員の協力を得て、測量をおこない、12月28日には全調査が終了した。

なお、調査期間中、岡山県古代吉備文化財センターより15日間にわたり調査員２名を派遣いただき、調査の協力を得た。

調査日誌抄

平成10年度

６月１日（月）	１次調査開始
19日（金）	１次調査終了
１月16日（土）	樹木伐採、表土剥ぎ取り開始
21日（木）	駐車場区の発掘調査開始

平成11年度

６月２日（水）	駐車場区の航空写真撮影
６月12日（土）	現地説明会開催
７月12日（月）	広場区の発掘調査開始
12月24日（金）	広場区の航空写真撮影
28日（火）	調査終了

調査・整理の体制

井原市教育委員会

教 育 長	三宅興太郎
教育次長	山村章志（11年度まで）、西山恒男（12・13年度）、久津間憲通（14年度）、畑地　泉（15年度）

文化スポーツ課

課　　長	小川智之（10年度まで）、渡辺良信（11年度～14年度）、池田孝雄（15年度）
課長補佐	畑地　泉（11年度まで）、松岡土貢恵（12・13年度）、原田宜典（14年度～）
主任学芸員	高田知樹（調査担当）
主　　事	西本洋子（14年度まで）、三輪純子（15年度）
学芸員（嘱託）	玉木秀幸（整理・12・13年度）
臨時職員	谷本有紀（10年度）、原田成明（11年度）、吉山慎一（11年度）、細羽千枝（整理・12年度から）
学生アルバイト	重政　晃、藤井秀則、松本晃典、渡辺省吾

（調査作業員）

荒木美信、大平明子、大平實夫、川井　進、川上和男、川上皖市、木山石男、萩原美雪、原田　哲、三宅公子、三宅勇二、宮原カネ子、宮原要一郎

発掘調査および報告書作成にあたっては、岡山県教育庁文化財課、岡山県古代吉備文化財センターから多大な援助を受けた。また、下記の方々からは調査全般にわたり有益なご教示、協力を得た。記して感謝します。

安東康宏、大橋雅也、岡本泰典、尾上元規、金田善敬、亀山行雄、草原孝典、葛原克人、小林利晴、小牧多恵、佐藤寛介、重根弘和、白石　純、松本和男、高畑知功、平井泰男、福本　明、藤江　望、藤原好二、間壁忠彦、正岡睦夫、米田克彦

（敬称略、50音順）

第３章　発掘調査の概要

第１節 遺跡の概要

高越遺跡は、井原市の東端にあたり、市の北部に広がる野上地区の丘陵から南方向に派生する標高148ｍの尾根上及び南に広がる緩やかな斜面に所在する。この丘陵の南側は、中世の山城である高越城跡の堀切と考えられる深い谷があり、それを挟んで標高172.8ｍの高越城跡の主郭がある高越山が所在する。そのため、南方向の見通しはよくない。また、東側は、約300ｍほどで神代町の平野があり、西側は、約500ｍで東江原町の平野が広がる。いずれも、遺跡の所在する丘陵との比高差が約100ｍあり、これらの平野やその平野につながる丘陵が直接見わたせる。

調査の結果、遺構は、竪穴住居15軒、段状遺構２基、土壙118基、溝２条、不明遺構１基が検出された。遺物は、弥生土器、金属器、土製品、石器などがあり、集落の時期は、弥生時代後期と考えられる。これらの集落は、地形から、調査区の西側へのびる丘陵へ広がると想定される。

第２節　遺構・遺物

１．竪穴住居

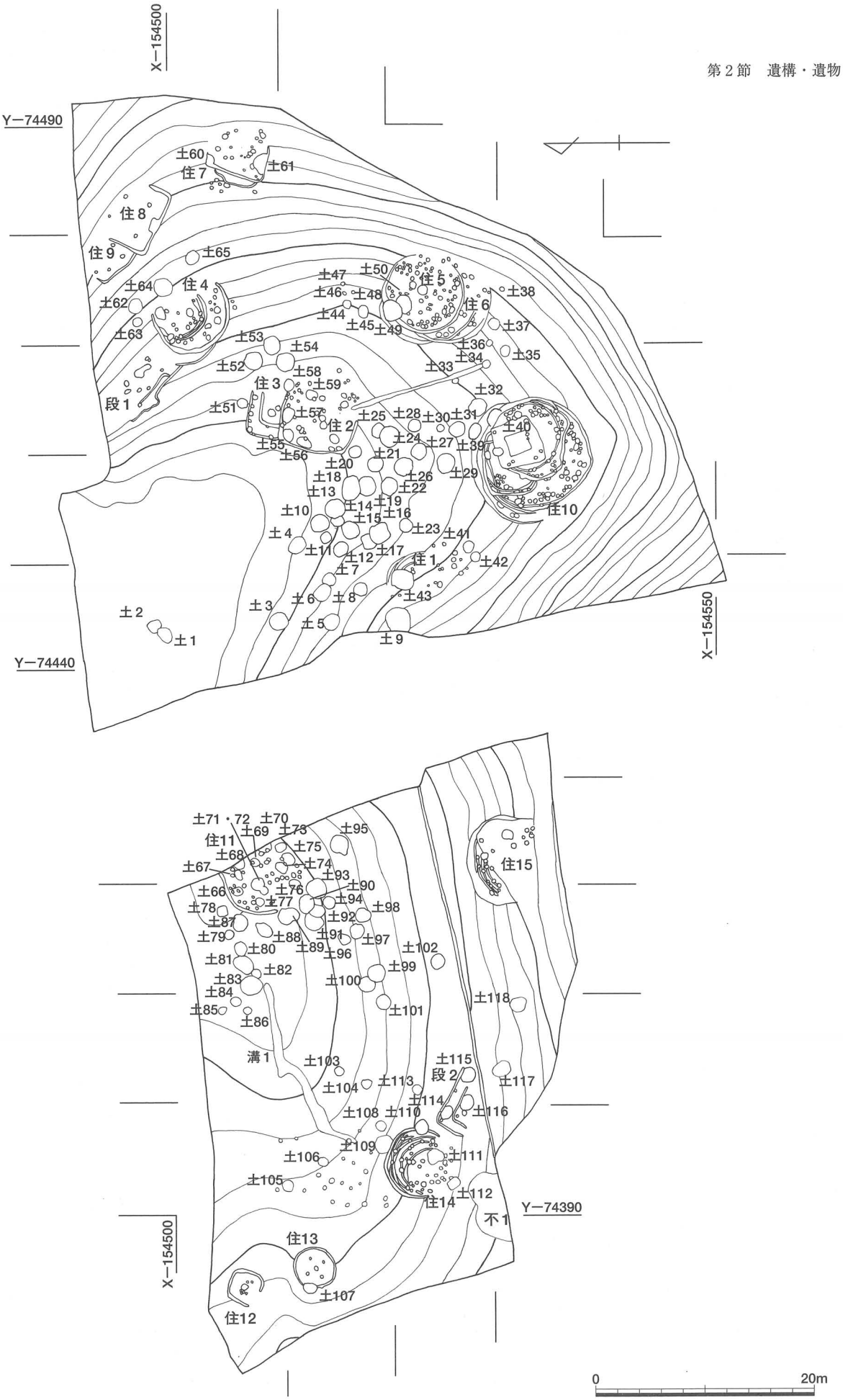
今回の調査で合計15軒の竪穴住居が確認できた。だだし、同じ場所で数回建て替えをおこなっているので実際に立てられた軒数は40軒を上回ると考えられる。住居がつくられた場所は、丘陵斜面に集中しており、丘陵の頂上部につくられたものは１軒のみであった。残りは斜面につくられている。規模は、径３ｍのものから11ｍを超える大型住居まで所在する。平面形も円形、隅丸方形、方形と出土したが、埋土の堆積状況、壁体溝の検出状況等から円形から隅丸方形・方形へと変遷していったと考えられる。

竪穴住居１（第４・５図、図版２）

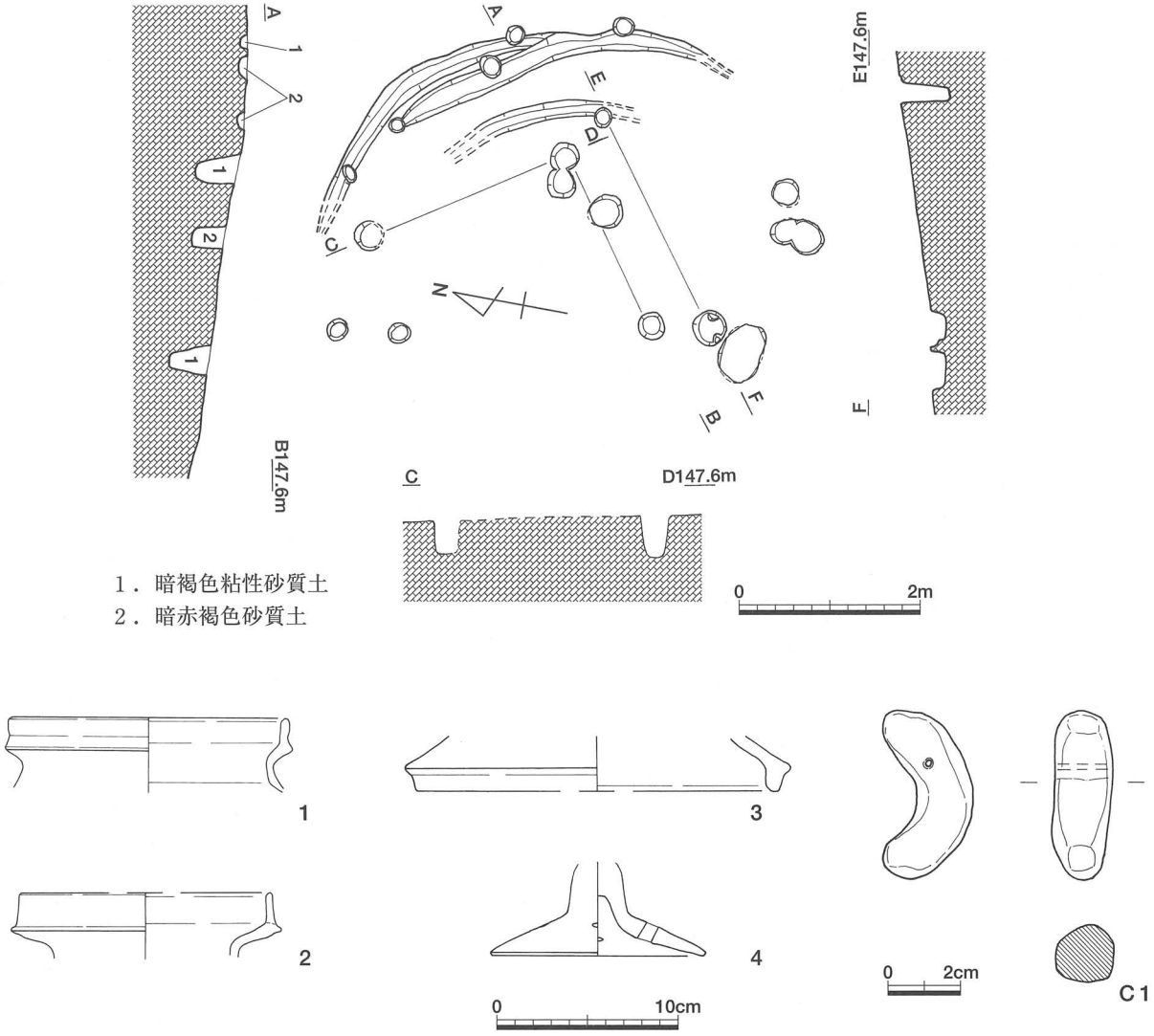
調査区の中央、南西斜面に所在する。斜面につくられているため、山側の北東部分の壁体溝が１／４程度残るのみであり、全容は不明である。平面形は、復元すると推定径5.2～5.6ｍで、円形を呈している。壁体溝が３条巡っており、同心円状に最低２回の建て替えがおこなわれていると思われるが、その建て替えの変遷は不明である。柱穴は、谷側が遺存していないが、住居の規模や山側の柱穴の位置等から４本柱が想定できる。

出土遺物には、弥生土器**１～４**、土製品**Ｃ１**がある。**１・２**は甕の口縁部である。端部の立ち上がりは、直立するものとやや内傾するものとがある。**１**には赤色顔料が塗布されている。**３・４**は高杯の脚部である。**３**は端部が直立している。**４**は端部を薄くし、丸く仕上げている。また、スカシ孔が４個あけられている。いずれも、赤色顔料が塗布されている。**Ｃ１**は、土製勾玉である。完形で、全長4.7㎝を測る。上部に穿孔がある。

これらの遺物から竪穴住居１は、弥生時代後期後葉に営まれたものと考えられる。



第４図　遺跡全体図（１／500）



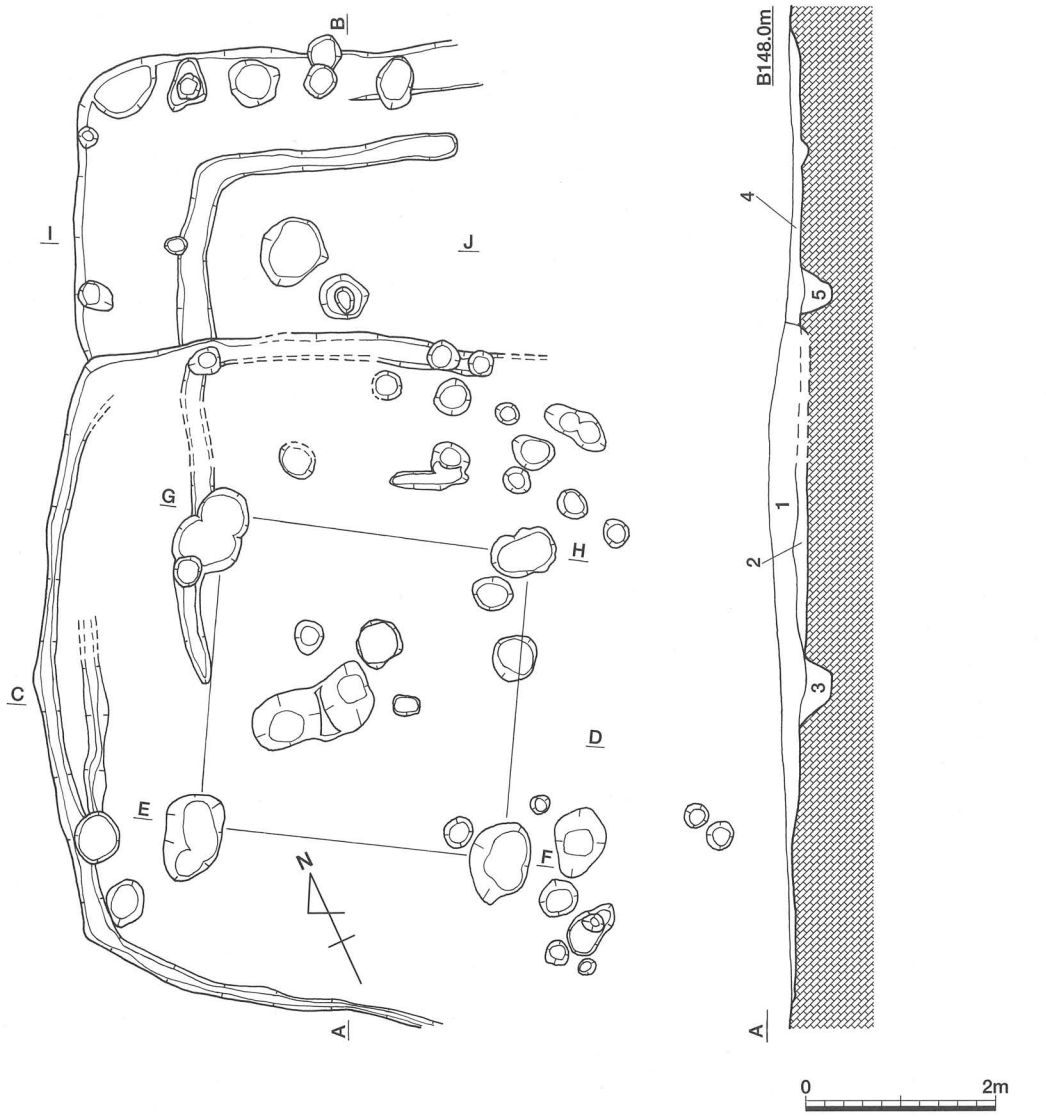
第５図　竪穴住居１（１／80）・出土遺物（１／２・１／４）

竪穴住居2・3（第４・６図、図版２）

調査区のほぼ中央、南東斜面に所在する。斜面につくられているため、谷側の南東部分の側壁が流出している。側壁の検出状況から、住居３から住居２へ建て替えをしている。平面形は、住居２・３ともに隅丸方形を呈する。住居２の中央部分で１辺７ｍを測る。床面は、住居２・３ともに平らで、住居２は主柱穴を４個もつ。柱穴間の距離は、3.2～3.4ｍである。

住居２は、中央穴をもち、側壁に沿って壁体溝が掘られている。また、西側の壁体溝が２条あるため、建て替えがおこなわれた可能性がある。

住居３は、住居２によって削平されているが、住居２と規模が近いものと想定されることから４本柱が想定できる。また、住居３の側壁の内側に壁体溝が１条巡っているため、この場所で建て替えがおこなわれた可能性がある。

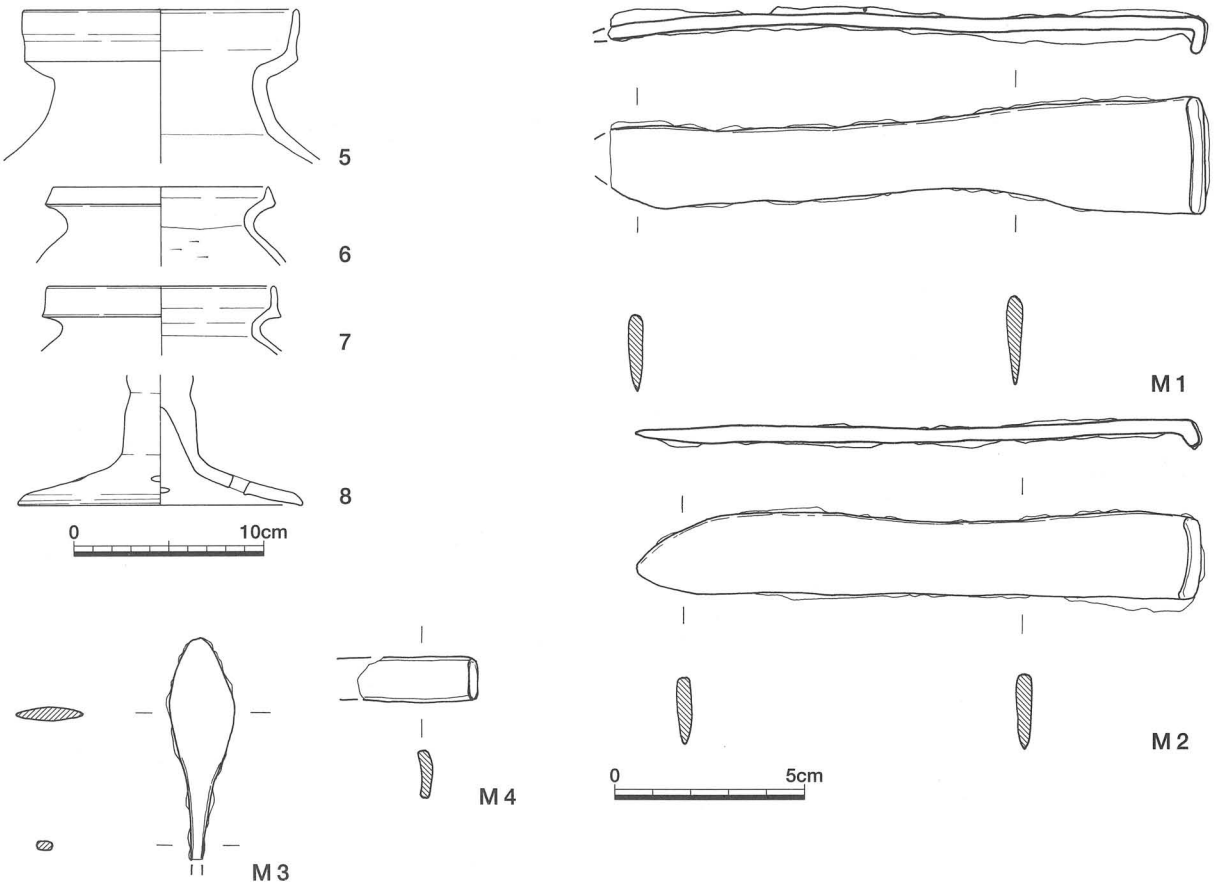


1．暗赤褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
2．暗赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．暗褐色砂質土
4．明褐色砂質土
5．灰褐色砂質土

第６図　竪穴住居２・３（１／80）

出土遺物には、弥生土器５～８、鉄器Ｍ１～Ｍ４がある。５～７は甕である。口縁から肩にかけての破片で、５は口縁端部を垂直に立ち上げている。６は口縁端部を上部に引き出し、拡張している。７は端部を、やや内傾させ、立ち上げている。８は高杯の脚部である。端部を薄くし、丸く仕上げている。また、スカシ孔が４個あけられている。Ｍ１・２は鎌である。いずれも、住居の床面で出土している。Ｍ１は、先端部が欠損しているが、ほぼ完形で、現存長15.7cm、最大幅3.0cmを測る。柄を取り付けるための折り返しがついている。Ｍ２は、完形で、全長14.9cm、最大幅2.3cmを測る。Ｍ２も柄を取り付けるための折り返しがついているが、Ｍ１に比べると折り返しの角度が大きい。また、Ｍ２は刃部が砥ぎ減りしている。Ｍ３は鏃である。茎部が欠損しているが、現存長5.9cmを測る。Ｍ４は工具と考えられる。茎の部分のみであるが、折り返しが残っている。

これらの、遺物から竪穴住居２・３は、弥生時代後期後葉に営まれたものと考えられ、住居２・３の時期差はあまりないと考えられる。



第７図　竪穴住居２・３出土遺物（1／2・1／4）

竪穴住居４（第４・８図、図版３）

調査区の北東部、北東斜面に所在する。斜面につくられているため谷側の東部分の側壁が流出している。平面形は、側壁の検出状況から円形を呈し、側壁に沿うように壁体溝が掘られている。また、壁体溝が住居内部に２条検出されていて、最低２回は建て替えがおこなわれたと考えられる。壁体溝の検出状況や住居内の埋土の状況から、北から南西方向へ拡張していったことが考えられる。規模は、最初の段階で、直径4.2m、次に直径4.8m、そして最終段階で大幅に拡張し、直径7.2mを測る。柱穴は、谷側の柱穴が遺存していないが、規模や山側の柱穴の位置等から、最初の段階と次に段階で４本柱、柱穴間の距離は、2.0

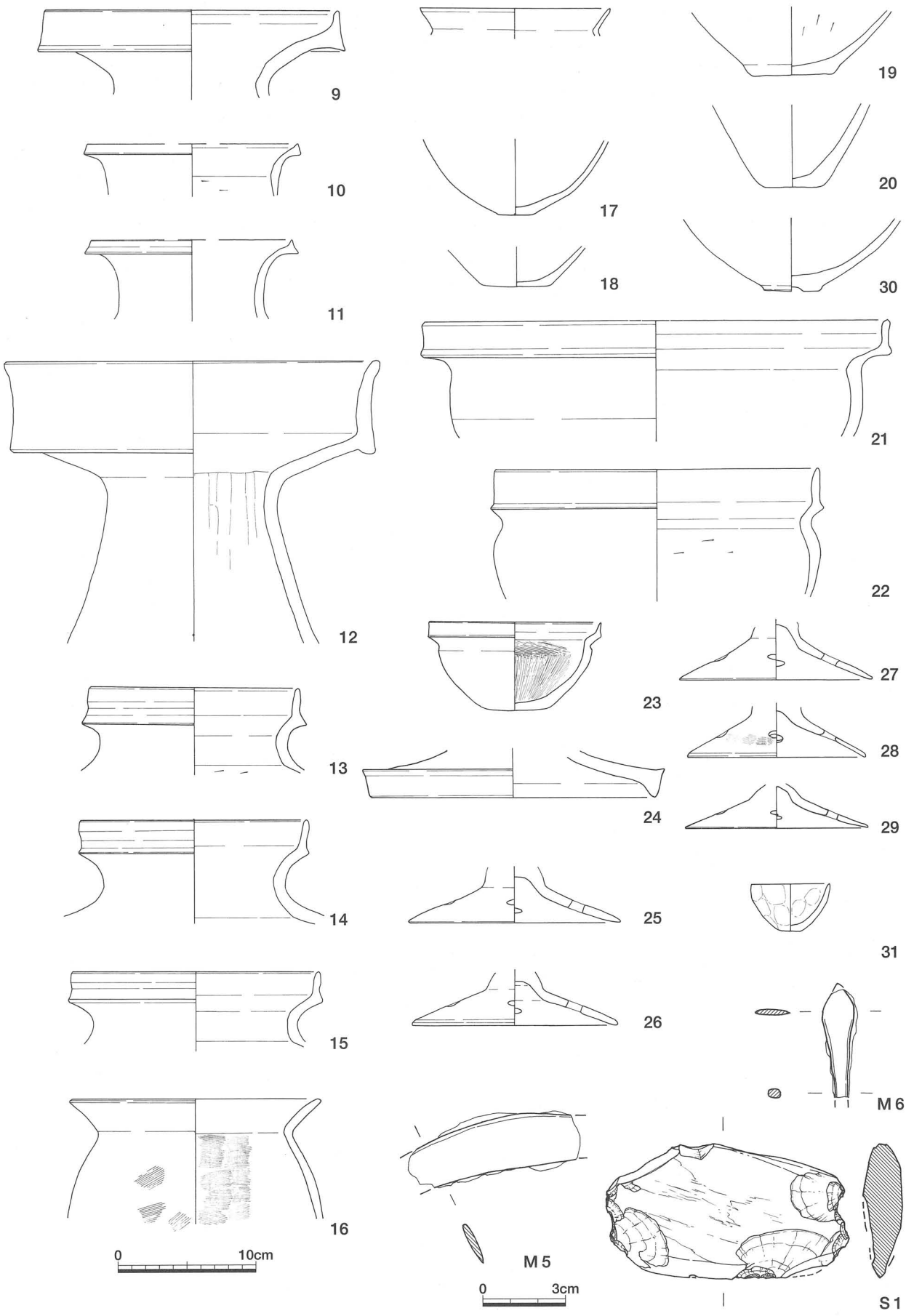
mを測る。最終段階で６本柱が想定され、柱穴間の距離は、1.8～3.0mを測る。また、住居西側の側壁に沿って、幅約0.7mのテラス状の遺構が検出された。この遺構から段状遺構１につながる。

出土遺物には、弥生土器**９～31**、鉄器**Ｍ５・６**、石器**Ｓ１**がある。**９～12**は壷の口縁から頸部にかけての破片である。**10・11**は、口縁部の上端を引き出し拡張している。**９・12**は、口縁端部を垂直に立ち上げている。特に**12**は大型の壷で、赤色顔料が施されている。**13～20**は甕で、口縁部と底部の破片がある。**13～15**は、口縁端部をほぼ垂直に立ち上げている。**16・17**は、口縁部がく字状に屈曲している。**21～23**は鉢である。**21・22**は口縁から肩部にかけての破片で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**24～29**は高杯の脚部で、**24**は端部を上下へ引き出している。**25～29**は、いずれも短脚で、端部を薄くし、丸く仕上げており、スカシ孔が４個あけられている。**30**は椀の底部で、底が高台状に突出している。**31**はミニチュアの手捏ねの椀である。**Ｍ５**は鎌で、先端部と茎部を欠いている。刃が湾曲しており、曲刃鎌と考えられる。**Ｍ６**は鏃で、茎部を欠いているが、全長3.9cmを測る。**Ｓ１**は打製石包丁である。両端を打ち欠いて抉りをつくっている。

これらの遺物から竪穴住居４は、弥生時代後期末葉に営まれたものと考えられる。

１．にぶい赤褐色砂質土　　３．灰褐色砂質土　　５．暗赤褐色粘性砂質土
２．暗褐色粘性砂質土　　４．黒褐色砂質土

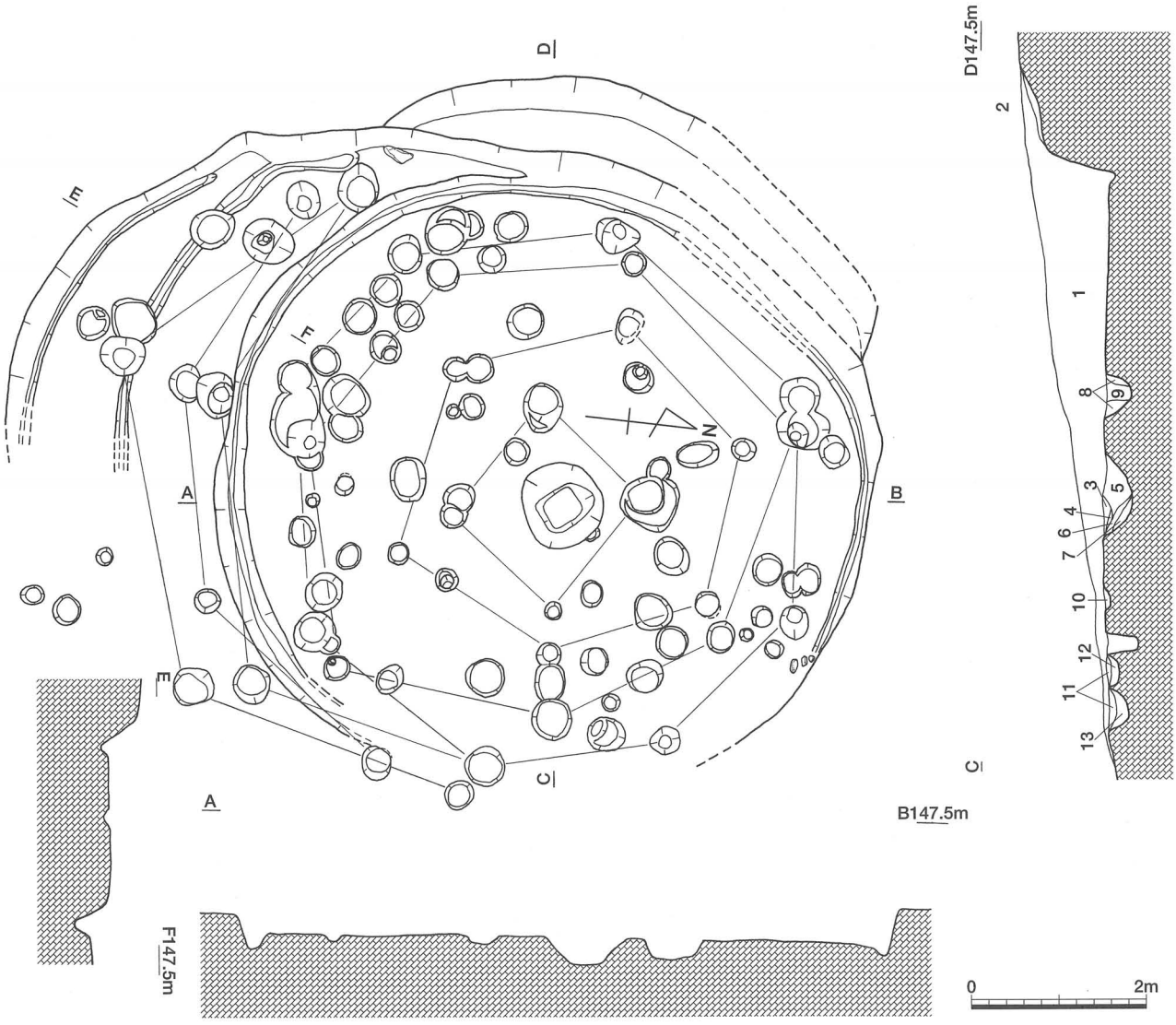
第８図　竪穴住居４（１／80）



第９図　竪穴住居４出土遺物（1／2・1／4）

竪穴住居５・６（第４・10・11図、図版４）

調査区の南東部、南東斜面に所在する。斜面につくられているため谷側の東部分の側壁の一部が流出している。側壁の検出状況から、住居６から住居５へ建て替えをおこなっている。平面形は、住居５・６ともに円形を呈する。住居５の直径は、7.6m、中央穴をもち、側壁に沿って壁体溝が掘られている。壁体溝が１条しかないが、床面から多数の柱穴が検出されたため、同じ場所で建て替えが数回おこなわれたことが考えられる。柱穴は、６本柱から８本柱が想定される。また、中央穴の周囲に、上屋を支える柱を補助する４本の小柱穴が検出された。ただし、どの柱穴に伴うのかは確認できなかった。また住居５には、住居西側の側壁に沿って、幅約0.8mのテラス状の遺構が検出された。また、この住居５は、土壙49・50



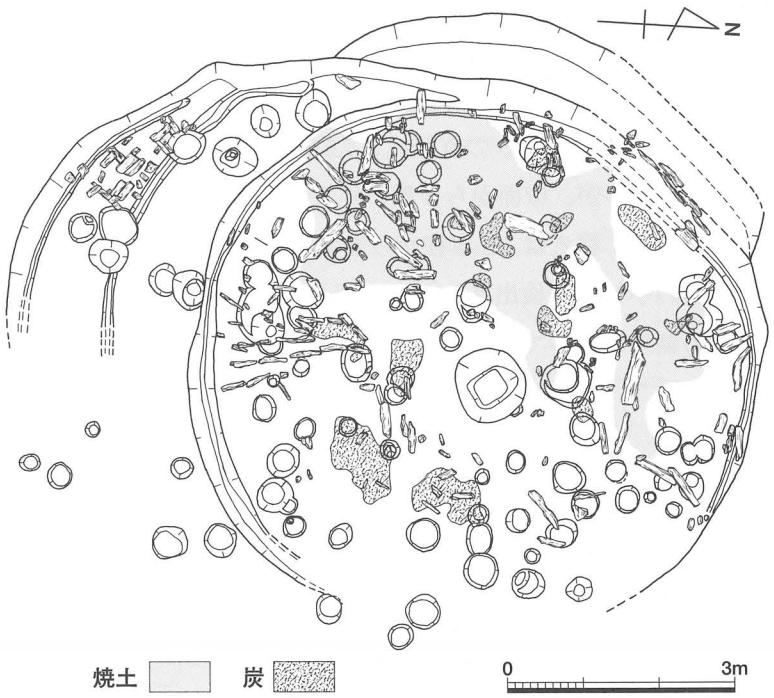
1．黒褐色粘性砂質土（炭化物と焼土を多く含む）
2．暗褐色砂質土
3．暗赤褐色粘性砂質土
4．黒褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
5．暗褐色粘性砂質土（炭化物と焼土を含む）
6．暗褐色粘性砂質土
7．灰褐色砂質土
8．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
9．橙褐色砂質土
10．暗褐色粘性砂質土（炭化物と焼土を多く含む）
11．暗褐色粘質土
12．灰褐色砂質土
13．にぶい褐色砂質土

第10図　竪穴住居５・６（１／80）

を埋めて住居を建てていることが確認された。

住居６は、住居５によって削平されているが、直径約６ｍが想定される。住居の規模や住居５の状況から６本柱が想定できる。また、住居６の側壁の北側に壁体溝が１条巡っており、この検出状況から住居６は、北方向に最低１回建て替えがおこなわれた可能性がある。

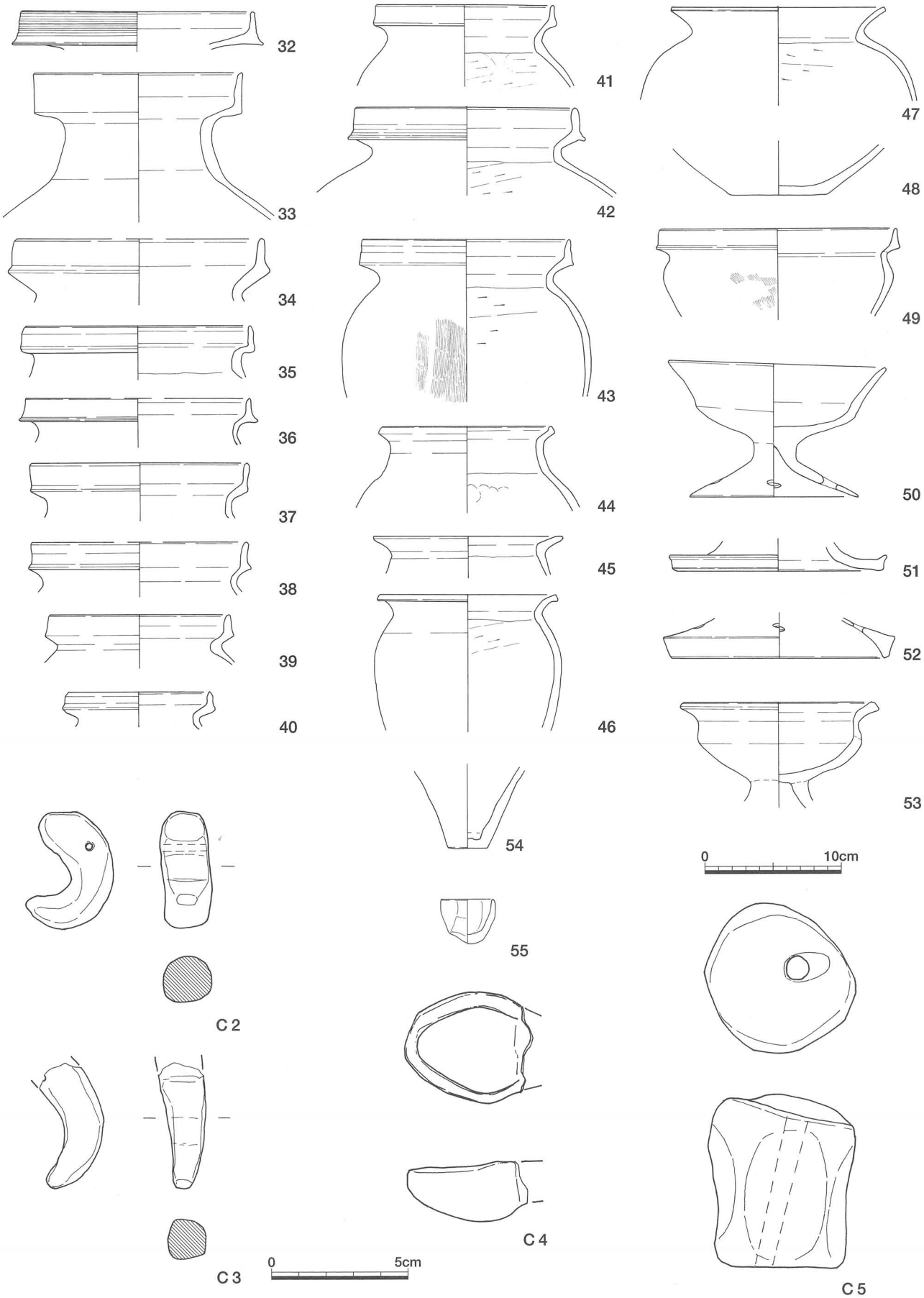
住居５・６ともに埋土中には、第11図に示すように焼土・炭化材が大量に検出され、火災にあったことが考えられる。炭化材として認識できるものを第11図に示しているが、柱材と考えられる大きなものは認められなかった。炭化材の出土状況から放射状に検出されたものが垂木と考えられ、一部梁材と想定される大きな材も確認できた。また、住居５は、土壙49を埋めて側壁の一部をつくっているため、その埋土を押さえるために幅10㎝の横板を３枚渡しており、それが炭化材として検出された。また、住居６では、側壁に沿って立てられたと思われる板状の部材も検出された。焼土については、炭化材の上層からも下層からも出土していたが、上層のほうが多く検出された。



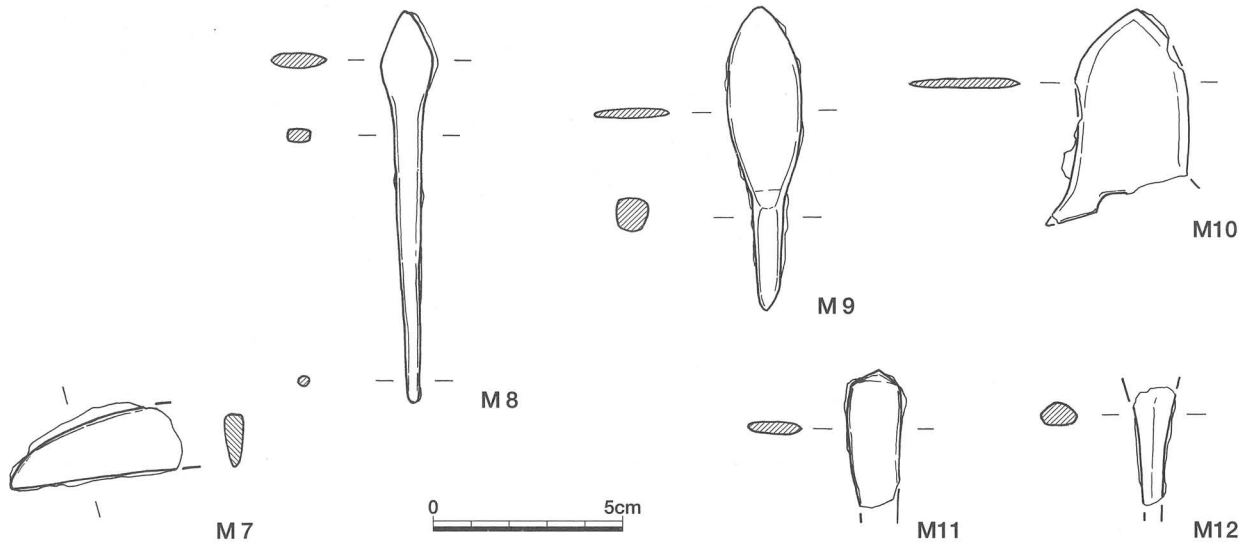
第11図　竪穴住居５・６炭化材出土状況（１／100）

出土遺物は、弥生土器32～55、土製品Ｃ２～５、鉄器Ｍ７～12がある。32・33は壷の口縁から肩部にかけての破片である。32は口縁端部を上下に引き出し拡張している。33は口縁端部を垂直に立ち上げている。また、赤色顔料が施されている。34～48は甕である。34～47は口縁部から肩部にかけての破片である。34～43は口縁端部を垂直またはやや内傾させて立ち上げている。44は口縁端部を内側へわずかに引き出している。45～47は口縁部をく字状に屈曲させている。48は底部の破片である。49は鉢である。口縁端部を垂直に立ち上げている。50～52は高杯である。50は短脚で杯部を反るように屈曲させている。脚部にはスカシ孔が４個あけられている。51・52は脚部の破片である。51は脚部の端部を上方へつまみあげている。52は端部を下方へ三角形になるよう引き出している。53は脚付椀である。脚部は欠けているが、椀の口縁は外に開いており、全体に赤色顔料が施されている。54は甕の底部の破片と考えられる。55はミニチュアの手捏ねの椀である。Ｃ２・３は土製勾玉である。Ｃ２は完形で中央の屈曲が大きく、Ｃ３は屈曲がＣ２に比べると緩やかである。いずれも上部に穿孔が認められる。Ｃ４は匙形土製品である。柄の部分が欠損している。Ｃ５は土錘である。円柱状を呈しており、中央に穿孔が認められる。Ｍ７は鎌で先端部のみ残る。Ｍ８～12は鏃である。Ｍ８・９は完形で、Ｍ８で全長9.9㎝、Ｍ９で全長7.5㎝を測る。M10は鏃の先端部である。返しの付く形で古墳時代の鏃に近い。M11は鏃の先端部である。先端が若干折れ曲がっている。M12は鏃の茎部分である。先端部と軸部が欠けている。

これらの遺物から竪穴住居５・６は、弥生時代後期後葉に営まれたものと考えられる。



第12図　竪穴住居５・６出土遺物①（１／２・１／４）



第13図　竪穴住居５・６出土遺物②（１／２）

竪穴住居７（第４・14図、図版５）

調査区の東端、東斜面に所在する。斜面につくられているため、谷側の東部分の側壁が流出している。平面形は、方形を呈し、住居の中央部分で１辺5.8ｍを測る。床面は、平らで主柱穴を４個もつ。柱穴間の距離は、2.6～2.8ｍを測る。西側の側壁に沿って壁体溝が掘られており、また、西側の側壁に沿って幅0.8ｍのテラス状の遺構が認められた。南西部分の柱穴の近くに台石と考えられる扁平な石が出土している。

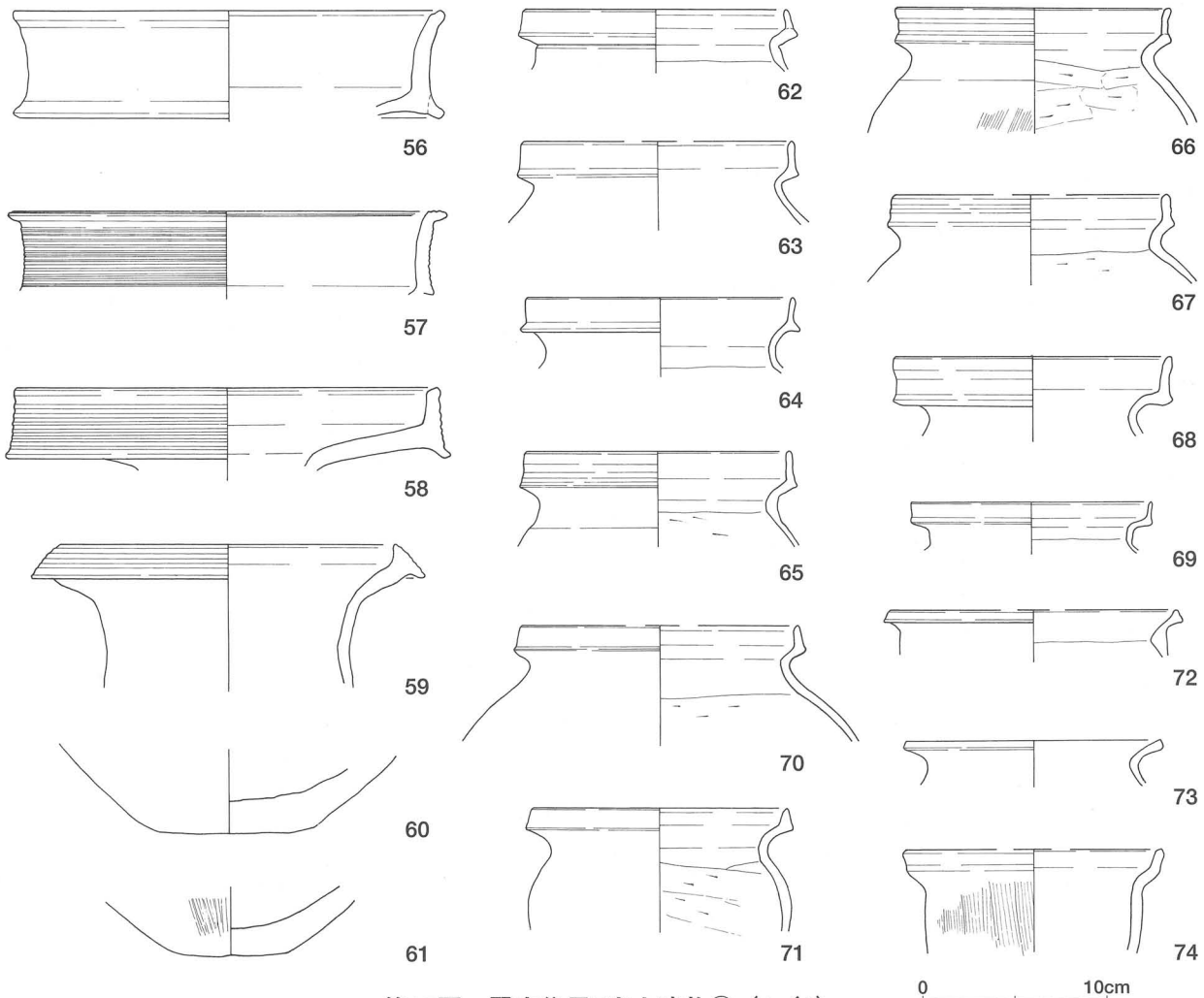
出土遺物には、弥生土器**56～86**、土製品**Ｃ６**、鉄器**M13・14**がある。**56～59**は壷の口縁から頸部にかけての破片である。**56**は口縁端部を若干外に反らすように立ち上げている。**57**は口縁端部をほぼ垂直に立ち上げ、上端を垂直に外側に折り曲げている。その上面と外面に沈線を施している。**58**は口縁端部をやや内傾させて上下に

１．暗赤褐色砂質土（炭化物を含む）
２．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
３．暗赤褐色砂質土

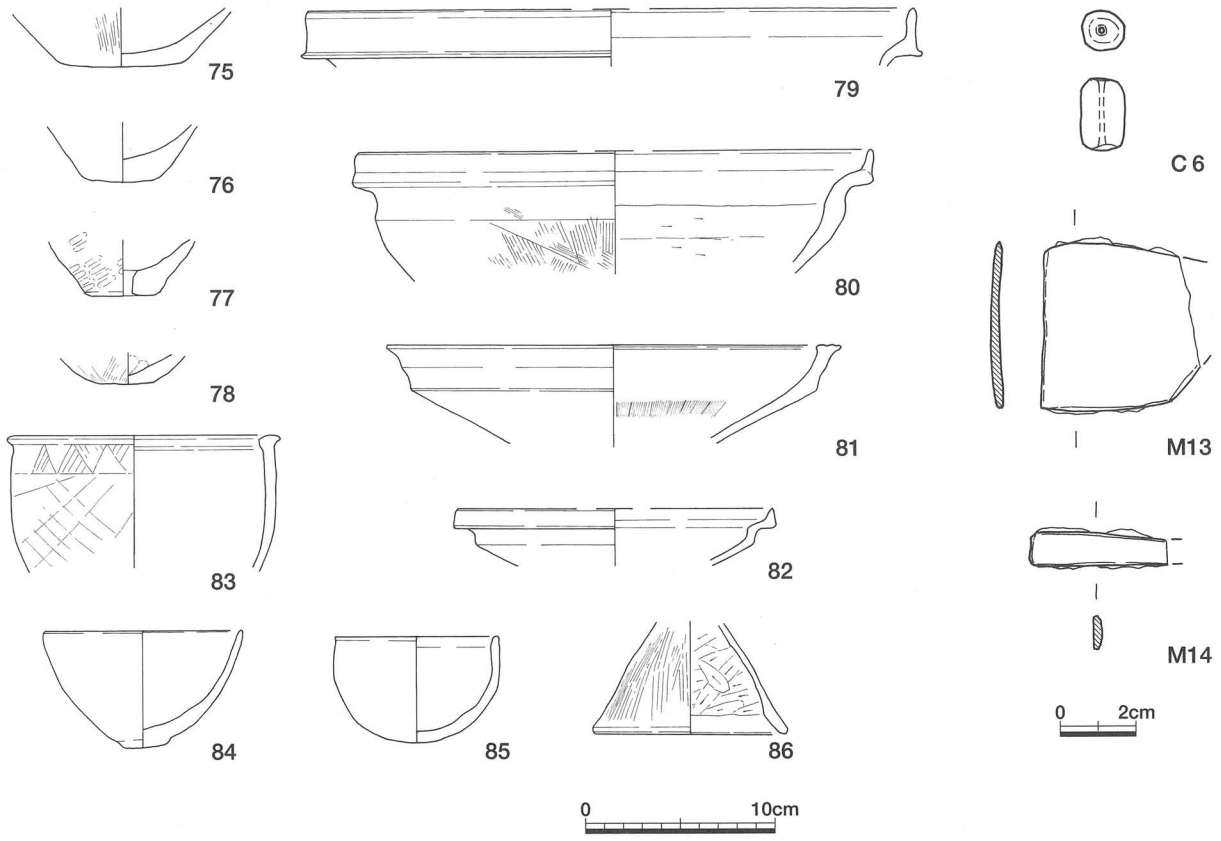
第14図　竪穴住居７（１／80）

引き出し、外面に沈線を施している。いずれも赤色顔料が塗られていた。59は口縁端部を内傾させ、上下に引き出し、外面に沈線を施している。60・61は壷の底部と考えられる破片である。62～74は甕の口縁から肩部にかけての破片である。62～71は口縁端部を垂直に立ち上げるものが中心で、外面に沈線が施されているものもある。72は口縁端部を三角形になるよう拡張している。73は口縁をく字状に屈曲させている。74は口縁端部を外に開くように立ち上げており、肩部にかけてハケメが残っている。75～78は甕と考えられる底部である。77は底の中央に楕円形の穿孔がある。また器壁にタタキが施されている。79・80は鉢の口縁から胴部にかけての破片である。いずれも口縁端部を垂直に立ち上げており、赤色顔料が残る。81・82は高杯の杯部の破片である。81は杯部を内側に屈曲させて上端を平坦にし、２条の沈線を施している。82は杯部を垂直に屈曲させ、段をもって垂直に引き上げている。83～85は椀である。83は口縁端部を三角形になるよう拡張し、器壁外面の上部に鋸歯文、その下に格子状の線刻が施されている。84は口縁端部を細くし、丸く仕上げている。また、底部が高台状に突出している。85は口縁端部を丸く仕上げており、また底も丸くしている。86は台付椀または台付壷の脚部と考えられる。外面に赤色顔料が施されている。C６は土玉である。管玉のように円柱状を呈しており、中央に穿孔している。M13は用途不明の鉄器である。薄い板状の２枚の鉄板が溶着したような状況が認められる。M14は工具と考えられる。先端が欠けているが扁平な棒状で鉋のような工具が推定される。

これらの遺物から竪穴住居７は、弥生時代後期後葉から末葉に営まれたものと考えられる。



第15図　竪穴住居7出土遺物①（1／4）



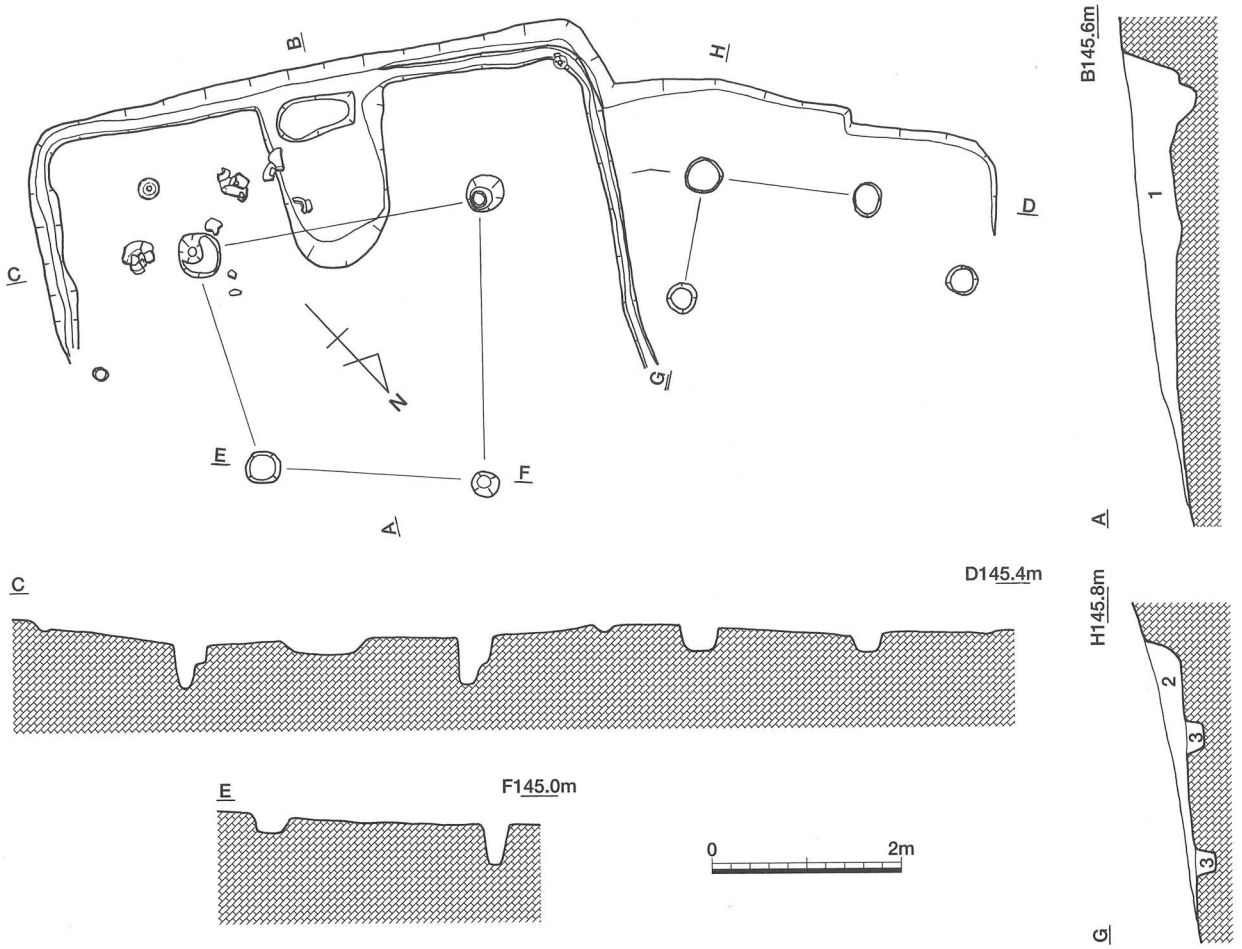
第16図　竪穴住居７出土遺物②（１／２・１／４）

竪穴住居８・９（第４・17図、図版５）

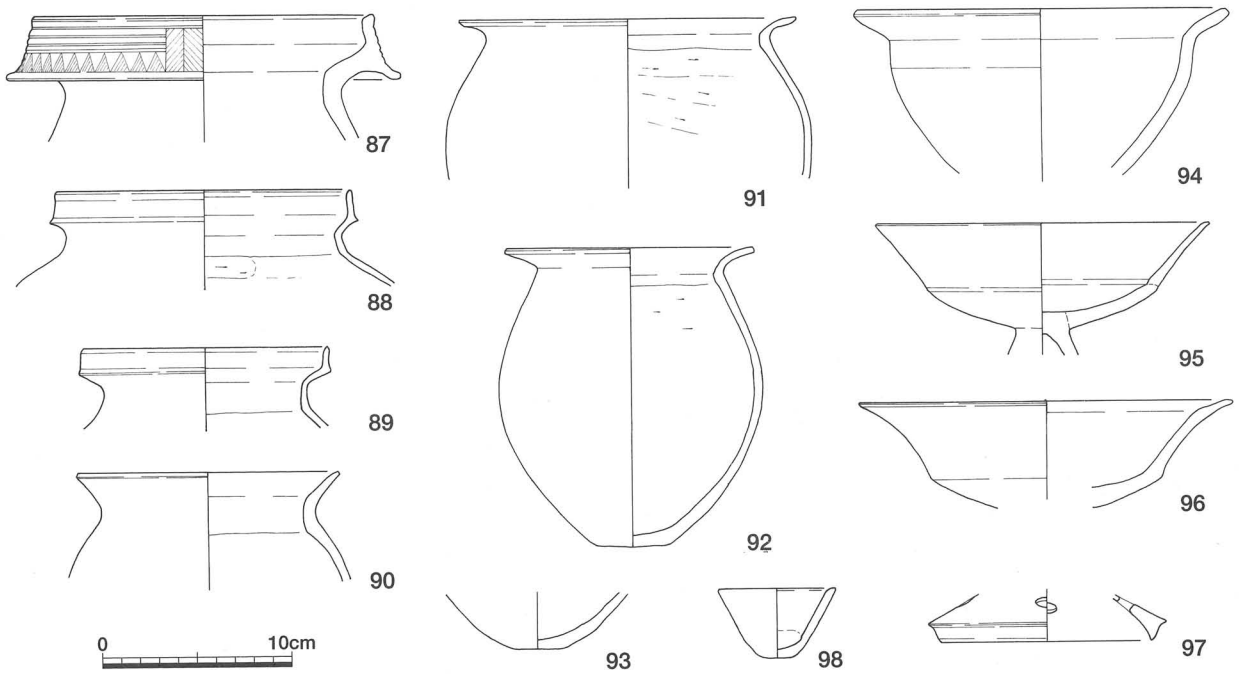
調査区の北東端、北東斜面に所在する。斜面につくられているため、谷側の北東部分の側壁が流出している。側壁の検出状況から、住居９から住居８へ建て替えをしている。平面形は、住居８・９ともに方形を呈する。住居２の中央部分で１辺6.4mを測る。床面は、住居８・９ともに平らで、住居９は主柱穴を４個もつ。柱穴間の距離は、2.3～3.0mを測る。住居８は、側壁に沿って壁体溝が掘られている。また、南西側の側壁中央に、隅丸方形の土壙が検出された。住居９は、住居８によって削平されているが、住居の規模、住居８の状況から４本柱が想定できる。

出土遺物には、弥生土器**87～98**、鉄器**M15・16**がある。**87**は壷の口縁部の破片である。口縁端部を内傾させて上下に引き出している。外面に沈線を施したのち、綾杉文と鋸歯文を線刻している。**88～92**は甕の口縁から肩部にかけての破片である。**88・89**は口縁端部を垂直に上へ引き出している。**90～92**は口縁部をく字状に屈曲させている。**93**は甕の底部と考えられる破片である。**94**は鉢の口縁から胴部にかけての破片である。口縁端部を外側に屈曲させている。**95～97**は高杯である。**95・96**は杯部の破片で杯部を外側に反るように立ち上げている。**97**は脚部の破片である。端部を下方向に三角形になるように引き出しており、スカシ孔が４個あけられている。**98**はミニチュアの手捏ねの椀である。**M15・16**は鏃である。**M15**は茎部が欠けており、**M16**は先端部が欠けている。

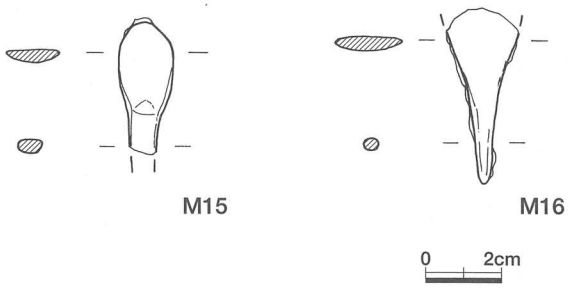
これらの遺物から竪穴住居８・９は、弥生時代後期末葉に営まれたものと考えられる。



1．暗褐色砂質土（炭化物を含む）　2．赤褐色砂質土（地山ブロックを含む）　3．赤褐色砂質土



第17図　竪穴住居８・９（１／80）・出土遺物（１／４）



第18図　竪穴住居８・９出土鉄器（１／２）

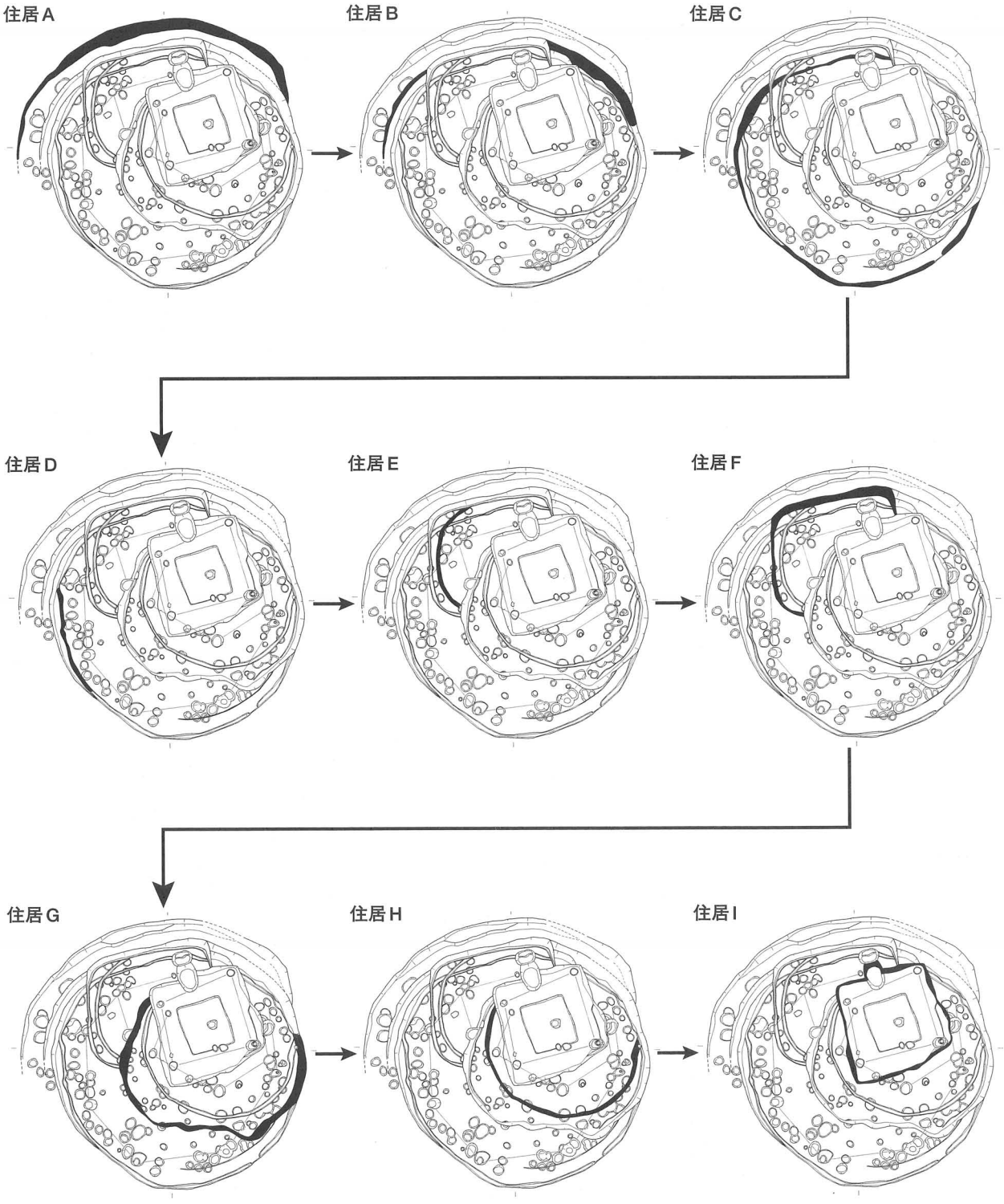
竪穴住居10（第４・19・20図、図版６）

調査区の南方向、南斜面に所在する。本遺跡では最大の住居で、直径11.4mを測る。側壁及びそれに伴う壁体溝が９条確認されたため同じ場所で、規模を変えながら９回以上建て替えをおこなっている。側壁の検出状況からまず最大の住居である住居Ａをつくっている。円形を呈しており、柱穴はその規模から８本程度が想定される。その後、若干規模を縮小して、直径10.7mの住居Ｂをつくっている。さらにひと回り小さい直径10.4mを測る住居Ｃをほぼ同心円状につくっている。さらに住居Ｄは、住居Ｃの壁帯溝一部共用しながら建て替えている。住居Ｂ～住居Ｄまでは、いずれも10m以上の大型の住居であるため、住居Ａ同様柱穴は８本程度が考えられるが、建て替えが多いため、どの住居に伴う柱穴かは確認できなかった。その後、大幅に規模を縮小して、北側に東西が長い隅丸方形の住居Ｅをつくっている。住居Ｅは直径約５ｍを測り、柱穴数も４本とそれまでの住居Ａ～住居Ｄに比べると極端に小さくなっている。住居Ｆは住居Ｅよりもひと回り大きい規模で建て替えており、直径約5.2mを測る。さらに場所を替えて南東方向に不整形な多角形の住居Ｇをつくっている。住居Ｇは、柱穴数が６本と考えられ、直径約7.2mを測り、ふたたび住居の規模が大きくなっている。住居Ｈは、住居Ｇとほぼ同じ場所で、わずかに規模を縮小してつくられている。楕円形を呈し、直径６ｍを測る。そして、最終段階の住居Iは方形に形を変えている。この最終段階の住居Ｉは、１辺4.0m、この住居の中では最小で、４本柱をもつ構造をとっている。柱穴間の距離は、2.6～3.2mを測り、比較的側壁に近い位置につくられている。中央穴をもち、その周囲には炭の層が確認できた。また、住居内部の周囲に一段高い高床部ができた。

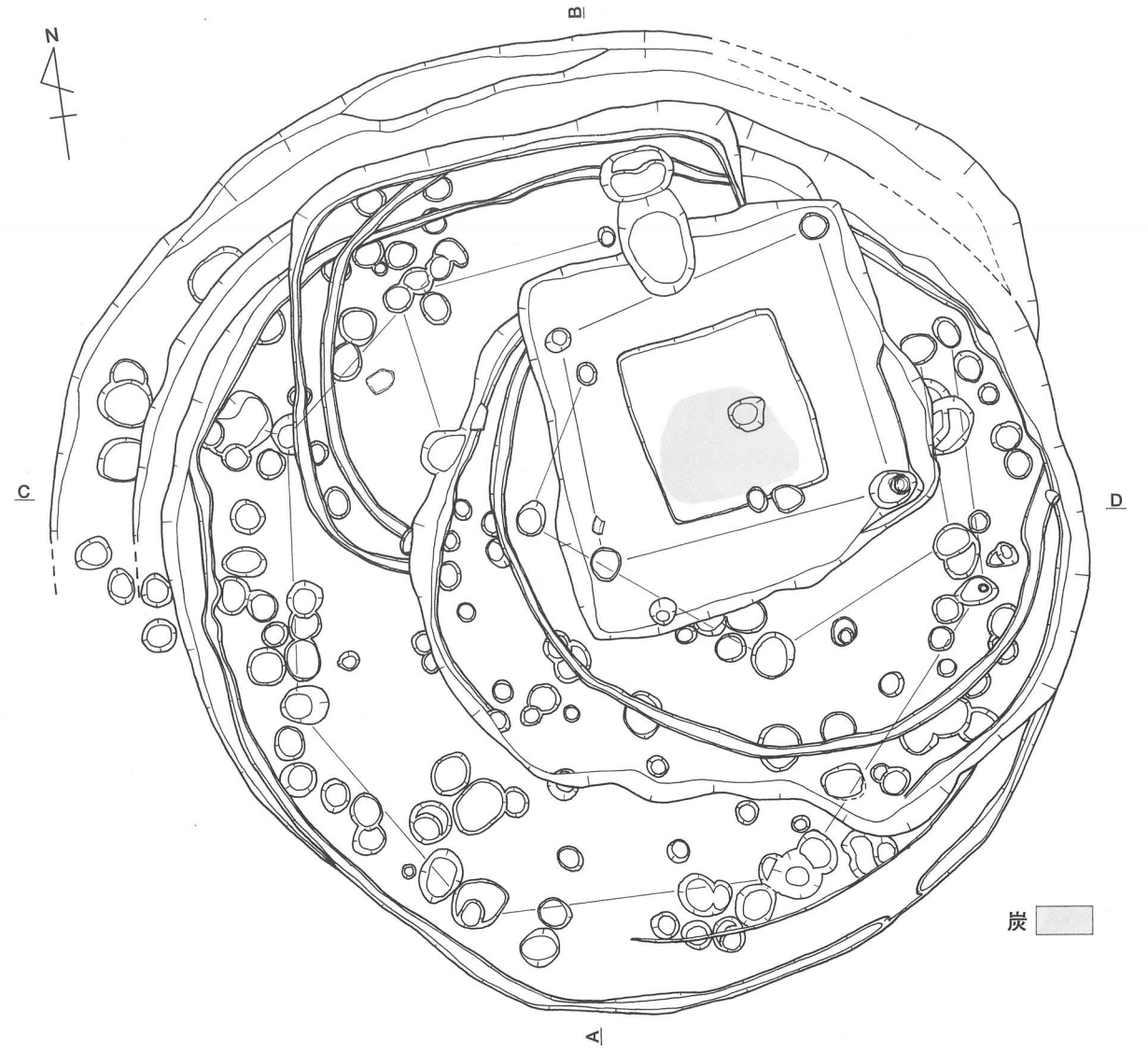
出土遺物には、弥生土器**99～148**、土製品**Ｃ７**、鉄器**M17～26**がある。**99～103**は壷で、いすれも口縁端部がほぼ垂直に立ち上がっている。**99**は大型の壷で外面に波状文が施されており、特殊壷の可能性もある。**102・103**は沈線が施されている。**104～118**は甕である。**104～109**は口縁端部がいずれもほぼ垂直に立ち上がっている。**110**は口縁端部を上下方向に三角形になるよう引き出している。**111～118**は口縁部をく字状に屈曲させている。**118**は完形の甕で、住居Iの柱穴から口を上に向けた状態で出土した。**119～124**は甕の底部と考えられる破片である。**124**は底部の中央がくぼんでいる。**125～133**は鉢の口縁から胴部にかけての破片である。**125～130**は大型の鉢で、口縁端部を上下に引き出し、上方向はほぼ垂直に立ち上げている。**131～133**は小型の鉢で、口縁端部をやや内傾させながら引き出している。いずれも赤色顔料を施している。**134～144**は高杯である。**134**は杯部の破片で、外側に反るように屈曲している。外面には波状文が施されている。**135**は完形で、杯部がやや反るように立ち上がっている。脚部は短脚で、スカシ孔が４個あけられている。**136**は杯から脚部にかけての破片である。脚部は短脚でスカシ孔が４個あけられている。杯部は湾曲しており、脚付き壷の可能性も考えられる。**137～144**は脚部の破片である。**137**は端部を直線的に、**138～143**は端部を丸く仕上げている。いずれもスカシ孔が４個あけられている。**144**は端部を下方向に拡張し、沈線を施している。また、スカシ孔を２列、合計８個あけられている。**145**は脚が欠けた製塩土器と考えられる。**146**は椀で、底部が突出している。**147**も椀であるが口縁部が欠けている。**148**は杯部が欠けているが脚付椀と考えられる。**Ｃ17**は完形の土製勾玉である。上部に穿孔がある。**M17～24**は鏃である。**M17～20**は完形で柳葉状を呈している。**M19**は身の部分が湾曲

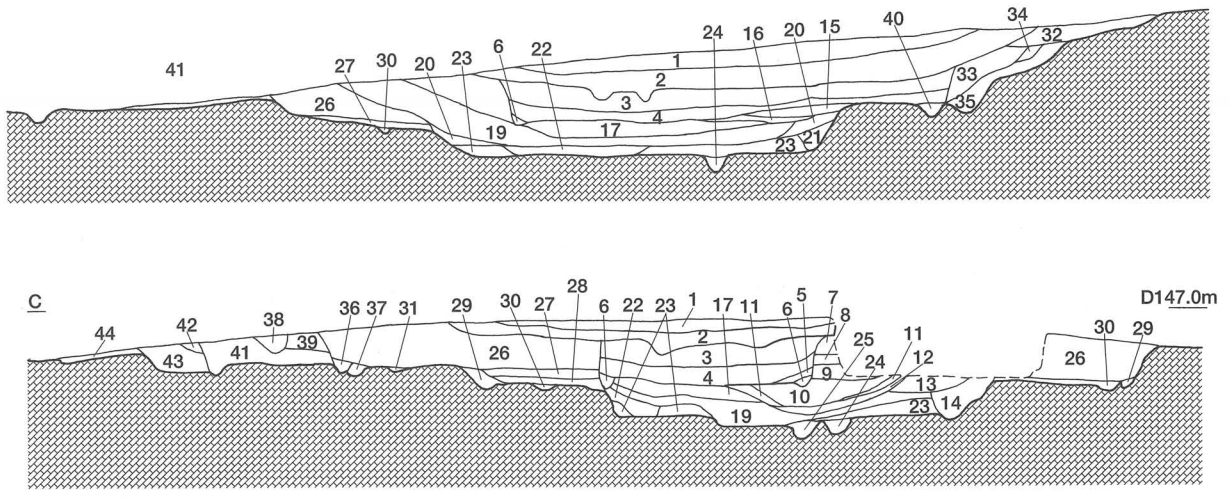
しているため工具の可能性もある。M21は茎部が欠けているが、M17～20と比べると身の幅が広い。M22・M23は鏃の茎部と想定される。M24は鏃の身から茎部にかけての破片である。M21と同様の形状をしていると考えられる。M25・M26は用途不明の鉄器である。鎌か刀子の先端部の可能性がある。

これらの遺物から竪穴住居10は、10回近く建て替えがおこなわれているにもかかわらず、弥生時代後期後葉から末葉の範囲に納まると考えられる。



第19図　竪穴住居10変遷（1／250）

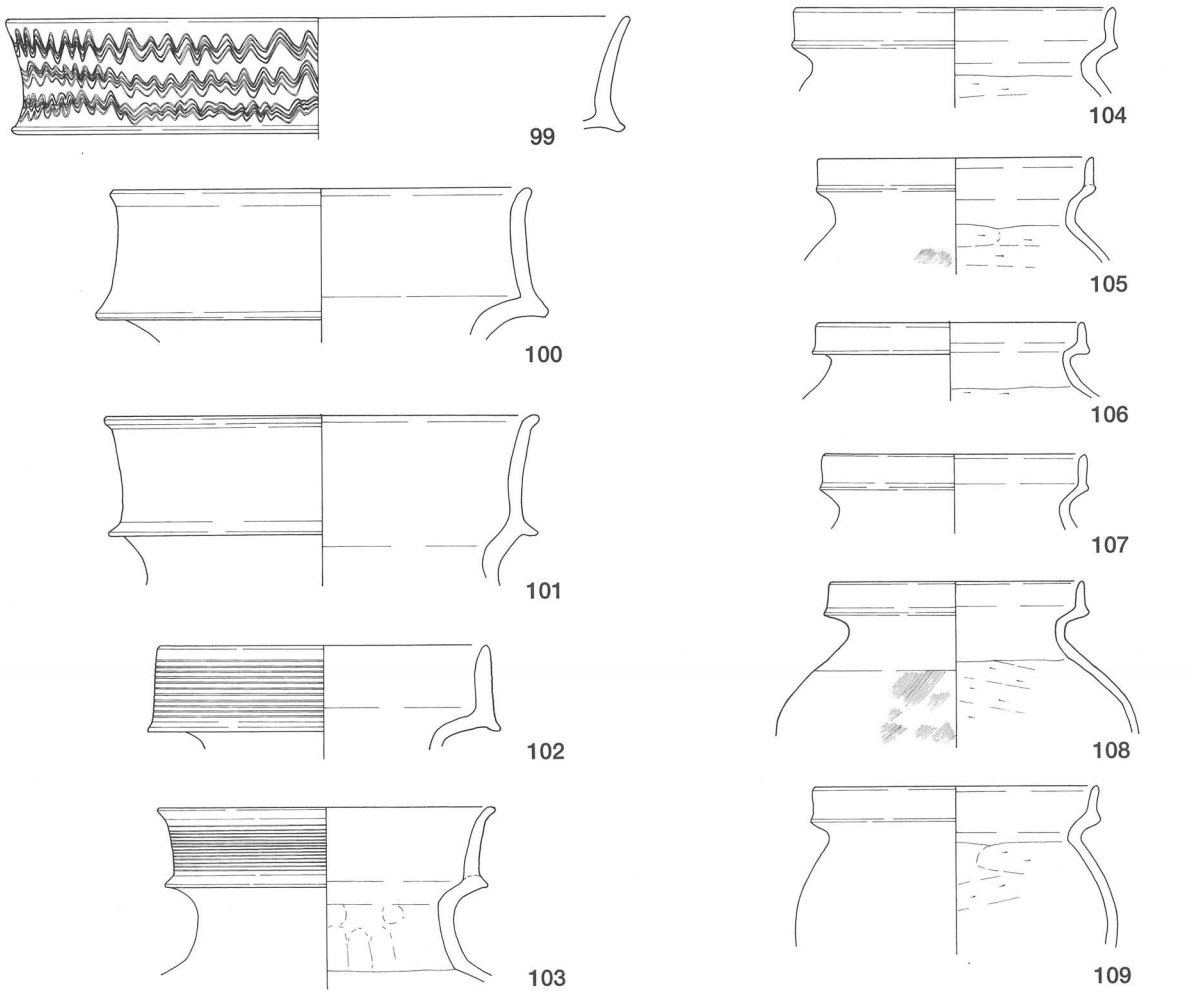




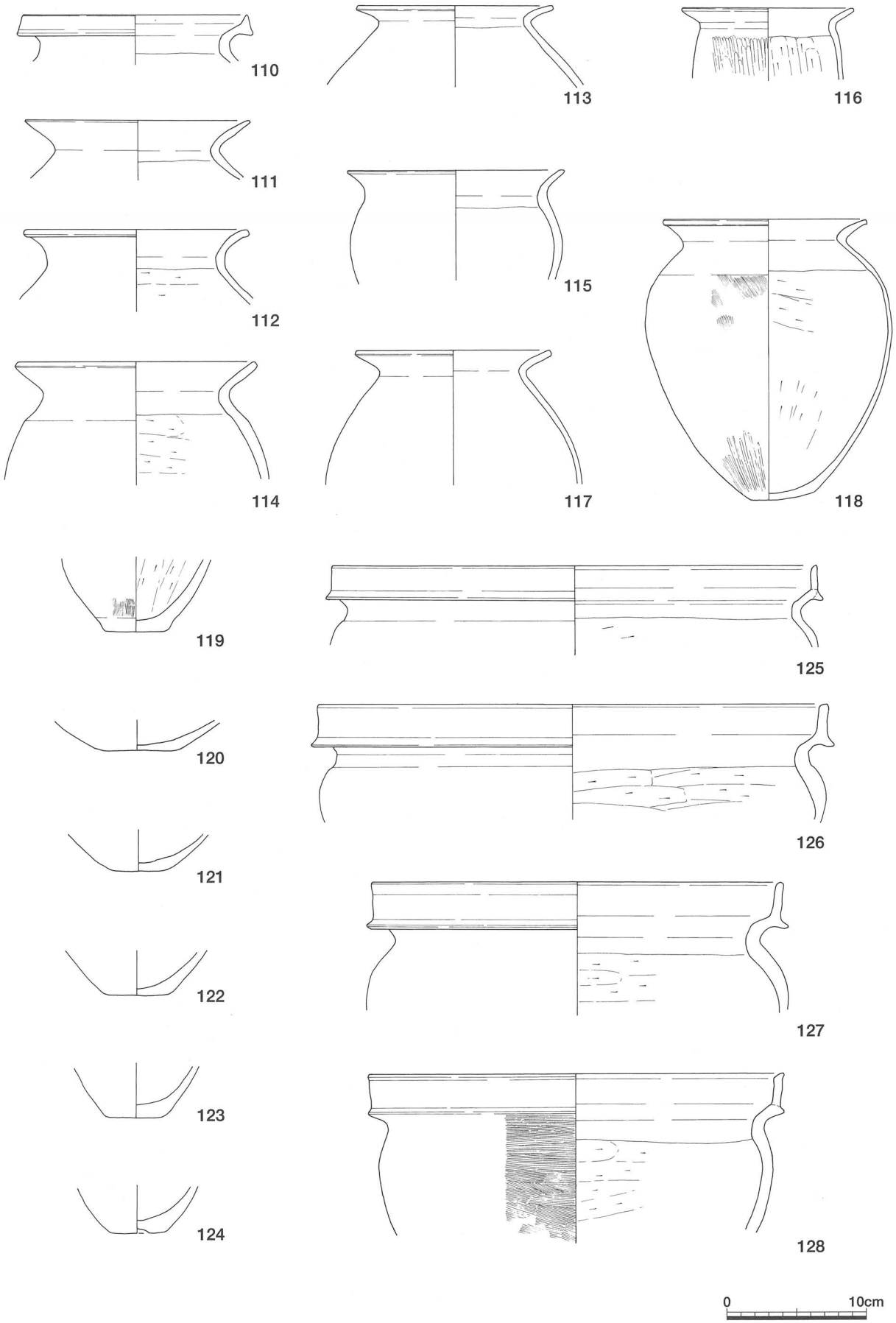
第20図　竪穴住居10（1／80）

0　2m

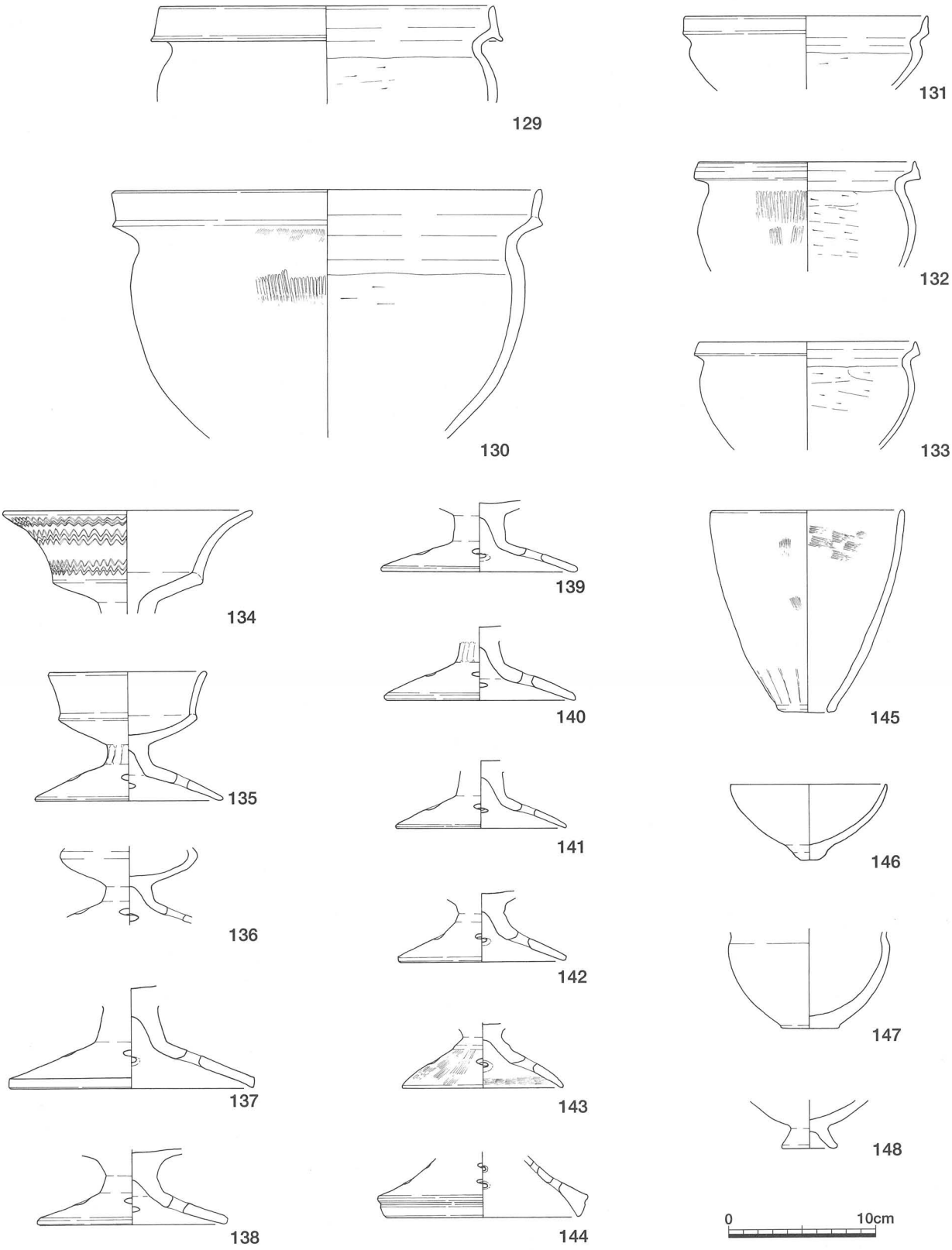
1．赤褐色粘性砂質土
2．暗褐色粘性砂質土
3．灰褐色粘性砂質土(炭化物を多く含む)
4．暗灰褐色粘性砂質土(炭化物を多く含む)
5．にぶい灰褐色粘性砂質土
6．暗灰褐色粘性砂質土
7．暗灰褐色粘性砂質土
8．にぶい灰褐色粘性砂質土
9．暗赤褐色粘性砂質土(焼土を多く含む)
10．暗褐色粘性砂質土(焼土を含む)
11．暗褐色粘性砂質土(炭化物・焼土を多く含む)
12．暗灰黄色砂質土(炭化物を多く含む)
13．暗灰褐色粘性砂質土と黄灰色砂質土(地山)のまざり土
14．暗灰黄色粘性砂質土(炭化物を多く含む)
15．暗灰褐色粘性砂質土(炭化物を含む)
16．暗灰褐色粘性砂質土(炭化物を多く含む)
17．暗赤灰色粘性砂質土(炭化物・焼土を多く含む)
18．にぶい褐色粘性砂質土
19．暗灰褐色粘性砂質土と黄灰色砂質土(地山)のまざり土
20．にぶい灰褐色粘性砂質土(炭化物を含む)
21．暗灰褐色粘性砂質土
22．暗灰褐色粘性砂質土(焼土を含む)
23．暗灰褐色粘性砂質土と黄灰色砂質土(地山)のまざり土
24．暗褐色粘質土
25．灰褐色粘性砂質土
26．暗灰褐色粘性砂質土
27．にぶい褐灰色粘性砂質土
28．にぶい灰褐色粘性砂質土
29．暗灰褐色粘性砂質土
30．灰褐色粘性砂質土(炭化物を含む)
31．灰褐色粘性砂質土
32．暗黄褐色砂質土
33．にぶい灰褐色粘性砂質土
34．黄灰褐色砂質土と黄白色砂質土(地山)のまざり土
35．にぶい黄灰褐色砂質土
36．にぶい灰褐色粘性砂質土
37．暗褐色粘性砂質土
38．にぶい褐灰色粘性砂質土
39．にぶい灰褐色粘性砂質土
40．暗灰褐色砂質土
41．暗灰褐色砂質土
42．にぶい黄灰色砂質土
43．黄灰色砂質土
44．暗灰褐色砂質土



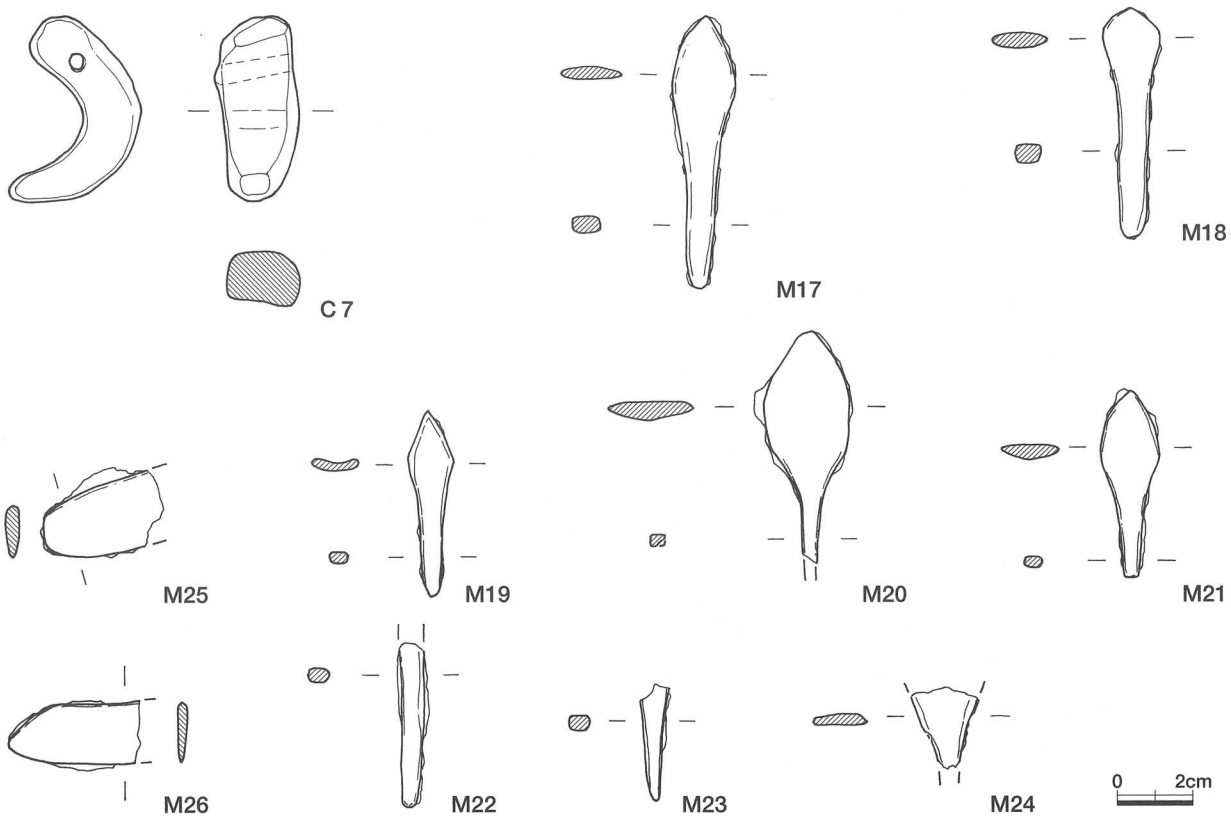
第21図　竪穴住居10土層・出土遺物①（1／4）



第22図　竪穴住居10出土遺物②（１／４）



第23図　竪穴住居10出土遺物③（1／4）



第24図　竪穴住居10出土遺物④（１／２）

竪穴住居11（第４・25図、図版７）

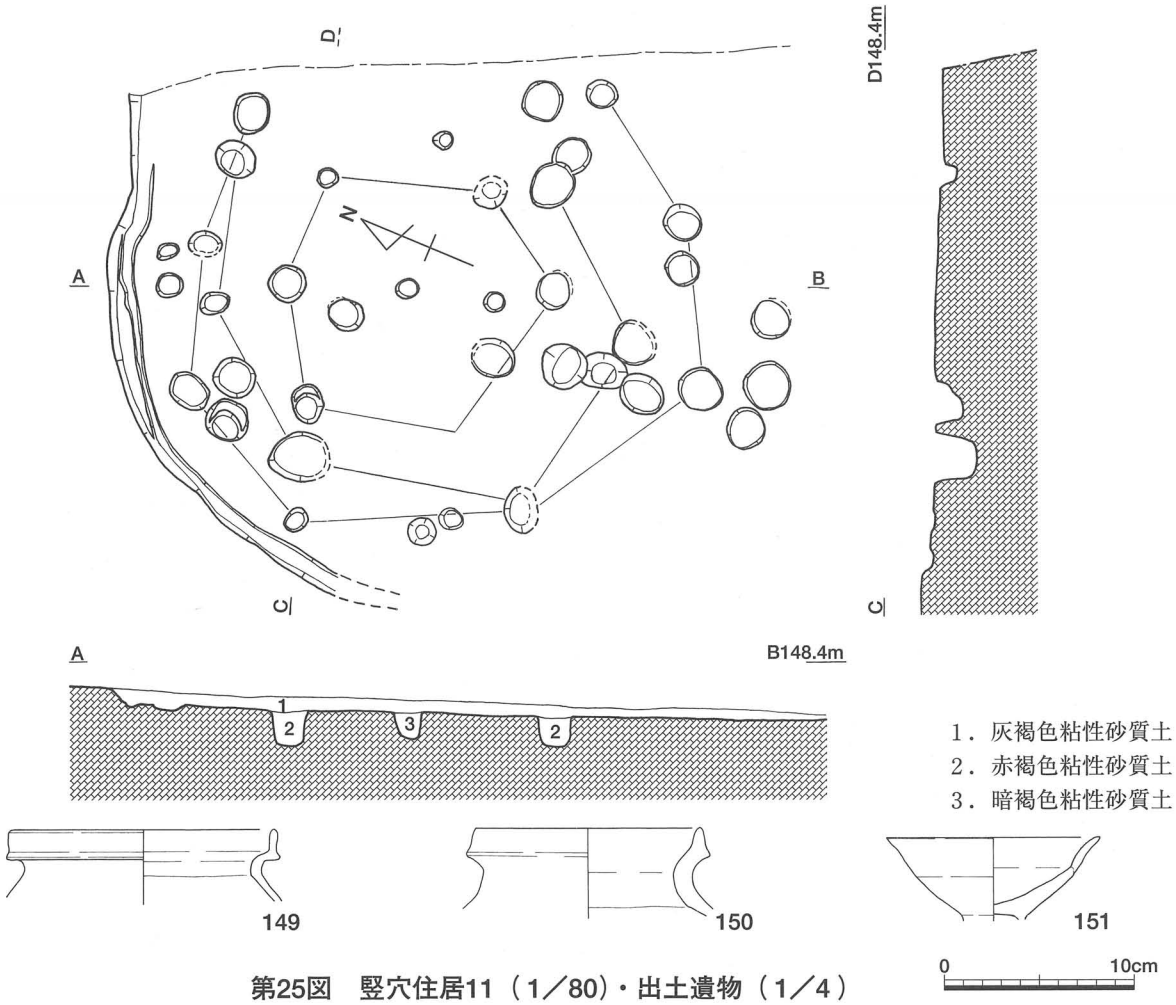
調査区の北側、丘陵のほぼ頂上平坦面に所在する。南側がわずかに傾斜しているため、側溝の一部が流出している。また、東半分が、道路の造成によって切られている。平面形は、円形を呈し、直径7.6ｍが考えられる。床面に多くの柱穴が出土したが、住居を廃絶した後、この住居跡で多くの土壙をつくっており、壁体溝が確認できなかったため、建て替えの回数や柱数が判然としなかった。住居の規模等を想定すると６本柱から８本柱が考えられる。

出土遺物には、弥生土器**149～151**がある。**149・150**は甕の口縁から頸部にかけての破片である。口縁端部を上下に拡張しており、垂直に引き出している。**151**は高杯の杯部である。口縁部を反らすように拡張している。

これらの遺物から竪穴住居11は、弥生時代後期後葉に営まれたものと考えられる。

竪穴住居12（第４・26図、図版７）

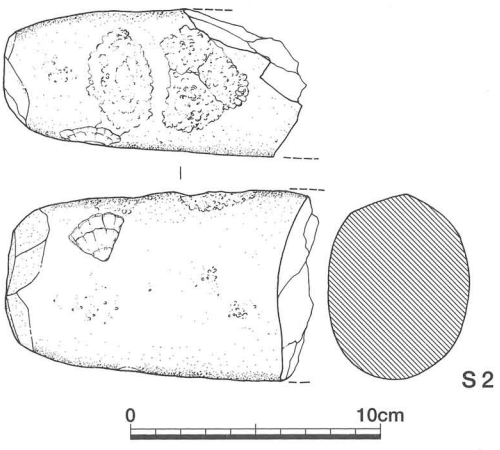
調査区の西端、西斜面に所在する。側壁に沿って壁体溝が掘られている。斜面につくられているため南西隅の壁体溝の一部が流出している。平面形は、南斜面方向にハの字形に広がる隅丸方形を呈し、住居の中央部分で１辺3.0ｍを測る。床面は、平らで主柱穴を２個もち、柱穴間の距離は1.0ｍを測る。台形の中央穴をもち、その中に径20㎝大の石材と石斧（**Ｓ２**）が遺存していた。また、中央穴のすぐ北側に台石と考えられる方形の扁平な石が出土した。また、北東隅にこぶし大の石を十数個集積した小土壙が確認された。また、床面より炭化材と炭の層が確認できた。炭化材は少量であったが放射状に検出されたため、この住居の垂木ということが想定され、火災にあったことが考えられる。

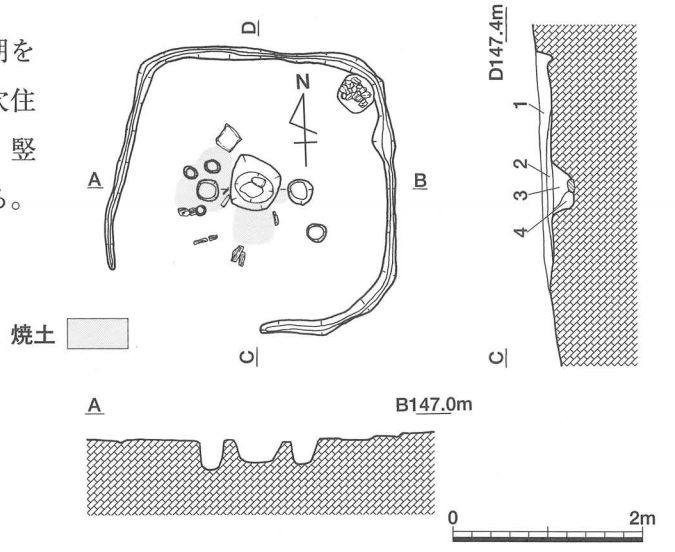


第25図　竪穴住居11（１／80）・出土遺物（１／４）

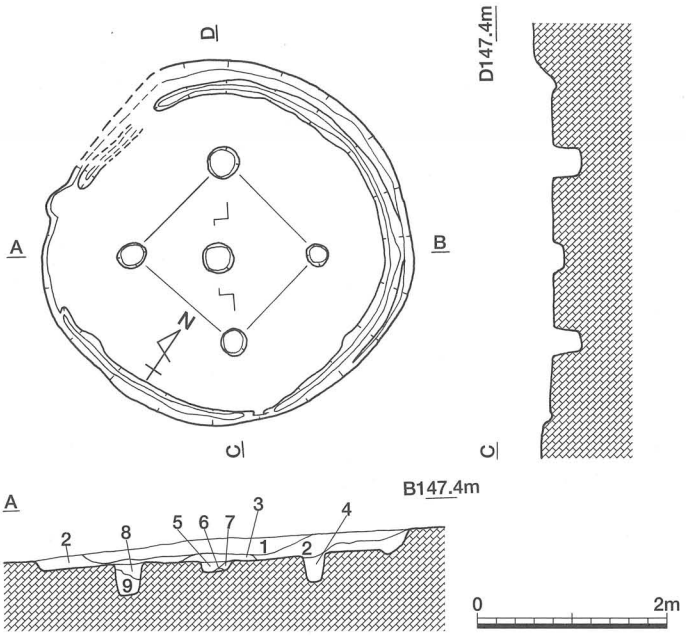
出土遺物には、石斧（**S２**）がある。刃部が欠けているが、大型の磨製蛤刃石斧と考えられる。

遺物が石斧１点のみのため住居が営まれた時期を特定することが難しいが、すぐ南に同規模の竪穴住居13が弥生時代後期後葉が想定されているため、竪穴住居12の時期も同時期であることが考えられる。





第26図　竪穴住居12（１／80）・出土遺物（１／３）



1．赤褐色粘質土
2．赤褐色粘質土(炭化物を含む)
3．黒褐色粘質土(炭化物を多く含む)
4．暗褐色粘質土(炭化物を含む)
5．赤褐色粘質土
6．黒褐色粘質土(炭化物を多く含む)
7．黄褐色粘質土
8．暗褐色粘質土(炭化物を含む)
9．赤褐色粘質土

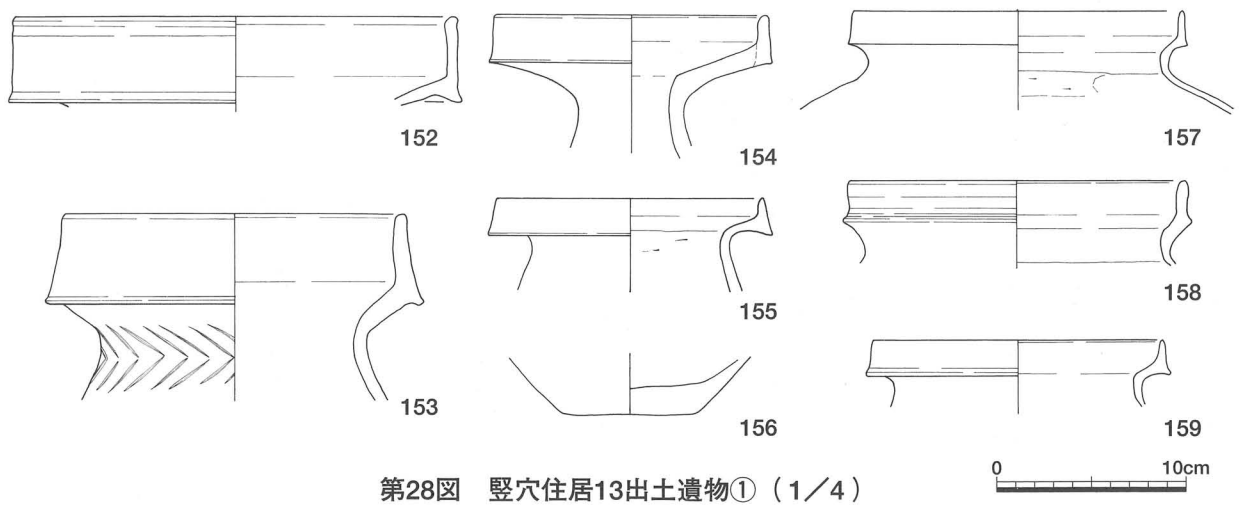
第27図　竪穴住居13（1／80）

竪穴住居13（第４・27図、図版７）

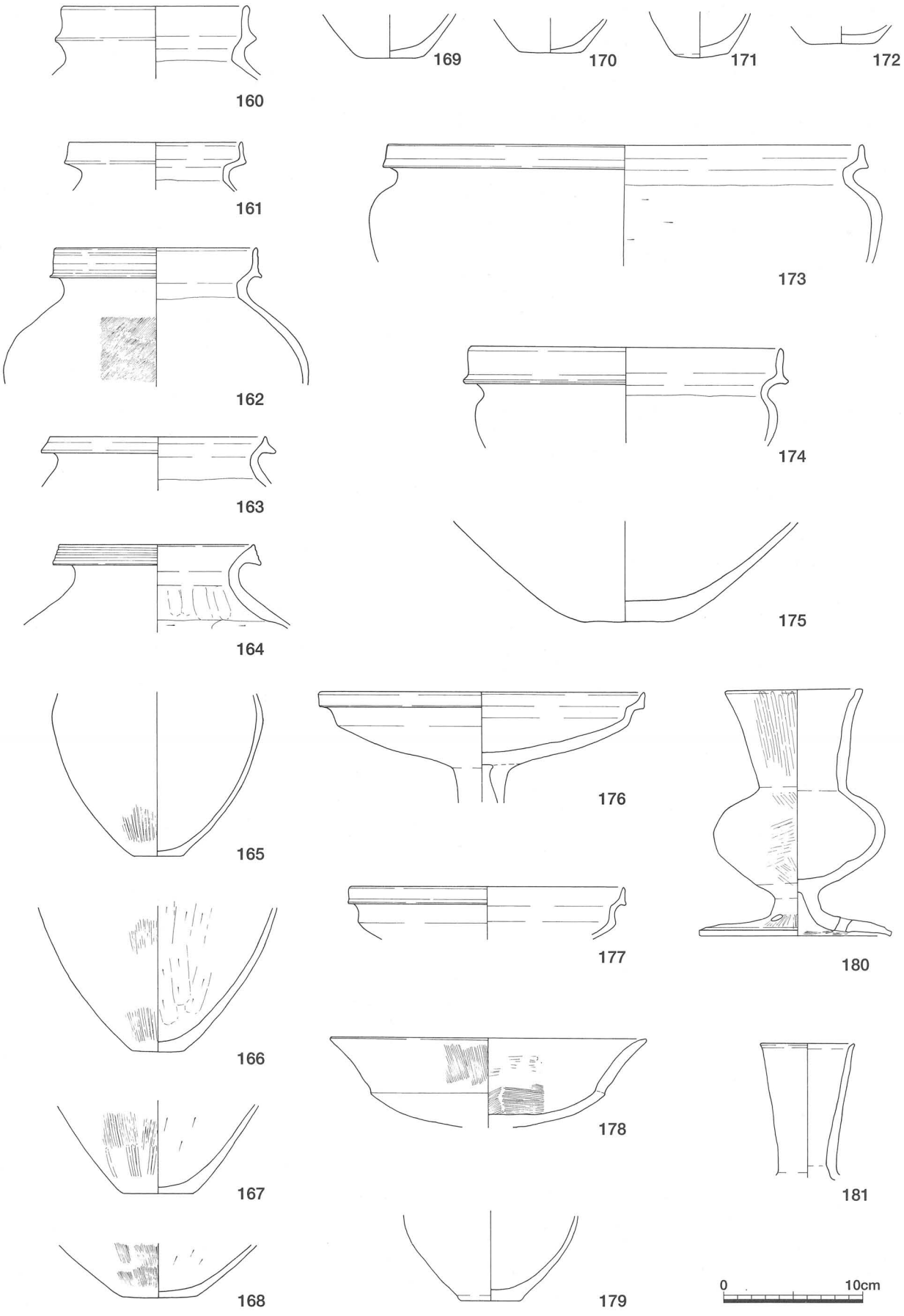
調査区の西端、西斜面に所在する。平面形は、円形を呈し、直径4.2mを測る。床面は、平らで主柱穴を４個もち、柱穴間の距離は、1.3～1.5mを測る。また、円形の中央穴をもつ。側壁に沿って壁体溝が掘られている。

出土遺物には、弥生土器**152～181**がある。**152～155**は壷の口縁から頸部にかけての破片である。いずれも口縁端部を上下に拡張しており、**152・154**は垂直に立ち上げている。**153**は頸部にく字状の線刻が施され、赤色顔料が塗られている。**156**は壷の底部と考えれる。**157～164**は甕の口縁から肩部にかけての破片である。**157～162**は口縁端部を上下に拡張しており、いずれも垂直に立ち上げている。**163・164**は口縁端部を三角形になるよう拡張している。**165・166**は甕の胴から底部にかけての破片である。**167～172**は底部の破片である。**173・174**は鉢の口縁から肩部にかけての破片である。口縁端部を上下に拡張しており、**173**は内外面に赤色顔料が塗られている。**175**は鉢の底部の破片である。**176～178**は高杯の杯部の破片である。**176・177**は杯部を垂直に屈曲させ、段をもって垂直に引き上げている。**178**は杯部を反るように屈曲させている。いずれも赤色顔料が塗られている。**179**は椀と考えられる胴から底部である。外面に赤色顔料が塗られている。**180**は脚付直口壷である。脚部にはスカシ孔が４個あけられている。**181**は直口壷の口縁部の破片と考えられる。

これらの遺物から竪穴住居13は、弥生時代後期後葉に営まれたものと考えられる。



第28図　竪穴住居13出土遺物①（1／4）



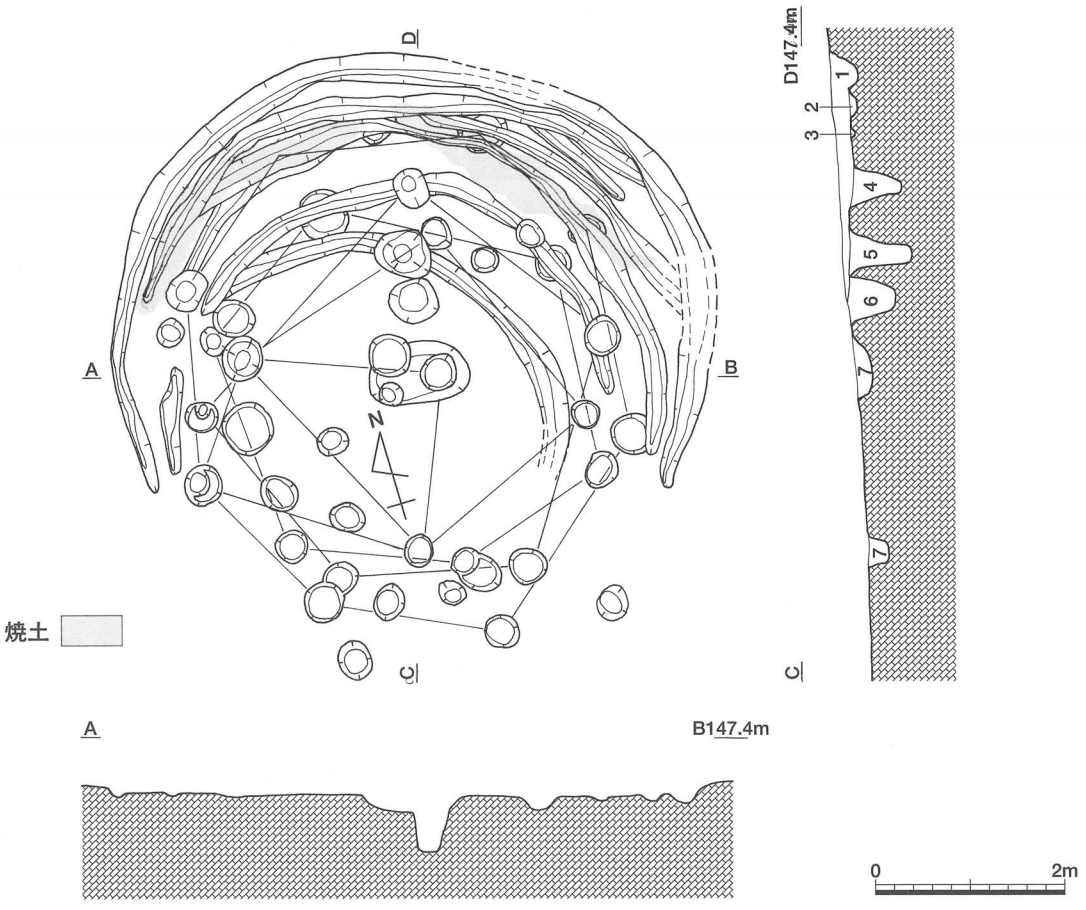
第29図　竪穴住居13出土遺物②（1／4）

竪穴住居14（第４・30図、図版８）

調査区の南西部、南斜面に所在する。斜面につくられているため谷側の南半分の側壁が流出している。平面形は、側壁の検出状況から円形を呈し、側壁に沿うように壁体溝が掘られている。また、壁体溝が住居内部に６条検出されていて、この場所で最低６回は建て替えがおこなわれたと考えられる。壁体溝の検出状況から北方向へ拡張していったことが確認できた。規模は、最初の段階で、直径4.4m、次に直径4.6m、そして次の段階で直径5.2m、さらに直径5.6m、直径6.0mと次第に拡張していき、最終段階で、直径6.4mを測る。柱穴は、最初の段階と次に段階で、４本柱、柱穴間の距離は、2.0～2.4mを測る。それ以降は、５本柱、６本柱が想定され、最終段階で８本柱が考えられる。また、中央に長方形状の中央穴をもつ。

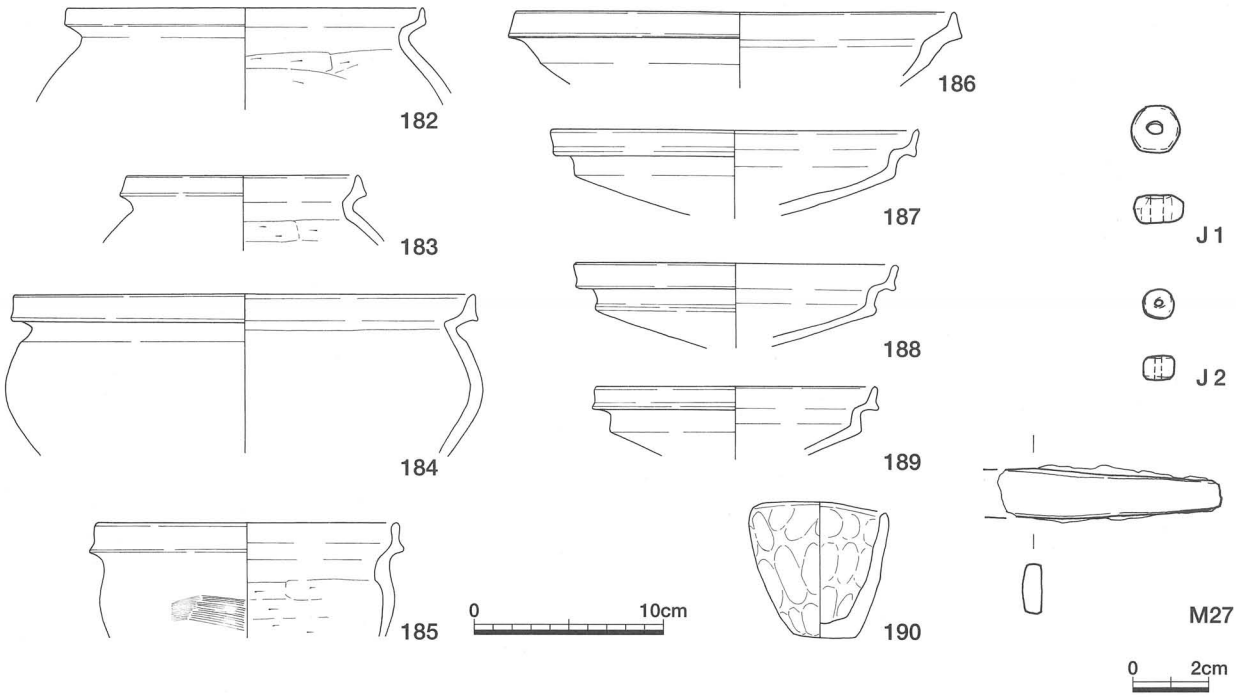
出土遺物には、弥生土器**182～190**、鉄器**M27**、ガラス玉**J1・2**がある。**182・183**は甕の口縁から肩部にかけての破片である。**182**は口縁端部を垂直に拡張しており、外面に赤色顔料が塗られている。**183**は口縁端部を上下に三角形になるよう拡張している。**184・185**は鉢の口縁から胴部にかけての破片である。口縁端部を上下に引き出し、上方向に垂直に拡張している。**186～189**は高杯の杯部の破片である。いずれも杯部を屈曲させ、段をもって垂直に引き上げている。**186**のみ緩やかに屈曲している。いずれも赤色顔料が塗られている。**190**は手捏ねのミニチュアの椀である。**M27**は工具と考えられる扁平な形状をしている鉄器である。**J1・2**はガラス製の小玉である。ともに薄い青緑色をしている。

これらの遺物から竪穴住居14は、弥生時代後期後葉に営まれたものと考えられる。



1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．暗褐色粘質土
3．赤褐色粘質土
4．暗褐色粘質土（炭化物を含む）
5．暗褐色粘質土（炭化物を含む）
6．暗褐色粘質土（炭化物を含む）
7．赤褐色粘質土

第30図　竪穴住居14（1／80）



第31図　竪穴住居14出土遺物（１／２・１／４）

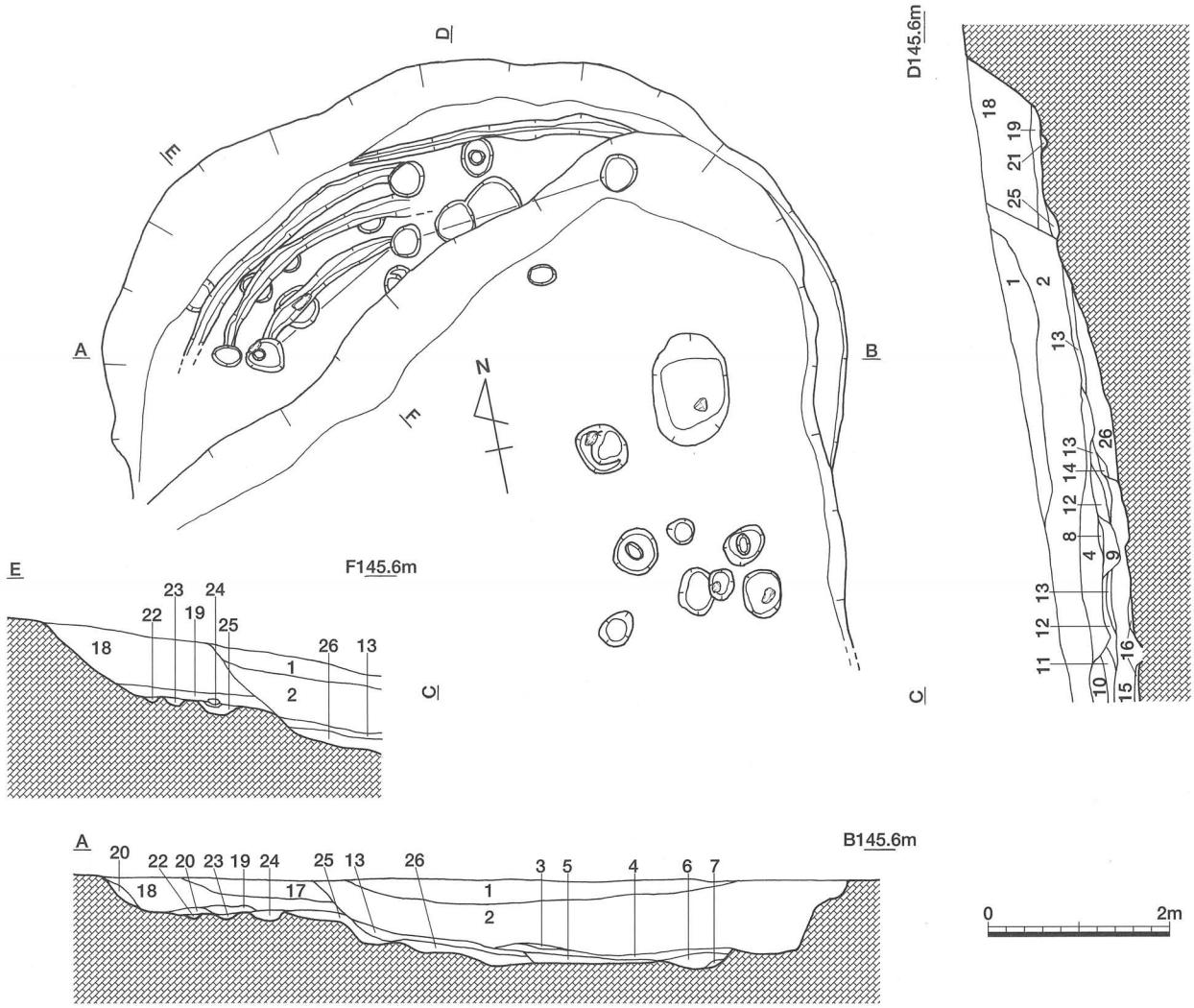
竪穴住居15（第４・32図、図版８）

調査区の南部、南斜面に所在する。斜面につくられているため谷側の南半分の側壁が流出している。平面形は、側壁の検出状況から円形を呈し、側壁に沿うように壁体溝が掘られている。また、壁体溝が住居内部に３条検出されていて、この場所で最低３回は建て替えがおこなわれたと考えられる。壁体溝の検出状況、住居の埋土の状況から北方向へ拡張していったことが確認できた。また、南側に方形の大きな掘り込みが確認できた。方形の住居の存在が考えられるが確認できなかった。規模は、最初の段階で、直径4.4m、そして次の段階で直径5.2m、さらに直径6.0m、最終段階で、直径8.0mを測る。柱穴も検出されたが、方形の掘り込みのため南半分の柱穴が確認できず、柱の本数などは確認できなかった。

出土遺物には、弥生土器**191～234**、石器**Ｓ３**、鉄器**M28～31**がある。**191～194**は壷の口縁から頸部にかけての破片である。**191**は口縁端部を垂直に立ち上げており、赤色顔料が塗られている。**192～194**は口縁端部を上下に拡張し、**192・194**は頸部に沈線が施されている。**193**は口縁外面に沈線が施されている。**195～209**は甕の口縁から肩部にかけての破片である。**195～199**は口縁端部を上下に拡張し、上方向へほぼ垂直に立ち上げている。**200～209**は口縁端部が三角形になるよう上下に拡張している。**206**は頸部に刺突文が施されている。**210・211**は口縁がく字状に屈曲している。**212～216**は甕の底部と考えられる破片である。**213**は底部が高台状に突出している。**214**は底部中央に穿孔が認められる。**217・218**は鉢の口縁から胴部にかけての破片である。口縁端部を垂直に立ち上げている。**219・220**は完形の小型の鉢である。これも口縁端部を垂直に立ち上げている。**217～220**のいずれも赤色顔料が塗られていた。**221**は鉢の底部である。**222・223**は高杯の杯部の破片である。杯部を屈曲させ、段をもって垂直に引き上げている。**224**は高杯の脚部の破片である。**225**は高杯の杯部から脚部にかけての破片である。杯部は椀状に湾曲している。脚の端部は丸く仕上げている。**226～231**は高杯の脚部の破片である。いずれも端部を三角形になるよう下方向に拡張している。**226～229**はスカシ孔があけられている。**232**は手捏ねのミニチュアの椀である。**233**は直口壷の口縁部と考えられる。**234**は脚付椀の脚部と考えられる。内外面に赤

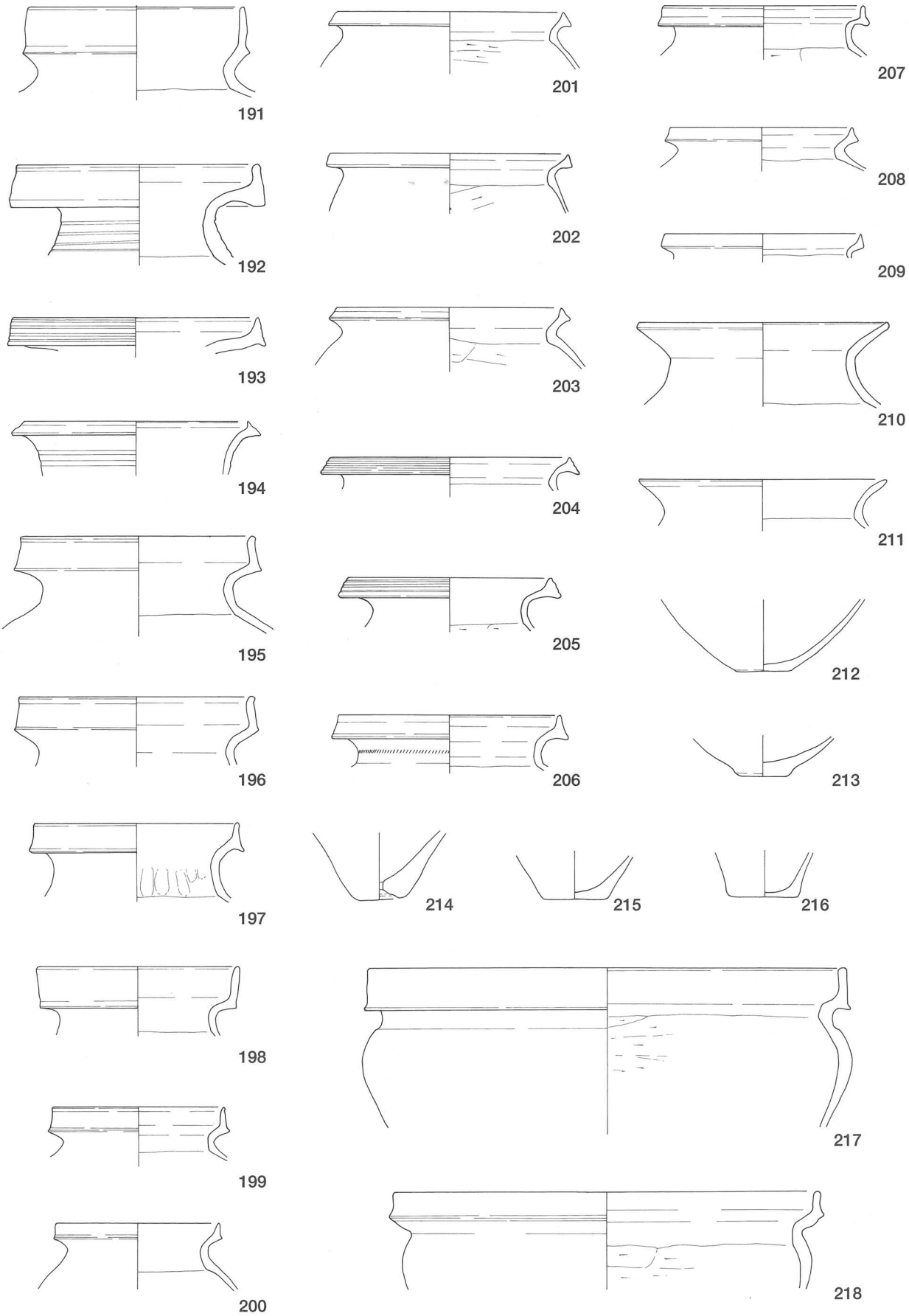
色顔料が塗られている。**S３**はサヌカイト製の打製石包丁で両端が抉られている。**M28～M30**は鏃である。**M28**は茎部を欠いている。**M29・30**は先端部を欠いている。**M31**は扁平な棒状の鉄を曲げた形状をしている。工具として使われたのではなかろうか。

これらの遺物から竪穴住居15は、弥生時代後期前葉と後期末葉に営まれたものと考えられる。

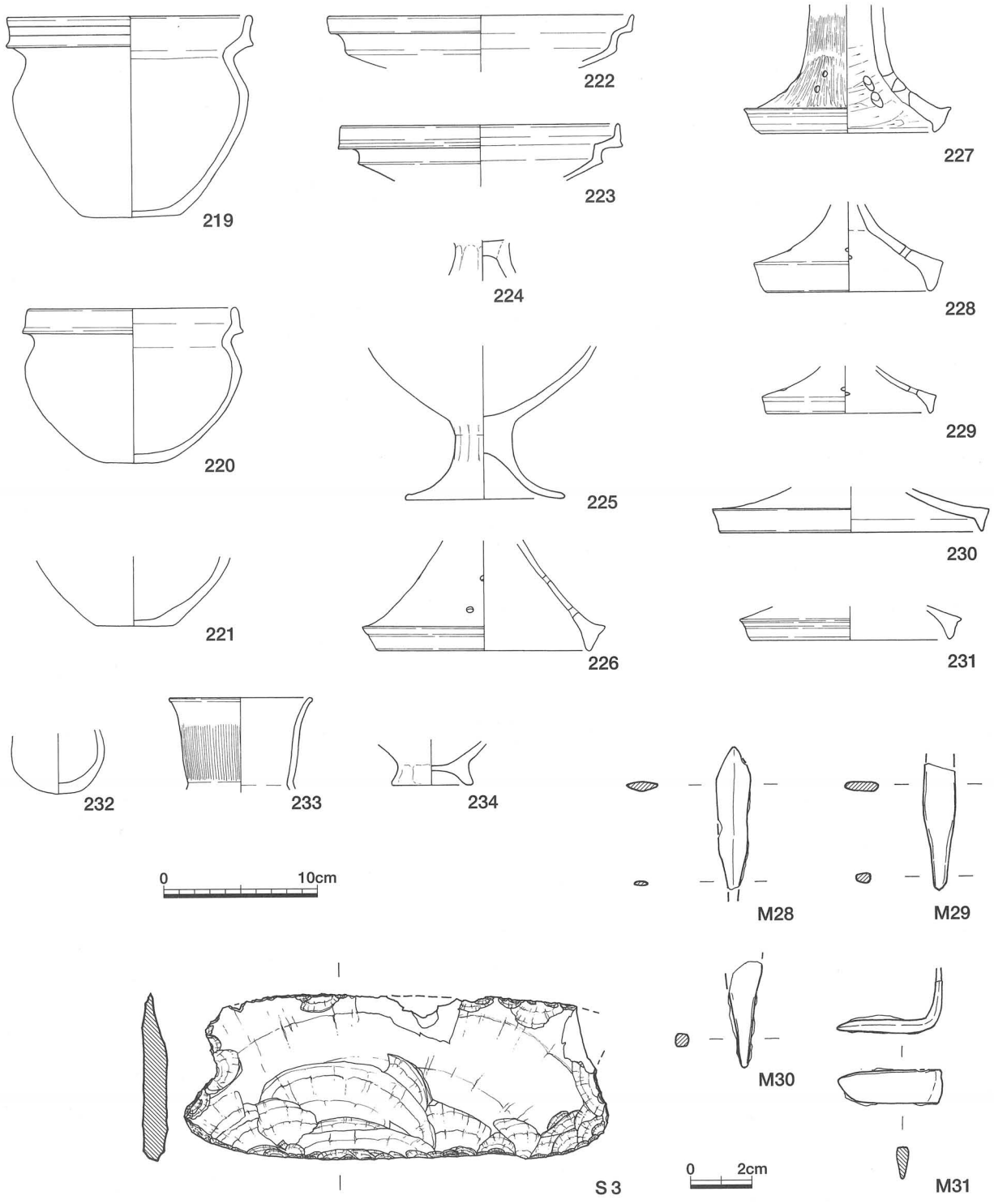


1．暗褐色粘質土
2．暗褐色粘質土（炭化物を含む）
3．黄褐色粘性砂質土
4．暗褐色粘質土（炭化物を含む）と黄褐色砂質土のまざり土
5．暗褐色粘質土
6．赤褐色粘質土（焼土を含む）
7．暗褐色粘質土（炭化物を含む）
8．暗褐色粘質土（炭化物・焼土を含む）
9．暗褐色粘質土（炭化物を多く含む）
10．青褐色粘質土
11．暗褐色粘質土（炭化物を多く含む）と黄褐色砂質土のまざり土
12．赤褐色粘質土（焼土を含む）
13．黄褐色砂質土（炭化物を多く含む）
14．黄褐色砂質土
15．暗褐色粘質土（炭化物を多く含む）
16．暗褐色粘質土（炭化物を含む）
17．暗褐色粘質土（焼土を含む）
18．暗褐色粘質土（炭化物を含む）
19．暗褐色粘質土（炭化物を含む）と青灰色粘質土のまざり土
20．暗褐色粘質土（炭化物を多く含む）
21．暗褐色粘質土と赤褐色粘質土のまざり土
22．暗褐色粘質土（炭化物を多く含む）
23．暗褐色粘質土（炭化物を多く含む）
24．暗褐色粘質土（炭化物を多く含む）と青灰色粘質土のまざり土
25．暗褐色粘質土と青灰色粘質土のまざり土
26．暗褐色粘質土（炭化物を多く含む）

第32図　竪穴住居15（１／80）



第33図　竪穴住居15出土遺物①（1／4）



第34図　竪穴住居15出土遺物②（１／２・１／４）

２．段状遺構

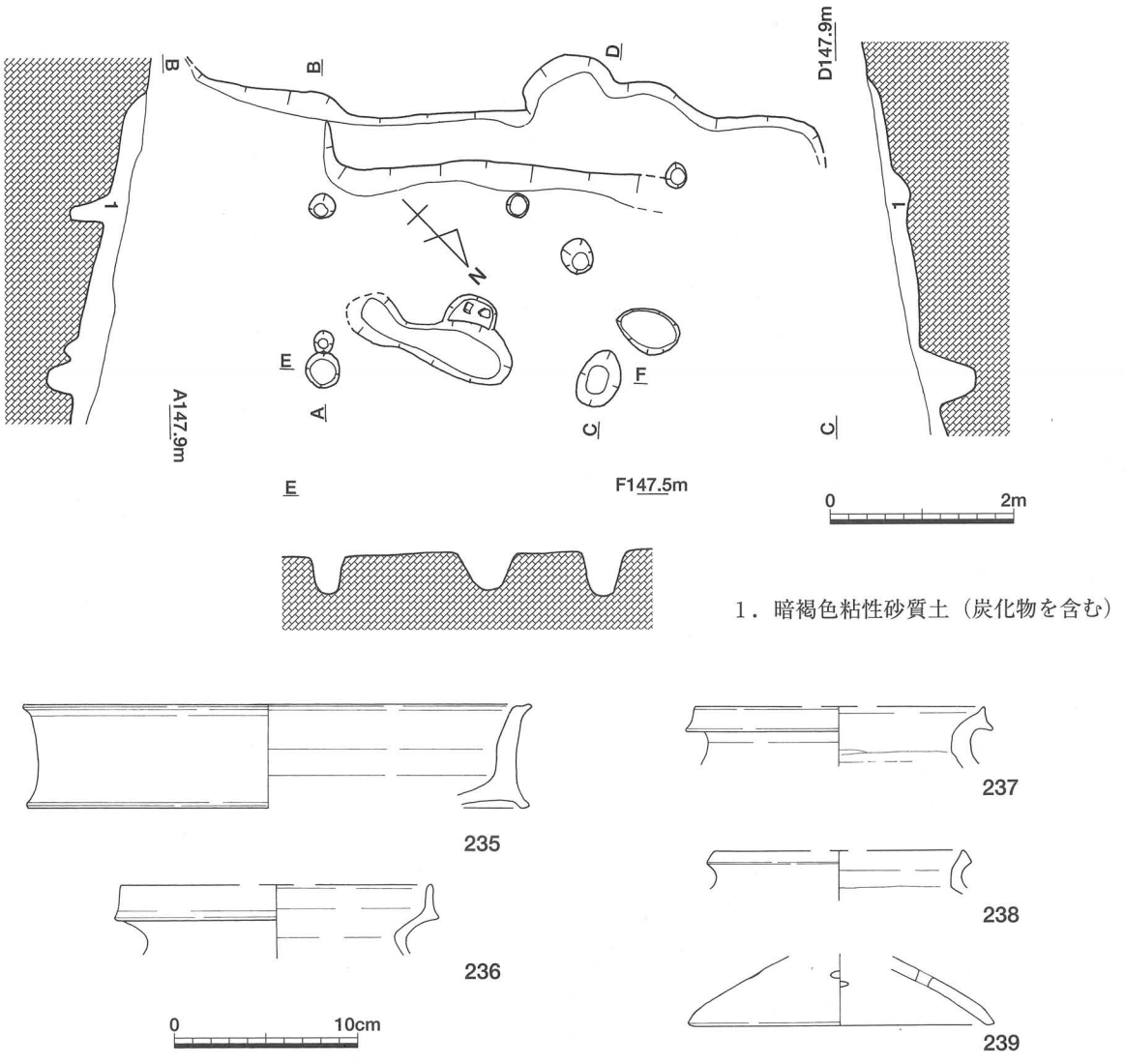
今回の調査で、段状遺構と考えられるものが合計２軒出土した。いずれも斜面につくられており、また竪穴住居に隣接しているため、住居を補助する簡易な小屋的な建物であったことが推測される。

段状遺構１（第４・35図、図版８）

調査区の北東部、北東斜面に所在する。丘陵の南東斜面を削平してつくっており、谷側の北東部分が流失している。北東部分で、竪穴住居４と接している。検出面で全長6.8m、最大幅4.0mを測る。側壁に沿って幅約50cmの高床状遺構が認められた。側壁に平行に柱穴が２個並んでいる。

出土遺物には、弥生土器**235～239**がある。**235**は壷の口縁の破片である。口縁端部を上下に拡張し、上方向に垂直に立ち上げている。内外面に赤色顔料が塗られている。**236～238**は甕の口縁から頸部にかけての破片である。**236**は口縁端部を上下に拡張し、上方向に垂直に立ち上げている。**237・238**は口縁端部を三角形になるように拡張している。**239**は高杯の脚部の破片である。端部を丸く仕上げている。

これらの遺物から段状遺構１は弥生時代後期後葉につくられたものと考えられる。



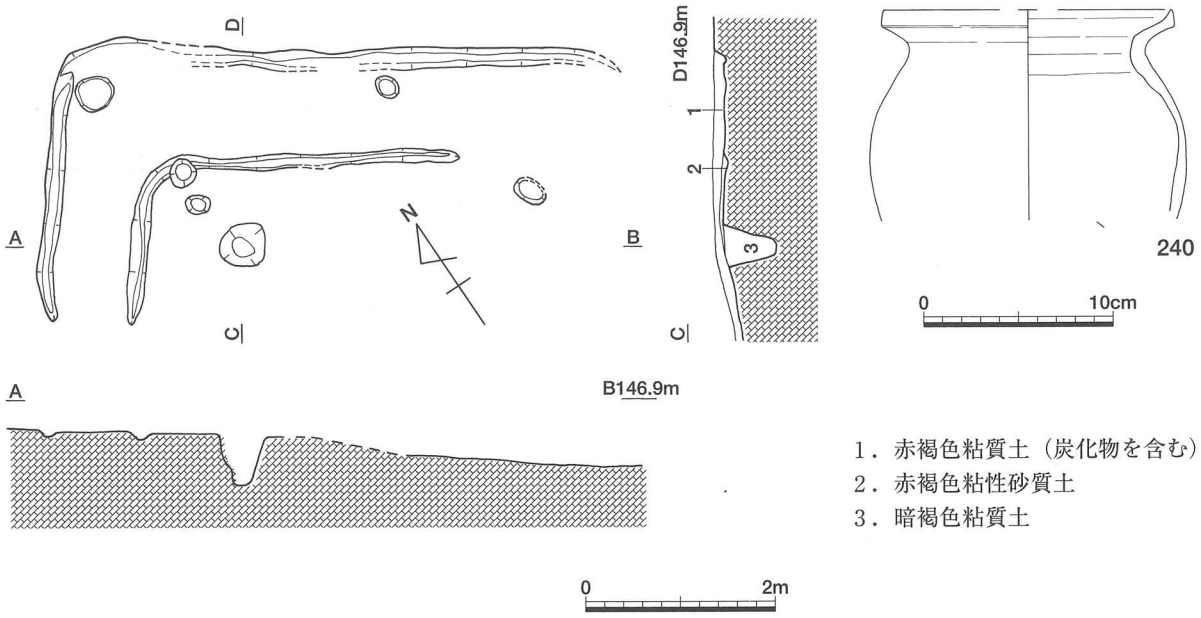
第35図　段状遺構１（１／80）・出土遺物（１／４）

段状遺構２（第４・36図、図版９）

調査区の南西部、南斜面に所在し、竪穴住居14と隣接する。丘陵の南斜面を削平してつくっており、側壁は確認できなかったが、壁体溝の一部が認められた。壁体溝が２条検出されているので、１度建て替えをおこなっていると考えられる。壁体溝に沿って平行に柱穴がそれぞれ２個並んでいる。

出土遺物には、弥生土器**240**がある。**240**は甕の口縁から肩部にかけての破片で、口縁端部をわずかに上方向に立ち上げている。

これらの遺物から段状遺構２は弥生時代後期後葉につくられたものと考えられる。



第36図　段状遺構２（１／80）・出土遺物（１／４）

２．土壙

今回の調査で、土壙が118基出土した。そのうち穴の底が広くなる袋状のものが多く検出され、貯蔵用の穴として利用されたことが考えられる。平面形態は円形のものが多く、規模は直径約1.3～1.7m、深さ0.5～1.5mが中心となる。これらの土壙は、大きく２群にまとまっている。１群は調査区東側のほぼ中央、住居１と２の間の南斜面に集中し、もう１群は、調査区西側の丘陵頂上部、住居11付近に集中している。

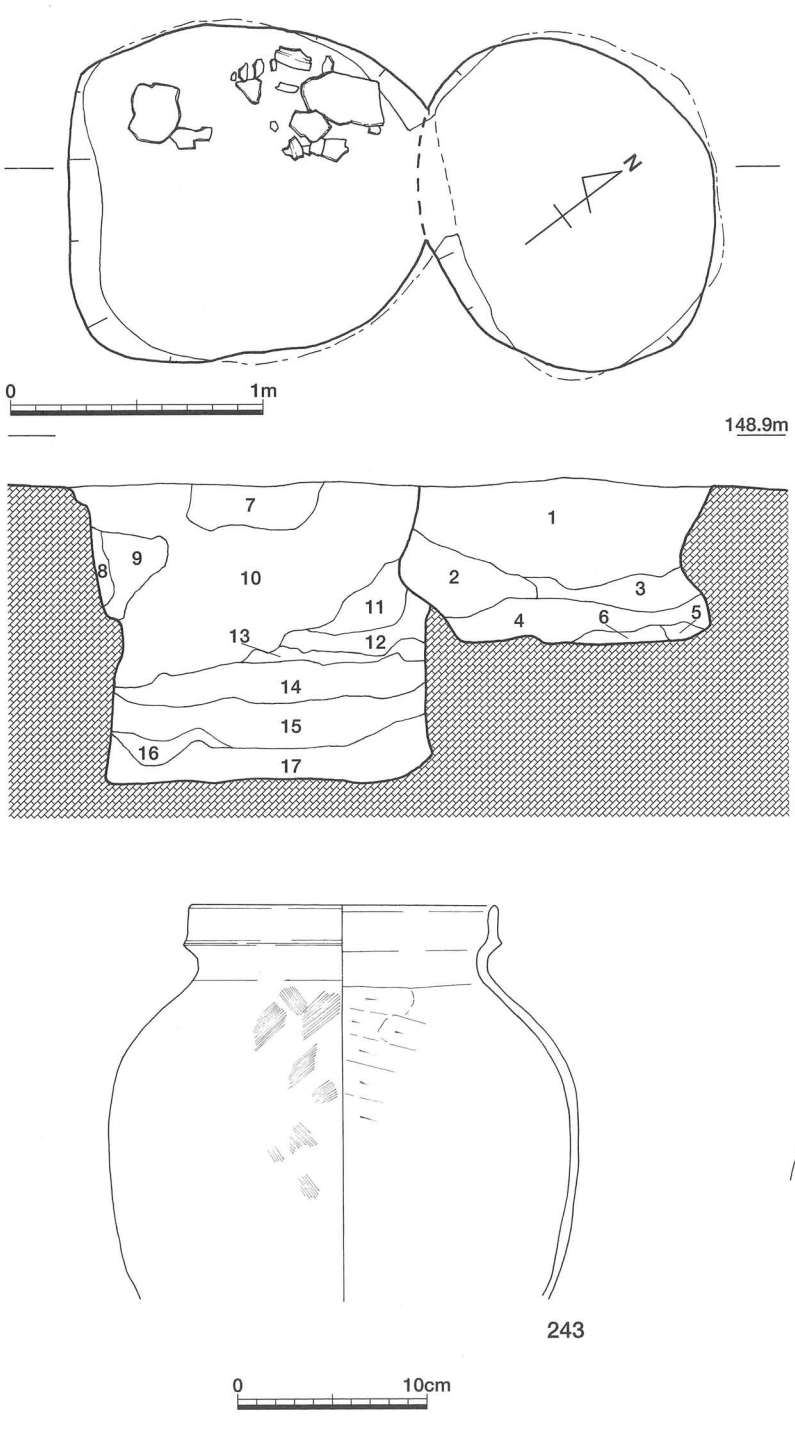
土壙１・２（第４・37図、図版９）

調査区の北端にあたり、丘陵頂上部に所在する。土壙群では、もっとも高所となる。土壙１と土壙２は重複しており、土壙２が土壙１を切るような形でつくられている。平面形は、土壙１が隅丸方形、土壙２が円形を呈し、断面は土壙１が方形、土壙２が袋状を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、土壙１は、最大径1.6m、最大底径1.6m、中央での深さ1.15m、土壙２は、最大径1.3m、最大底径1.4m、中央での深さ0.65mを測る。

出土遺物には、土壙１で弥生土器**241～258**がある。**241・242**は壷の口縁から頸部にかけての破片である。**241**は口縁端部を上方向に三角形になるよう拡張している。**242**は口縁端部を上方向に垂直に拡張している。**243～252**は甕の口縁から胴部にかけての破片である。**243～251**は口縁端部をほぼ垂直に立ち上げている。**253**は口縁端部を三角形になるよう上方向に拡張している。**253～256**は甕の底部から胴部に

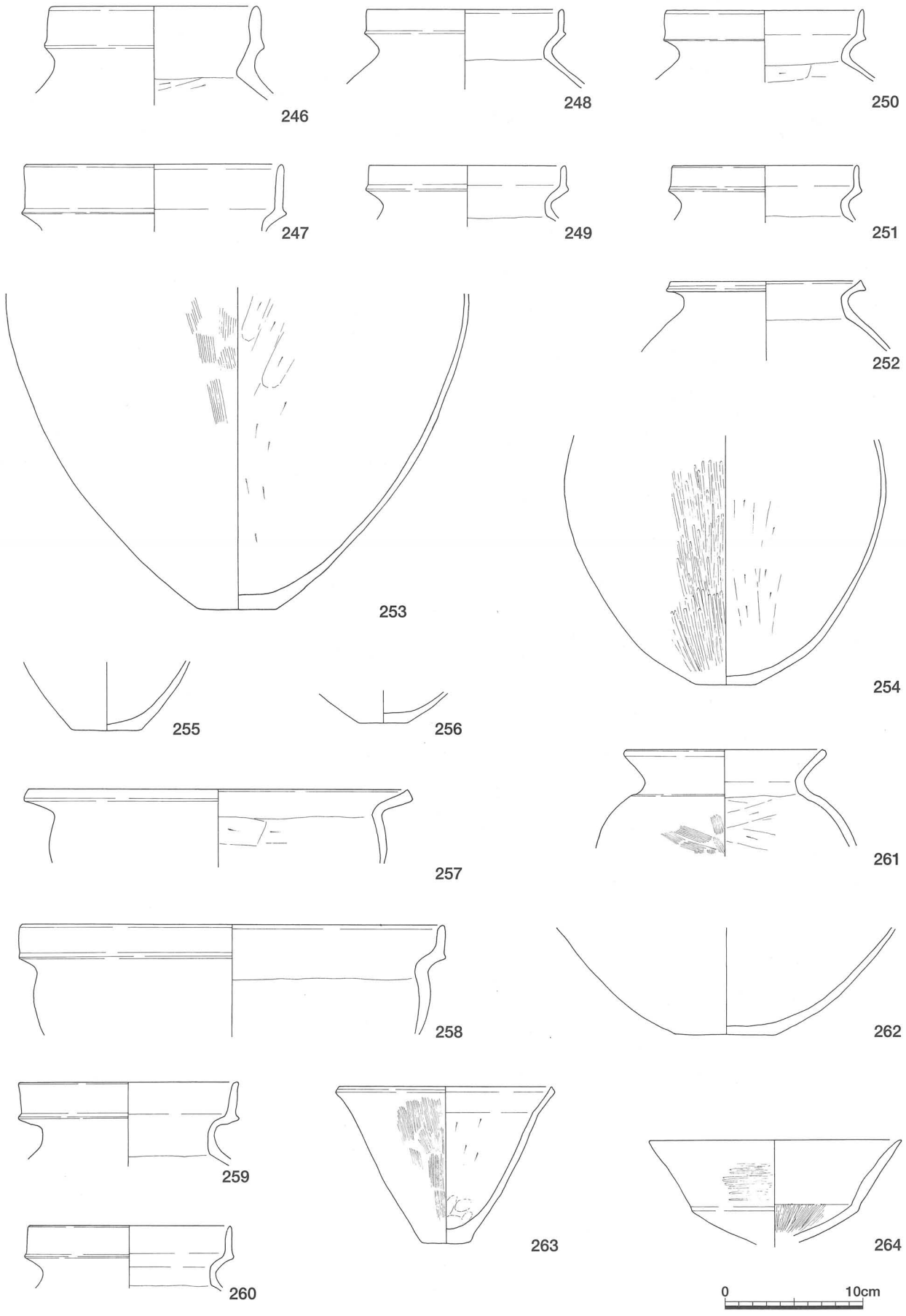
かけての破片である。257・258は鉢の口縁から肩部にかけての破片である。257は口縁端部をく字状に屈曲させている。258は口縁端部を垂直に立ち上げている。土壙2は弥生土器259～264がある。259～261は甕の口縁から肩部にかけての破片である。259・260は口縁端部を垂直に立ち上げている。261は口縁部がく字状に屈曲している。262は甕の底部と考えられる。263は鉢で、口縁端部が三角形になるように仕上げている。また、胴は湾曲せず、直線的になっている。264は高杯の杯部の破片で、口縁がやや外に反るように立ち上がっている。

これらの遺物から土壙1・2は、弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。



1．黄褐色砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色粘性砂質土
3．黄褐色砂質土
4．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
5．赤褐色粘性砂質土
6．暗褐色粘性砂質土
7．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
8．黄褐色砂質土
9．黄橙色砂質土
10．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
11．黄褐色砂質土
12．赤褐色砂質土
13．赤褐色粘性砂質土
14．暗褐色粘性砂質土
15．赤褐色砂質土
16．黄褐色砂質土
17．暗褐色粘性砂質土

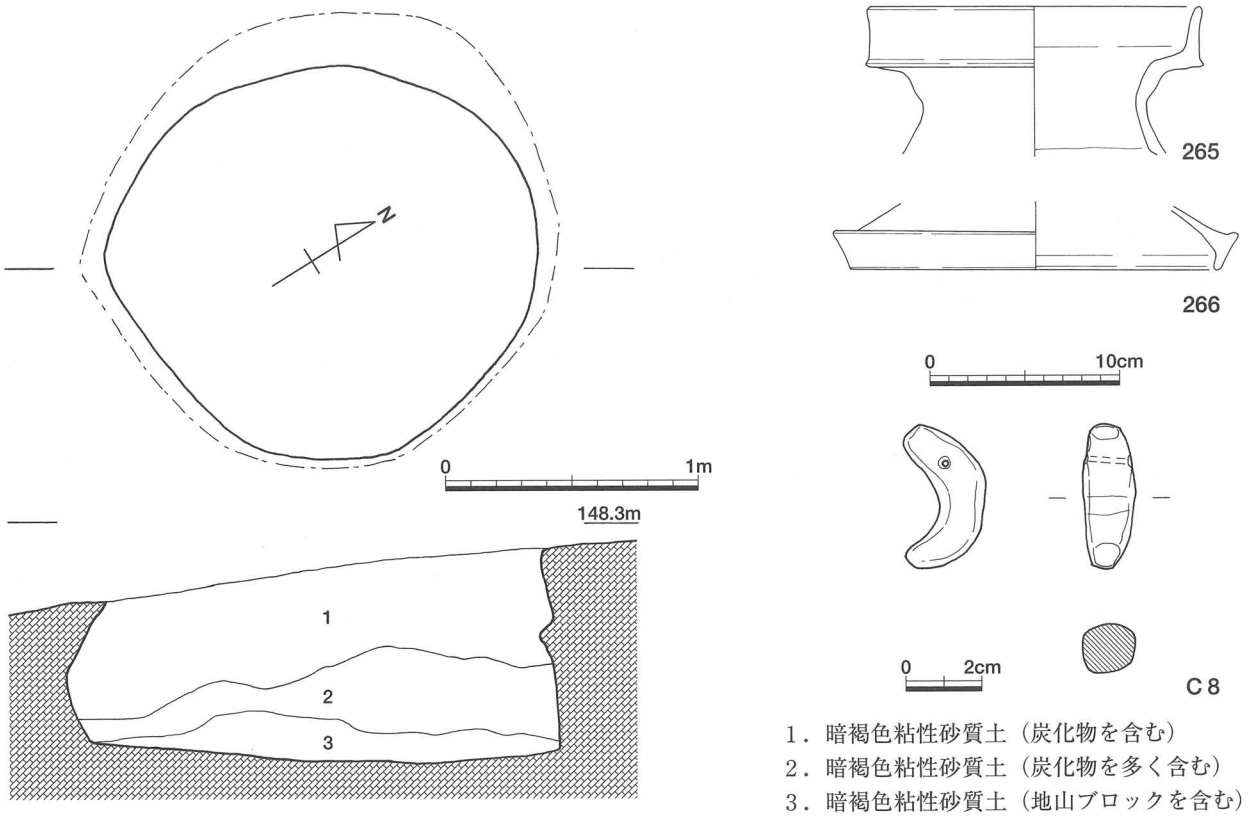
第37図　土壙1・2（1／30）・出土遺物①（1／4）



第38図　土壙１・２出土遺物②（１／４）

土壙３（第４・39図）

調査区の中央、丘陵平坦面の南端にあたり南西斜面に所在する。平面形は、円形を呈し、断面は袋状を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.7m、底径1.9m、中央での深さ0.75mを測る。出土遺物には弥生土器**265・266**、土製品**C８**がある。**265**は壷の口縁から頸部にかけての破片である。口縁端部が垂直に立ち上がる。**266**は高杯の脚部の破片である。端部を内径するように上下に引き出している。**C８**は土製勾玉である。完形で、中央がく字状に屈曲し、上部に穿孔がある。これらの遺物から土壙３は、弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。



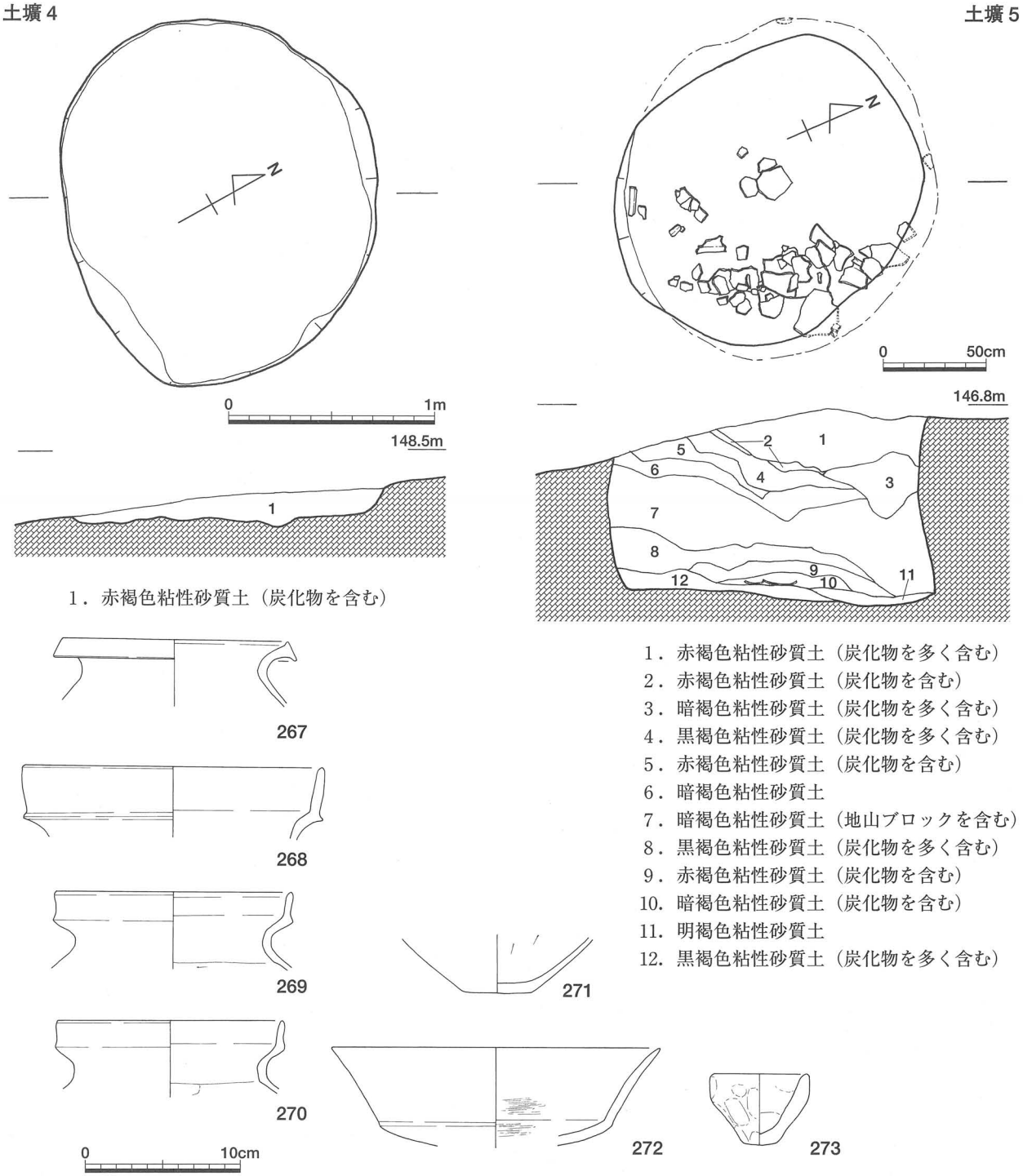
第39図　土壙３（１／30）・出土遺物（１／２・１／４）

土壙４（第４・40図）

調査区の中央、南西斜面に所在する。平面形は、円形を呈している。非常に浅く、斜面の谷側では平坦になっている。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.8m、最大底径1.75m、中央での深さ0.1mを測る。出土遺物には弥生土器**267**がある。甕の口縁から頸部にかけての破片で、口縁端部を三角形になるよう上下に拡張している。この遺物から土壙４は、弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。

土壙５（第４・40図、図版９）

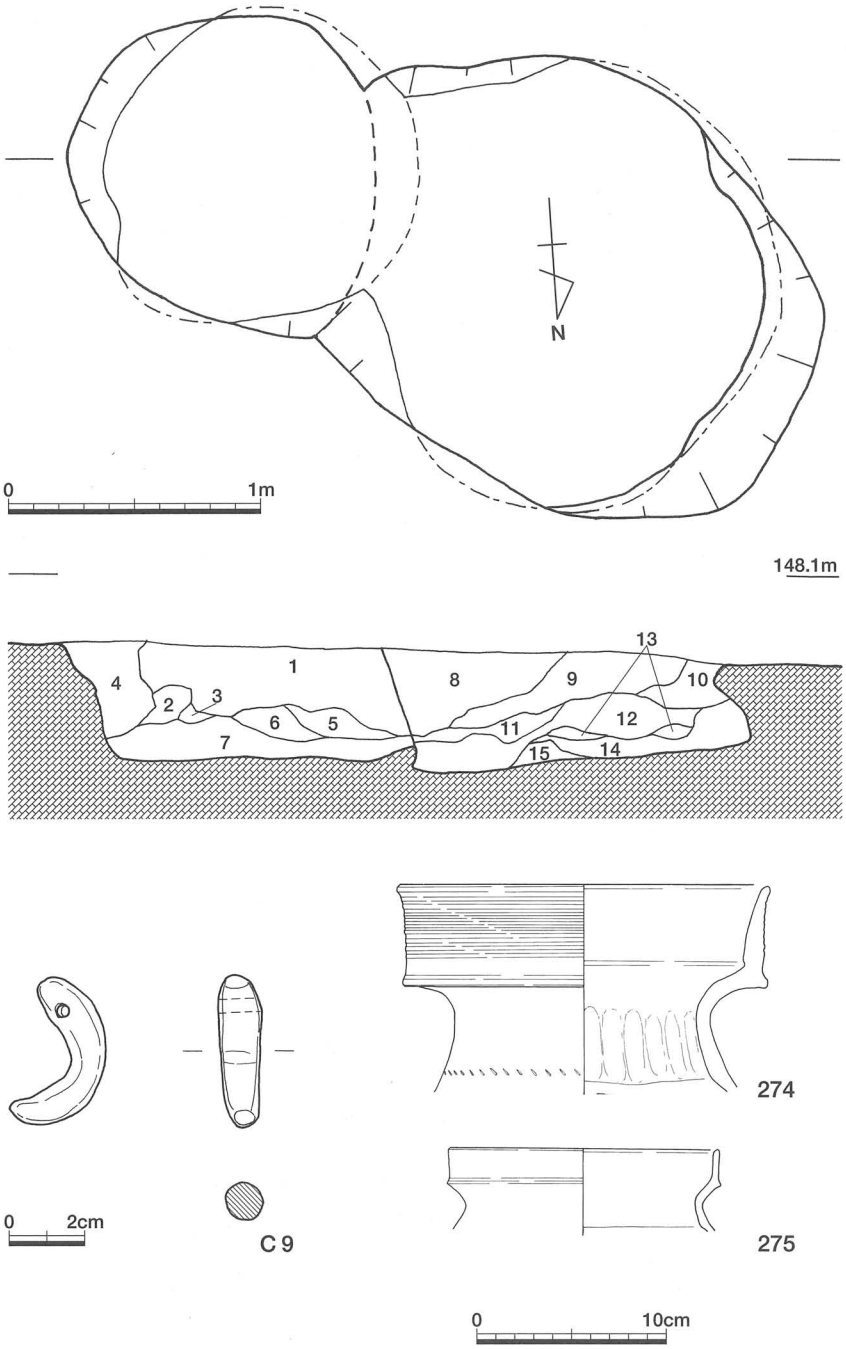
調査区の中央、南西斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は底がやや広い方形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.55m、最大底径1.7m、中央での深さ0.9mを測る。底からまとまって土器が出土している。出土遺物には弥生土器**268～273**がある。**268～270**は甕の口縁から頸部にかけての破片である。口縁端部を垂直に立ち上げている。**271**は甕の底部と考えられる破片である。**272**は高杯の杯部の破片である。口縁部が外側に反るように屈曲している。**273**はミニチュアの手捏ねの椀である。ほぼ全面に指押えの痕跡が残る。この遺物から土壙５は、弥生時代後期末葉につくられたと考えられ



第40図　土壙４・５（１／30）・出土遺物（１／４）

土壙６・７（第４・41図）

調査区の中央、南西斜面に所在する。土壙６と土壙７は重複しており、土壙７が土壙６を切るような形でつくられている。平面形は、土壙６が円形、土壙７が楕円形を呈し、断面は土壙６が台形、土壙７が袋状を呈している。土壙６は中型の部類にはいり、最大径1.3m、最大底径1.35m、中央での深さ0.45mを測る。土壙７は大型の部類にはいり、最大径2.05m、最大底径1.8m、中央での深さ0.45mを測る。出土遺物には弥生土器**274・275**、土製品**Ｃ９**がある。**274**は壷の口縁から頸部にかけての破片である。口縁端部を



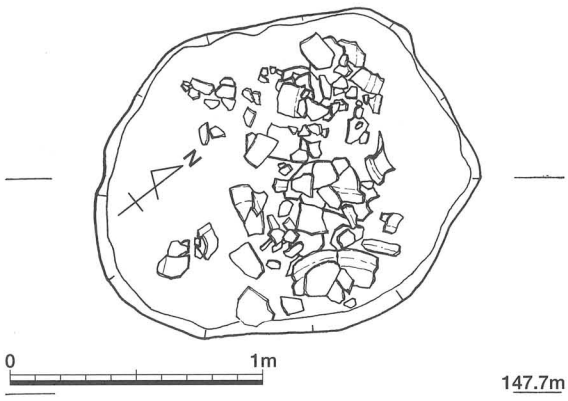
垂直に立ち上げ、その外側に沈線、頸部に刺突文を施している。**275**は甕の口縁から頸部にかけての破片である。口縁端部を垂直に立ち上げている。**C９**は土製の勾玉である。完形で中央をく字状に屈曲にさせている。これらの遺物から土壙７・８は、弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

1．明褐色粘性砂質土
（炭化物を多く含む）
2．赤褐色粘性砂質土
3．暗褐色粘性砂質土
4．暗褐色粘性砂質土
（炭化物を含む）
5．赤褐色粘性砂質土
（炭化物を多く含む）
6．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
7．赤褐色粘性砂質土
8．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
9．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
10．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
11．暗褐色粘性砂質土
（炭化物を多く含む）
12．黒褐色粘性砂質土
（炭化物を多く含む）
13．赤褐色粘性砂質土
（炭化物を多く含む）
14．暗褐色粘性砂質土
（炭化物を多く含む）
15．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

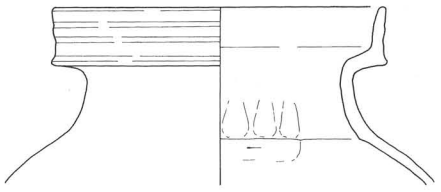
第41図　土壙６・７（１／30）・出土遺物（１／４）

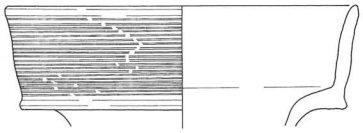
土壙８（第４・42図）

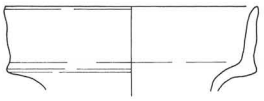
調査区の中央、南西斜面に所在する。平面形は、円形を呈している。比較的浅く、断面はレンズ状を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.5m、最大底径1.4m、中央での深さ0.2mを測る。底を中心に土器がまとまって出土している。出土遺物には弥生土器**276～285**がある。**276～279**は壷の口縁から肩部にかけての破片である。口縁端部を垂直またはやや反るように立ち上げている。**280**は甕の口縁から頸部の破片である。口縁端部を垂直に立ち上げている。**281・282**は甕の底部と考えられる破片である。**283～285**は鉢である。口縁端部を垂直に立ち上げている。これらの遺物から土壙８は、弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

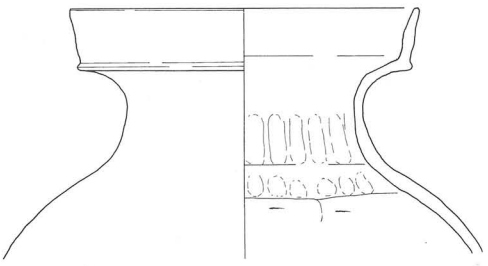


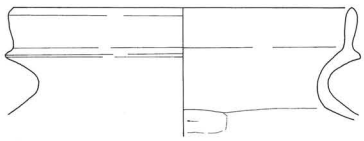
1．暗褐色粘性砂質土
2．暗褐色粘性砂質土
（炭化物・土器を含む）
3．赤褐色粘性砂質土
4．赤褐色粘性砂質土
5．灰褐色粘性砂質土
6．赤褐色粘性砂質土
7．暗褐色粘性砂質土

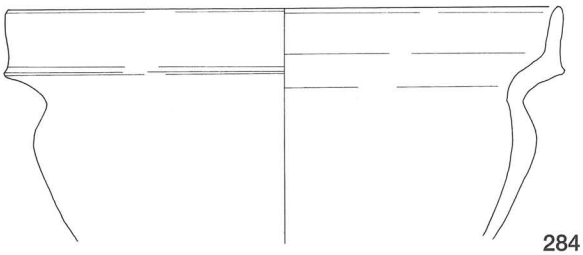

276

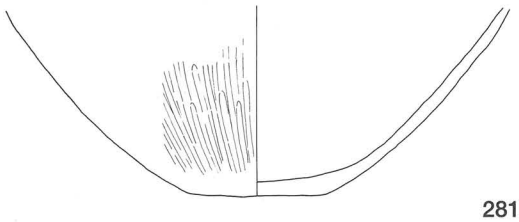

277

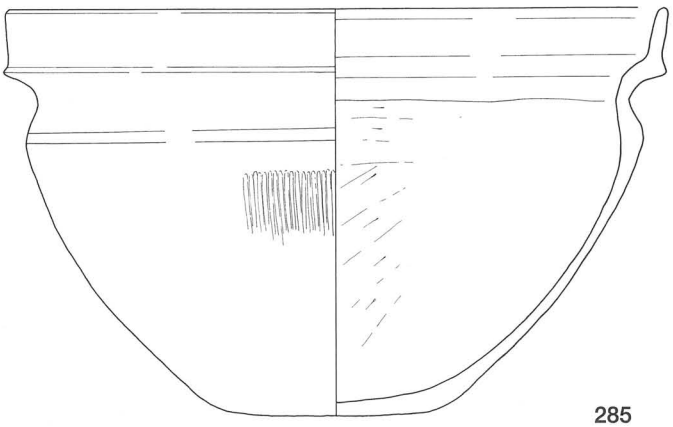

278

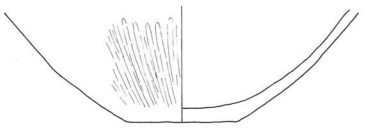

279

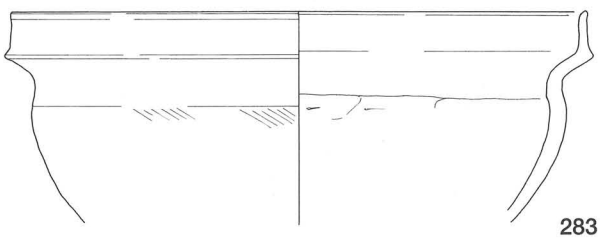

280


284


281


285

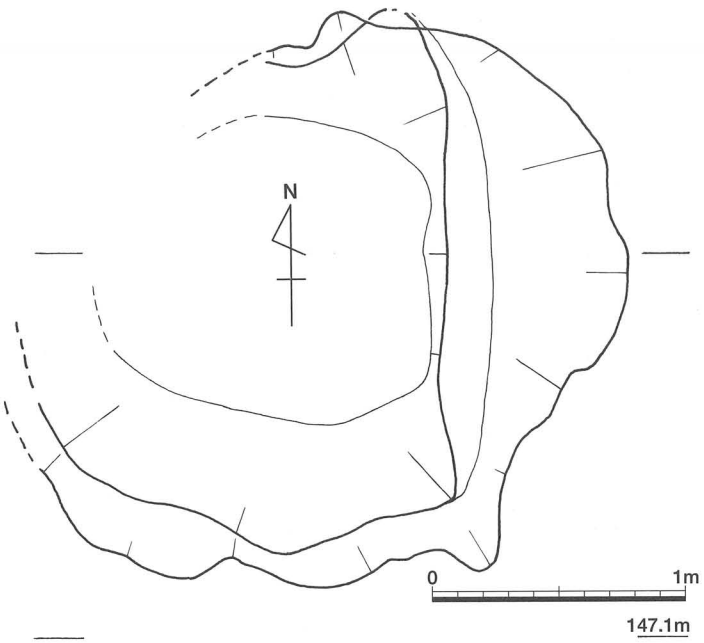

282

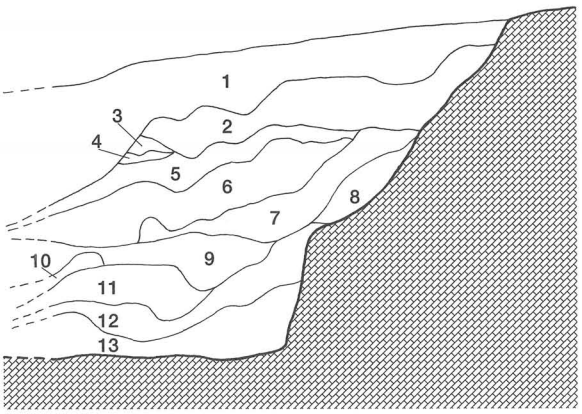

283

第42図　土壙８（１／30）・出土遺物（１／４）

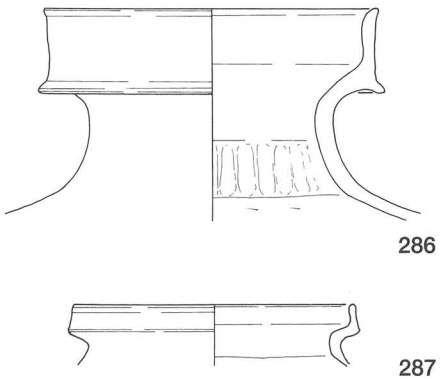
土壙９（第４・43図）

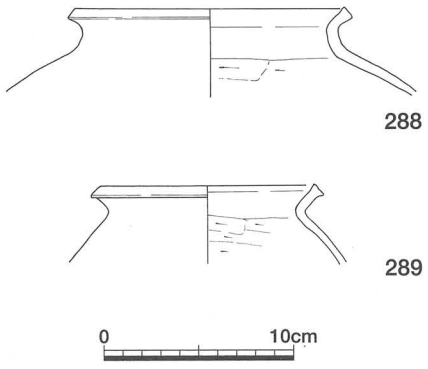
調査区の中央、南西斜面に所在する。後世の道路によって西側の１／３が削平されている。平面形は、円形を、断面はすり鉢状を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、現存の最大径2.6m、最大底径1.4m、中央での深さ1.2mを測る。出土遺物には弥生土器**286～293**がある。**286**は壷の口縁から頸部にかけての破片で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**287～289**は甕の口縁から肩部の破片である。**287**は口縁端部をやや内傾させて立ち上げている。**288・289**は口縁端部を三角形になるよう上下に拡張している。**290～292**は甕と考えられる底部の破片である。**292**は底の中央に穿孔が認められる。**293**は高杯の杯部で、内側に屈曲し、端部を水平に拡張し、沈線を施している。**C10**は土製の紡錘車である。ほぼ円形を呈しており、中央に穴があけられている。これらの遺物から土壙９は、弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。



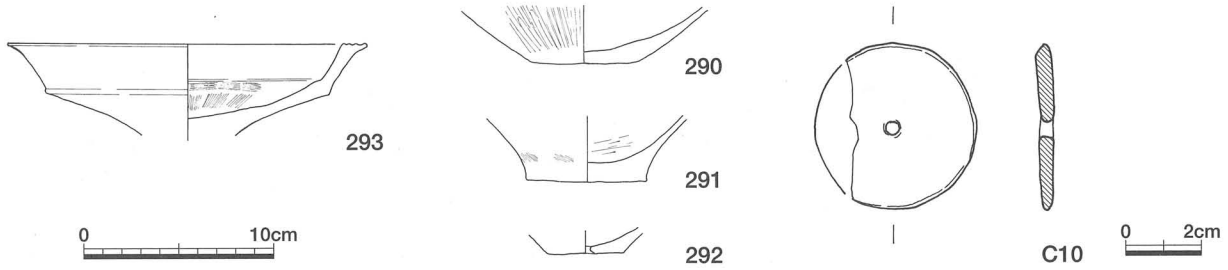


1．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．暗褐色粘性砂質土
（地山ブロック及び炭化物を含む）
3．黒褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
4．青灰色砂質土（地山ブロック）
5．黒褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
6．青灰色砂質土（地山ブロック）と黒褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）のまざり土
7．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
8．灰褐色砂質土と黒褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）のまざり土
9．青灰色砂質土（地山ブロック）
10．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
11．橙褐色粘性砂質土
12．暗褐色粘性砂質土（炭化物・土器を含む）
13．灰褐色砂質土と暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）のまざり土





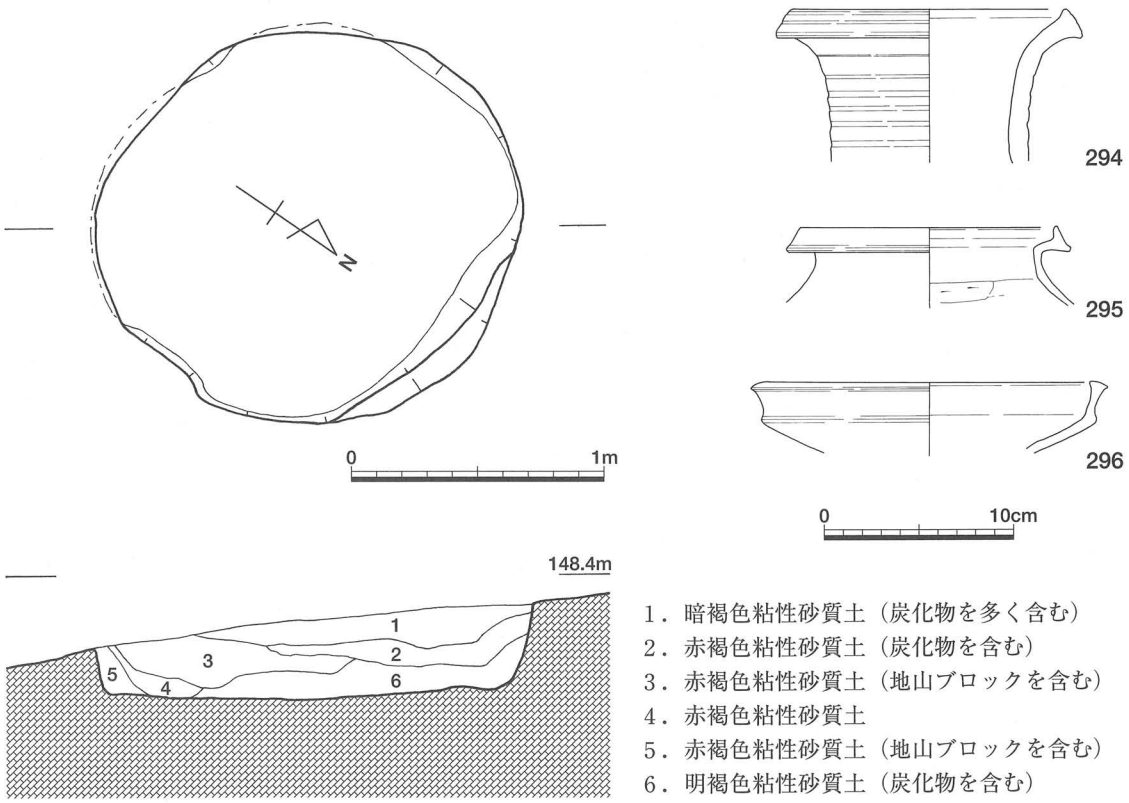
第43図　土壙９（１／30）・出土遺物①（１／４）



第44図　土壙９出土遺物②（１／２・１／４）

土壙10（第４・45図）

調査区の中央、南西斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.7m、最大底径1.65m、中央での深さ0.3mを測る。出土遺物には弥生土器**294～296**がある。**294**は壷の口縁から頸部にかけての破片である。口縁端部を三角形になるよう上下に拡張し、沈線を施している。また、頸部外面に沈線を施している。**295**は甕の口縁から肩部の破片で、口縁端部をやや内傾させ、上下に拡張している。**296**は高杯の杯部で、内側に屈曲し、端部を三角形になるよう拡張している。これらの遺物から土壙10は、弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。



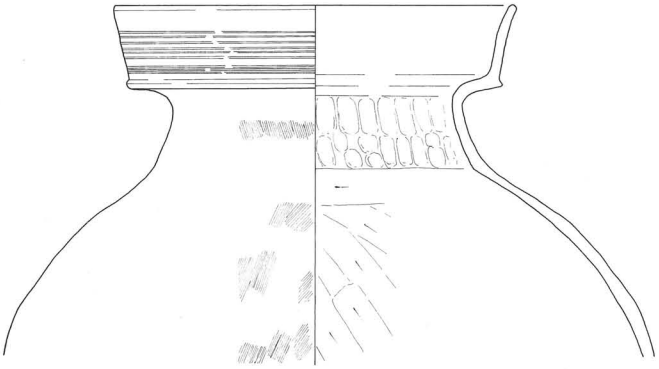
1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
2．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．赤褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）
4．赤褐色粘性砂質土
5．赤褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）
6．明褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

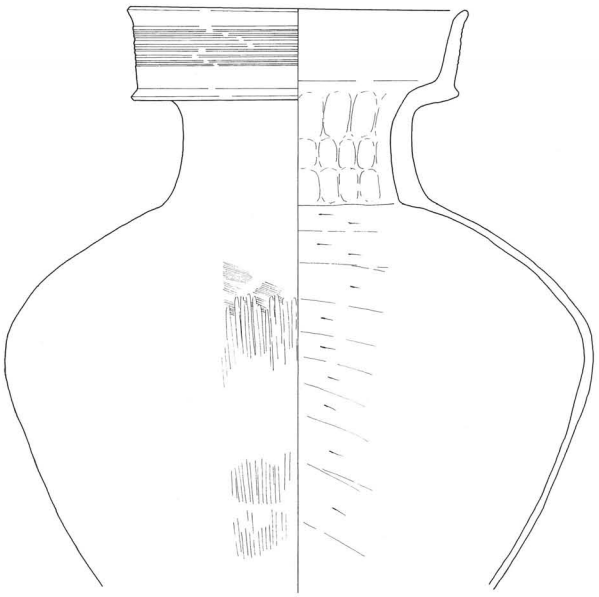
第45図　土壙10（１／30）・出土遺物（１／４）

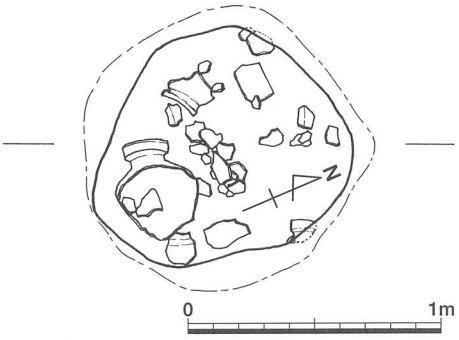
土壙11（第４・46図）

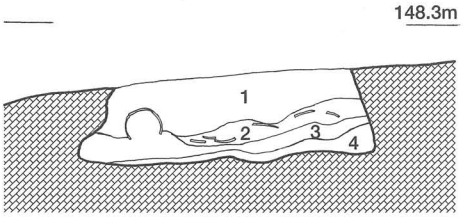
調査区の中央、南西斜面に所在し、土壙10と隣接する。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.05m、最大底径1.15m、中央での深さ0.3mを測る。底から

まとまって土器が出土している。出土遺物には弥生土器**297～300**がある。**297～299**は壷の口縁から胴部にかけての破片である。いずれも口縁端部をやや反るように上方向に拡張している。**297・298**は口縁外面に沈線を施している。**300**は壷と考えられる底部の破片である。これらの遺物から土壙11は、弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

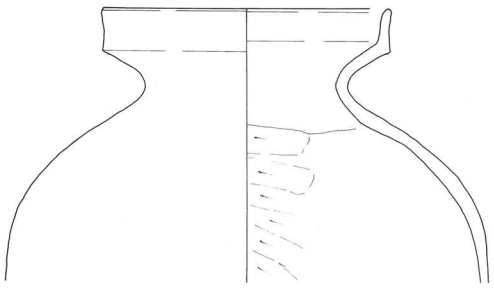


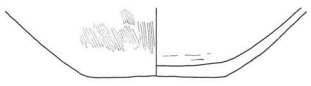






1．明褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色粘性砂質土（土器多くを含む）
3．赤褐色砂質土
4．暗褐色粘性砂質土





第46図　土壙11（1／30）・出土遺物（1／4）

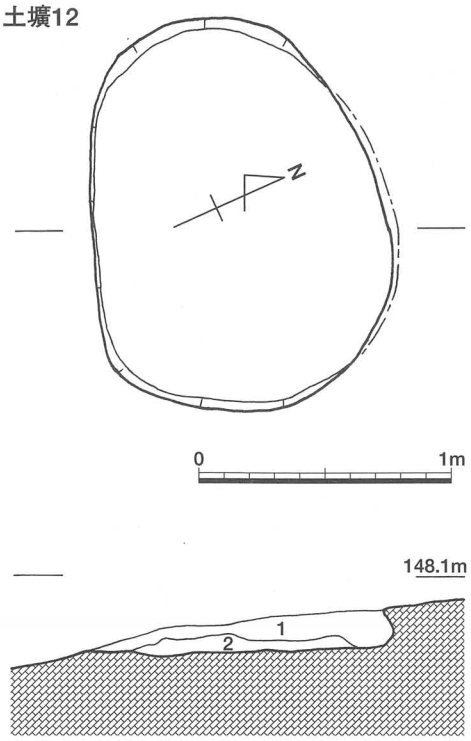
土壙12（第４・47図）

調査区の中央、南西斜面に所在する。平面形は、楕円形を呈している。非常に浅く、斜面の谷側では平坦になっている。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.6m、最大底径1.5m、中央での深さ0.1mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙13（第４・47図、図版10）

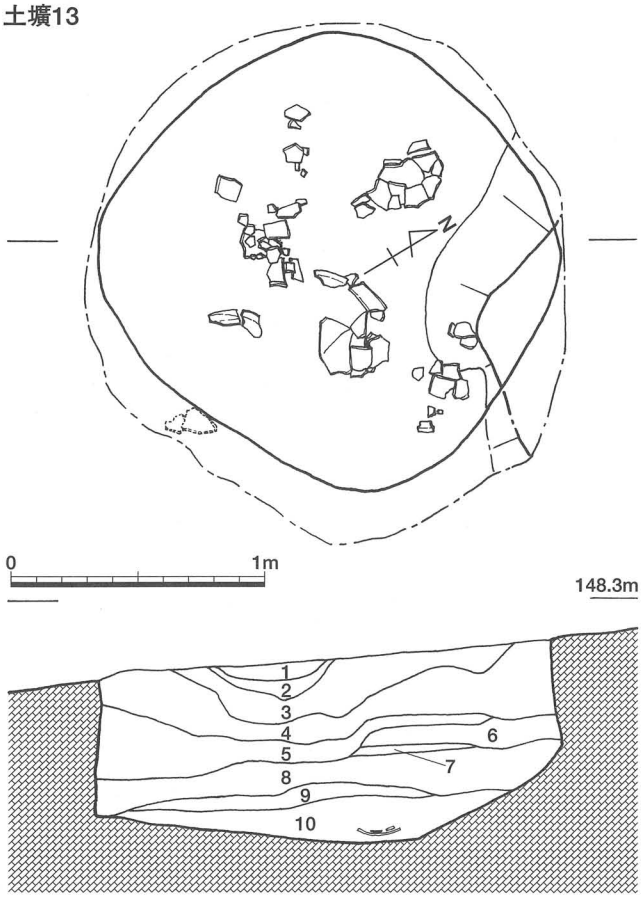
調査区の中央、南西斜面に所在し、土壙14・15と隣接する。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.8m、最大底径1.3m、中央での深さ0.7mを測る。底からまとまって土器が出土している。

土壙12



１．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
２．灰褐色粘質土

土壙13



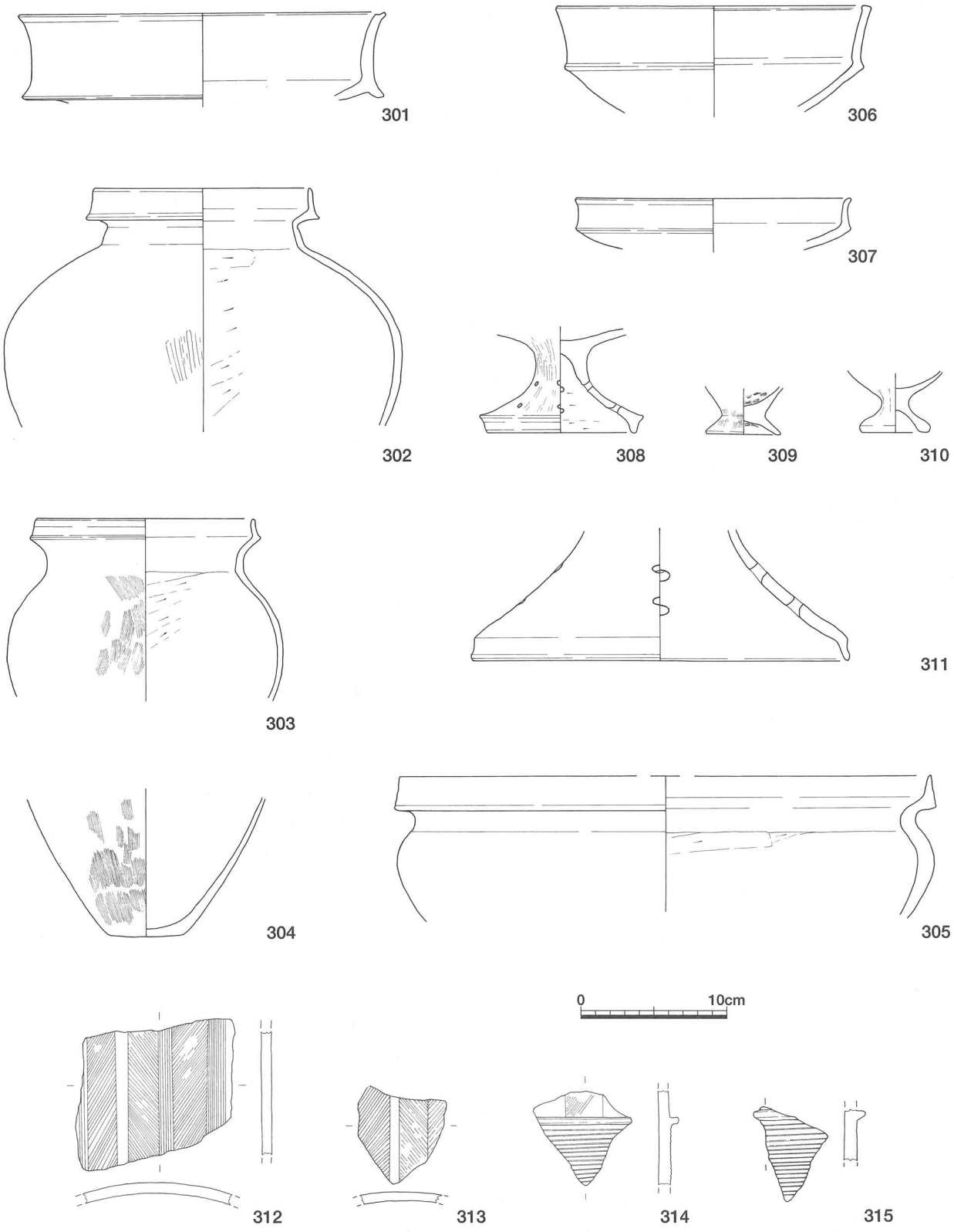
１．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
２．黒褐色粘質土（炭化物を多く含む）
３．赤褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
４．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
５．黒褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
６．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
７．黒褐色粘質土（炭化物を多く含む）
８．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
９．黒褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
10．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

出土遺物には弥生土器**301～315**がある。**301・306・308**は壷の口縁部の破片で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**302・303**は甕の口縁から胴部にかけての破片である。口縁端部を内傾させ立ち上げている。**304**は甕の底部の破片である。**305**は鉢の口縁から胴部にかけての破片で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**308**は高杯の脚部の破片で、端部を下方向に拡張し、スカシ孔を２列、合計８個あけている。**309・310**は脚付の甕と考えられる。**311**は器台の脚部である。端部を下方向に拡張し、スカシ孔を２列、合計８個あけている。**312～315**は特殊器台の破片である。外面に施された文様、胎土から同一個体と考えられる。文様帯には、ヘラ描の綾杉文・縦線文が施され、長方形のスカシ孔の痕跡が残っている。間帯には、箍の間に横方向のクシ描沈線が施されている。僅かであるが赤色顔料が遺存している。いわるゆ「立坂型」といわれる特殊器台である。これらの遺物から土壙13は、弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。

土壙14・15（第４・49図）

調査区の中央、南西斜面に所在する。土壙14と土壙15は重複しており、土壙14が土壙15を切るような形でつくられている。平面形は、土壙14が円形、土壙15が楕円形を呈している。ともに比較的浅く、断面もレンズ状を呈している。土壙14は中型の部類にはいり、最大径1.25m、

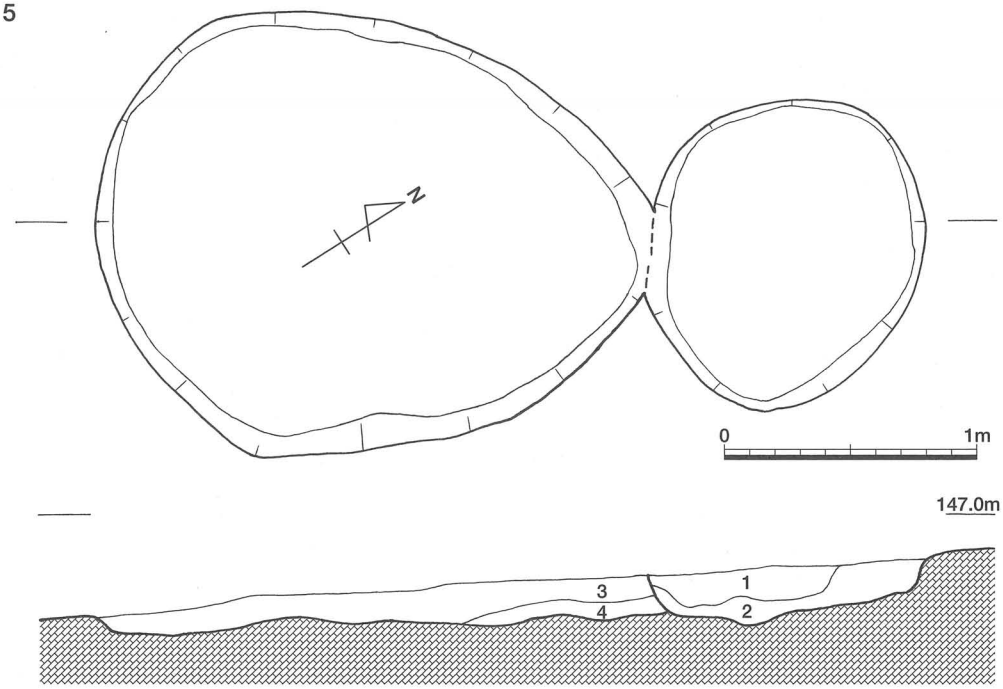
第47図　土壙12・13（1／30）



第48図　土壙13出土遺物（１／４）

最大底径1.15m、中央での深さ0.2mを測る。土壙15は大型の部類にはいり、最大径2.2m、最大底径2.0m、中央での深さ0.15mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

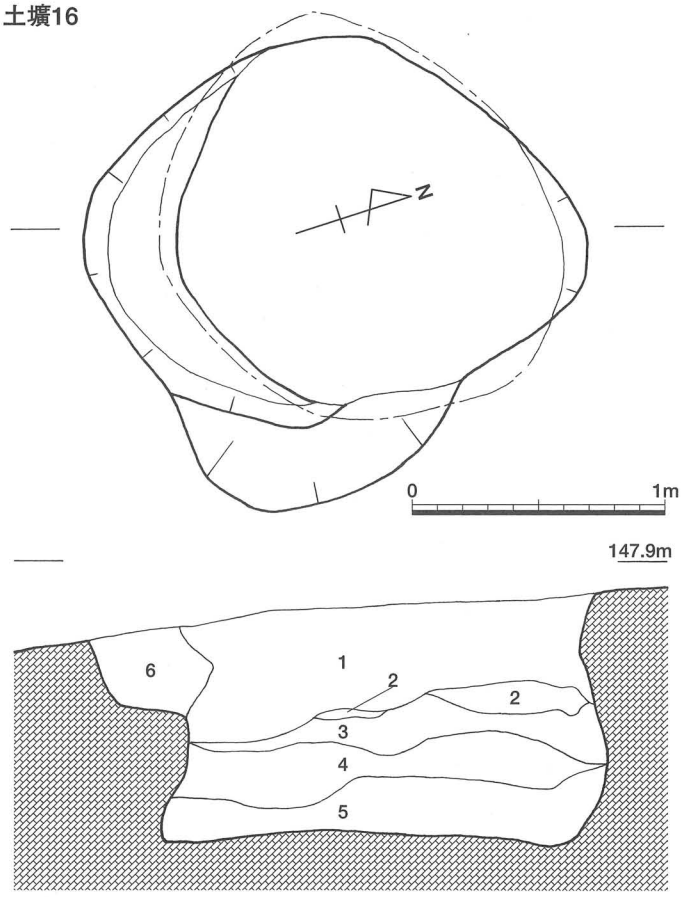
土壙14・15



1．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）　3．暗褐色粘性砂質土
2．明褐色粘性砂質土　4．赤褐色粘性砂質土

第49図　土壙14・15（1／30）

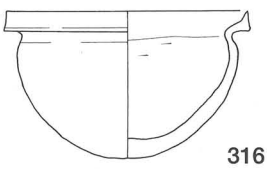
土壙16



土壙16（第４・50図）

調査区の中央、南西斜面に所在し、土壙17と隣接する。平面形は、楕円形を、断面は袋状を呈している。南側にテラス状の平坦面をもっている。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径2.0m、最大底径1.6m、中央での深さ0.9mを測る。出土遺物には弥生土器の**316**がある。小型の鉢で口縁端部を垂直に引き上げている。この遺物から土壙16は、弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。

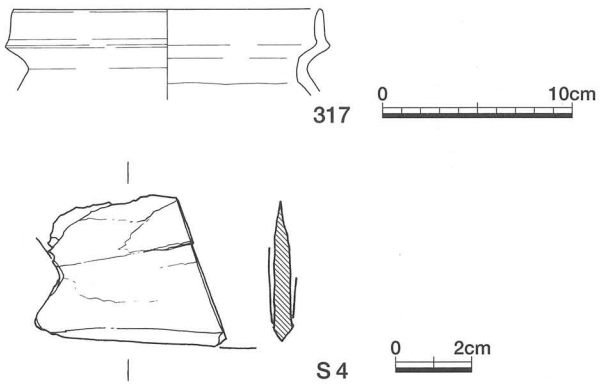
1．赤褐色粘性砂質土
2．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
3．黄褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
4．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
5．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
6．灰褐色砂質土（地山ブロック）

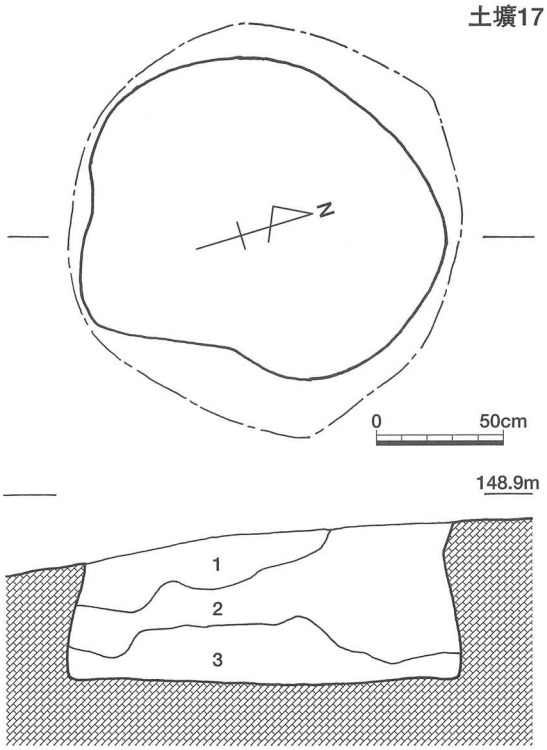


第50図　土壙16（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙17（第４・51図）

調査区の中央、南西斜面に所在し、土壙16と隣接する。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.45m、最大底径1.7m、中央での深さ0.6mを測る。出土遺物には弥生土器の**317**、石器の**Ｓ４**がある。**317**は甕の口縁から頸部にかけての破片で、口縁端部をやや内傾させながら上方向に立ち上げている。**Ｓ４**は打製石包丁の破片である。両端に抉りのあるものと考えられる。これらの遺物から土壙17は、弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。





1．灰褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
2．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．灰褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）

第51図　土壙17（１／30）・出土遺物（１／２・１／４）

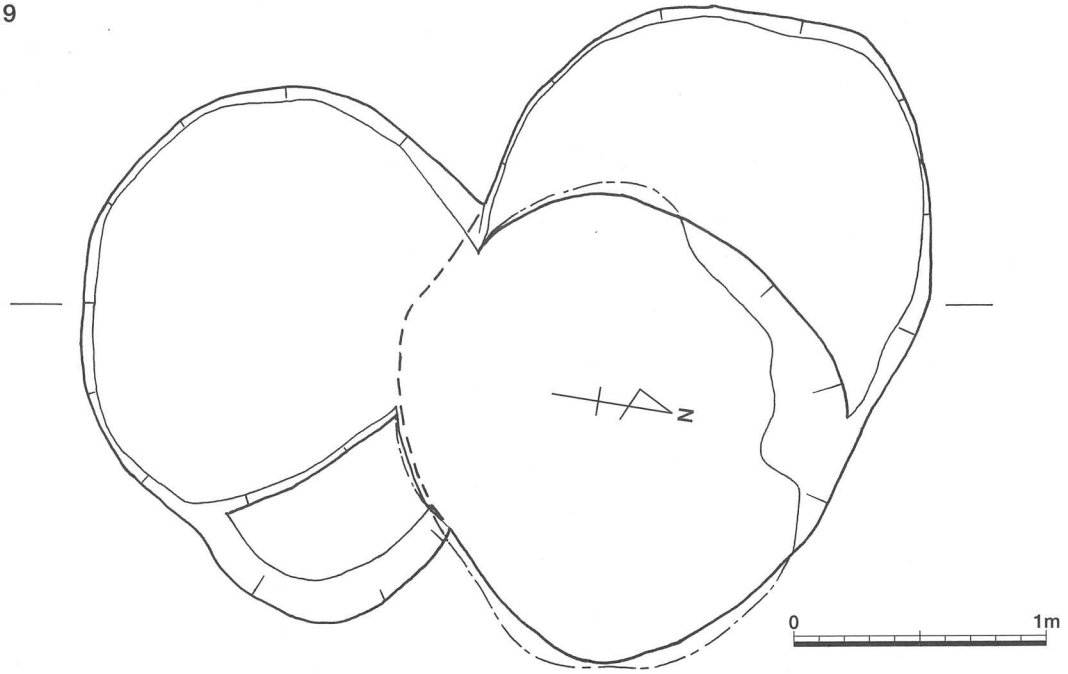
土壙18・19（第４・52図）

調査区の中央、南斜面に所在する。土壙18と土壙19は重複しており、土壙19が土壙18を切るような形でつくられている。平面形は、ともに楕円形を呈している。ともにテラス状の平坦面をもっている。断面は、土壙18は方形、土壙19がレンズ状を呈している。ともに大型の部類にはいり、土壙18は、最大径2.7m、最大底径1.9m、中央での深さ0.5mを測る。土壙19は、最大径2.1m、最大底径1.65m、中央での深さ0.4mを測る。出土遺物には弥生土器**318～322**がある。**318～320**は甕の口縁から胴部にかけての破片である。いずれも口縁端部を垂直またはやや内傾させて立ち上げている。**321**は甕の底部の破片である。**322**は高杯の脚部の破片である。短脚でスカシ孔が４個あけられている。これらの遺物から土壙18・19は、弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

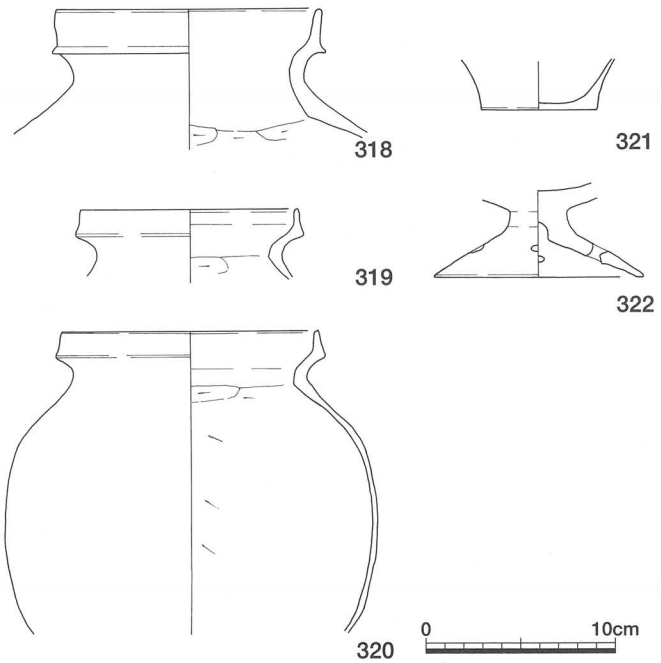
土壙20（第４・52図）

調査区の中央、南斜面に所在する。竪穴住居２に隣接している。平面形は、楕円形を呈している。非常に浅く、斜面の谷側ではほぼ平坦になっている。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.5m、最大底径1.45m、中央での深さ0.2mを測る。出土遺物には弥生土器**323～325**がある。**323・324**は甕の口縁から胴部にかけての破片である。**323**は口縁端部を内傾させ上下に拡張している。**324**は口縁端部をく字に屈曲させている。**325**は高杯の杯から脚部にかけての破片である。口縁端部を垂直に屈曲させ立ち上げている。これらの遺物から土壙20は、弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。

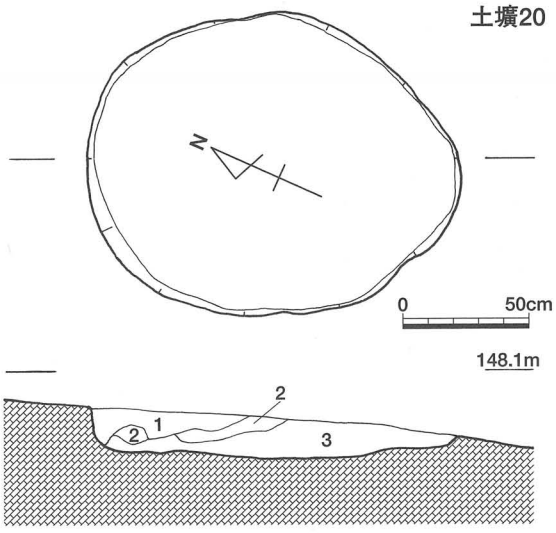
土壙18・19



1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色粘質土（炭化物を多く含む）
3．灰褐色粘性砂質土（炭化物・土器を含む）
4．赤褐色粘性砂質土
5．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
6．褐灰色砂質土
7．灰赤色砂質土
8．灰褐色粘性砂質土
9．暗褐色粘性砂質土

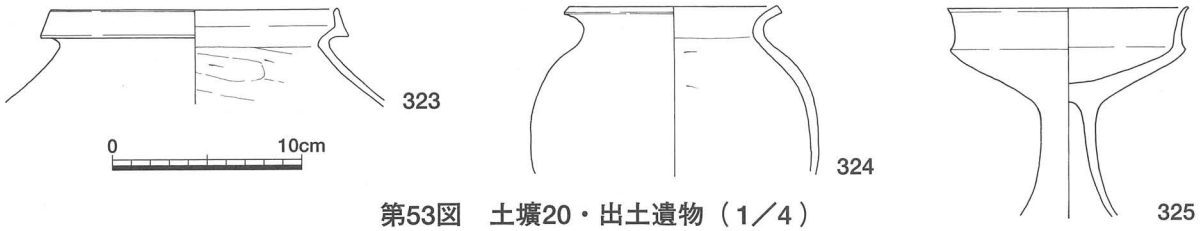


土壙20

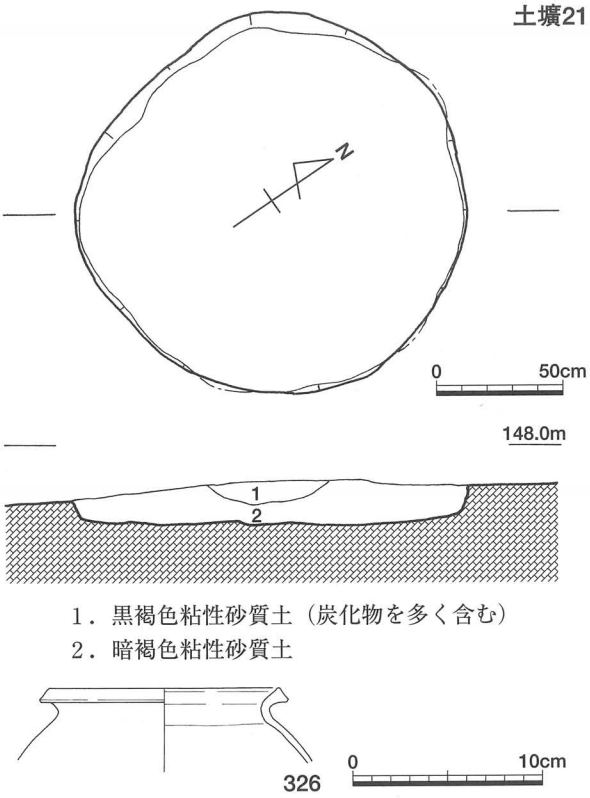


1．黒褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
2．赤褐色砂質土（地山ブロックを含む）
3．赤褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）

第52図　土壙18・19・20（1／30）・出土遺物（1／4）



第53図　土壙20・出土遺物（１／４）



第54図　土壙21（１／30）・出土遺物（１／４）

土壙21（第４・54図）

調査区の中央、南斜面に所在する。平面形は、円形を呈している。比較的浅く、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.55m、最大底径1.5m、中央での深さ0.2mを測る。出土遺物には弥生土器の**326**がある。甕の口縁から肩部にかけての破片で、口縁端部を三角形になるよう拡張している。この遺物から土壙21は、弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。

土壙22（第４・55図）

調査区の中央、南斜面に所在する。平面形は、楕円形を呈している。比較的浅く、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.8m、最大底径1.75m、中央での深さ0.2mを測る。出土遺物には弥生土器の**327**がある。ミニチュアの手捏ねの椀である。この遺物から土壙22は、弥生時代後期につくられたと考えられる。

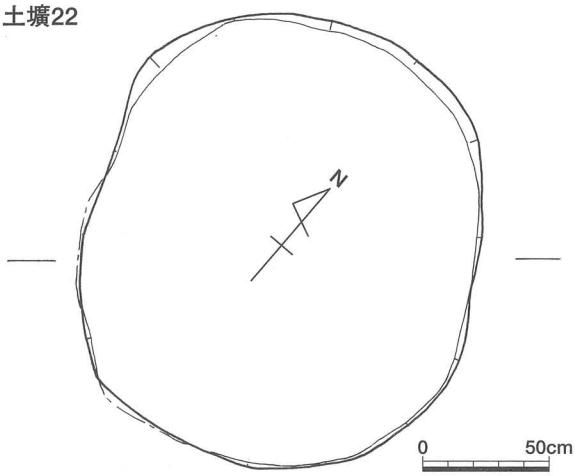
土壙23（第４・55図）

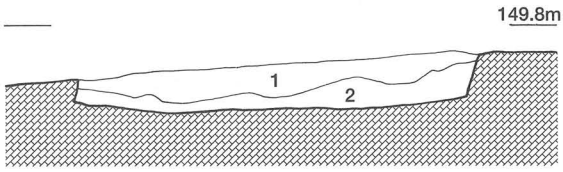
調査区の中央、南西斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.25m、最大底径1.4m、中央での深さ0.3mを測る。出土遺物には弥生土器の**328・329**がある。**328**は壷の口縁から頸部にかけての破片で、口縁端部をやや反らせながら上方向に立ち上げている。**329**は鉢の口縁から肩部にかけての破片である。口縁端部をやや反らせながら上方向に立ち上げている。これらの遺物から土壙23は、弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

土壙24・25（第４・56図）

調査区の中央、南斜面に所在する。土壙24と土壙25は重複しており、土壙24が土壙25を切るような形でつくられている。ともに、平面形が円形、断面が台形を呈している。土壙24は、大型の部類にはいり、最大径1.8m、最大底径1.95m、中央での深さ0.5mを測る。土壙25は、中型の部類にはいり、最大径1.2m、最大底径1.5m、中央での深さ0.5mを測る。出土遺物には弥生土器の**330～332**、鉄器の**M34**がある。**330・331**は甕の口縁から肩部にかけての破片で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**332**は高杯の杯部の破片で、口縁端部を垂直に屈曲させ、上端を横方向に拡張している。**M32**は鑿状の工具と考えられる鉄器で、茎部を欠いている。これらの遺物から土壙24・25は、弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。

土壙22



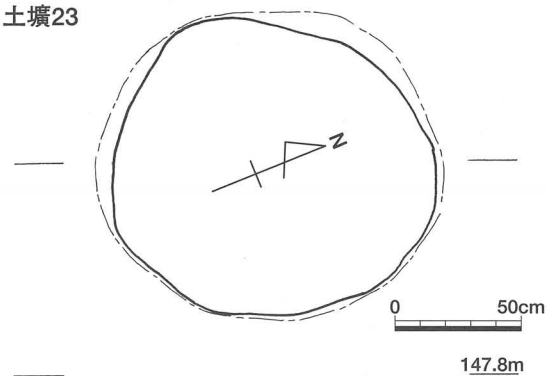


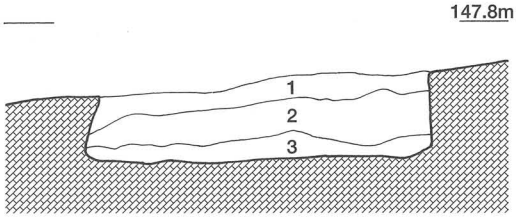
1．明褐色砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色砂質土（炭化物を含む）

327

0　10cm

土壙23





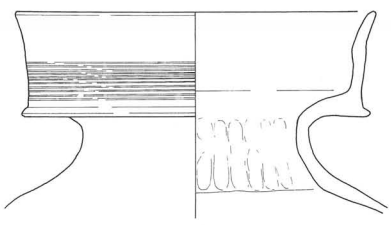
1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．黒褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）

土壙26（第４・56図）

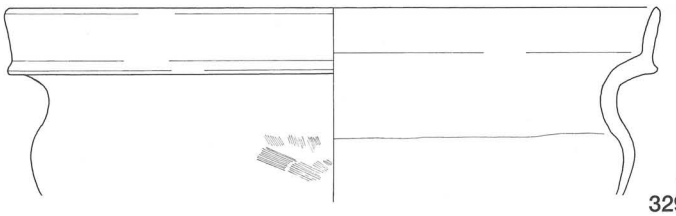
調査区の中央、南西斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.8m、最大底径2.05m、中央での深さ0.6mを測る。出土遺物には弥生土器の**333～346**、土製品の**C11・12**がある。**333・334**は壷の口縁から肩部にかけての破片で、口縁端部を三角形になるよう拡張している。**334**は頸部に沈線を施している。**335～344**は甕の口縁から頸部にかけての破片で、いずれも口縁端部を三角形になるよう拡張している。**345**は甕の底部の破片である。**346**は高杯の脚部の破片で、端部を三角形になるよう拡張している。**C11**は分銅型土製品である。上部のみの破片で、文様などはつけられていない。**C12**は土製勾玉である。上部の中央に穿孔が認められる。また、上部上面には、数条線刻が施されている。これらの遺物から土壙26は、弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。

土壙27（第４・58図）

調査区の中央、南西斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.75m、最大底径1.85m、中央での深さ0.35mを測る。出土遺物には弥生土器の**347～349**がある。**347**は甕の口縁から肩部にかけての破片で、口縁端部を三角形になるよう拡張しており、外面に沈線を施している。**348**は甕の底部の破片である。**349**は器台の脚部の破片である。端部を三角形になるよう上下に拡張している。これらの遺物から土壙27は、弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。



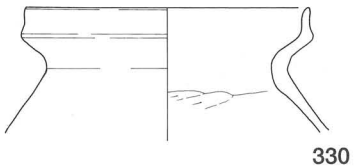
328

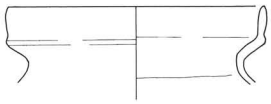


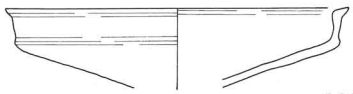
329

0　10cm

第55図　土壙22・23（1／30）・出土遺物（1／4）

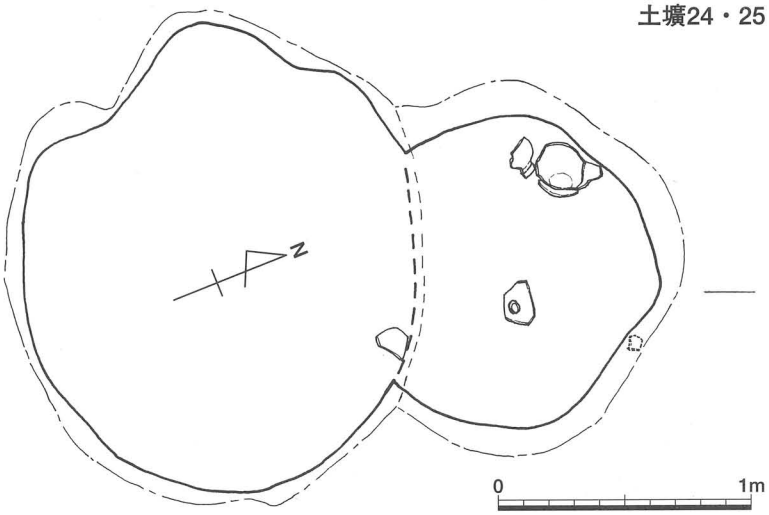

330


331

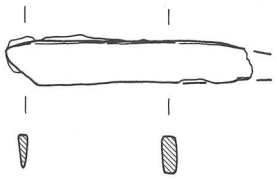

332

0　10cm

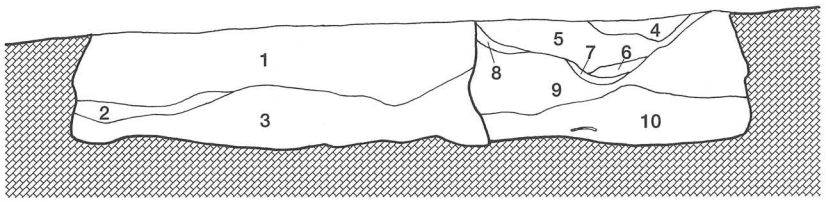
土壙24・25



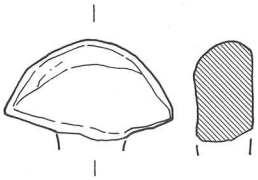
149.8m

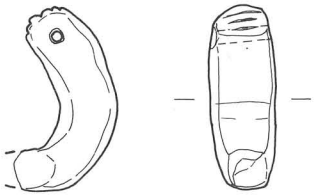

M32

0　2cm



1．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色粘性砂質土
3．褐灰色粘性砂質土（炭化物を含む）
4．橙褐色粘性砂質土
5．黒褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
6．黒褐色粘質土（炭化物を多く含む）
7．暗褐色粘質土（炭化物を多く含む）
8．黄橙色砂質土
9．橙褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
10．灰褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）

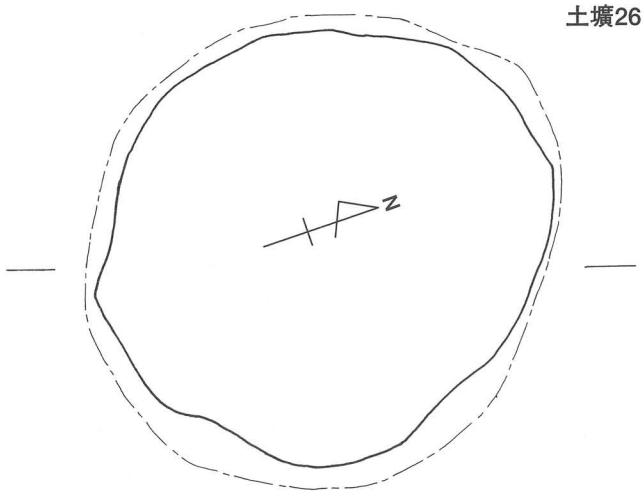

C11



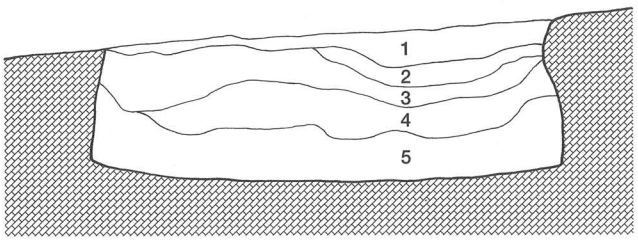
0　2cm

C12

土壙26

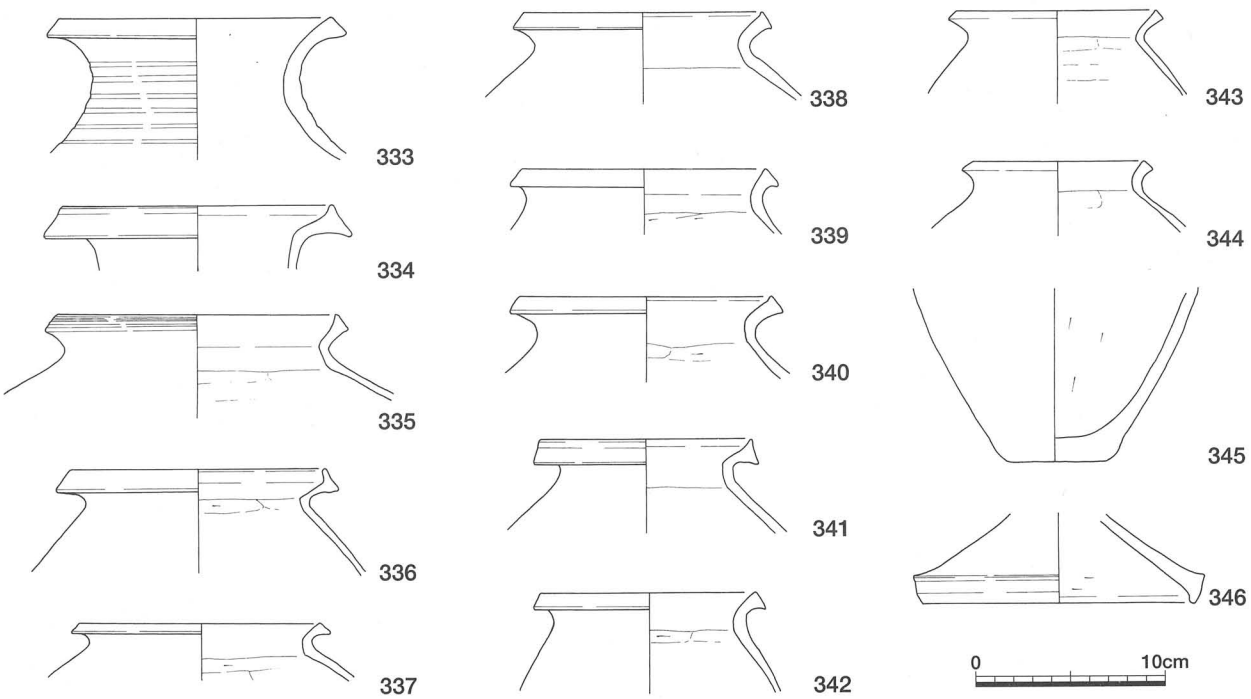


147.8m

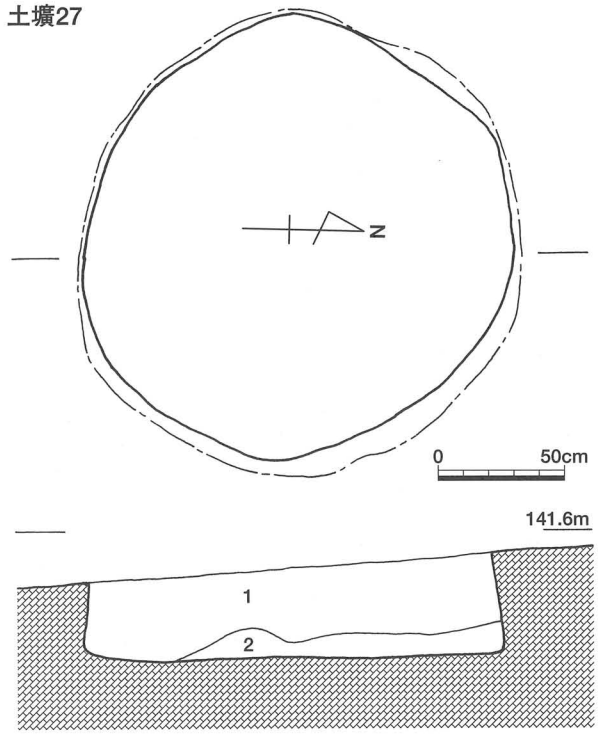


1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
2．赤褐色粘性砂質土
3．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
4．黄褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
5．赤褐色粘性砂質土

第56図　土壙24・25・26（1／30）・出土遺物（1／2・1／4）



第57図　土壙26出土遺物（１／４）

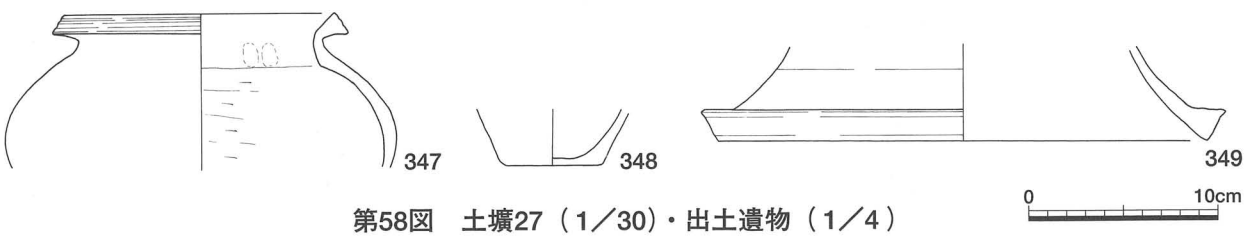


土壙28（第４・59図）

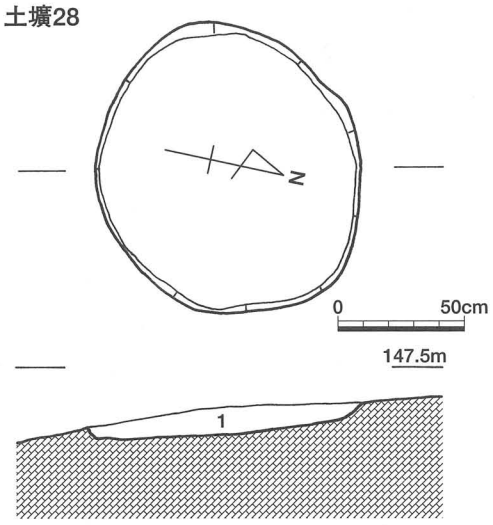
調査区の中央、南斜面に所在する。平面形は、円形を呈している。比較的浅く、断面はレンズ状を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.15m、最大底径1.05m、中央での深さ0.1mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙29（第４・59図）

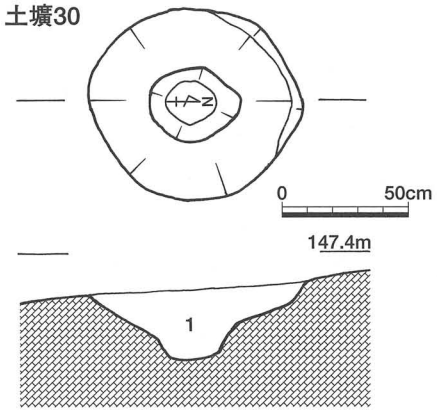
調査区の中央、南斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。比較的浅く、斜面の谷側では平坦になっている。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.8m、最大底径1.75m、中央での深さ0.2mを測る。出土遺物には弥生土器の**350・351**がある。**350**は甕の口縁から肩部にかけての破片で、口縁端部を三角形になる



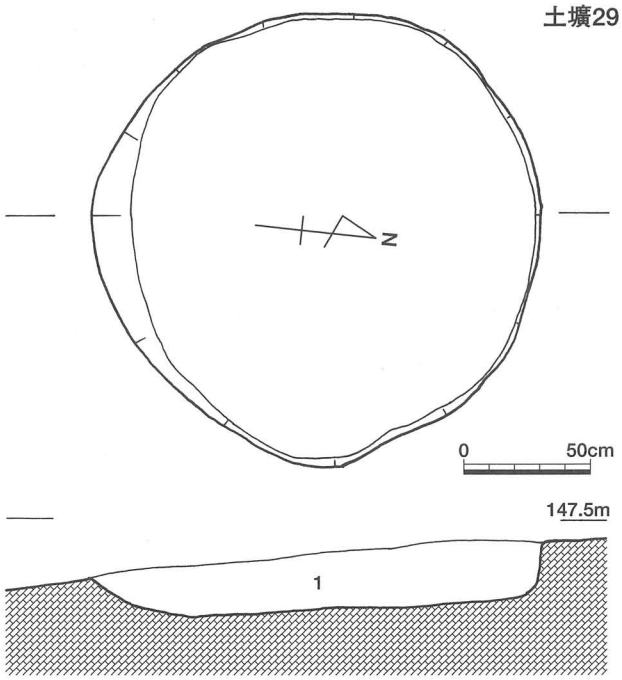
第58図　土壙27（１／30）・出土遺物（１／４）



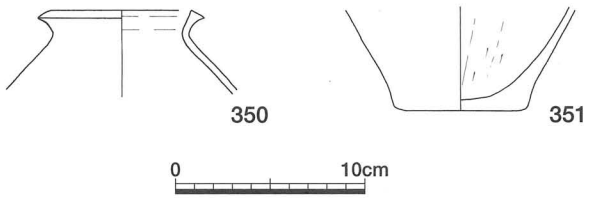
1．暗褐色粘性砂質土

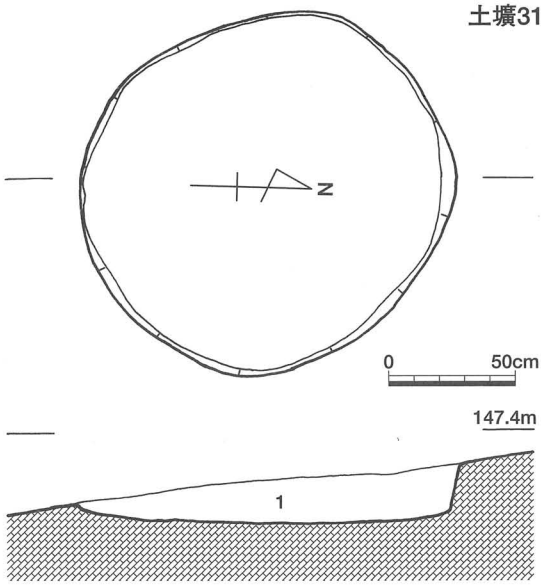


1．暗褐色粘性砂質土

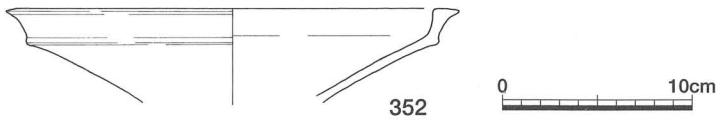


1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）





1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

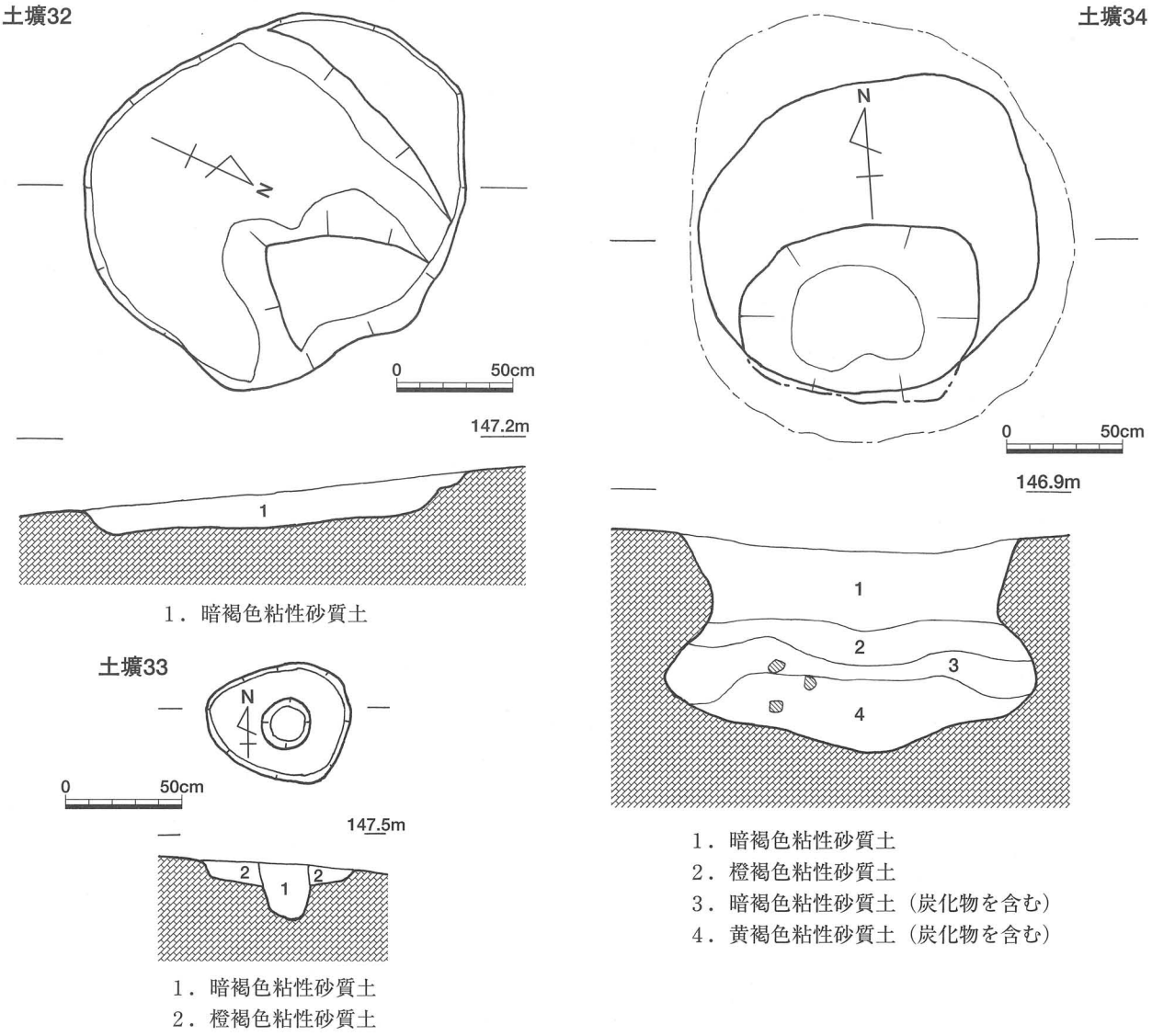


第59図　土壙28・29・30・31（1／30）・出土遺物（1／4）

よう拡張している。**348**は甕の底部の破片である。これらの遺物から土壙29は、弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。

土壙30（第４・59図、図版10）

調査区の中央、南斜面に所在する。平面形は、円形を呈している。比較的浅く、断面はレンズ状を呈している。底の中央に柱穴状の遺構が残っている。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径0.7ｍ、最大底径0.35ｍ、中央での深さ0.25ｍを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。



第60図　土壙32・33・34（1／30）

土壙31（第４・59図）

調査区の南部、南斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。比較的浅く、斜面の谷側では平坦になっている。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.5m、最大底径1.45m、中央での深さ0.2mを測る。出土遺物には弥生土器の**352**がある。**352**は高杯の杯部の破片で、口縁をやや反るように屈曲させ、端部を横に拡張している。この遺物から土壙31は、弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。

土壙32（第４・60図）

調査区の南部、南斜面に所在し、竪穴住居10に隣接する。平面形は、楕円形を、断面はレンズ状を呈している。比較的浅く、テラス状の平坦面が残る。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.7m、最大底径1.2m、中央での深さ0.15mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

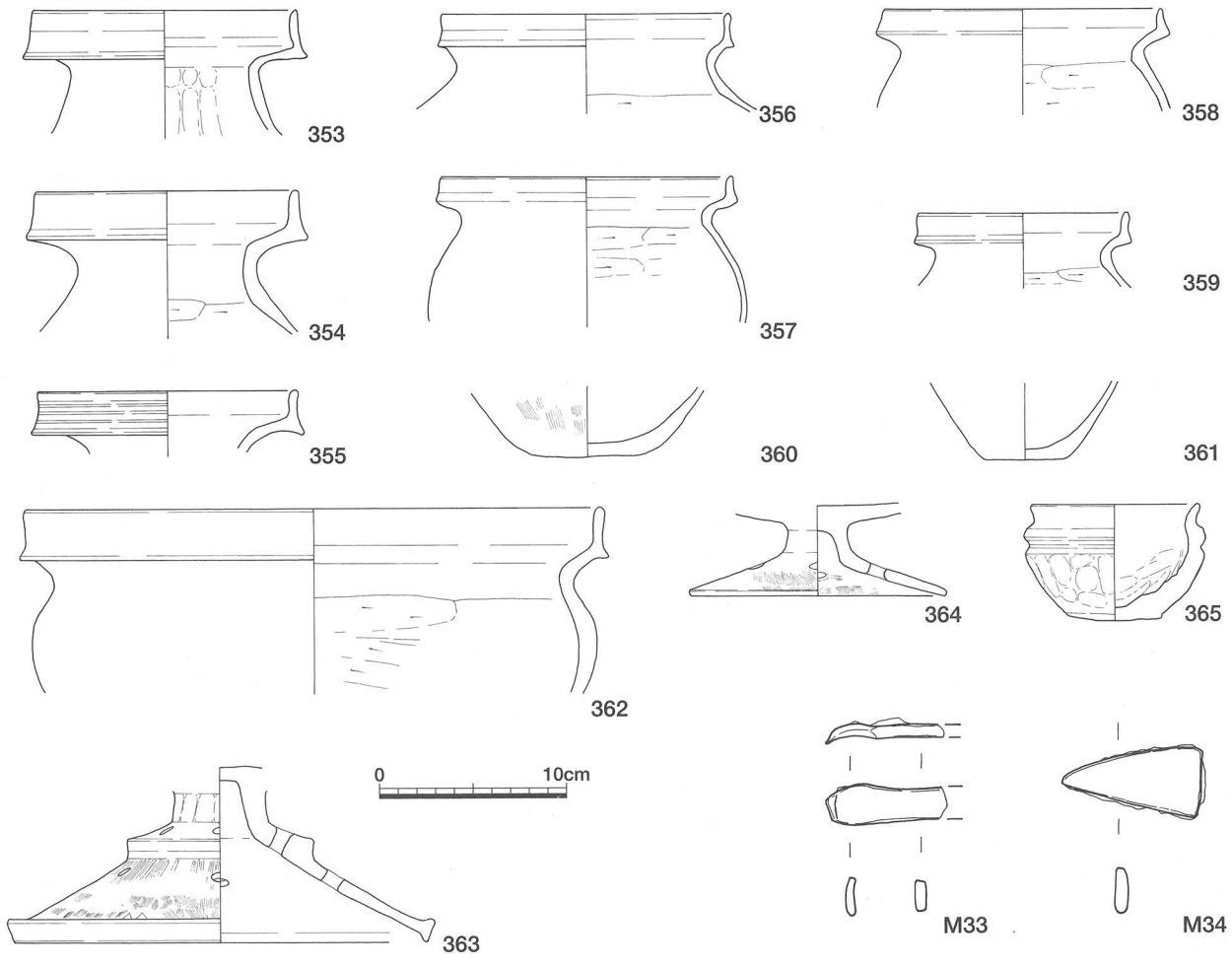
土壙33（第４・60図）

調査区の南部、南東斜面に所在し、溝１に接する。平面形は、円形を呈している。比較的浅く、断面は

レンズ状を呈している。底の中央に柱穴状の遺構が残っている。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径0.6m、最大底径0.55m、中央での深さ0.2mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

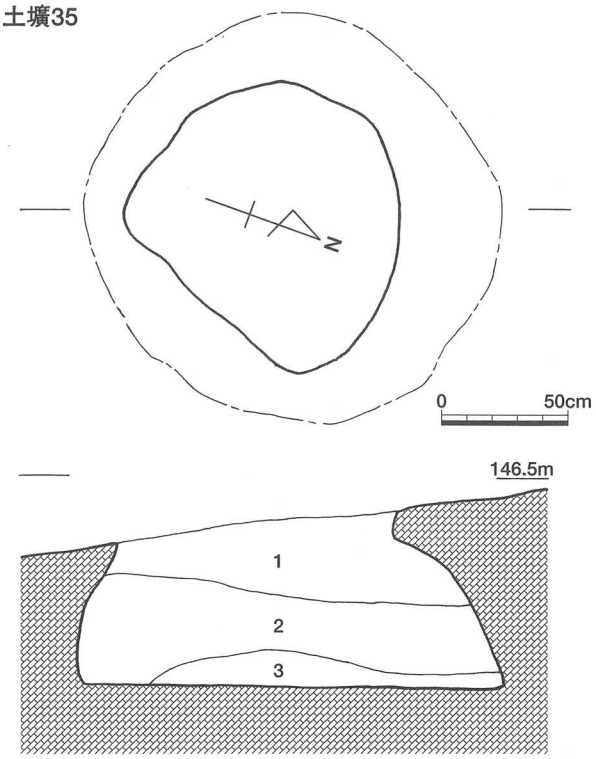
土壙34（第4・60図、図版11）

調査区の南部、南東斜面に所在し、溝１の南端に位置する。平面形は、楕円形を、断面は袋状を呈している。また、底の中央がレンズ状に窪んでいる。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.5m、最大底径1.95m、中央での深さ0.85mを測る。出土遺物には弥生土器の**353～365**、鉄器の**M33・34**がある。**353～355**は壷の口縁から頸部にかけての破片で、**353・354**は口縁端部をやや内傾させながら立ち上げている。**355**は口縁端部を垂直に立ち上げ、外面に沈線を施している。これは、器台の口縁の可能性もある。**356～359**は口縁から肩部の破片である。口縁端部を垂直あるいはやや内傾させながら立ち上げている。**360・361**は甕と考えられる底部の破片である。**362**は鉢の口縁から胴部にかけての破片で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**363**は装飾高杯の脚部で、脚部中央に段をもつ。端部を三角形になるよう上下に拡張し、上面に鋸歯文を配している。**364**は高杯の脚部である。短脚でスカシ孔が４個認められる。**365**は手捏ねの椀である。外面に指で押えた痕跡が残る。**M33**は鉇の先端部と考えられる。先端がやや湾曲している。**M34**は三角形状を呈した鉄片で工具の破片であろうか。これらの遺物から土壙34は、弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。



第61図　土壙34・出土遺物（1／2・1／4）

土壙35



1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．暗褐色粘性砂質土
3．橙褐色粘性砂質土

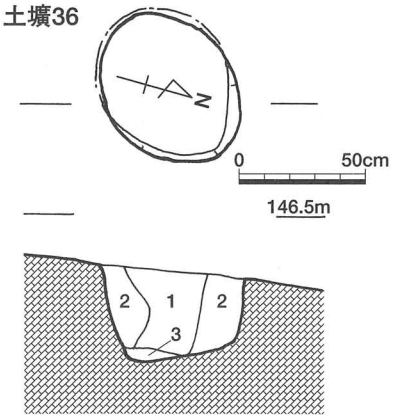
土壙35（第４・62図）

調査区の南東部、南東斜面に所在する。平面形は、不整形の円形を、断面は袋状を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.15m、最大底径1.65m、中央での深さ0.65mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙36（第４・62図）

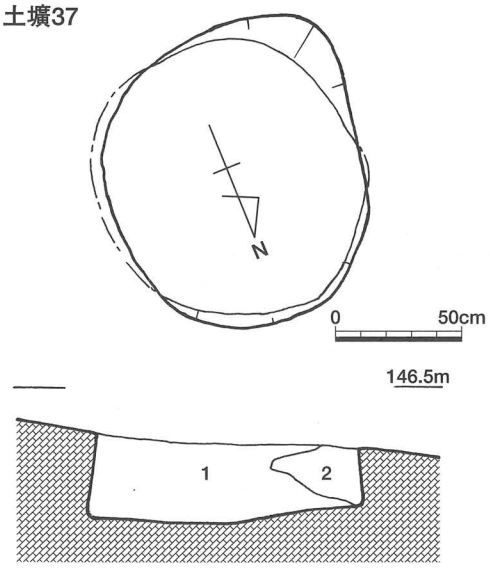
調査区の南東部、南東斜面に所在し、竪穴住居６に隣接する。平面形は、楕円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径0.65m、最大底径0.6m、中央での深さ0.3mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙36



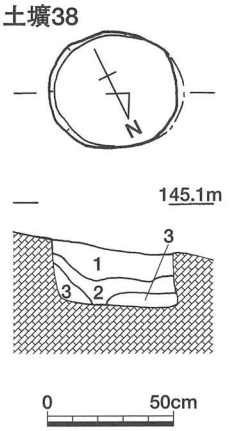
1．暗褐色粘質土（炭化物を含む）
2．赤褐色粘性砂質土（地山ブロック含む）
3．橙褐色粘性砂質土

土壙37



1．暗褐色粘質土（炭化物を含む）
2．橙褐色粘性砂質土

土壙38



1．暗褐色粘質土
2．橙褐色粘質土
3．橙褐色粘性砂質土

第62図　土壙35・36・37・38（1／30）

土壙37（第４・62図）

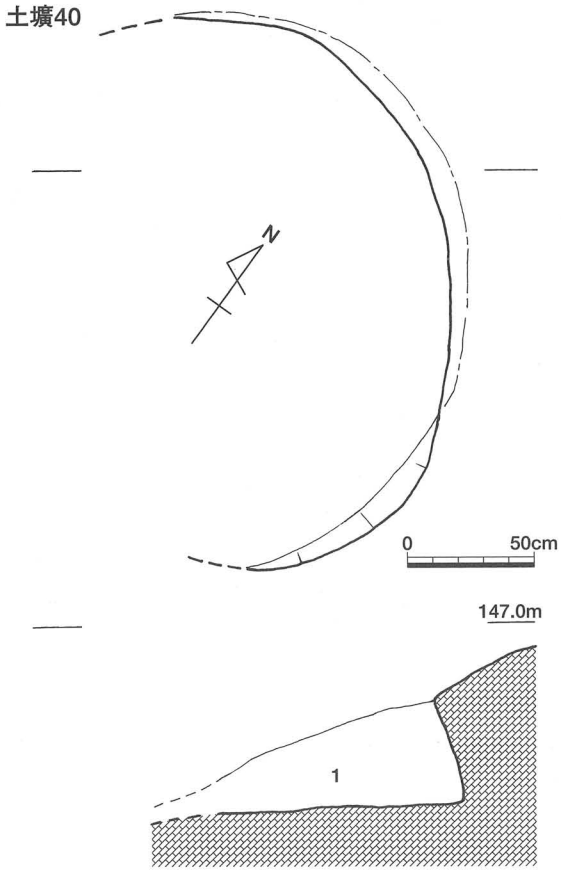
調査区の南東部、南東斜面に所在し、竪穴住居６に隣接する。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.25m、最大底径1.1m、中央での深さ0.3mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙38（第４・62図）

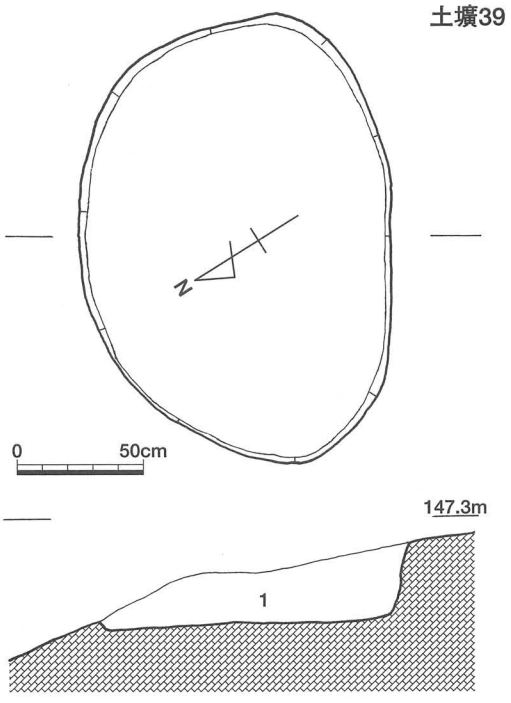
調査区の南東部、南東斜面に所在し、竪穴住居６に隣接する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径0.5m、最大底径0.5m、中央での深さ0.2mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙39（第４・63図）

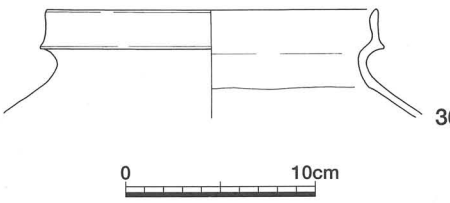
調査区の南部、南斜面に所在し、竪穴住居10に接するため、南側が削平されている。平面形は、楕円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.8m、最大底径1.75m、中央での深

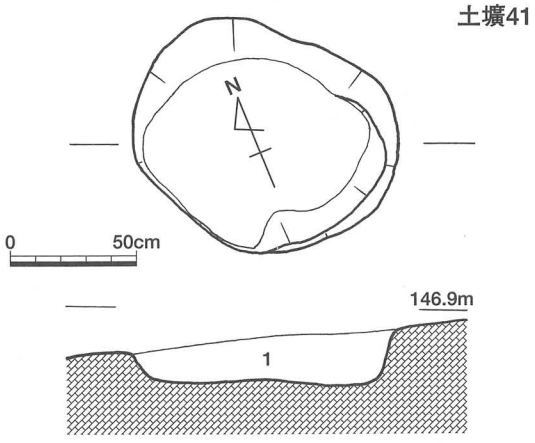


１．暗褐色粘質土

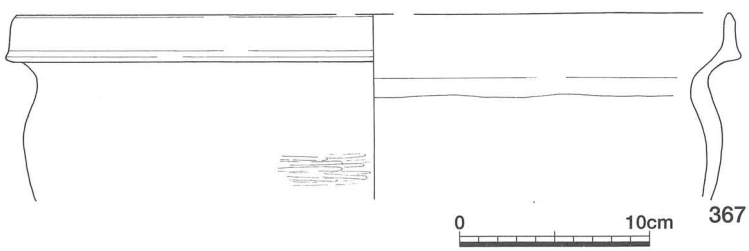


１．暗褐色粘質土

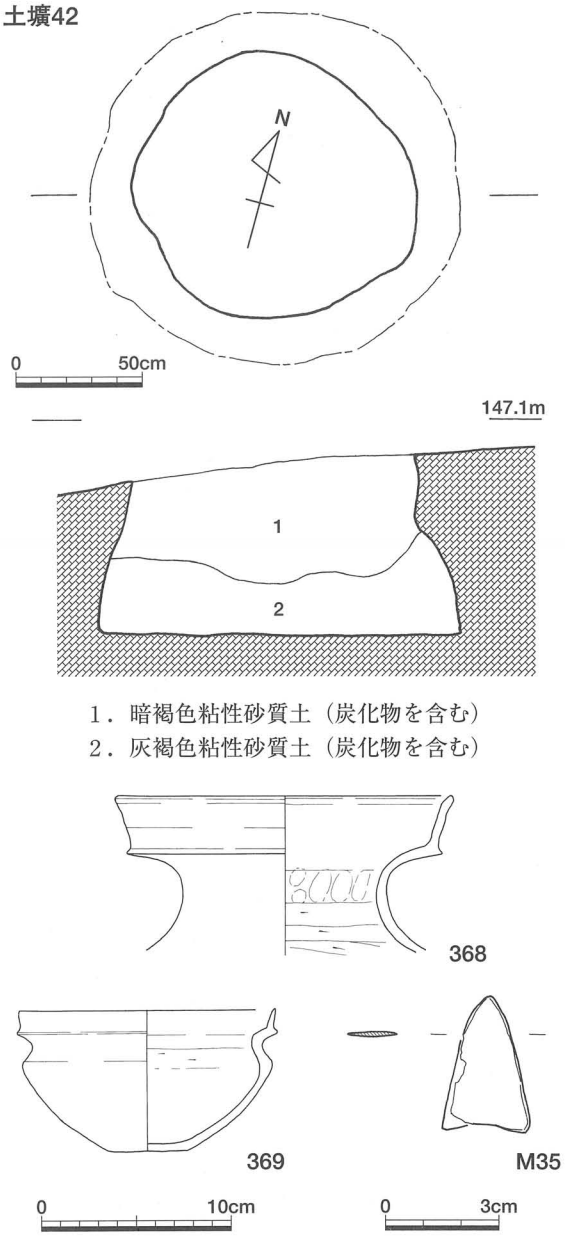




１．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）



第63図　土壙39・40・41（1／30）・出土遺物（1／4）



第64図　土壙42（1／30）・出土遺物（1／2・1／4）

さ0.2ｍを測る。出土遺物には弥生土器の**366**がある。**366**は甕の口縁から肩部の破片で、口縁をやや内傾するように立ち上げている。この遺物から土壙39は、弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。

土壙40（第４・63図）

調査区の南部、南斜面に所在し、竪穴住居10に接するため、西半分が削平されている。平面形は、楕円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径2.2ｍ、最大底径2.2ｍ、最深部で0.4ｍを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙41（第４・63図）

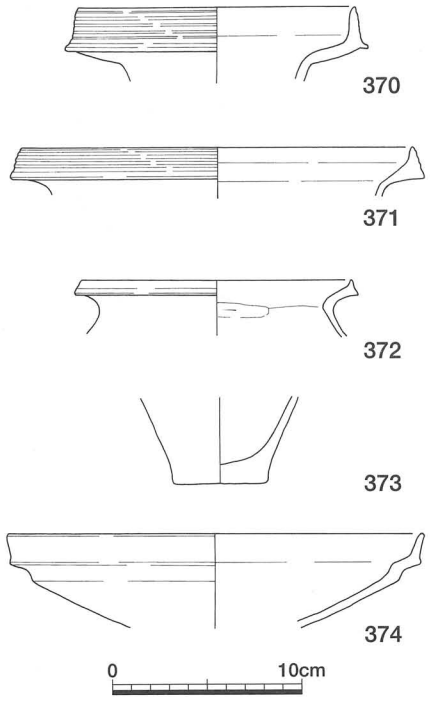
調査区の南部、南西斜面に所在する。平面形は、楕円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.05ｍ、最大底径0.9ｍ、中央での深さ0.15ｍを測る。出土遺物には弥生土器の**367**がある。**367**は鉢の口縁から肩部の破片で、口縁を垂直に立ち上げている。この遺物から土壙41は、弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。

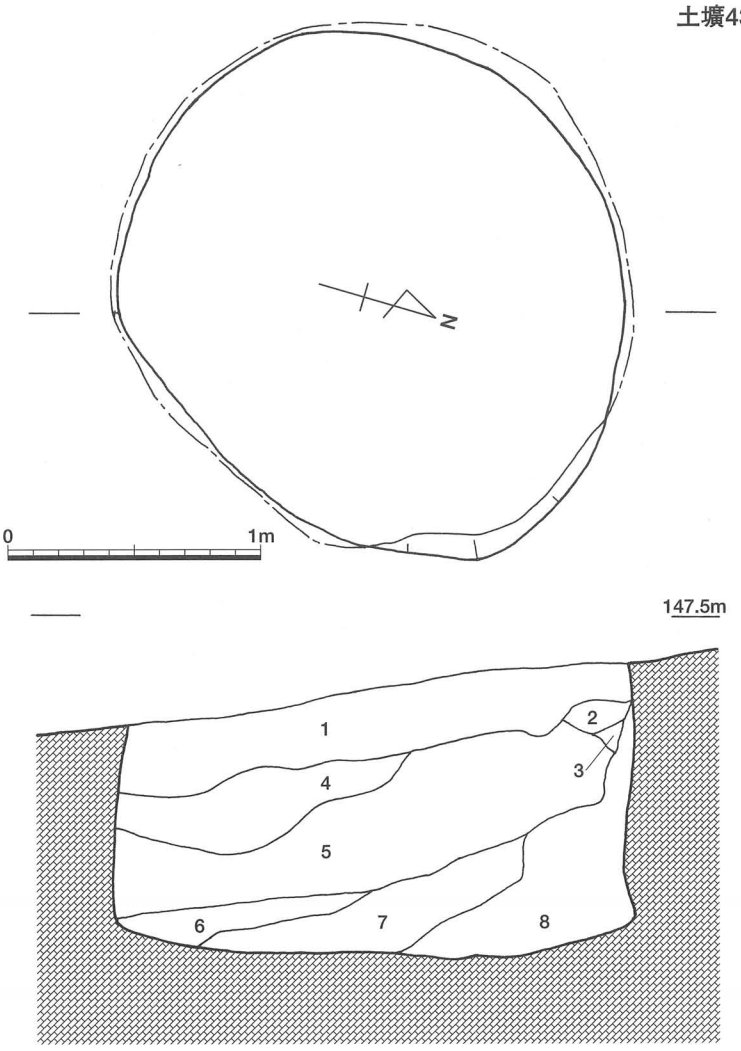
土壙42（第４・64図）

調査区の南部、南西斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.1ｍ、最大底径1.4ｍ、中央での深さ0.7ｍを測る。出土遺物には弥生土器の**368**・**369**、鉄器の**M35**がある。**368**は壷の口縁から頸部の破片で、口縁を反るように立ち上げている。**369**は小型の鉢で口縁端部を垂直に立ち上げている。**M35**は鏃で、柄をもたない。これらの遺物から土壙42は、弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

土壙43（第４・65図）

調査区の南部、南西斜面に所在する。竪穴住居１内につくられている。竪穴住居の埋土が流出しているため、どちらが先につくられたかは不明である。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径2.0ｍ、最大底径2.0ｍ、中央での深さ1.0ｍを測る。出土遺物には弥生土器の**370**～**374**がある。**370**は壷の口縁から頸部の破片で、口縁をやや内傾させて立ち上げ、外面に沈線を施している。**371**・**372**は甕の口縁から頸部にかけての破片で、口縁端部を三角形になるよう拡張しており、**371**は外面に沈線を施している。**373**は甕の底部の破片である。**374**は高杯の杯部の破片で、杯部を屈曲させ、段をもって垂直に立ち上げている。これらの遺物から土壙43は、弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。



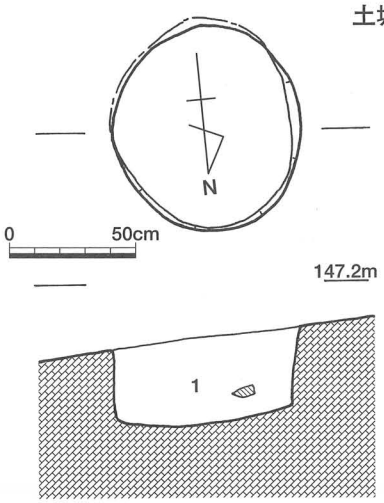


1．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色砂質土
3．赤褐色砂質土（地山ブロックを含む）
4．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
5．暗褐色粘性砂質土
（炭化物・地山ブロックを含む）
6．赤褐色砂質土
7．暗褐色粘性砂質土
8．赤褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）

第65図　土壙43（１／30）・出土遺物（１／４）

土壙44（第４・66図）

調査区の南東部、南東斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径0.8m、最大底径0.85m、中央での深さ0.25mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。



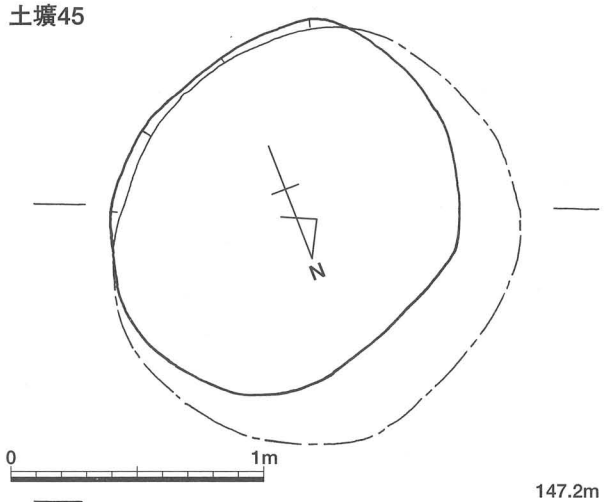
1．暗褐色粘性砂質土

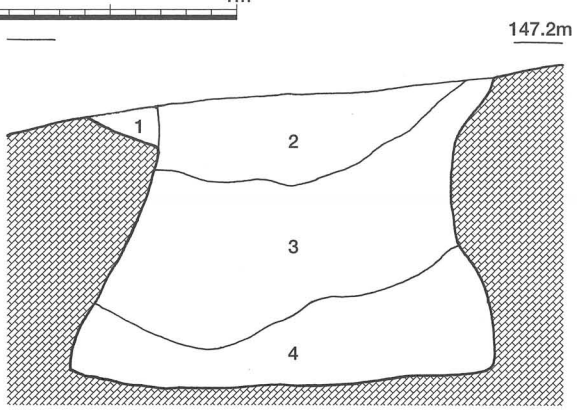
第66図　土壙44（１／30）

土壙45（第４・67図）

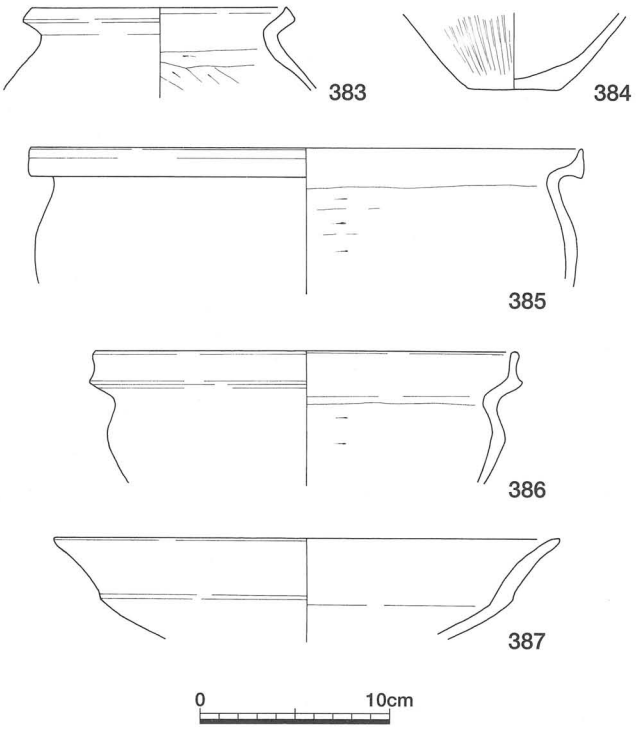
調査区の南東部、南東斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は袋状を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.5m、最大底径1.6m、中央での深さ1.1mを測る。出土遺物には弥生土器の**375～387**、石器**Ｓ５**がある。**375・376**は壷の口縁から頸部にかけての破片で、口縁を垂直に立ち上げており、**376**は外面に沈線を施している。**377～383**は甕の口縁から胴部にかけての破片で、**377～382**は口縁端部を垂直に立ち上げている。**383**は口縁端部を三角形になるよう拡張している。**384**は

土壙45

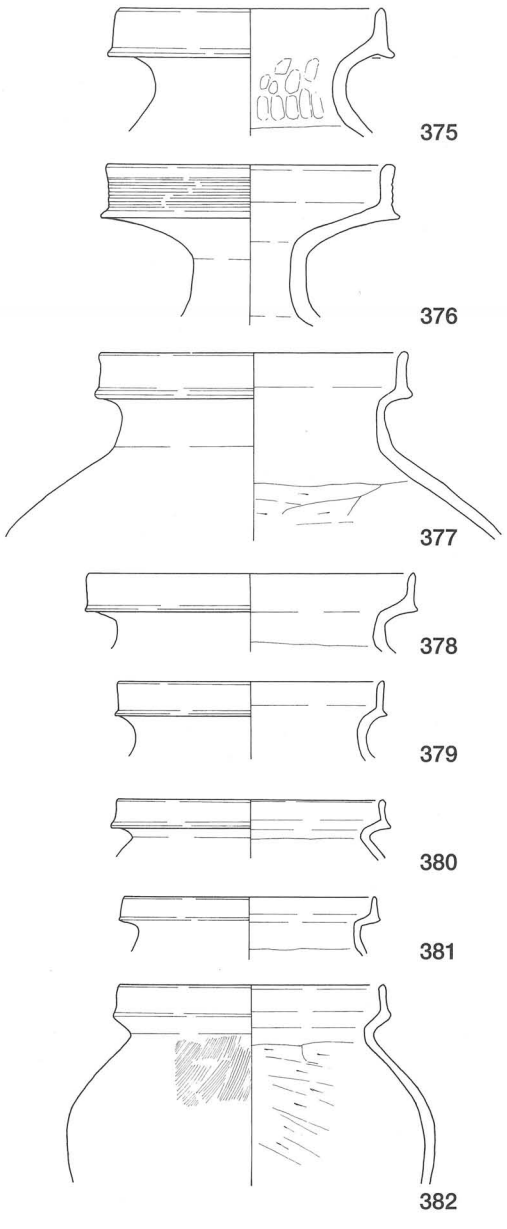


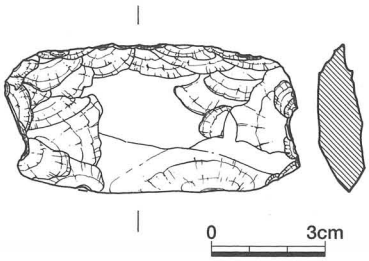


1．明赤褐色粘質土（炭化物を含む）
2．暗褐色粘質土（炭化物を含む）
3．暗褐色粘質土（炭化物・焼土を多く含む）
4．赤褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）



甕の底部の破片である。**385・386**は鉢の口縁から胴部にかけての破片で、**385**は口縁端部を三角形になるよう上下に拡張し、**386**は垂直に上方向に立ち上げている。**387**は高杯の杯部の破片で、杯部を反るように屈曲させている。**S５**は打製の石包丁で両端に抉りが認められる。これらの遺物から土壙45は弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。





S５

第67図　土壙45（1／30）・出土遺物（1／2・1／4）

土壙46（第4・68図）

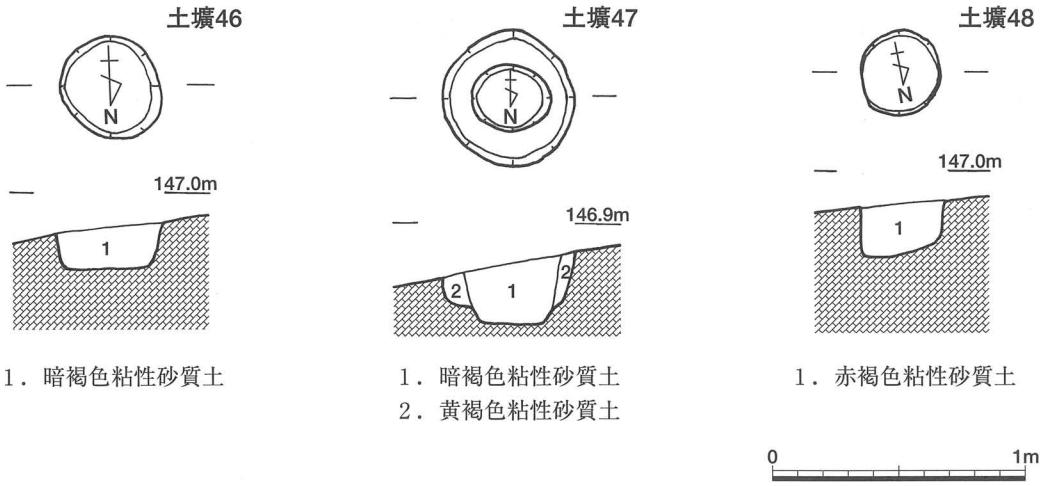
調査区の南東部、南東斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径0.8m、最大底径0.85m、中央での深さ0.25mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙47（第4・68図）

調査区の南東部、南東斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。底の中央に柱穴状の遺構が認められる。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径0.5m、最大底径0.45m、中央での深さ0.2mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙48（第4・68図）

調査区の南東部、南東斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径0.3m、最大底径0.3m、中央での深さ0.2mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

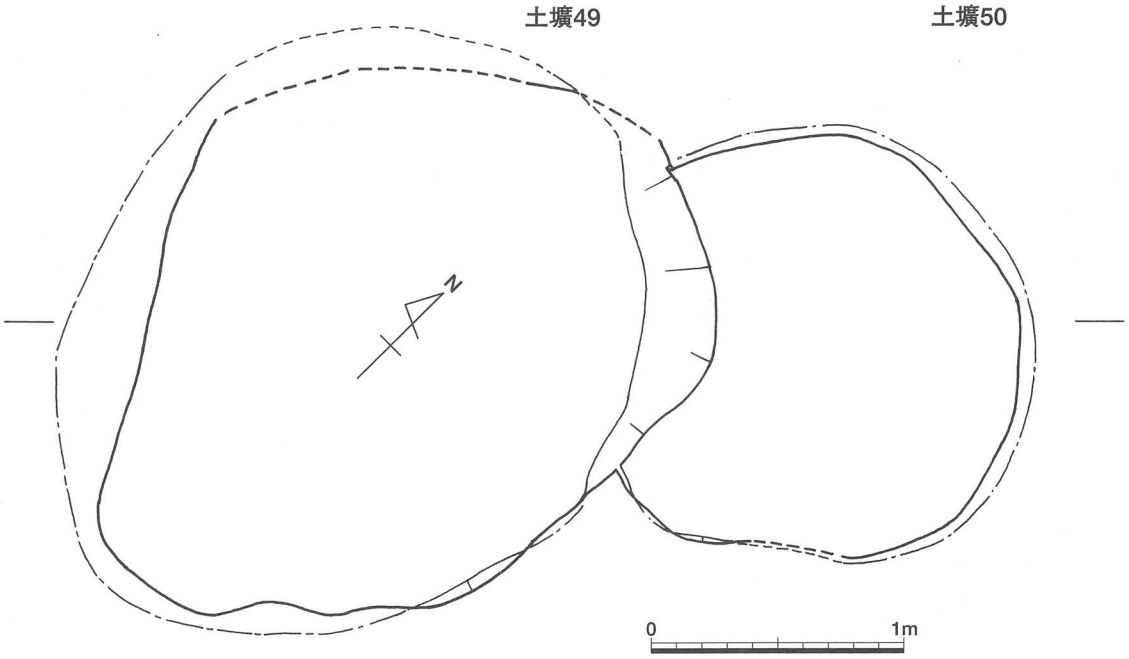


第68図　土壙46・47・48（1／30）

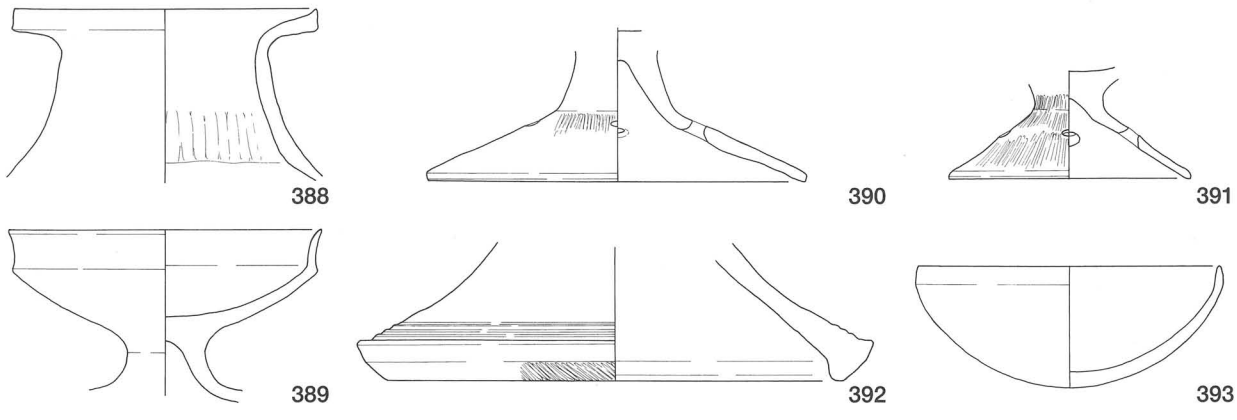
土壙49・50（第4・69図、図版11）

調査区の南東部、南東斜面に所在する。竪穴住居5内につくられている。出土状況から土壙50を最初につくり、その後、土壙49をつくっている。さらに土壙49を埋めて竪穴住居5を建てていると考えられる。平面形は、土壙49が楕円形、土壙50が円形を呈している。また断面は上部が竪穴住居5で削平されているが、ともに台形を呈していると考えられる。土壙の中では、いずれも大型の部類にはいり、土壙49は、最大径2.6m、最大底径2.7m、中央での深さ0.7mを測る。本遺跡最大の土壙となる。土壙50は、最大径1.6m、最大底径1.7m、中央での深さ0.3mを測る。

出土遺物には弥生土器の**388～393**がある。**388**は壷の口縁から頸部にかけての破片で、口縁をわずかに垂直に拡張している。**389～391**は高杯の杯から脚部にかけての破片である。**389**は杯部をやや反るように上方向に屈曲させている。**390・391**は端部を細くしながら丸く仕上げており、スカシ孔がそれぞれ4個認められる。**392**は器台の脚部の破片で、端部を三角形になるよう上下に拡張しており、端部の外面に斜線文様が、脚部の下段に沈線が認められる。**393**は椀である。これらの遺物から土壙49・50は弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。



1．暗褐色粘質土
2．灰褐色粘質土
（炭化物を含む）
3．橙褐色砂質土
4．赤褐色粘質土
5．橙褐色粘質土
6．橙褐色砂質土
7．暗褐色粘性砂質土
8．灰褐色粘性砂質土
9．暗褐色粘質土
10．青灰色砂質土
（地山ブロック含む）
11．黒褐色粘質土
（炭化物を多く含む）
12．黒褐色粘性砂質土
（炭化物を多く含む）
13．灰褐色粘性砂質土
14．灰オリーブ色砂質土
15．赤褐色粘質土
（焼土を含む）
16．橙褐色粘質土
（炭化物・焼土を含む）
17．青灰色砂質土
（地山ブロックを含む）
18．暗褐色粘質土
19．灰褐色粘性砂質土
20．黄褐色砂質土



第69図　土壙49・50（1／30）・出土遺物（1／2・1／4）

土壙51（第４・70図）

調査区の中央、東斜面に所在し、竪穴住居３に隣接する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。比較的浅く、斜面の谷側では平坦になっている。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.3m、最大底径1.3m、中央での深さ0.15mを測る。出土遺物には、高杯の**394**がある。脚から杯部にかけての破片で、短脚でスカシ孔が４個認められる。この遺物から土壙51は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

土壙52（第４・70図、図版11）

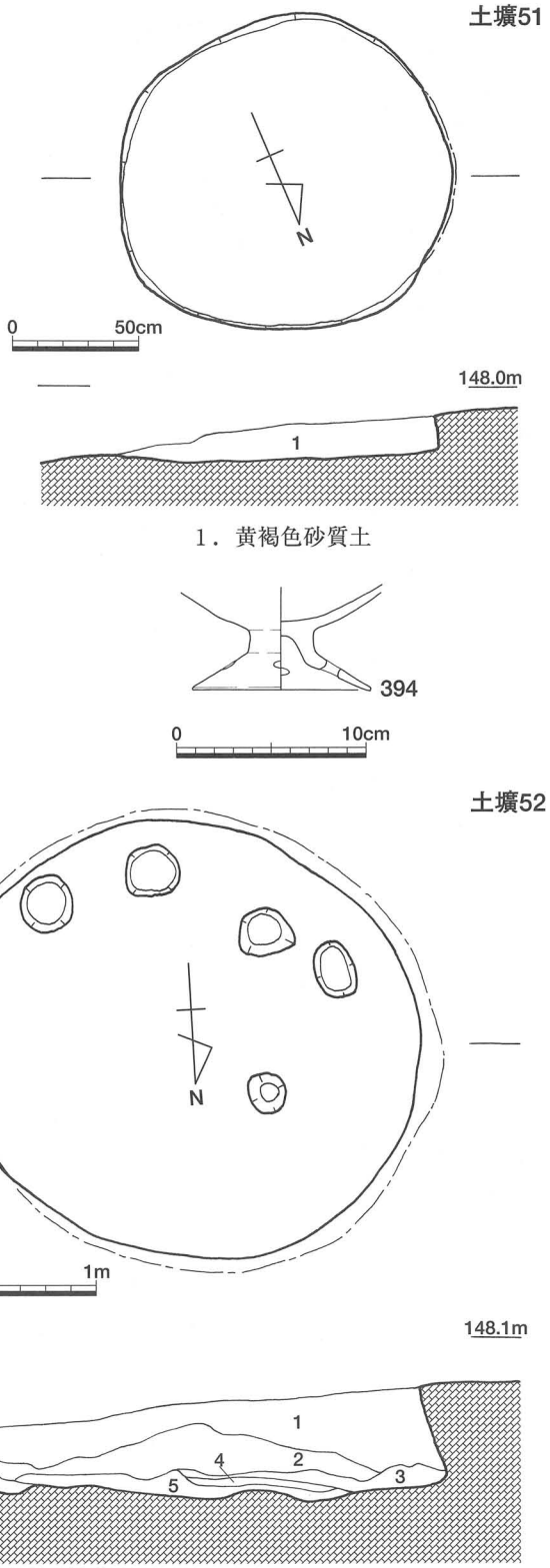
調査区の東部、東斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。底に柱穴状の遺構が５個残っている。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.9m、最大底径1.9m、中央での深さ0.4mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙53（第４・71図）

調査区の東部、東斜面に所在する。平面形は、楕円形を、断面は台形を呈している。比較的浅く、斜面の谷側では平坦になっている。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.8m、最大底径1.8m、中央での深さ0.2mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

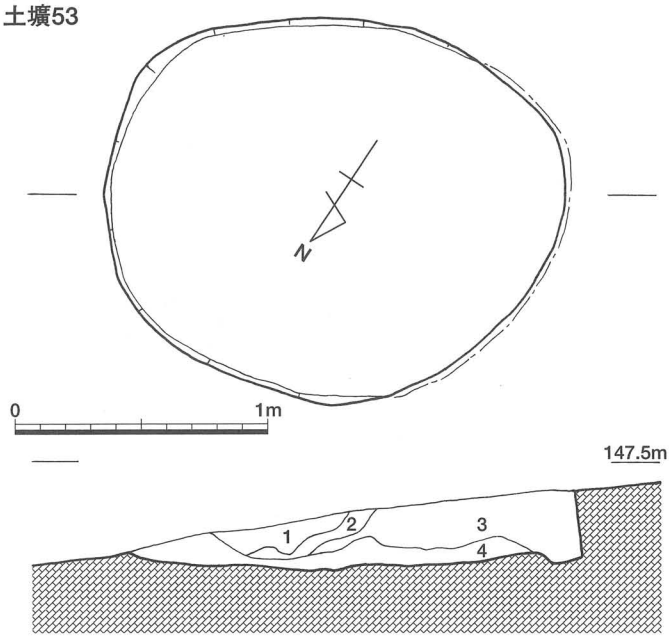
土壙54（第４・71図）

調査区の東部、東斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。底の周囲に柱穴状の遺構が６個残っている。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.8m、最大底径1.9m、中央での深さ0.5mを測る。出土遺物には、弥生土器の**395～397**がある。**395**は甕の口縁から肩部にかけての破片で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**396**は甕の底部と考えられる破片で底部が突出している。**397**は脚から杯部にかけての破片で、短脚でスカシ孔が４個認められる。この遺物から土壙54は



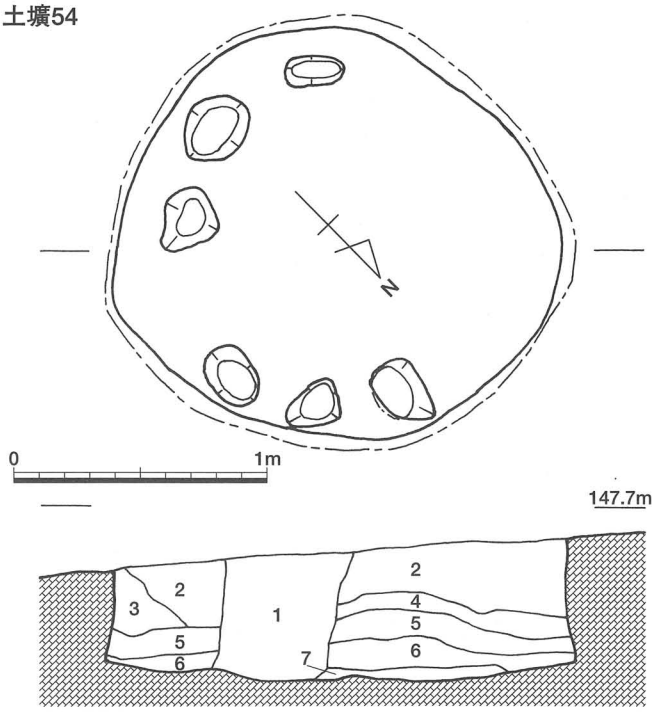
第70図　土壙51・52（１／30）・出土遺物（１／４）

土壙53



1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．黄褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．橙褐色粘性砂質土
4．黄褐色粘性砂質土

土壙54

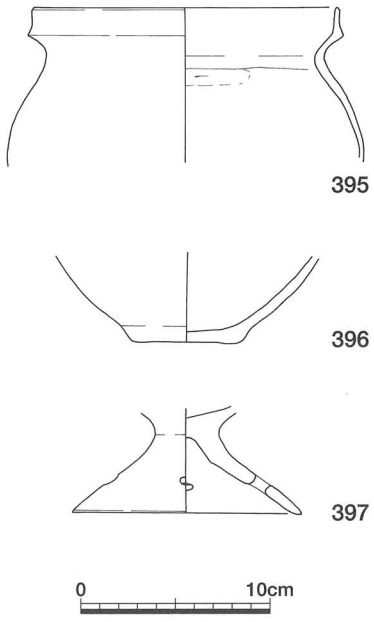


1．暗褐色粘性砂質土（土器・炭化物を多く含む）
2．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．橙褐色粘性砂質土
4．黒褐色粘性砂質土（土器・炭化物を多く含む）
5．橙褐色砂質土（炭化物を含む）
6．橙褐色砂質土

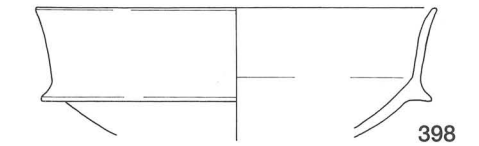
弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

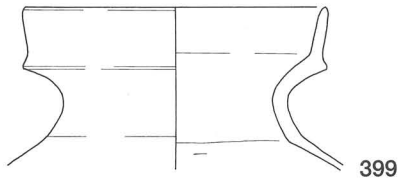
土壙55（第４・72図）

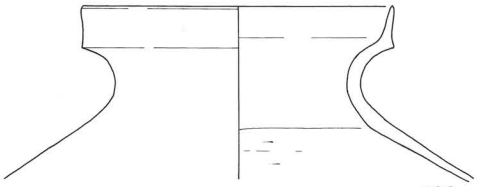
調査区の中央、南東斜面に所在する。竪穴住居２内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居２を建てたことが考えられる。平面形は、長方形が考えられるが竪穴住居２によって削平されているため確認できない。断面は方形を呈しており、比較的浅い。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.75m、最大底径1.7m、中央での深さ0.2mを測る。出土遺物には、弥生土器の**398～401**がある。**398・399**は壷の口縁から頸部にかけての破片で、口縁端部をやや反らせながら立ち上げている。**400**は甕の口縁から頸部にかけての破片で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**401**は甕の底部と考えられる破片である。この遺物から土壙55は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

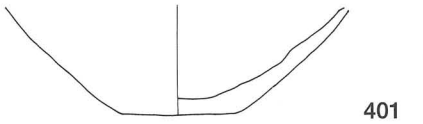


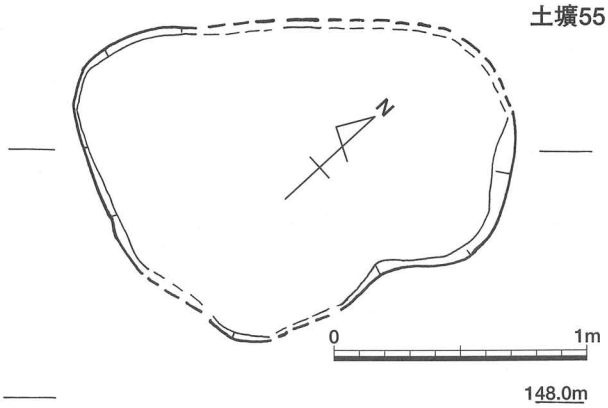
第71図　土壙53・54（1／30）・出土遺物（1／4）



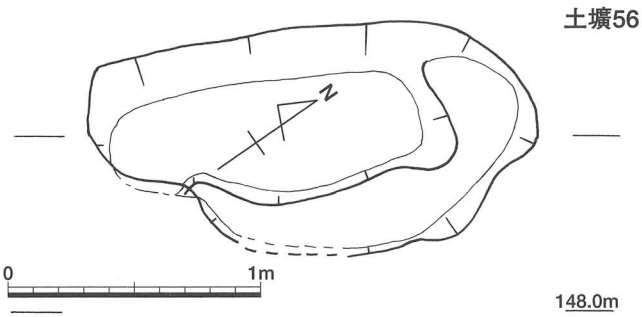








1．灰褐色性砂粘質土

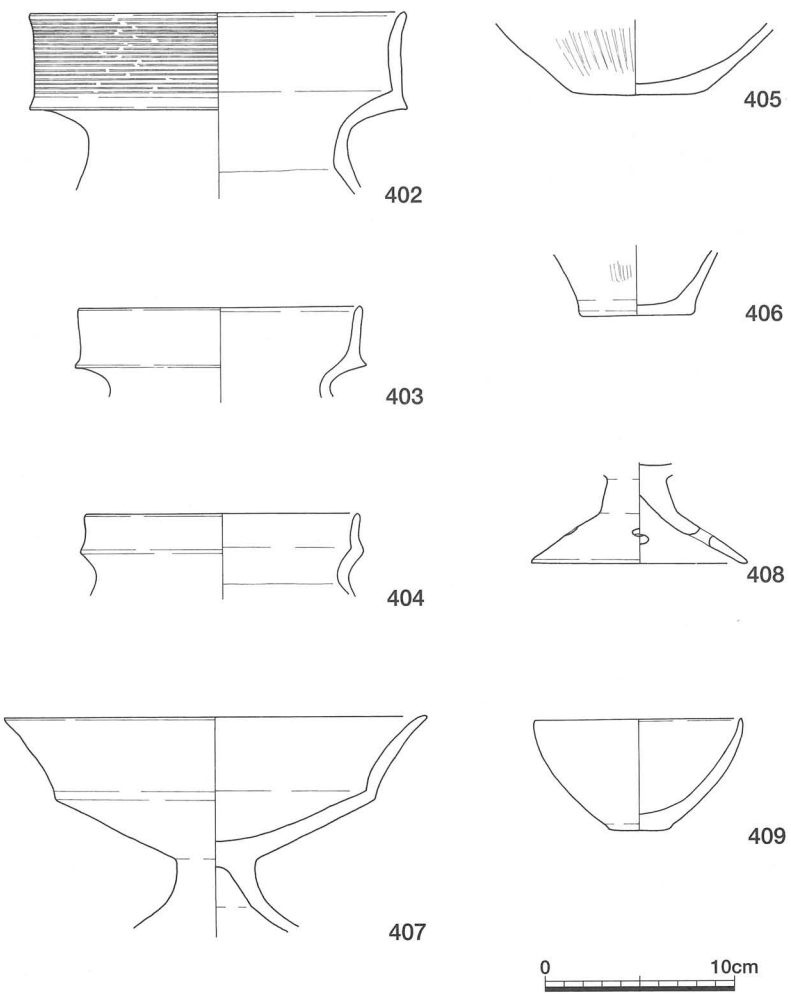


1．暗褐色粘性砂質土
2．黄褐色砂質土

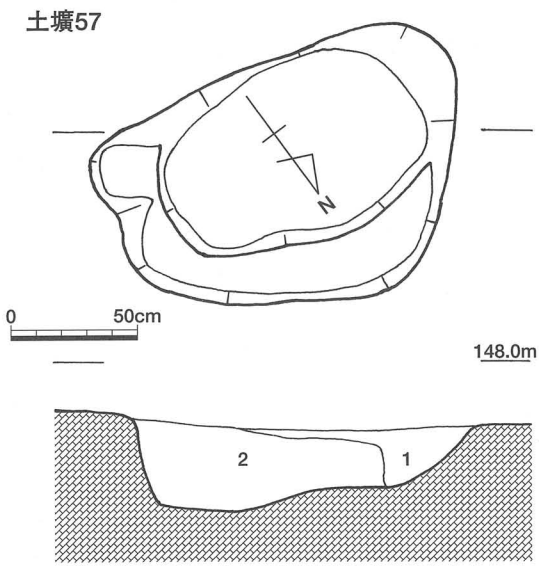
第72図　土壙55・56（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙56（第４・72図）

調査区の中央、南東斜面に所在する。竪穴住居２内につくられている。埋土の検出状況から土壙55同様に土壙を埋めたのち竪穴住居２を建てたことが考えられる。平面形は、長方形が考えられるが竪穴住居２によって削平されているため確認できない。断面はやや底が狭くなる方形を呈しており、テラス状の平坦面をもつ。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.75m、最大底径1.2m、中央での深さ0.6mを測る。出土遺物には、弥生土器の402～409がある。402・403は壷の口縁から頸部にかけての破片で、口縁端部を垂直に立ち上げており、402は沈線を施している。404は甕の口縁部の破片で、口縁端部を垂直に立ち上げている。405・406は甕の底部と考えられる破片である。407・408は高杯の杯から脚部にかけての破片で、407は杯部を反るように屈曲させている。408は短脚でスカシ孔が４個認められる。409は椀で底部が高台状に突出している。これらの遺物から土壙56は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。



第73図　土壙56　出土遺物（１／４）



１．暗褐色粘性砂質土
２．橙褐色砂質土

第74図　土壙57（１／30）

土壙57（第４・74図）

調査区の中央、南東斜面に所在する。竪穴住居２内につくられている。埋土の検出状況から土壙55同様に土壙を埋めたのち竪穴住居２を建てたことが考えられる。平面形は、楕円形が考えられるが竪穴住居２によって削平されているため確認できない。断面はややすり鉢状を呈しており、テラス状の平坦面をもつ。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.5m、最大底径1.0m、中央での深さ0.3mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙58（第４・75図）

調査区の中央、南東斜面に所在する。竪穴住居２内につくられている。埋土の検出状況から土壙55同様に土壙を埋めたのち竪穴住居２を建てたことが考えられる。平面形は、楕円形が考えられるが竪穴住居２によって削平されているため確認できない。断面は方形を呈しており、比較的浅く、斜面の谷側では平坦になる。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.45m、最大底径1.4m、中央での深さ0.2mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

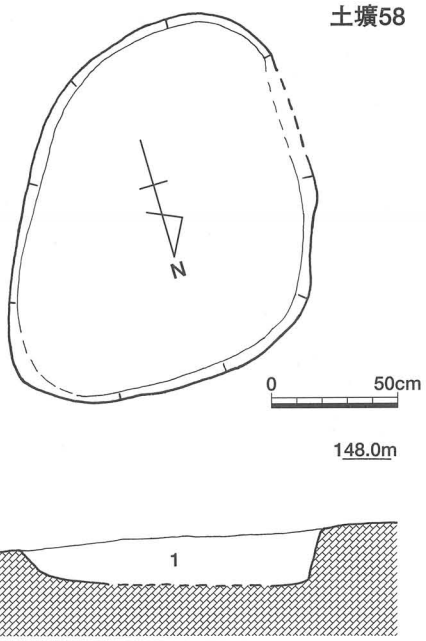
土壙59（第４・75図）

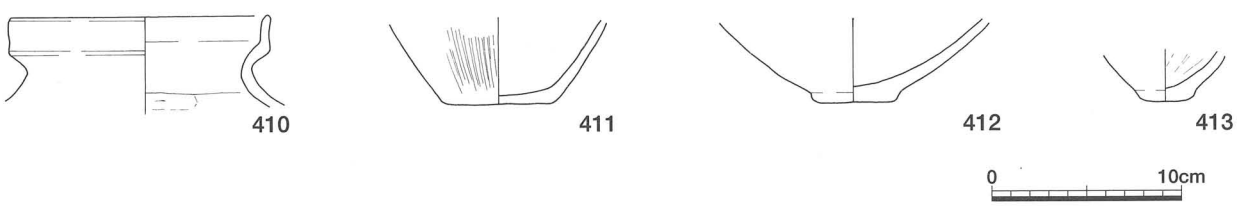
調査区の中央、南東斜面に所在する。竪穴住居２内につくられている。埋土の検出状況から土壙55同様に土壙を埋めたのち竪穴住居２を建てたことが考えられる。平面形は、円形を、断面は袋状を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.4m、最大底径1.5m、中央での深さ0.45mを測る。出土遺物には、弥生土器の**410～413**がある。**410**は甕の口縁から頸部の破片で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**411～413**は甕の底部と考えられる破片で、**412・413**は底部が突出している。これらの遺物から土壙59は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

土壙60（第４・76図、図版12）

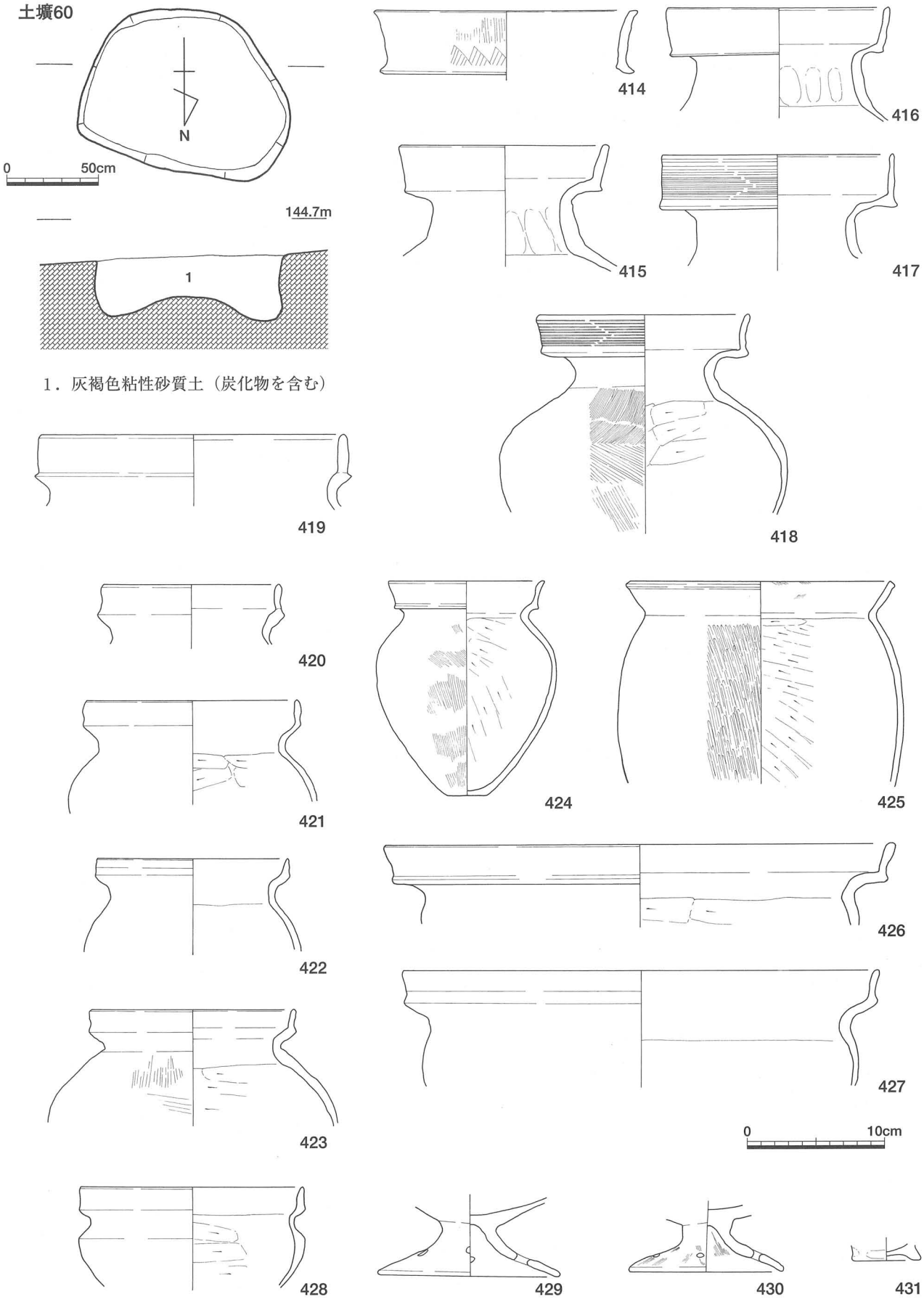
調査区の東端、東斜面に所在する。竪穴住居７内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居７を建てたことが考えられる。土器がまとまって出土している。平面形は、楕円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径1.0m、最大底径1.0m、中央での深さ0.2mを測る。

出土遺物には、弥生土器の**414～431**がある。**414～418**は壷の口縁から胴部にかけての破片で、口縁端部をやや反るように立ち上げており、**417・418**は外面に沈線を施している。**419～425**は甕で、**419～424**は口縁端部を垂直に立ち上げている。**425**は口縁端部をく字状に屈曲させている。**426～428**は鉢で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**429・430**は高杯の脚部の破片で、ともにスカシ孔が４個認められる。**431**は脚付きの甕の破片と考えられる。これらの遺物から土壙60は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。





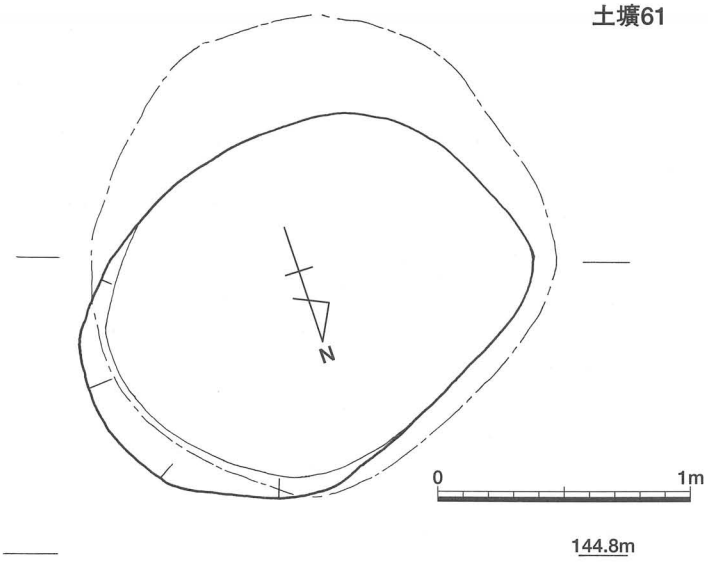
第75図　土壙58・59（1／30）・出土遺物（1／4）

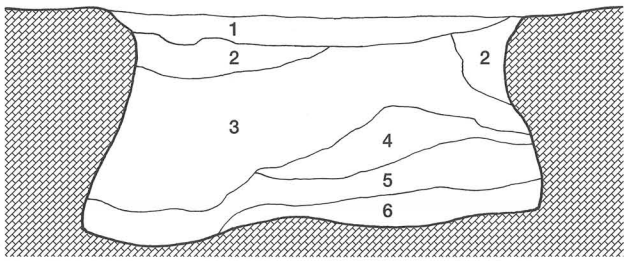


第76図　土壙60（1／30）・出土遺物（1／4）

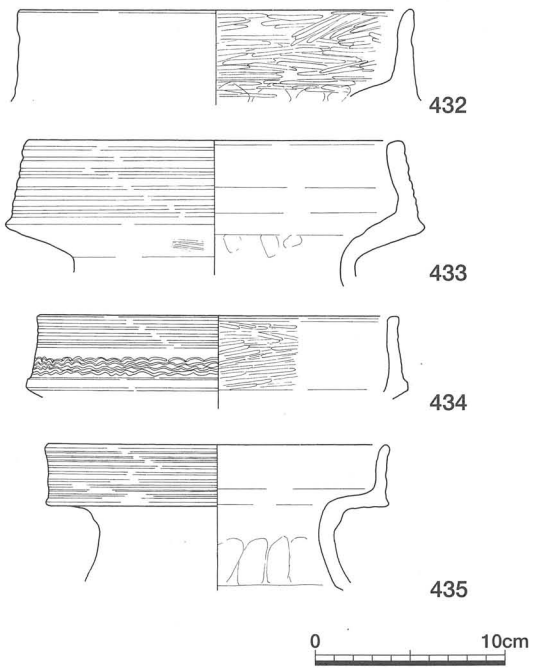
土壙61（第４・77図、図版12）

調査区の東端、東斜面に所在する。竪穴住居７内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居７を建てたことが考えられる。土器がまとまって出土している。平面形は、楕円形を、断面は袋状を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.8m、最大底径1.9m、中央での深さ0.8mを測る。出土遺物には、弥生土器の**432～516**がある。**432～441**は壷の口縁から胴部にかけての破片で、いずれも口縁端部をやや内傾または垂直に立ち上げており、**434**は外面上段に沈線を、下段に波状文を施している。**442～482**は甕で、**442～472**は口縁端部をほぼ垂直に立ち上げている。**473～475**は口縁端部を反らしながら立ち上げている。**476～478**は口縁をく字状に屈曲させ、端部を内傾するように整えている。**479～482**は口縁端部をく字状に屈曲させている。**483～489**は甕あるいは壷の底部と考えられる。**490～498**は鉢の口縁から胴部にかけての破片で、**497**は口縁端部をく字状に、それ以外はほぼ垂直に立ち上げている。**499～508**は高杯で、杯部は口縁を反るように屈曲させるものと段をもって垂直に引きあげているものがある。脚部にはいずれもスカシ孔が４個認められる。**508**はミニチュアの高杯である。**509・510**は器台の口縁部の破片で、内傾させながら上下に立ち上げ、外面に沈線を施している。**511～513**は直口壷で、いずれも脚が付くと考えられる。**514～516**はミニチュアの椀である。これらの土器の胎土は精良なものが多く、本遺跡で出土するものとは異なっていた。これらの遺物から土壙61は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

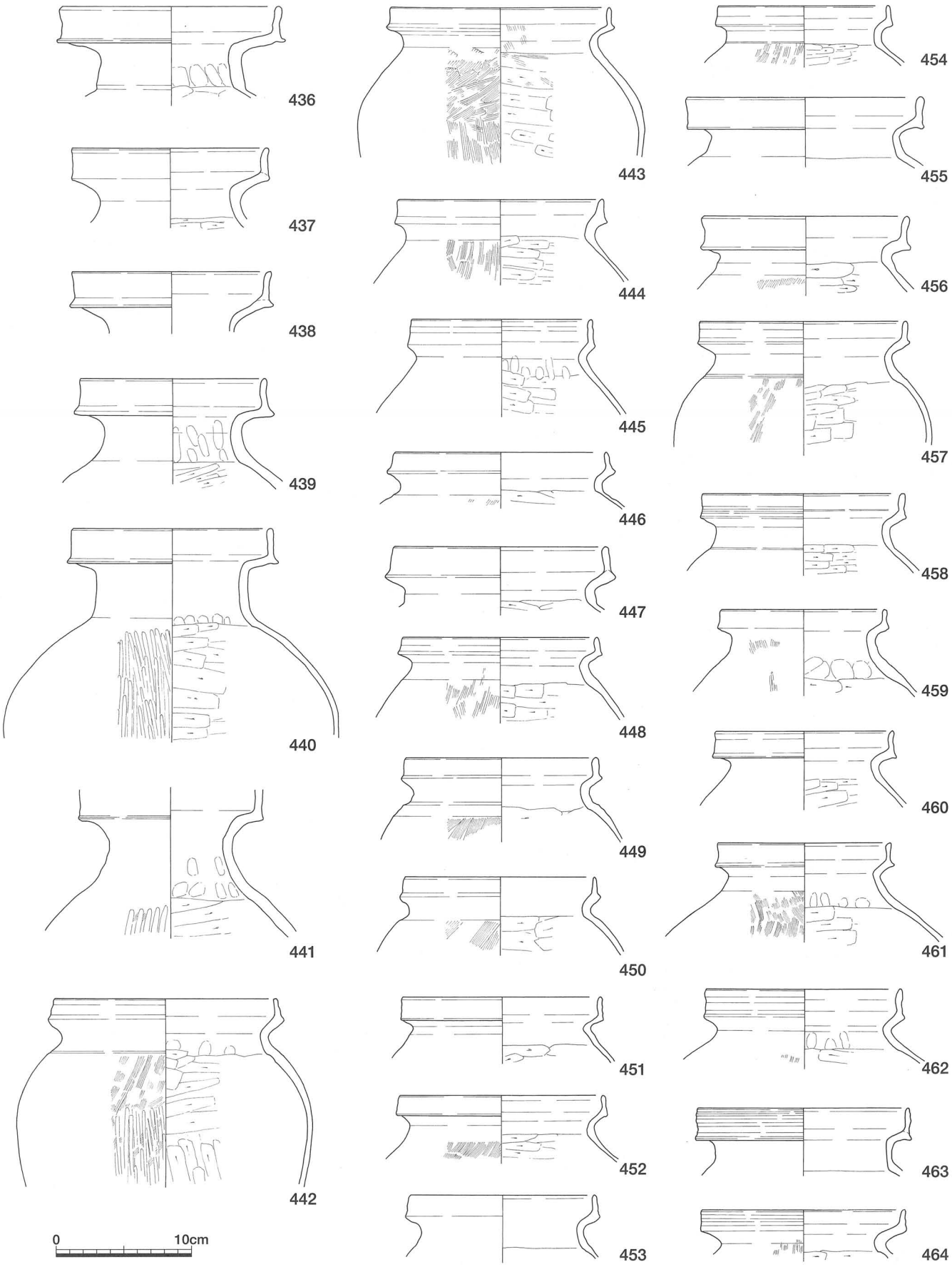




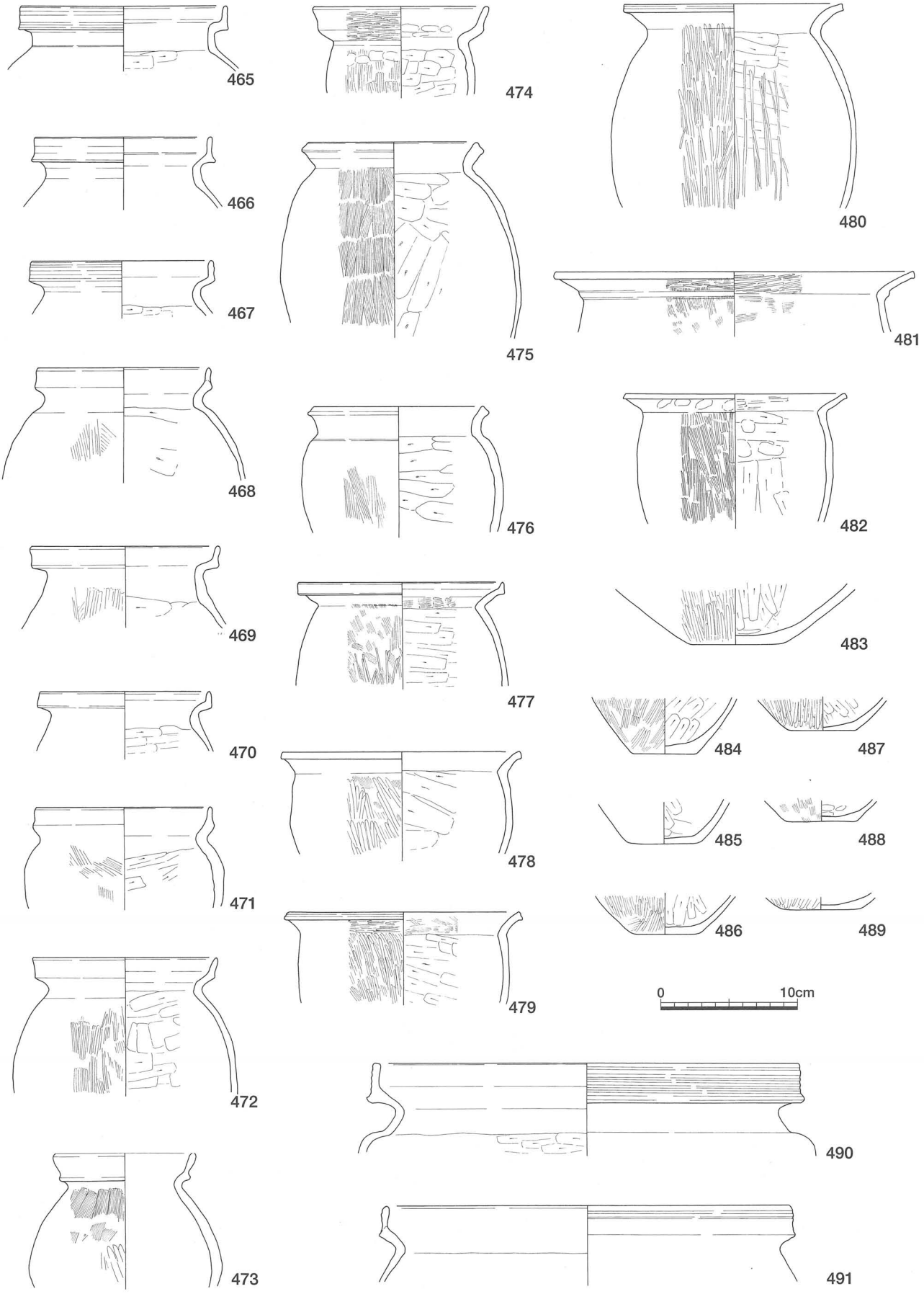
1．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．黄褐色砂質土（炭化物を含む）
3．黒褐色粘性砂質土（土器・炭化物を含む）
4．黄褐色砂質土
5．黒褐色粘性砂質土と黄褐色砂質土のまざり土（土器を多く含む）
6．黒褐色粘性砂質土（土器を多く含む）



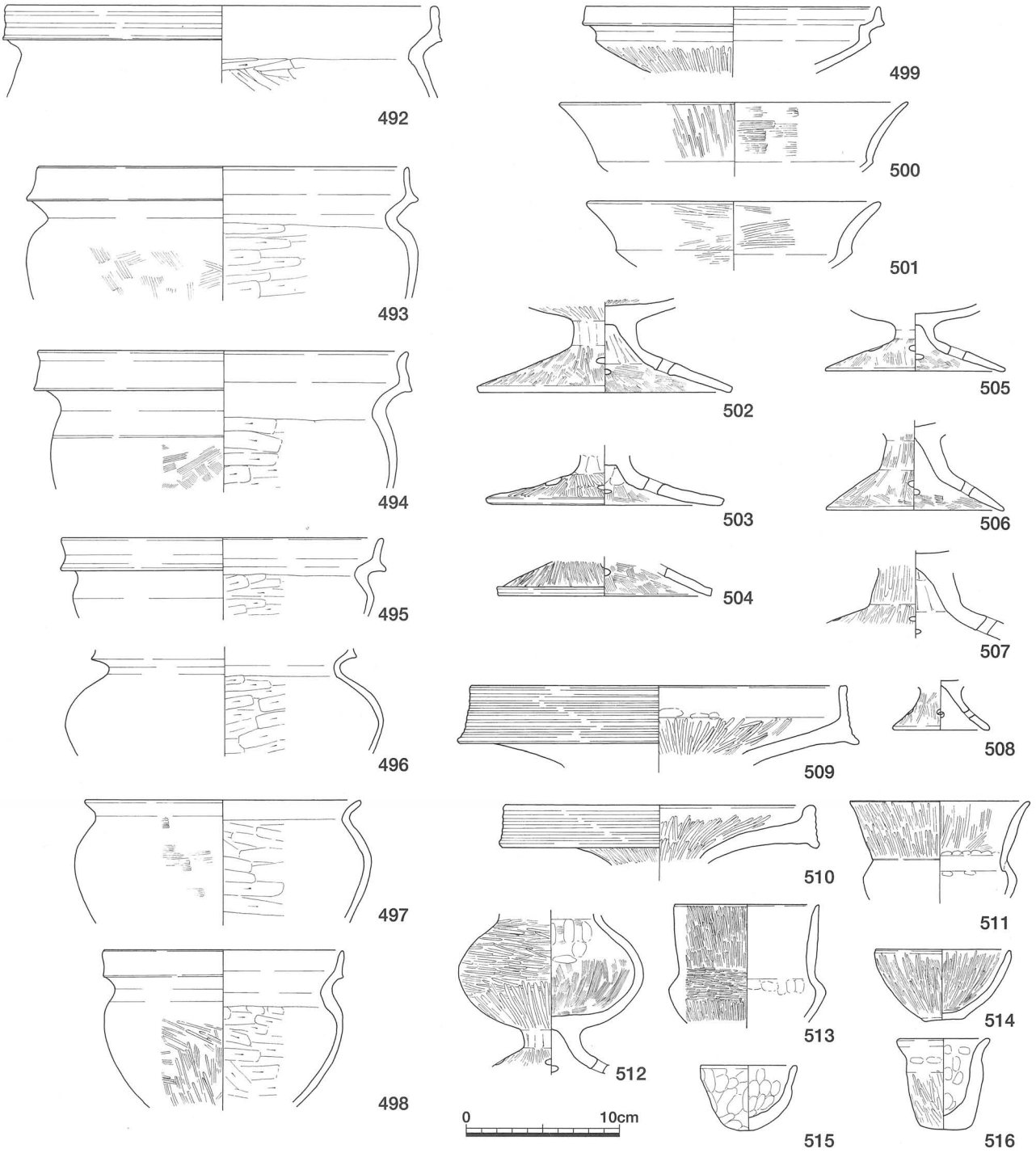
第77図　土壙61（１／30）・出土遺物①（１／４）



第78図　土壙61出土遺物②（1／4）



第79図　土壙61出土遺物③（１／４）



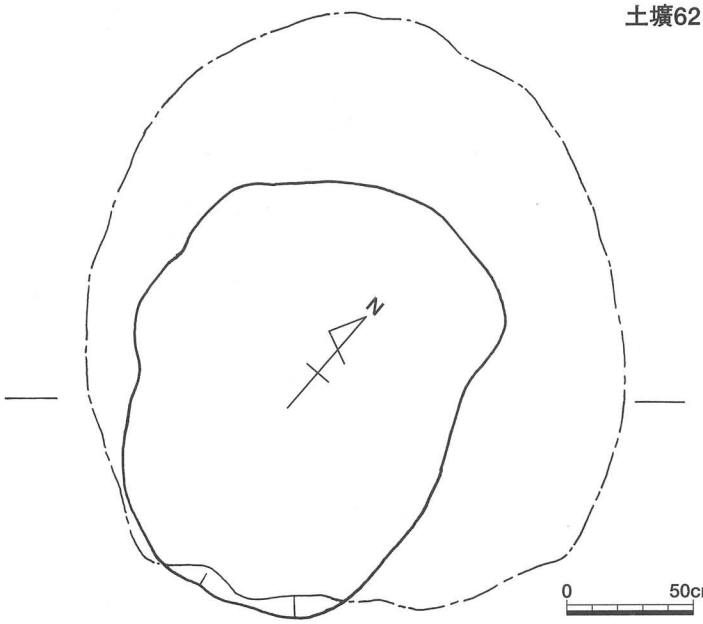
第80図　土壙61出土遺物④（1／4）

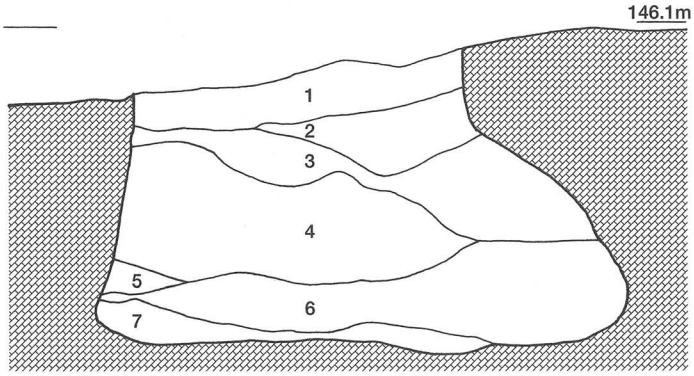
土壙62（第４・81図、図版12）

調査区の東部、北東斜面に所在し、竪穴住居４に隣接する。平面形は、楕円形を、断面は袋状を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.75m、最大底径2.4m、中央での深さ0.5mを測る。出土遺物には、弥生土器の**517～529**がある。**517**は壷の口縁から頸部の破片で、口縁端部を内傾させながら立ち上げている。**518・519**は甕の口縁から胴部の破片で、口縁端部を内傾させながら立ち上げている。**520～522**は甕あるいは鉢の底部と考えられる。**521**は底の中央に穿孔が認められる。**523～525**は鉢の口縁から胴部にかけての破片で、**523**は口縁上端を平坦になるように仕上げている。**526～529**は高杯

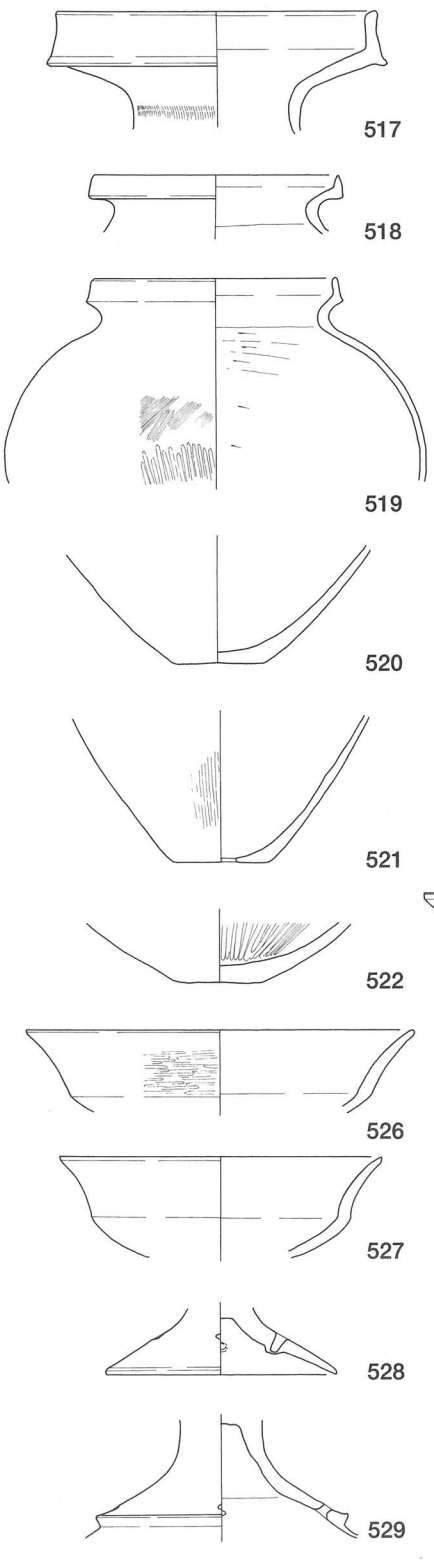
で、526・527は杯部を反るように屈曲させている。528はスカシ孔が４個認められるが、孔が貫通していない。529は装飾高杯と考えられ段が認められる。これらの遺物から土壙62は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

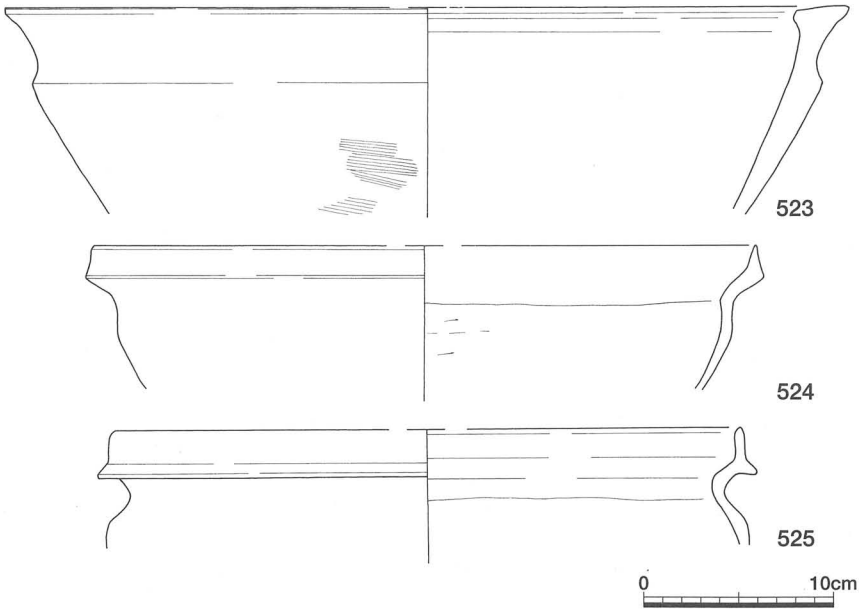
土壙62



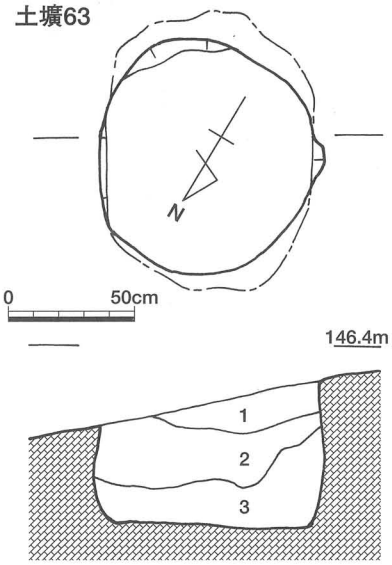


1．橙褐色粘性砂質土
2．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
4．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
5．灰褐色砂質土
6．灰褐色粘性砂質土
7．灰褐色砂質土





第81図　土壙62（１／30）・出土遺物（１／４）

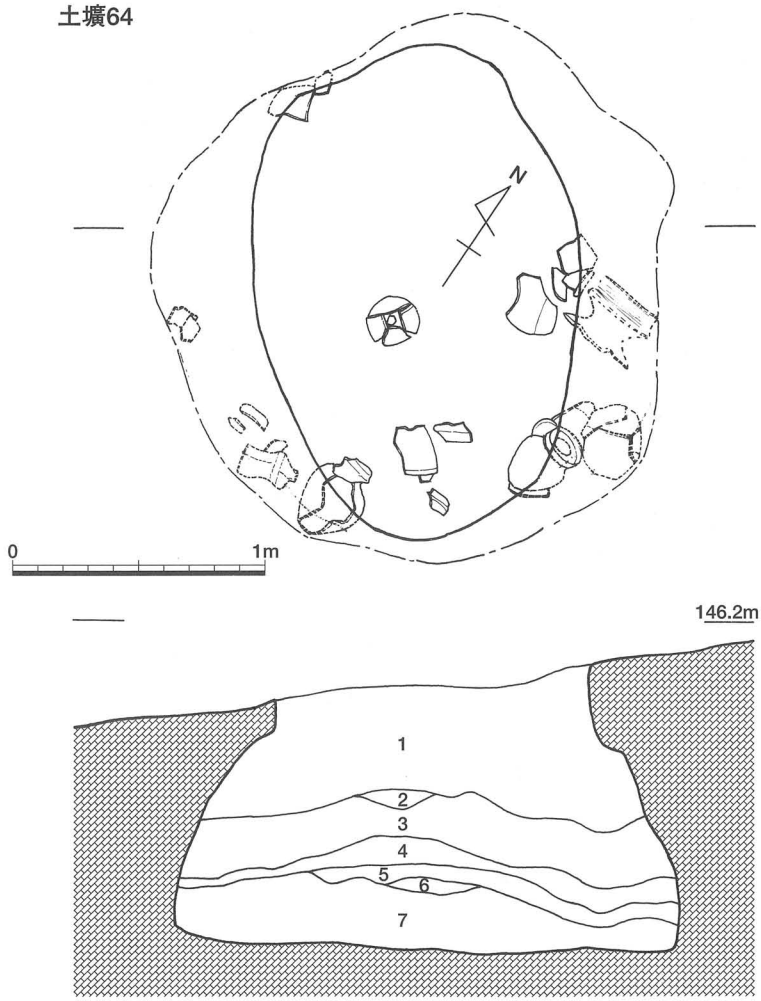


土壙63（第４・82図）

調査区の東部、北東斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径0.9m、最大底径1.1m、中央での深さ0.5mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙64（第４・82図）

調査区の東部、北東斜面に所在し、竪穴住居４に隣接する。平面形は、楕円形を、断面は袋状を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.95m、最大底径2.2m、中央での深さ1.05mを測る。底から土器がまとまって出土している。出土遺物には、弥生土器の**530～562**、土製品**C13**がある。**530～537**は壷で、いずれも口縁端部を垂直に立ち上げている。**530**は大型で特殊壷の可能性もある。**538～545**は甕の口縁から胴部の破片で、**538～545**は口縁端部を内傾あるいは垂直に立ち上げている。**546**は口縁端部をわずかにく字状に屈曲させている。**547**は甕の底部と考えられる。**548～552**は鉢で、**548～550**は口縁端部をほぼ垂直に立ち上げている。**551・552**は小型の鉢で、口縁端部を上方向に引き上げて仕上げている。**553～559**は高杯で、いずれも短脚でスカシ孔が４個認められる。**553～555**は杯部を反るように屈曲させている。**560・561**は脚付きの直口壷である。**562**は脚付きの甕と考えられる。**C13**は匙形土製品と考えられる。柄の部分が欠けている。これらの遺物から土壙63は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

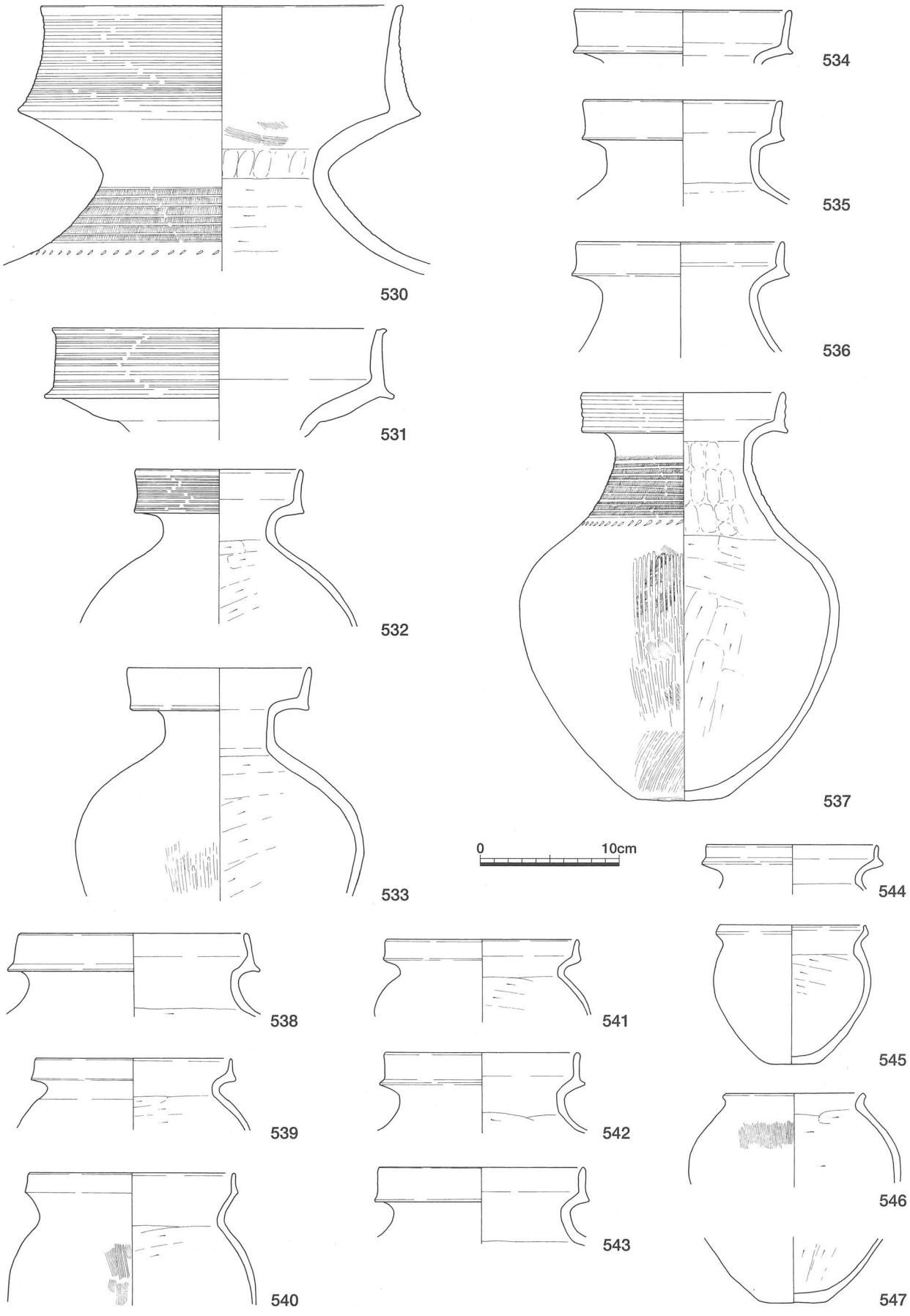


第82図　土壙63・64（1／30）

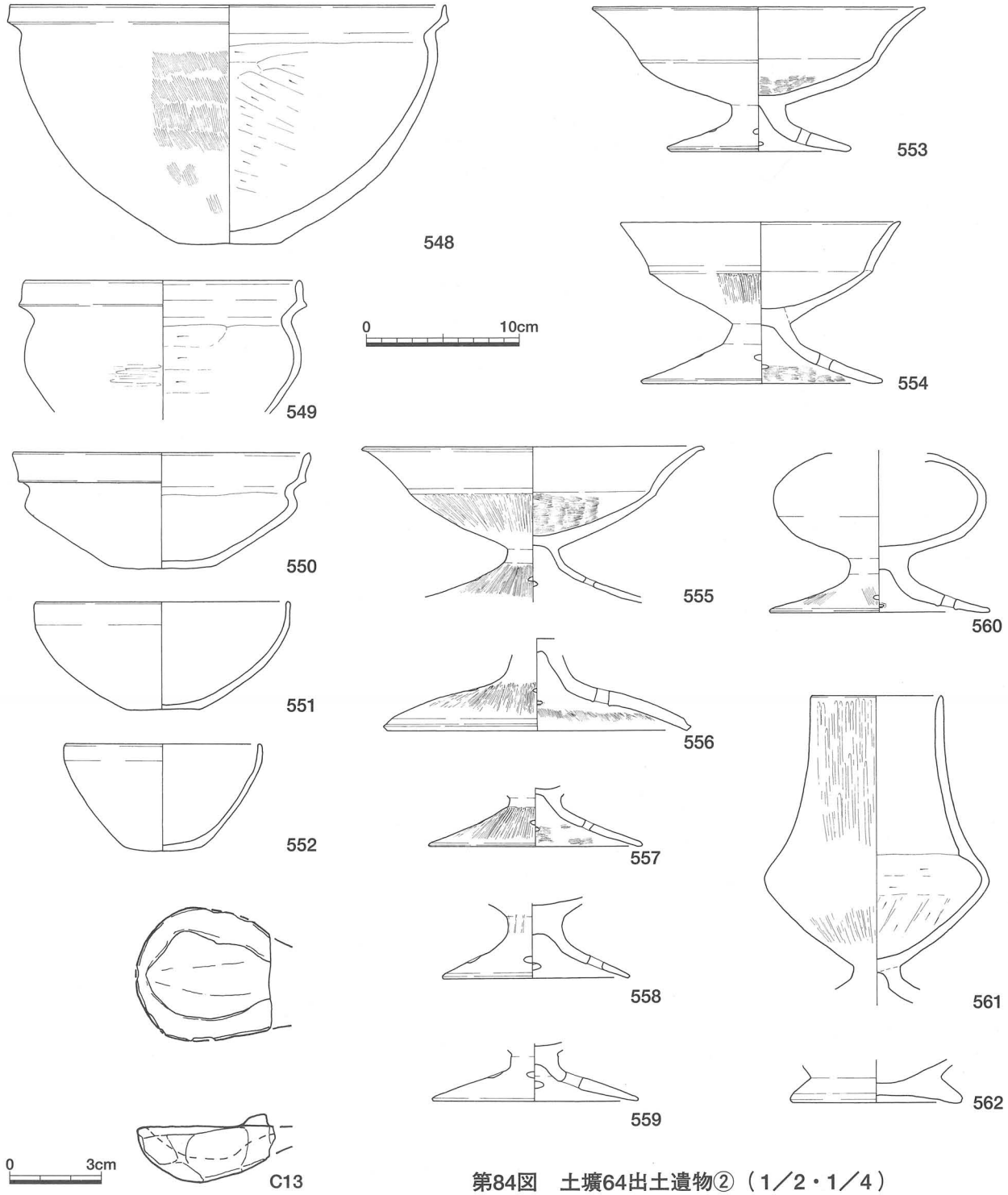
土壙65（第４・85図、図版13）

調査区の東部、北東斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.4m、最大底径1.4m、中央での深さ0.45mを測る。底から土器がまとまって出土している。出土遺物には、弥生土器の

1．黒褐色粘性砂質土
（土器・炭化物・地山ブロックを多く含む）
2．灰褐色砂質土
3．黒褐色粘性砂質土（土器・炭化物を多く含む）
4．黒褐色粘質土
5．暗褐色粘性砂質土
6．黄褐色粘性砂質土
7．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）

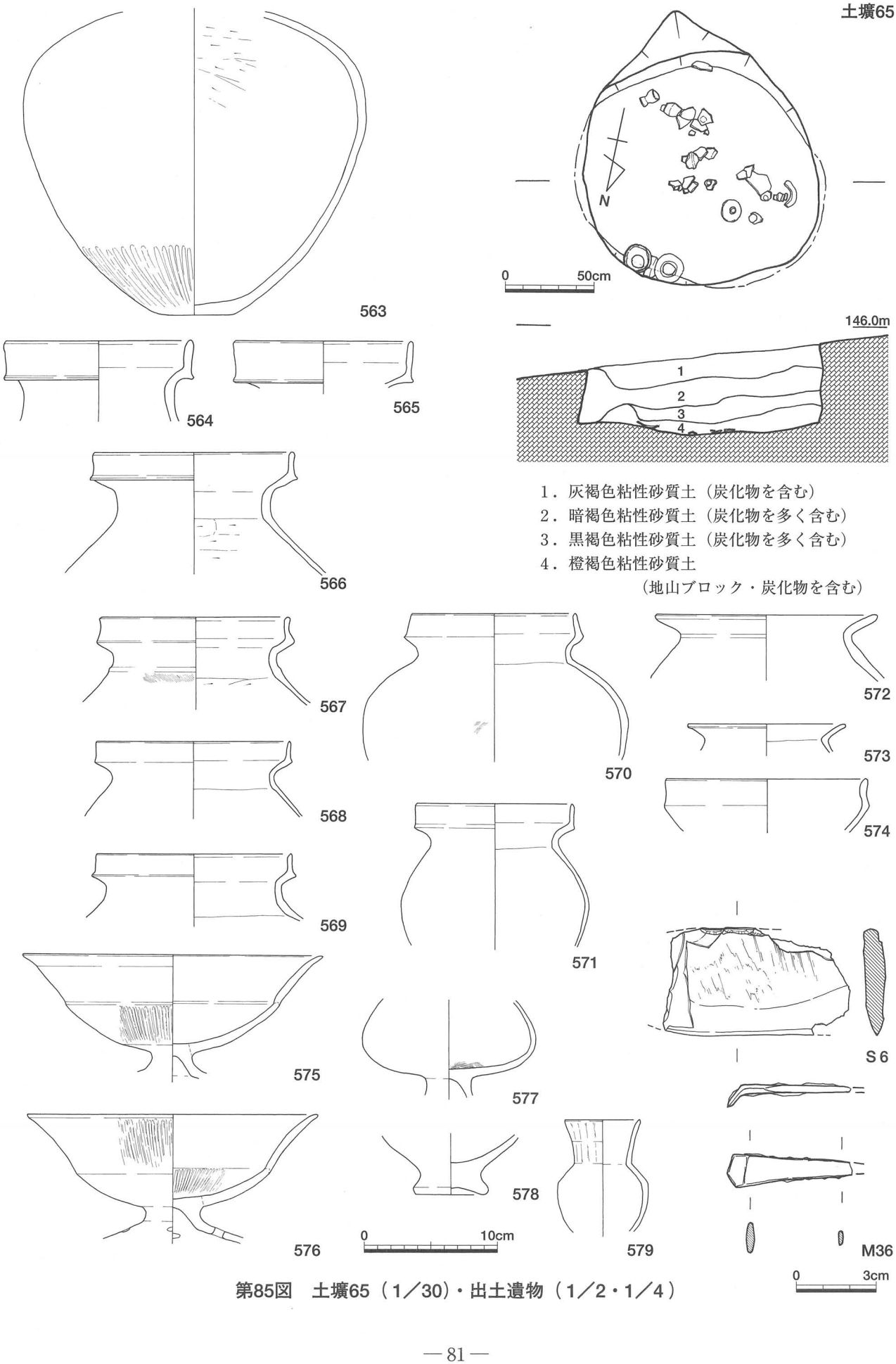


第83図　土壙64出土遺物①（１／４）

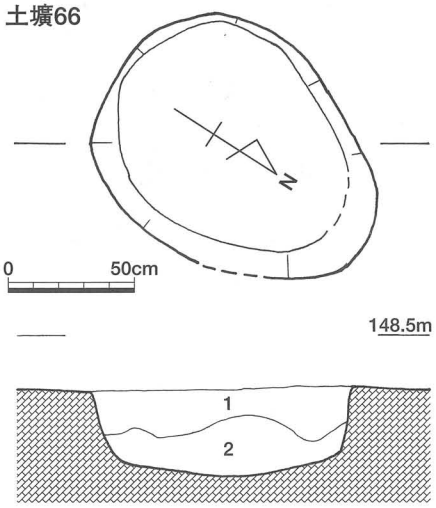


第84図　土壙64出土遺物②（1／2・1／4）

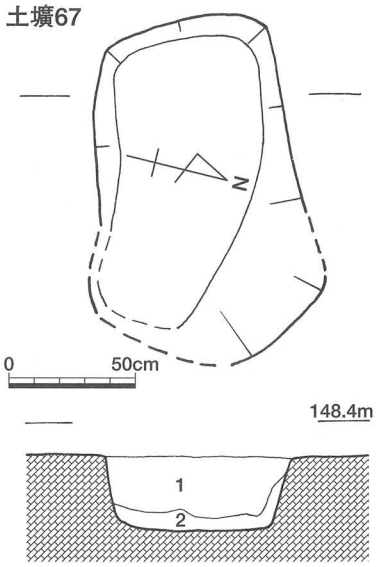
563～579、石器**S６**、鉄器**M36**がある。**563～565**は壷で、いずれも口縁端部を垂直に立ち上げている。**566～573**は甕の口縁から胴部の破片で、**566～571**は口縁端部をほぼ垂直に立ち上げている。**572・573**は口縁端部をく字状に屈曲させている。**574**は鉢の口縁部で、上方向に引き上げて仕上げている。**575・576**は高杯で、いずれも短脚では杯部を反るように屈曲させている。**577**は脚付きの直口壷と考えられる。**578**は脚付きの甕と考えられる。**579**はミニチュアの直口壷である。**S６**は打製の石包丁で、両端を欠いているが、抉りをもつと考えられる。**M36**は柄の部分が欠けているが鉇と考えられる。これらの遺物から土壙65は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。



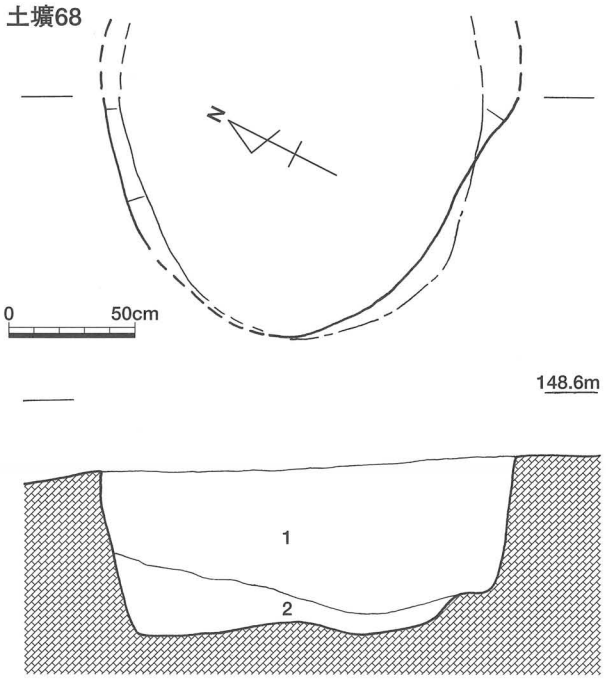
第85図　土壙65（1／30）・出土遺物（1／2・1／4）



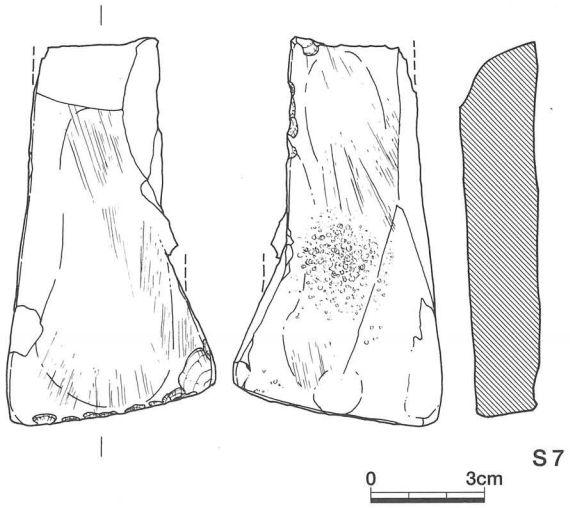
1．赤褐色粘性砂質土
2．暗褐色粘性砂質土



1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）



1．暗褐色粘性砂質土
2．暗褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）



第86図　土壙66・67・68（1／30）・出土遺物（1／2）

土壙66（第４・86図、図版14）

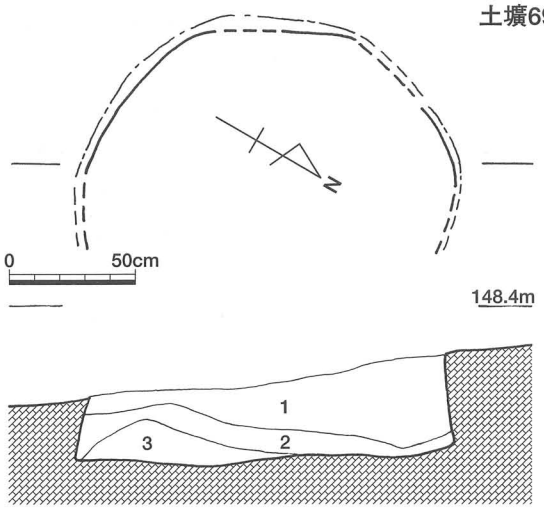
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面の南端に所在し、竪穴住居11内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居11を建てたことが考えられる。平面形は、楕円形を、断面はやや内傾する方形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.1ｍ、最大底径1.0ｍ、中央での深さ0.35ｍを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙67（第４・86図、図版14）

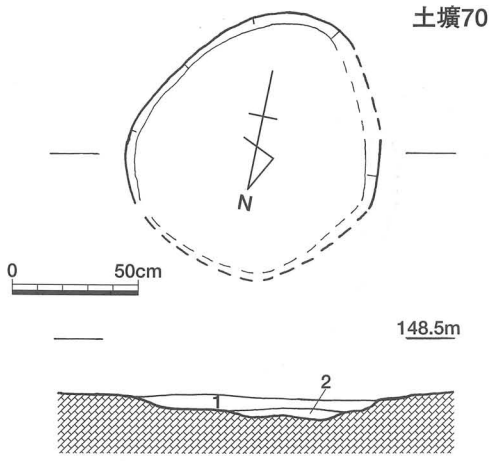
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面の南端に所在し、竪穴住居11内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居11を建てたことが考えられる。平面形は、長方形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、長径1.4ｍ、短径0.75ｍ、中央での深さ0.3ｍを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙68（第４・86図、図版14）

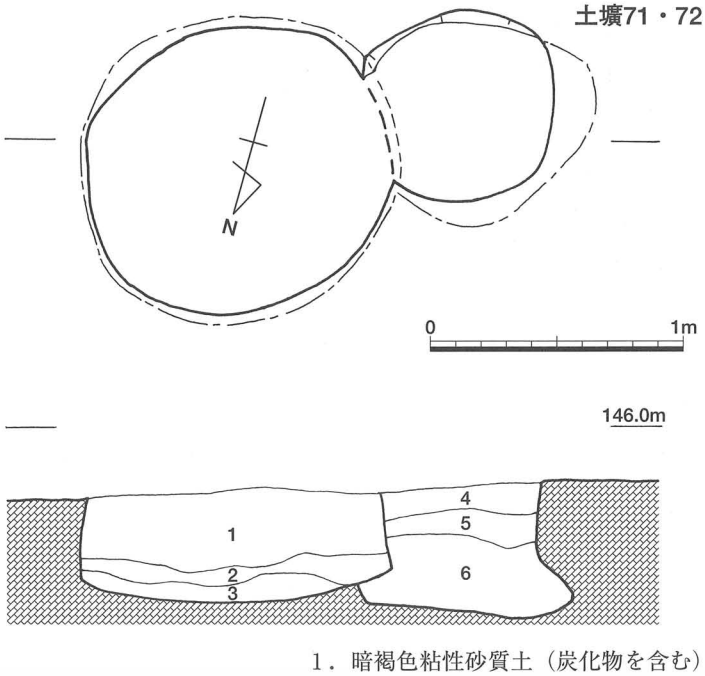
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面の南端に所在し、竪穴住居11内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居11を建てたことが考えられる。東半分は後世の道路によって削平されている。



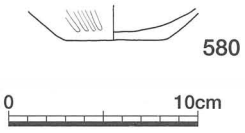
1．灰褐色粘性砂質土
　（炭化物・地山ブロックを含む）
2．暗褐色砂質土（炭化物を含む）
3．赤褐色粘性砂質土



1．赤褐色粘性砂質土
2．暗褐色粘性砂質土



1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．暗褐色粘質土（炭化物を含む）
3．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
4．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
5．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
6．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）



第87図　土壙69・70・71・72（1／30）・出土遺物（1／4）

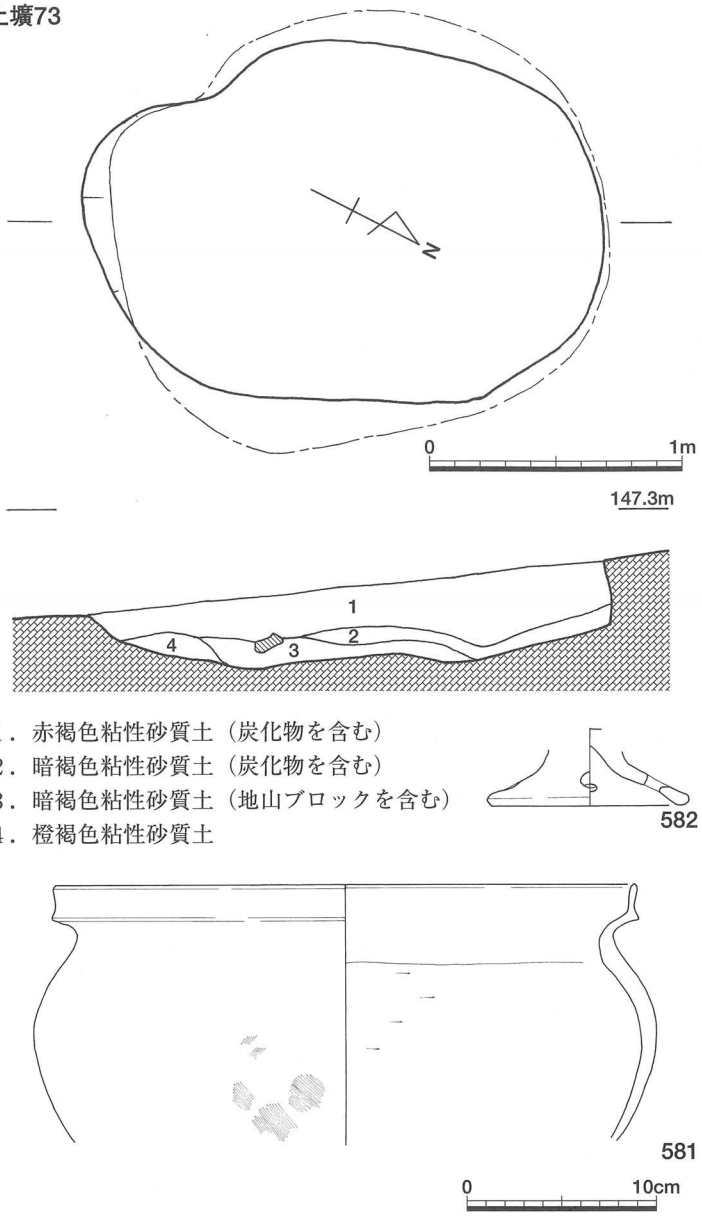
平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.6m、最大底径1.45m、中央での深さ0.6ｍを測る。出土遺物には、砥石の**Ｓ７**がある。砥石のみの出土のため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙69（第４・87図、図版14）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面の南端に所在し、竪穴住居11内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居11を建てたことが考えられる。東半分は後世の道路によって削平されている。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.45m、最大底径1.5m、中央での深さ0.3ｍを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙70（第４・87図、図版14）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面の南端に所在し、竪穴住居11内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居11を建てたことが考えられる。上部は竪穴住居によって削平されている。平面形は、楕円形を、断面はレンズ状を呈している。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径1.0m、最大底径0.95m、中央での深さ0.1ｍを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。



第88図　土壙73（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙71・72（第４・87図、図版14）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面の南端に所在し、竪穴住居11内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居11を建てたことが考えられる。土壙71と土壙72は重複しており、土壙72が土壙71を切るようにつくられている。平面形は、ともに楕円形を、断面は土壙71が袋状、土壙72は台形を呈している。土壙71は小型の部類にはいり、最大径0.75m、最大底径0.85m、中央での深さ0.5mを測る。土壙72は中型の部類にはいり、最大径1.2m、最大底径1.25m、中央での深さ0.35mを測る。出土遺物は弥生土器の甕の底部と考えられる**580**がある。出土遺物が甕の底部１点のみのため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙73（第４・88図、図版14）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面の南端に所在し、竪穴住居11内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居11を建てたことが考えられる。上部は竪穴住居によって削平されている。平面形は、楕円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径2.05m、最大底径1.95m、中央での深さ0.25mを測る。出土遺物には弥生土器の**581・582**がある。**581**は鉢で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**582**は高杯の脚部で、短脚でスカシ孔が4個認められる。これらの遺物から土壙73は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

土壙74（第４・89図、図版14）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面の南端に所在し、竪穴住居11内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居11を建てたことが考えられる。南半分は竪穴住居によって削平されており、平面形は確認できないが楕円形が想定される。断面は台形が想定される。底の中央が１段深くなっている。大型の部類にはいり、最大径1.9m、最大底径1.8m、中央での深さ0.6mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙75（第４・89図、図版14）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面の南端に所在し、竪穴住居11内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居11を建てたことが考えられる。上部は竪穴住居によって削平されている。平

面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.9m、最大底径2.0m、中央での深さ0.35mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙76（第４・90図、図版14）

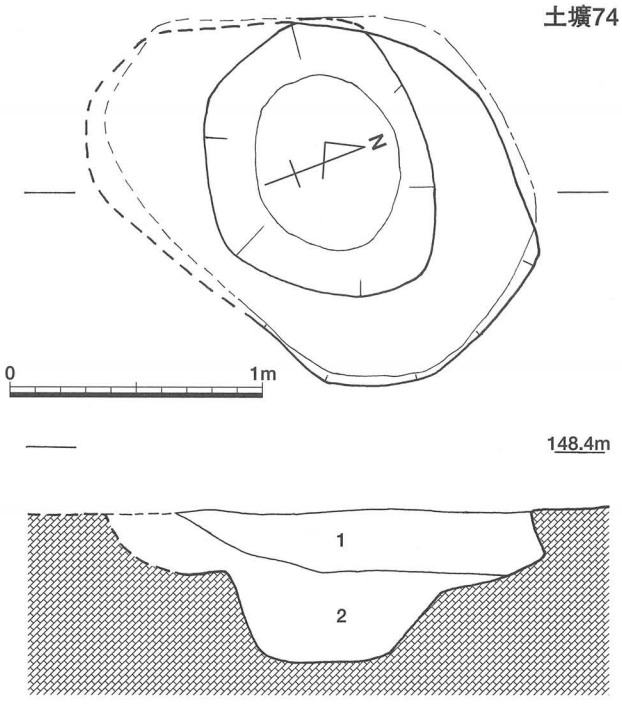
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面の南端に所在し、竪穴住居11内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居11を建てたことが考えられる。平面形は、楕円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.7m、最大底径1.7m、中央での深さ0.8mを測る。出土遺物には弥生土器の**583～585**、鉄器の**M37**がある。**583**は壷の口縁から頸部にかけての破片で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**584・585**は鉢の口縁から頸部の破片で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**M37**は鏃身で柄の部分が欠けている。これらの遺物から土壙76は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

土壙77（第４・90図、図版14）

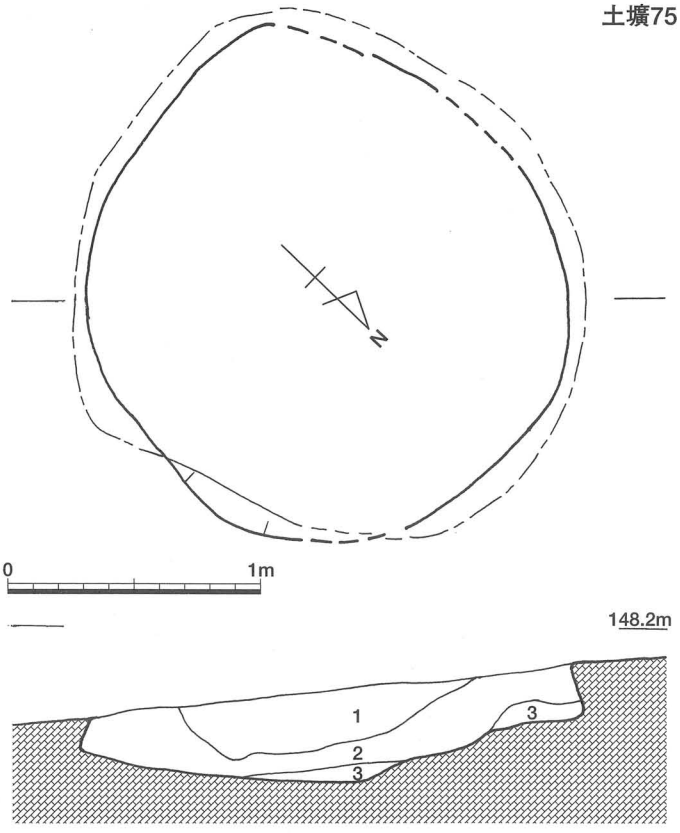
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面の南端に所在し、竪穴住居11内につくられている。埋土の検出状況から土壙を埋めたのち竪穴住居11を建てたことが考えられる。平面形は、楕円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.3m、最大底径1.05m、中央での深さ0.4mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙78（第４・90図）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.15m、最大底径1.2m、中央での深さ



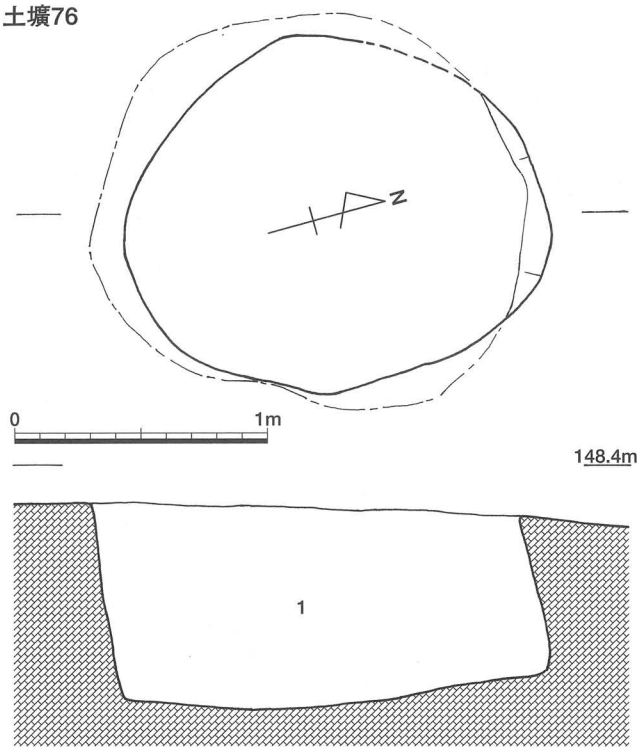
1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．黄褐色砂質土



1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．橙褐色粘性砂質土

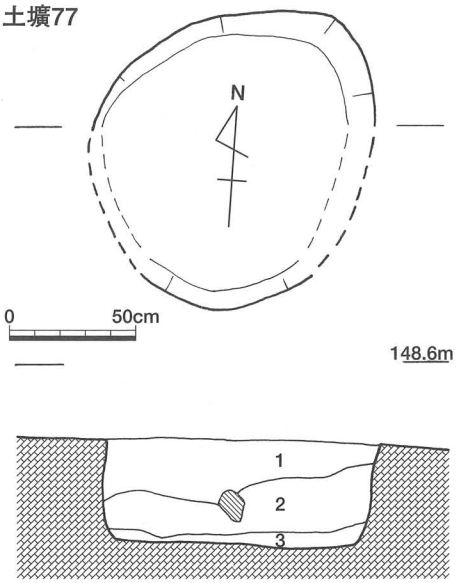
第89図　土壙74・75（1／30）

土壙76



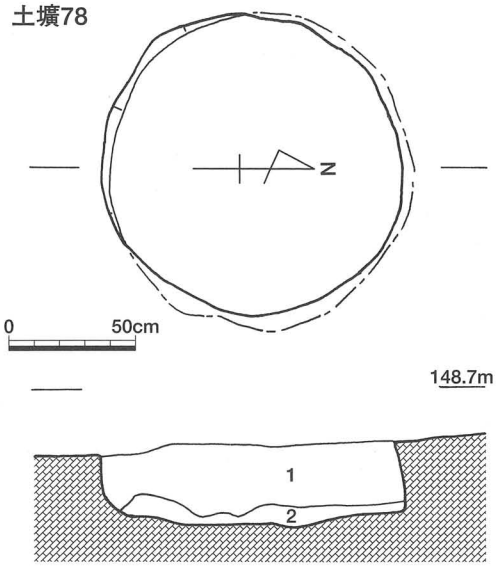
1．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

土壙77

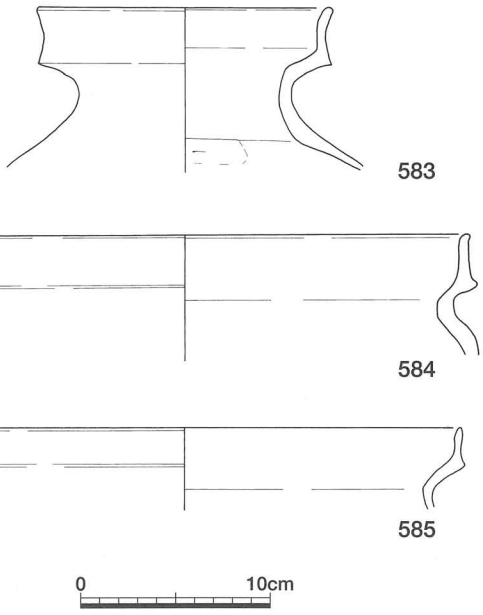


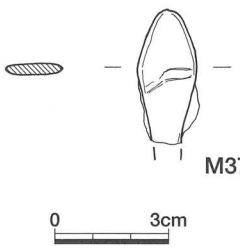
1．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色砂質土（炭化物を含む）
3．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

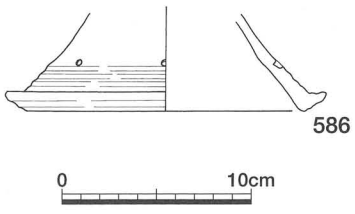
土壙78



1．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．暗褐色粘性砂質土





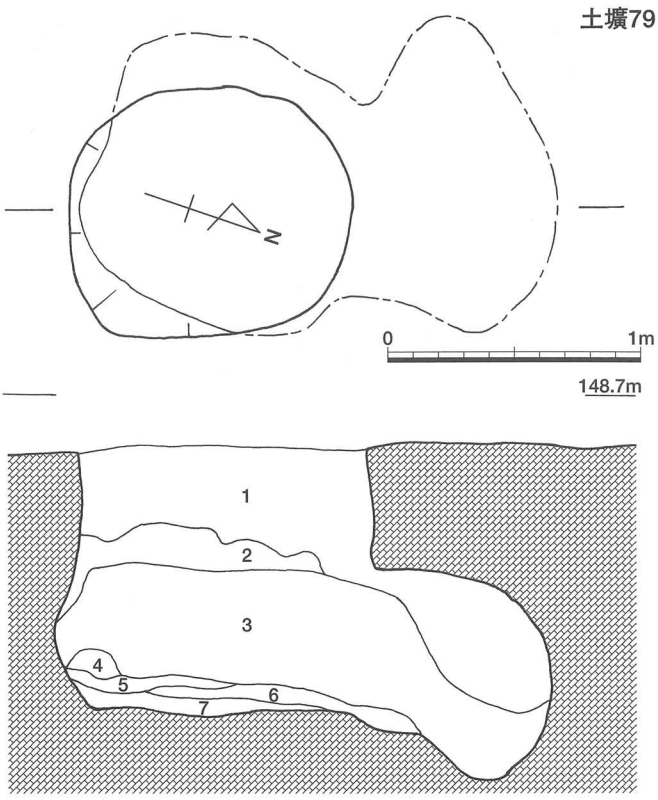


第90図　土壙76・77・78（1／30）・出土遺物（1／2・1／4）

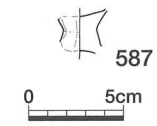
0.3mを測る。出土遺物には、弥生土器**586**がある。**586**は器台の脚部で、端部を斜め上方向に三角形になるように引き上げている。スカシ孔が認められるが貫通していない。この遺物から土壙78は弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。

土壙79（第4・91図）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に所在する。平面形は、円形を、断面は袋状を呈しており、北側は横穴状に掘られている。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.1m、最大底径1.95m、中央での深さ1.05mを測る。出土遺物には、弥生土器**587**がある。**587**はミニチュアの高杯の脚部である。ミニチュア土器のみの出土のため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。



1．赤褐色粘性砂質土
2．橙褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
4．橙褐色粘性砂質土
5．赤橙褐色砂質土
6．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
7．赤褐色砂質土



第91図　土壙79（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙80・81（第4・92図）

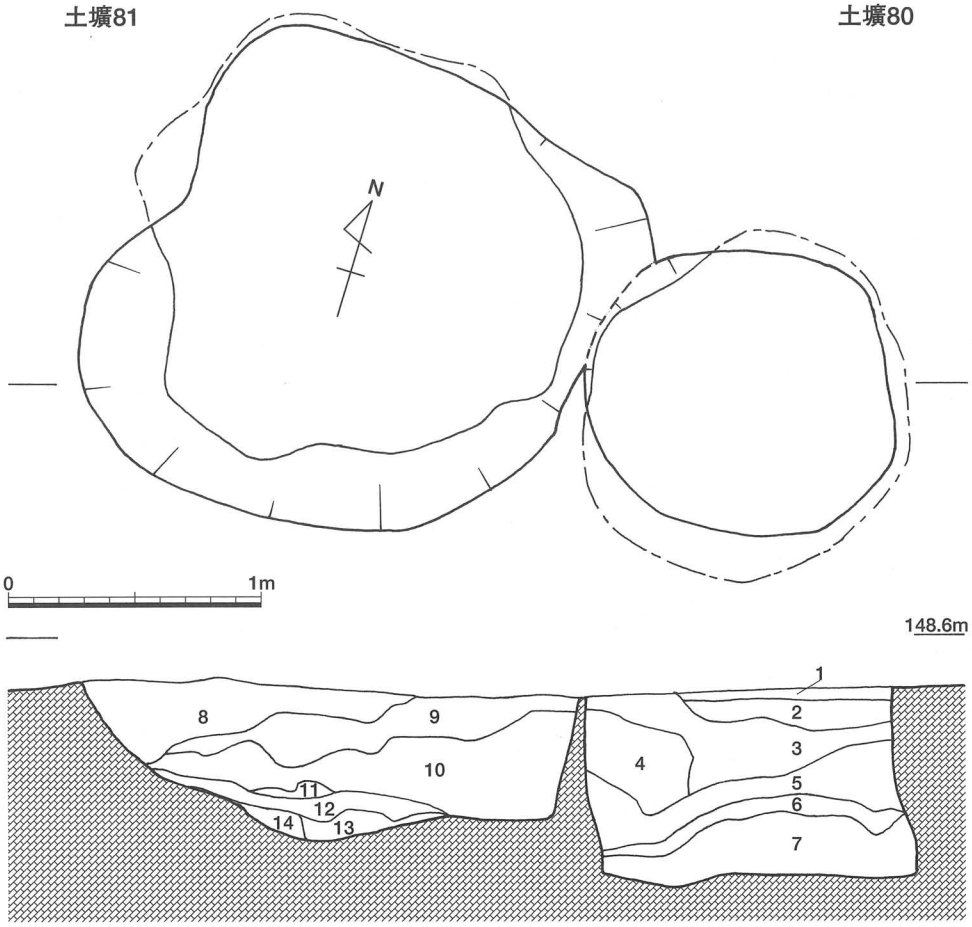
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に所在する。平面形は、ともに円形で、断面は土壙71が台形、土壙72は方形を呈している。土壙80は中型の部類にはいり、最大径1.2m、最大底径1.4m、中央での深さ0.75mを測る。土壙81は大型の部類にはいり、最大径2.3m、最大底径1.8m、中央での深さ0.6mを測る。出土遺物には、弥生土器の**588**～**597**がある。**588**・**589**は壷の口縁から胴部の破片で、いずれも口縁端部を内傾させながら立ち上げている。**590**～**593**は甕の口縁から頸部の破片で、いずれも口縁端部をほぼ垂直に立ち上げている。**594**は甕の底部と考えられる。**595**は小型の鉢ので、口縁端部を垂直に引き上げ、胴部に斜線文が施されている。**596**・**597**は高杯で、杯部を反るように屈曲させている。**597**はスカシ孔が4個認められる。これらの遺物から土壙80・81は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

土壙82（第4・93図）

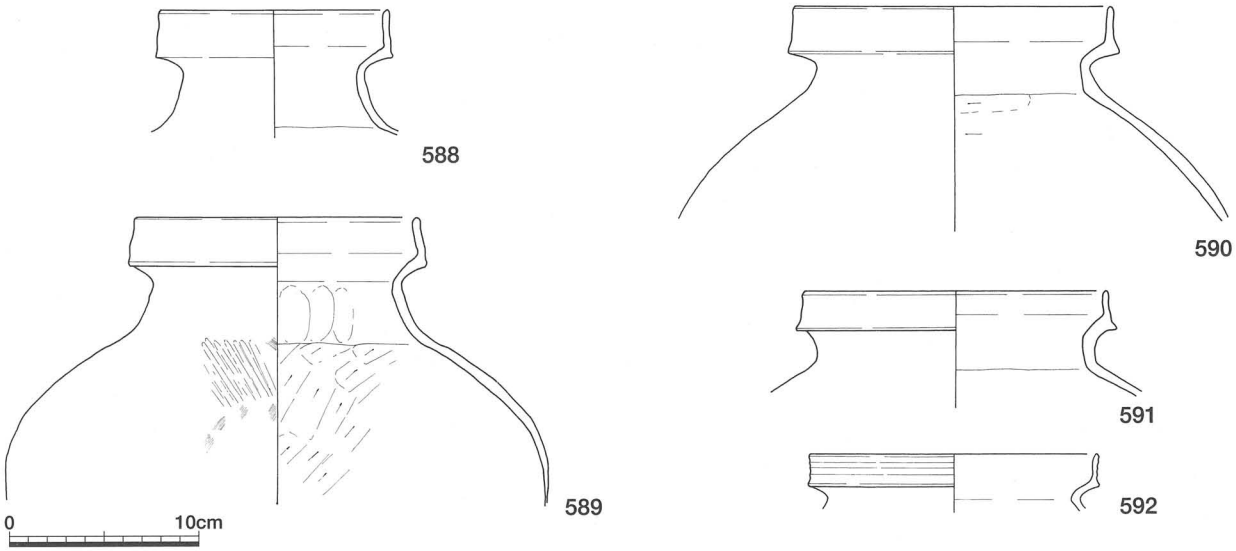
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径0.8m、最大底径0.6m、中央での深さ0.65mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙83（第4・93図）

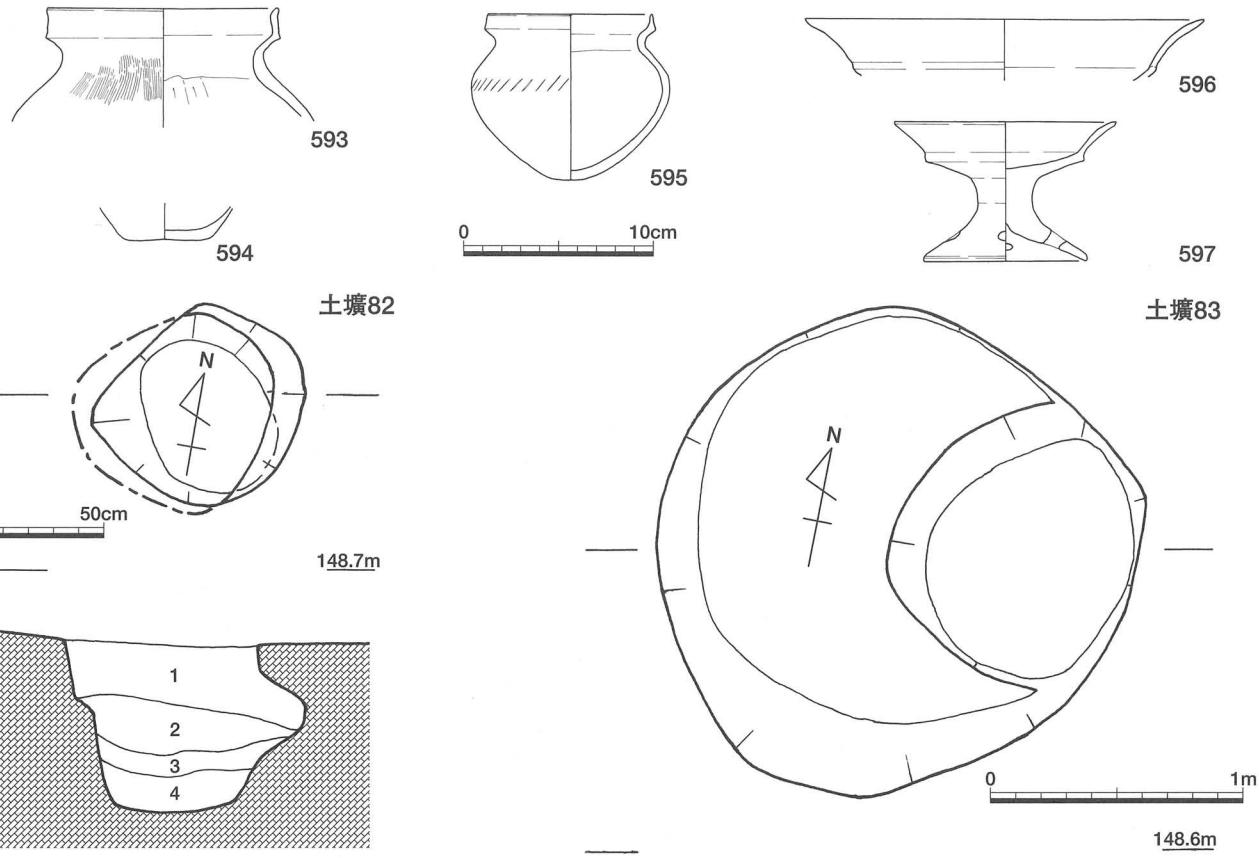
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。南側にテラス状の平坦面がある。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.9m、最大底径0.95m、中央での深さ0.55mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。



1．灰褐色砂質土
2．赤褐色粘性砂質土
3．赤褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
4．橙褐色砂質土
5．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
6．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
7．赤褐色粘性砂質土
8．赤褐色粘性砂質土
9．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
10．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
11．橙褐色砂質土
12．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
13．赤褐色粘性砂質土
14．橙褐色砂質土



第92図　土壙80・81（1／30）・出土遺物①（1／4）



1．黄褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．赤橙褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
4．黄褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

1．赤褐色粘性砂質土
（炭化物を含む）
2．橙褐色粘性砂質土
（地山ブロックを含む）
3．暗褐色粘性砂質土
（炭化物を多く含む）
4．暗褐色砂質土
5．暗褐色粘性砂質土
6．橙褐色粘性砂質土
7．橙褐色砂質土

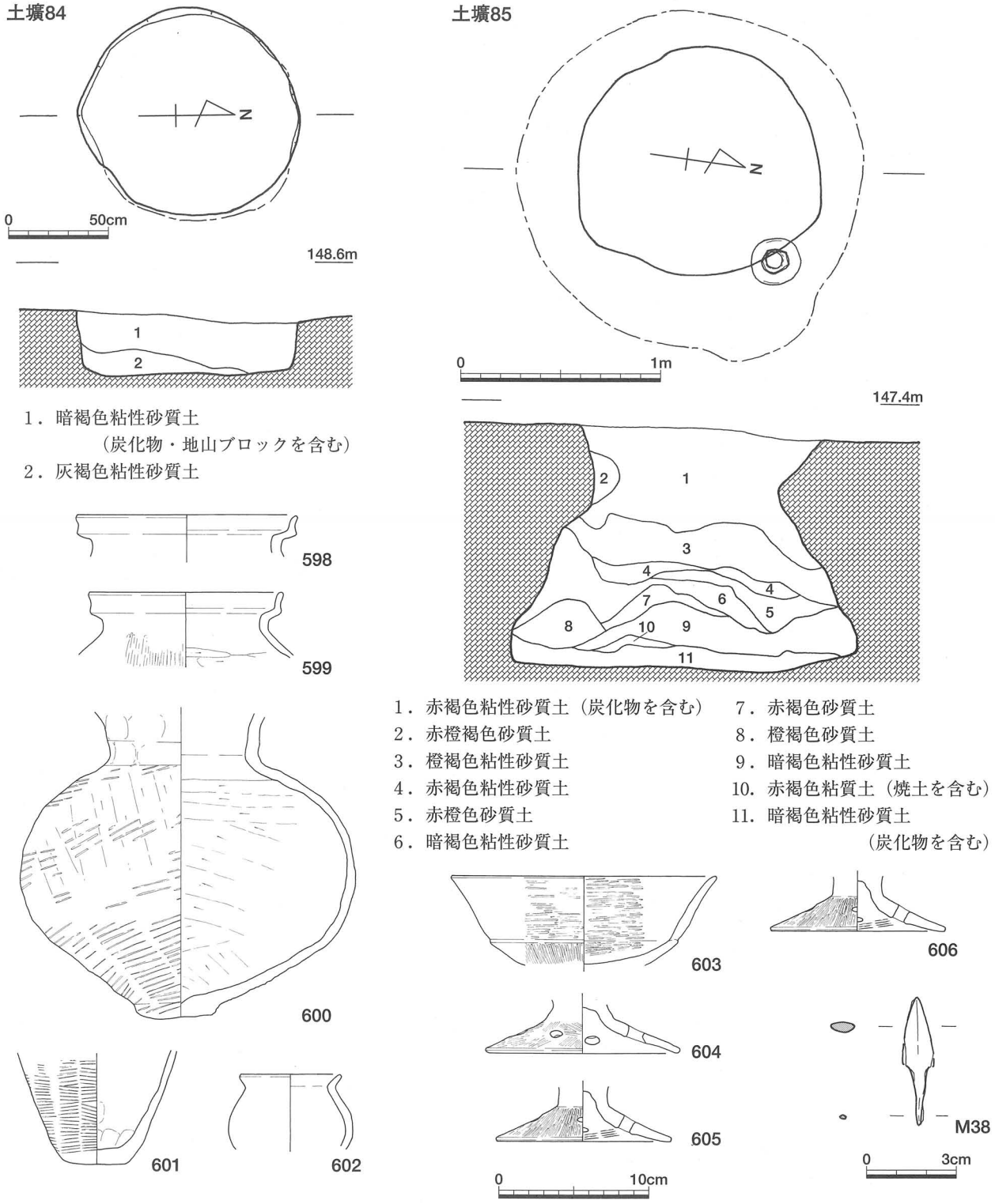
第93図　土壙80・81出土遺物②（1／4）
・土壙82・83（1／30）

土壙84（第4・94図）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.1m、最大底径1.05m、中央での深さ0.25mを測る。出土遺物には、弥生土器の**598・599**がある。**598・599**は甕の口縁から頸部の破片で、いずれも口縁端部をやや反らせながら立ち上げている。これらの遺物から土壙84は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

土壙85（第4・94図、図版13）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に所在する。平面形は、円形を、断面は袋状を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.2m、最大底径1.75m、中央での深さ1.2mを測る。出土遺物には、弥生土器の**600～606**、青銅器の**M38**がある。**600**は壷で、外面のほぼ全面に平行なタタキ目が残り、底部が突出している。**601・602**は甕で、**601**は**600**と同様に平行タタキ目が残っている。**602**は小型の甕で、口縁をく字状に屈曲させている。**603～606**は高杯で、**603**は杯部をややそらせながら屈曲させている。脚部はいずれも短脚で、スカシ孔が認められる。**M38**は鏃である。これらの遺物から土壙85は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。



第94図　土壙84・85（1／30）・出土遺物（1／2・1／4）

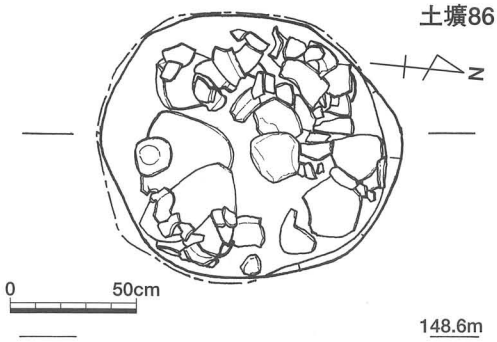
土壙86（第４・95図、図版13）

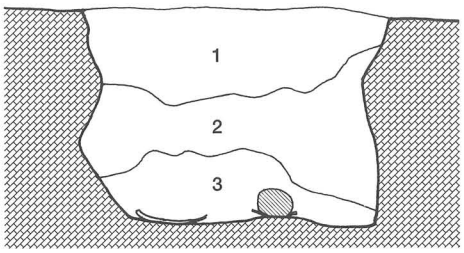
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.2m、最大底径1.1m、中央での深さ0.85mを測る。底を中心に大量の土器が出土し、その土器の内外より炭化米が出土している。出土遺物には、弥生土器の**607～620**、鉄器の**M39**がある。**607～612**は大型の壷で、いずれも口縁端部をやや反るように立ち上げている。**613～**

618は甕で、613～615は口縁端部をやや内傾させて立ち上げている。616～618は口縁をく字状に屈曲させている。619は甕または壷の底部である。620は高杯の杯部で内傾させながら屈曲させている。M39は鎌である。端部をＵ字に折り返しているため摘鎌の可能性がある。これらの遺物から土壙86は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

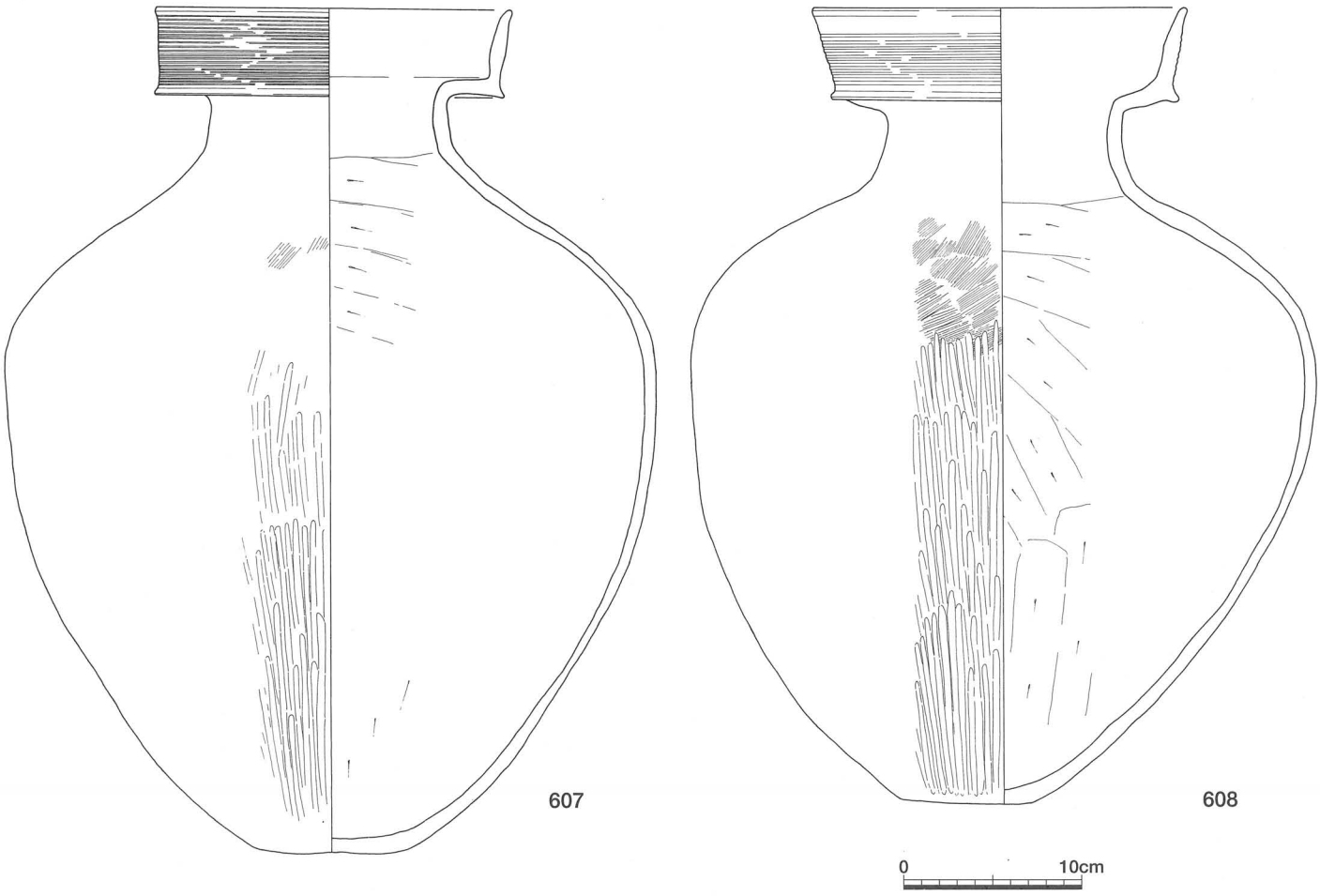
土壙87（第４・97図、図版14）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。南側から西側にテラス状の平坦面がある。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.7m、最大底径1.5m、中央での深さ0.7mを測る。出土遺物には、弥生土器の621～623がある。621は壷で、口縁端部を垂直立ち上げている。622・623は甕で、口縁端部をほぼ垂直に立ち上げている。623は高台をもつ。621は623の中に入れ子の状態で出土した。これらの遺物から土壙87は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

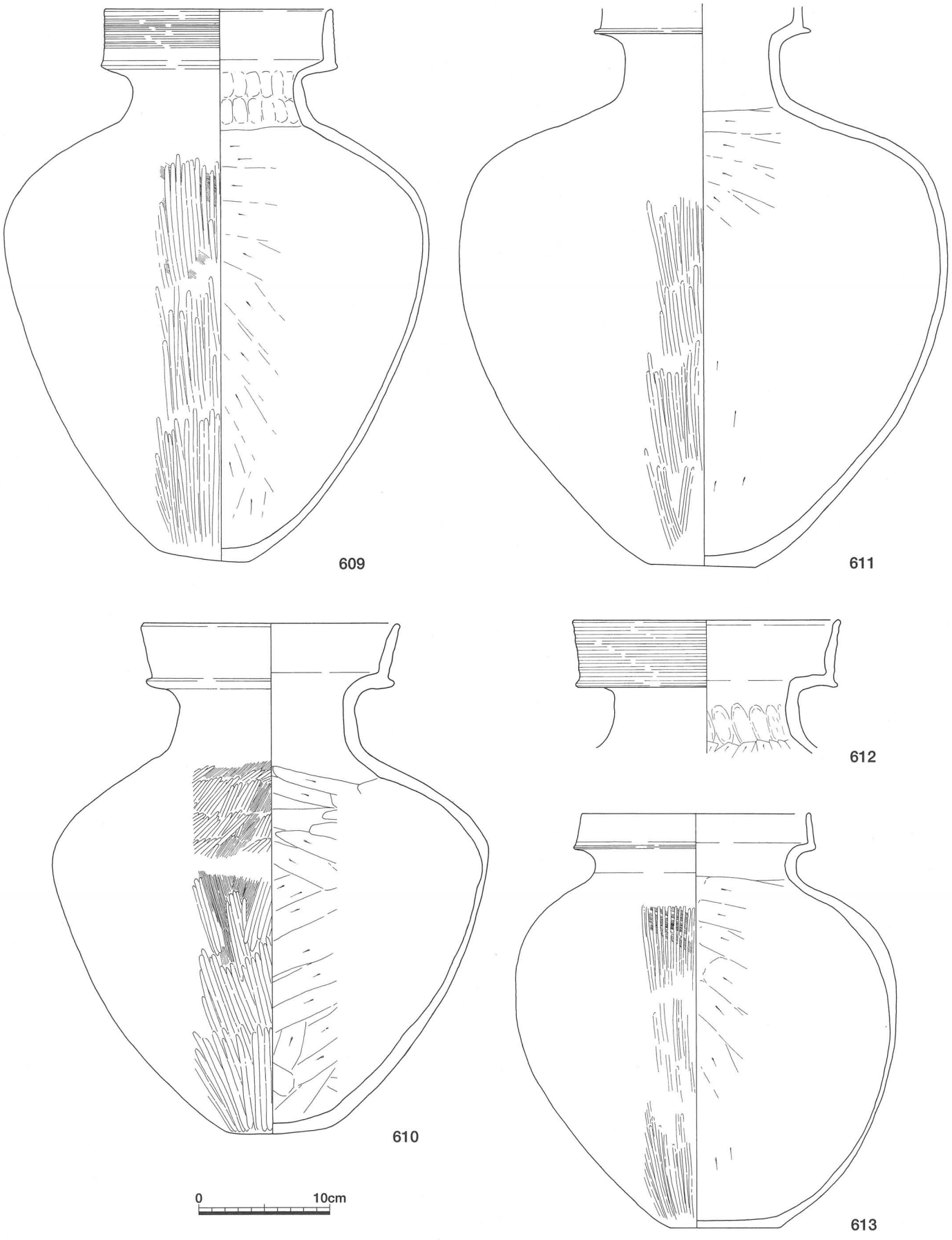




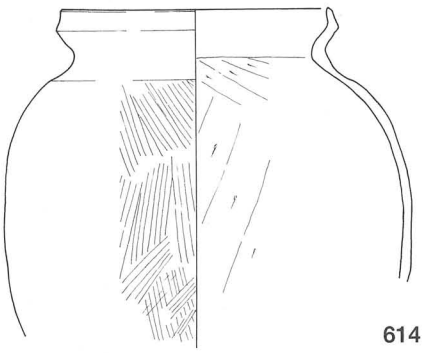
1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

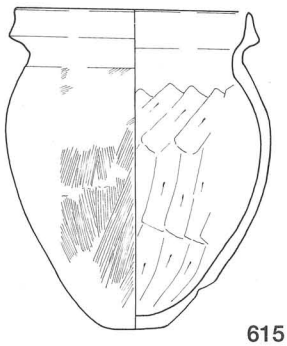


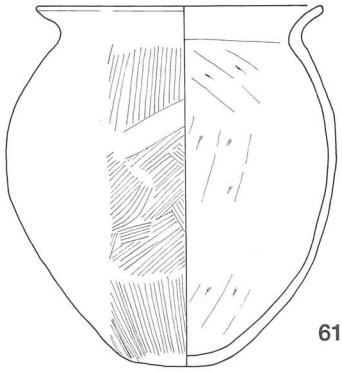
第95図　土壙86（1／30）・出土遺物①（1／4）

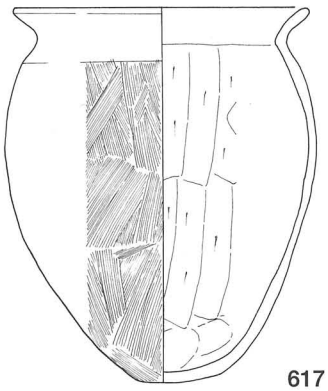


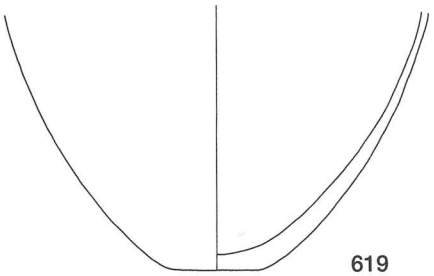
第96図　土壙86出土遺物②（１／４）

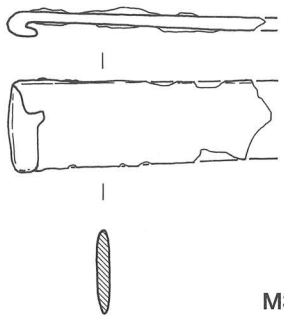

614


615

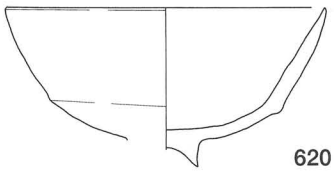

616

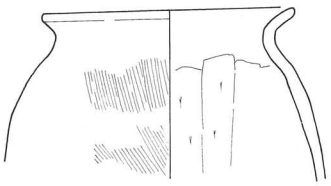

617


619


M39

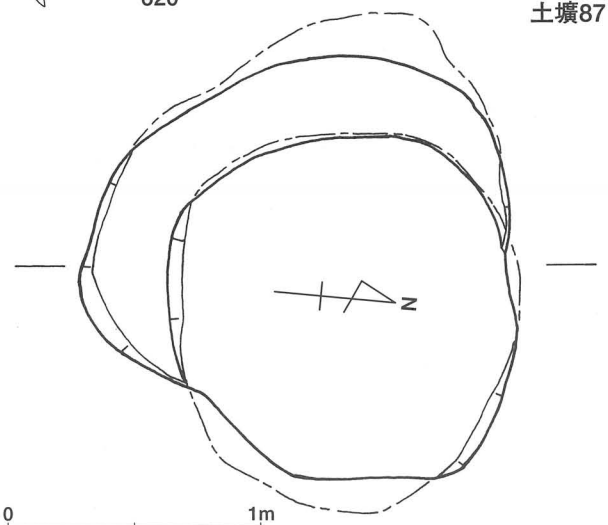
0　3cm


620


618

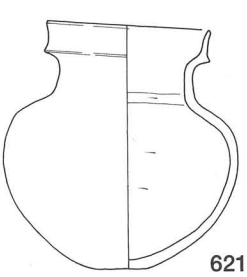
0　10cm

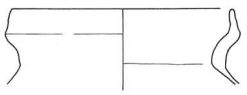
土壙87

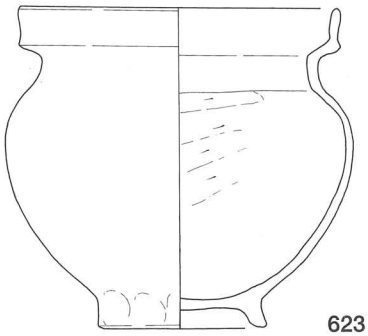


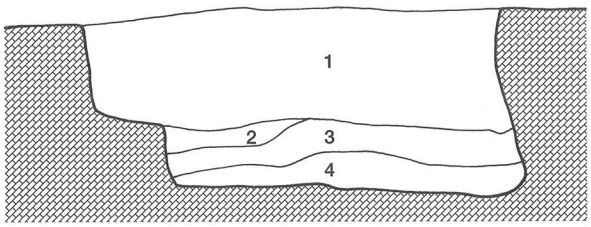
0　1m

148.7m


621


622

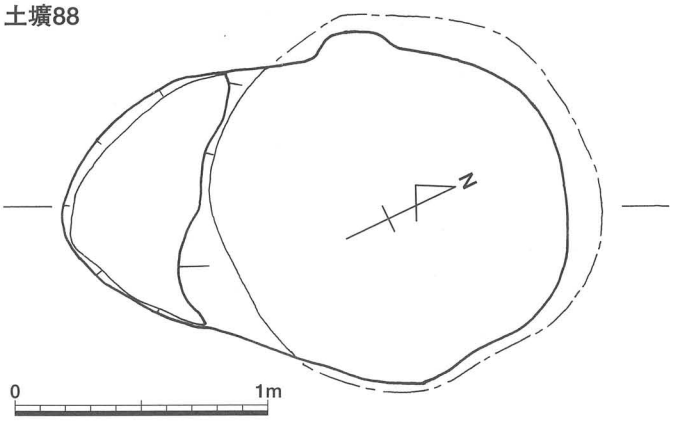

623

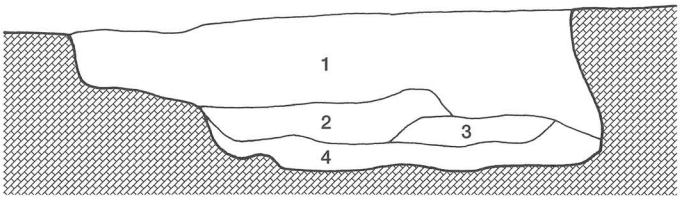


1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．暗褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）
3．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
4．黒褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

第97図　土壙86出土遺物③（1／2・1／4）・
土壙87（1／30）・出土遺物（1／4）

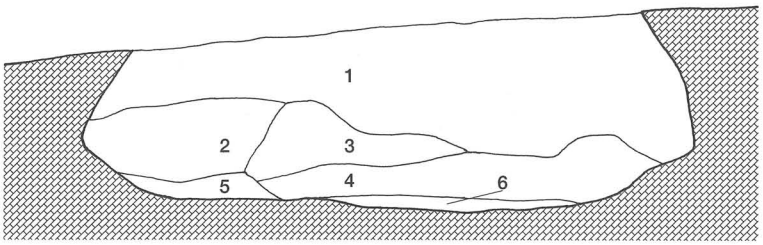
土壙88





1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．灰褐色粘性砂質土
4．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

土壙89



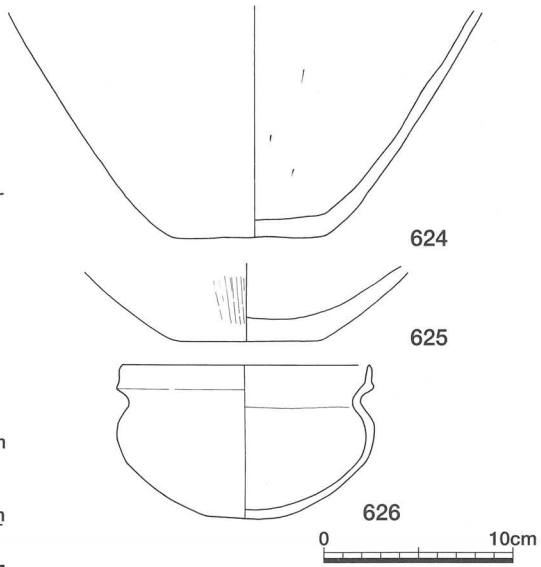
1．灰褐色粘性砂質土（炭化物・地山ブロックを含む）
2．灰褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）
3．暗褐色粘性砂質土（炭化物・地山ブロックを含む）
4．赤褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）
5．赤褐色粘性砂質土（地山ブロックを多く含む）
6．灰褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）

土壙88（第４・98図）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に所在する。平面形は、楕円形を、断面は袋状を呈している。南側にテラス状の平坦面がある。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径2.0m、最大底径1.55m、中央での深さ0.6mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙89（第４・98図）

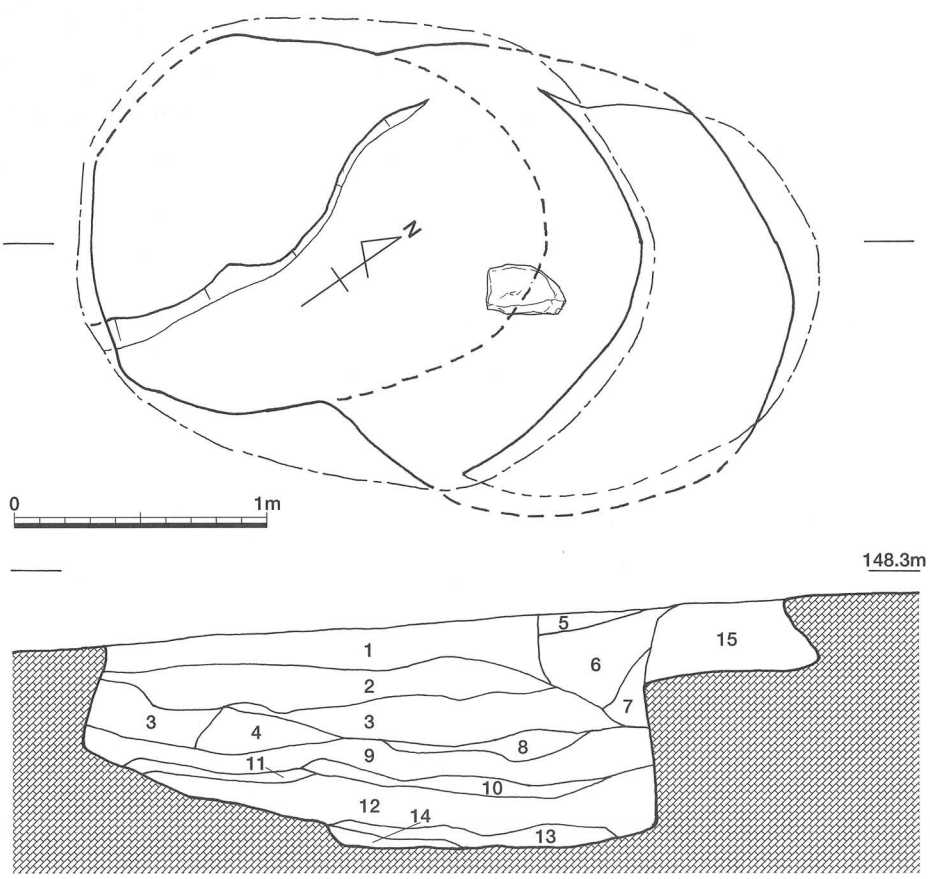
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に所在する。平面形は、楕円形を、断面は袋状を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径2.05m、最大底径2.45m、中央での深さ0.7mを測る。出土遺物には、弥生土器の**624～626**がある。**624・625**は大型の甕または鉢の底部の破片である。**626**は鉢で、口縁端部を垂直に立ち上げている。これらの遺物から土壙89は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。



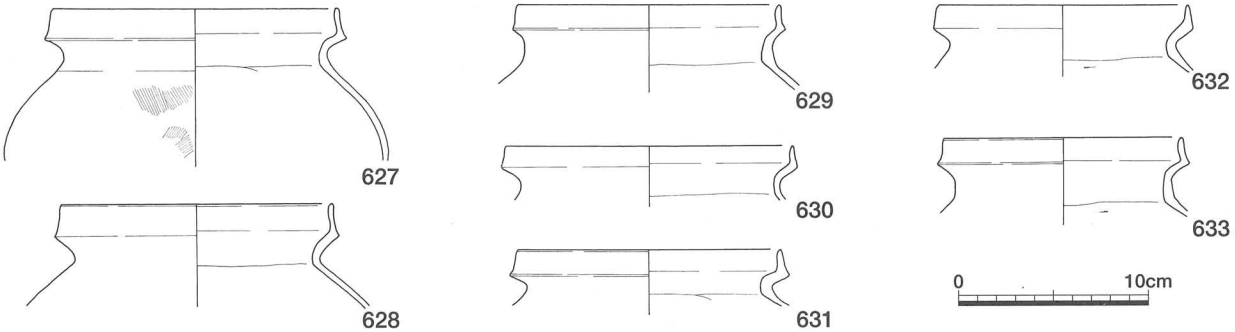
第98図　土壙88・89（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙90・92（第4・99図）

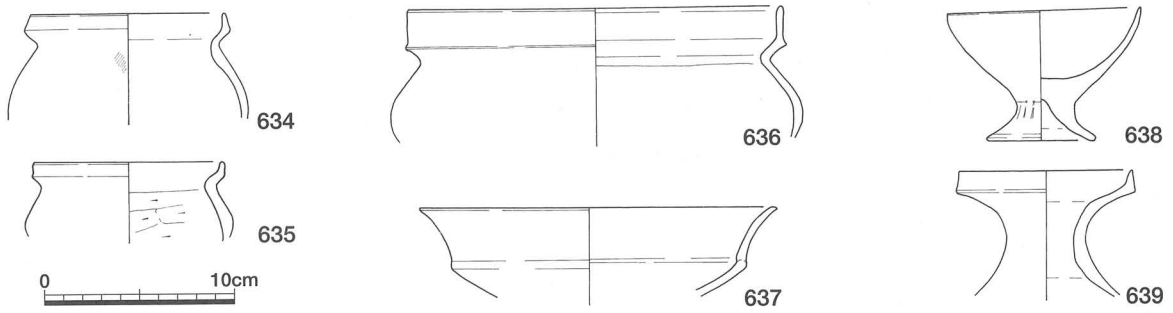
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面の南端に所在する。土壙90と土壙92は重複しており、土壙90が土壙92を切るようにつくられている。ともに、平面形は楕円形、断面は台形を呈している。ともに大型の部類にはいり、土壙90は最大径1.8m、最大底径1.6m、中央での深さ0.3mを測る。土壙92は、最大径2.15m、最大底径2.25m、中央での深さ0.9mを測る。出土遺物には、弥生土器の**627～639**がある。**627～635**はいずれも甕で、口縁端部をやや内傾させながら立ち上げている。**636**は鉢で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**637**は高杯で、杯部を反るように屈曲させている。**638**は脚付椀で、**639**は小型の器台と考えられる。これらの遺物から土壙90・92は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

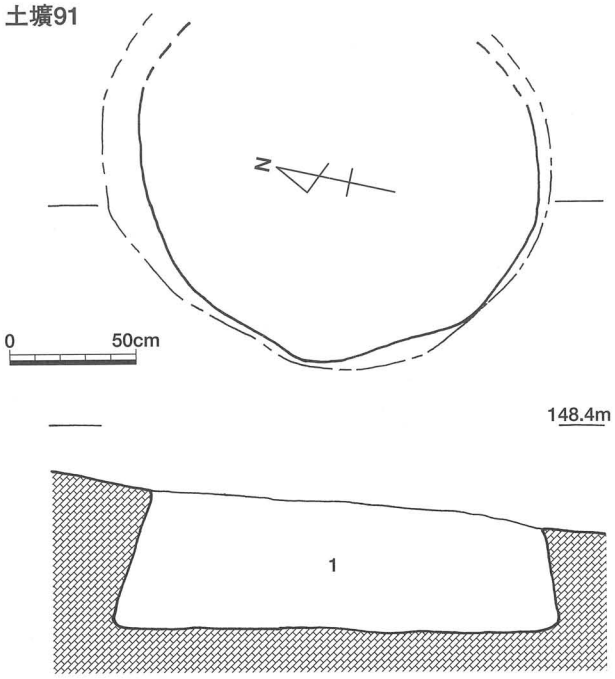


1．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
4．橙褐色粘性砂質土
5．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
6．橙褐色砂質土
7．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
8．赤褐色粘性砂質土
9．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
10．赤褐色粘質土（炭化物を含む）
11．青灰色砂質土
12．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
13．橙褐色粘性砂質土
14．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
15．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

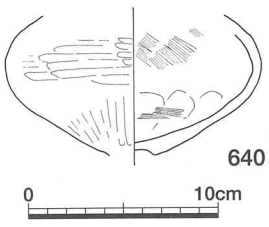


第99図　土壙90・92（1／30）・出土遺物①（1／4）





1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）



第100図　土壙90・92出土遺物②（1／4）
・土壙91（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙91（第４・100図）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に南端に所在する。東半分は土壙92によって削平されている。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.55m、最大底径1.8m、中央での深さ0.5mを測る。出土遺物には、弥生土器の**640**がある。**640**は脚付きの直口壷と考えられる。これらの遺物から土壙91は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

土壙93（第４・101図）

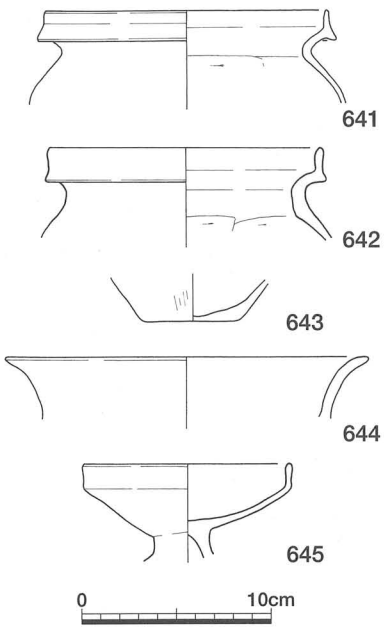
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に南端に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.95m、最大底径1.95m、中央での深さ0.3mを測る。出土遺物には、弥生土器の**641～645**がある。**641・642**は甕で、口縁端部をやや内傾させながら立ち上げている。**643**は甕の底部と考えられる。**644・645**は高杯で、**644**は杯部を反るように仕上げている。**645**は杯部の端部を上方向に垂直に屈曲させている。これらの遺物から土壙93は弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。

土壙94（第４・101図）

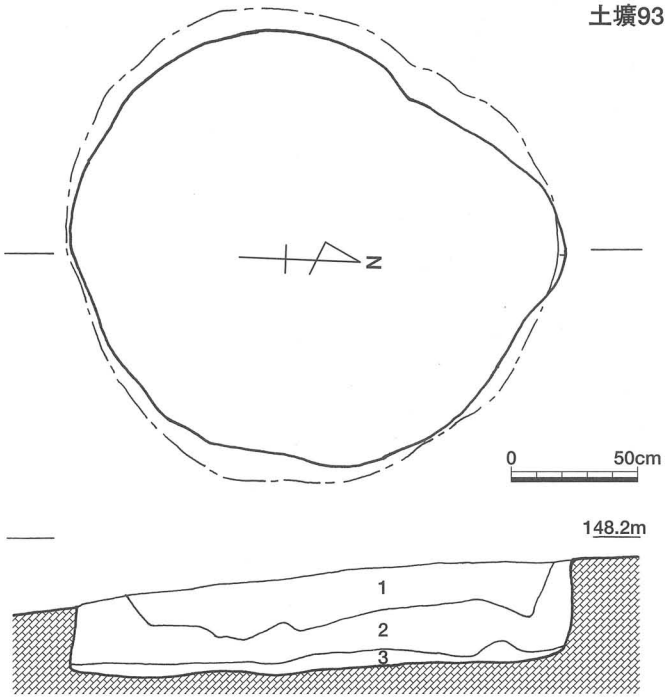
調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に南端に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.25m、最大底径1.25m、中央での深さ0.1mを測り、比較的浅い。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙95（第４・101図）

調査区の中央、南斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は袋状を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.7m、最大底径2.0m、中央での深さ0.55mを測る。出土遺物には、弥生土器の**646**、土製品の**C14**がある。**646**は直口壷の口縁で、半円状の縄目の痕跡を残す。**C14**は匙形土製品で全面に赤色顔料が施されている。これらの遺物から土壙95は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

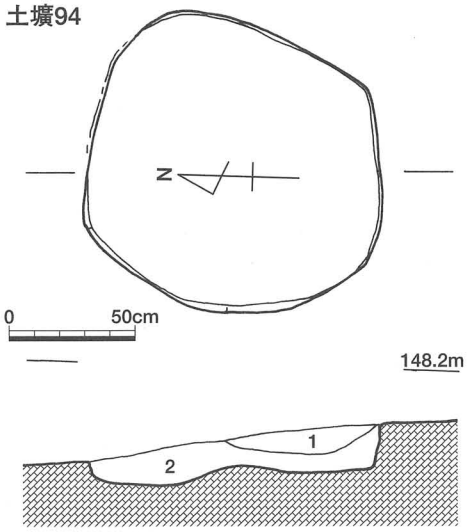


土壙93

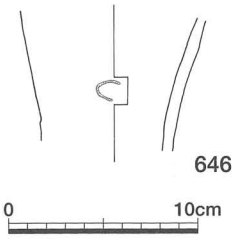


1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．暗褐色粘性砂質土（炭化物・地山ブロックを含む）
3．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

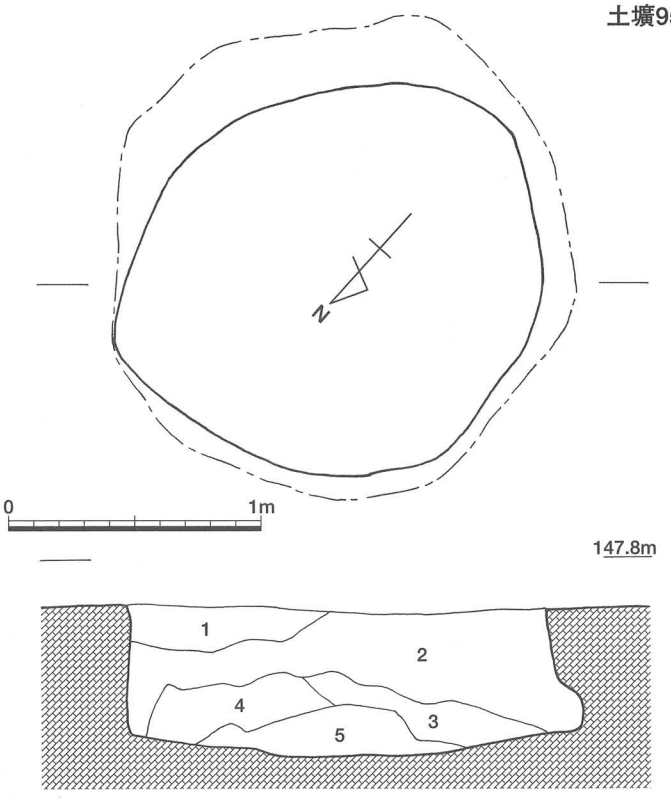
土壙94



1．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．赤褐色粘性砂質土
（地山ブロックを多く含む）
4．暗褐色粘性砂質土
（炭化物・地山ブロックを含む）
5．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

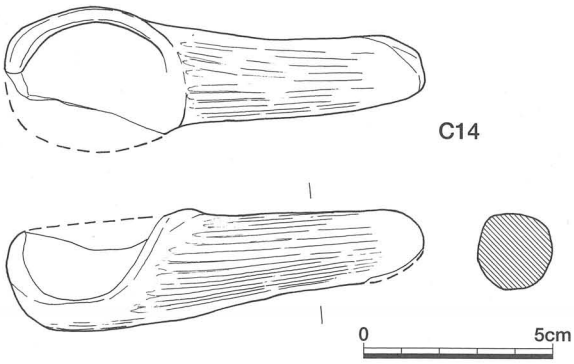


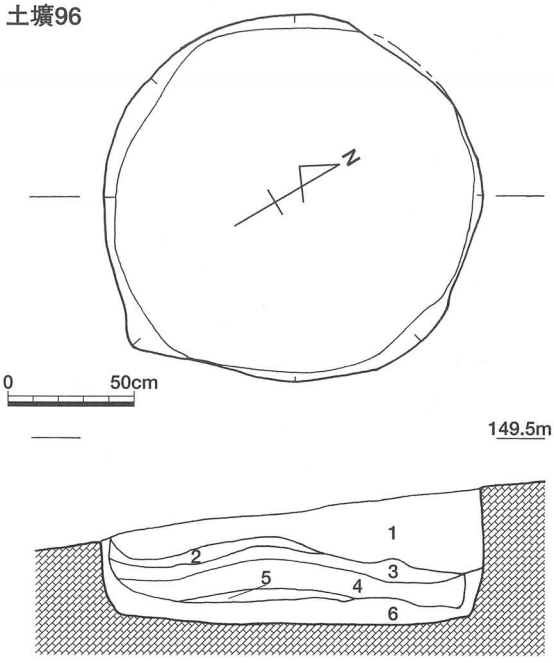
土壙95



1．橙褐色粘性砂質土
2．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）

第101図　土壙93・94・95（1／30）・出土遺物①（1／4）

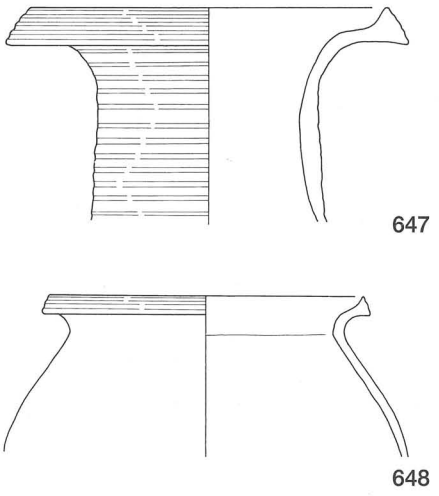


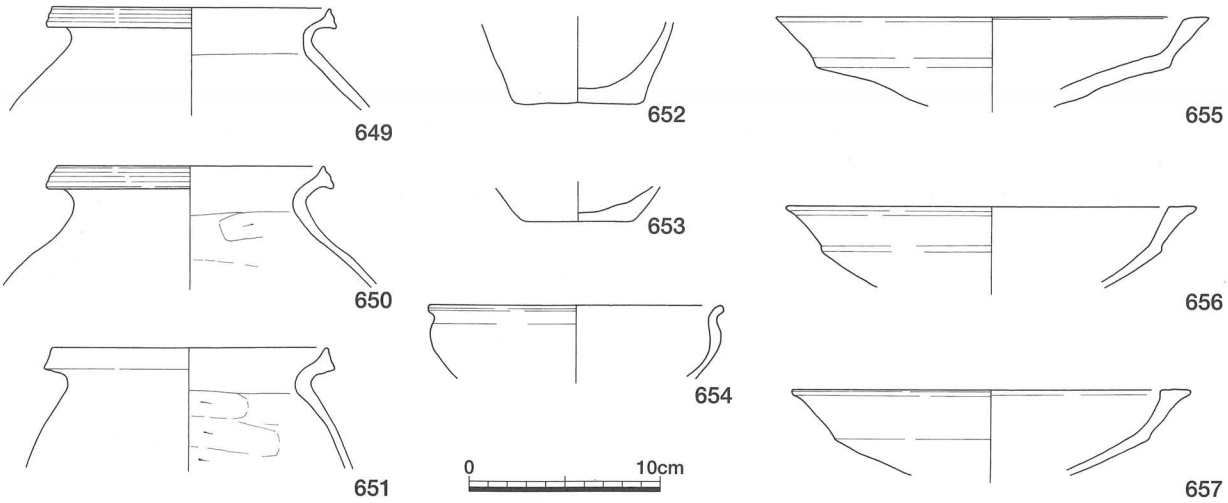


1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．黒褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．赤褐色粘性砂質土
4．暗褐色粘性砂質土
5．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
6．赤褐色粘性砂質土

土壙96（第４・102図、図版15）

調査区の中央、南斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.55m、最大底径1.5m、中央での深さ0.45mを測る。出土遺物には、弥生土器の**647～657**がある。**647**は壷で、口縁端部を三角形になるよう上下に拡張している。頸部外面に沈線を施している。**648～651**は甕の口縁から頸部にかけての破片で、いずれも口縁端部を三角形になるよう上下に拡張している。**652・653**は甕と考えられる底部の破片である。**654**は鉢で口縁端部をく字状に屈曲させている。**655～656**は高杯の杯部で、内傾するように屈曲させ、端部を平坦になるよう仕上げている。これらの遺物から土壙96は弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。

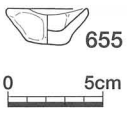




第102図　土壙95出土遺物②（1／2）・土壙96（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙97（第４・103図）

調査区の中央、丘陵頂上の平坦面に南端に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.5m、最大底径1.3m、中央での深さ0.05mを測り、非常に浅い土壙である。出土遺物には、弥生土器の**655**がある。**655**はミニチュアの手捏ねの椀である。出土遺物がこの１点のみのため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

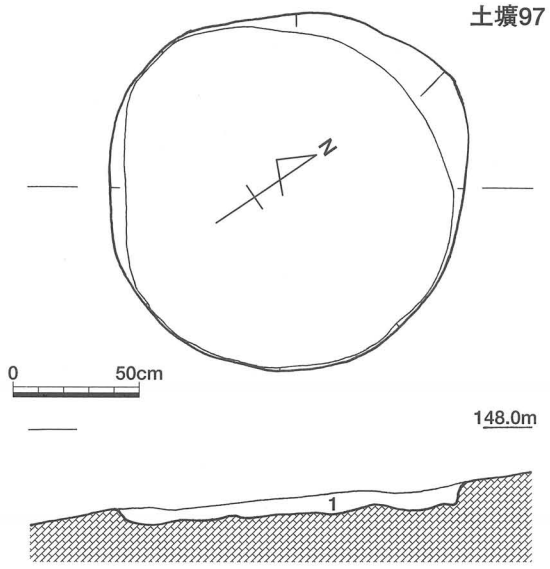


土壙98（第４・103図）

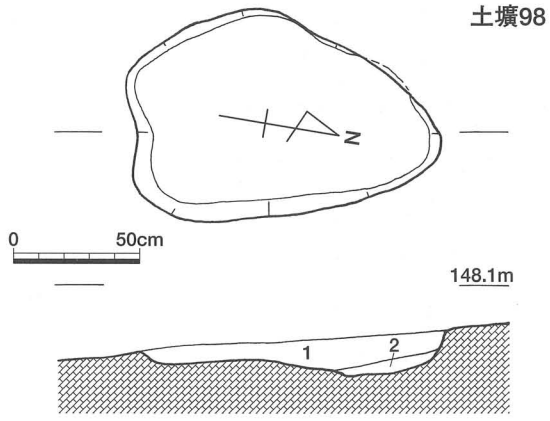
調査区の中央、南斜面に所在する。平面形は、楕円形を、断面はレンズ状を呈している。比較的浅く、斜面の谷側では平坦になっている。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.2m、最大底径1.1m、中央での深さ0.1mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙99（第４・103図）

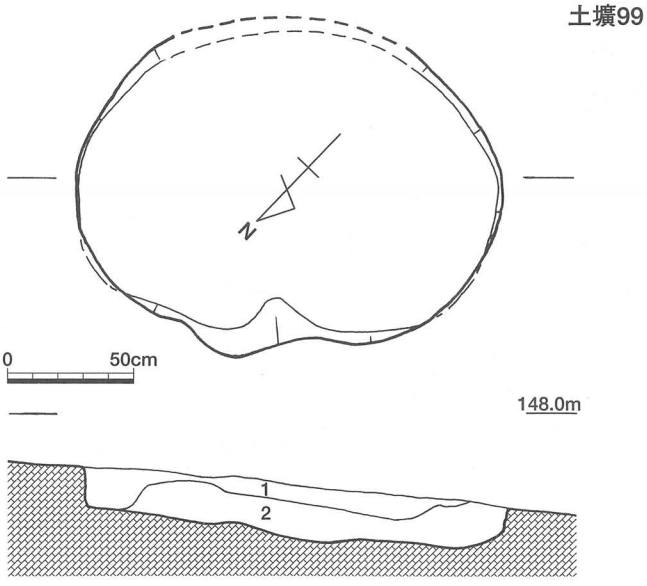
調査区の中央、南斜面に所在する。平面形は、楕円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.7m、最大底径1.65m、中央での深さ0.2mを測り、比較的浅い。出土遺物には、弥生土器の**656～660**、土製品の**C15**がある。**656**は壷で、口縁端部を垂直に立ち上げている。**657～659**は甕で、**657・658**は、口縁端部を垂直に立ち上げ、**659**は口縁をく字状に屈曲させている。**660**は甕の底部と考えられる。**C15**は匙形土製品で柄の部部が欠けている。これらの遺物から土壙99は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。



1．赤褐色粘性砂質土

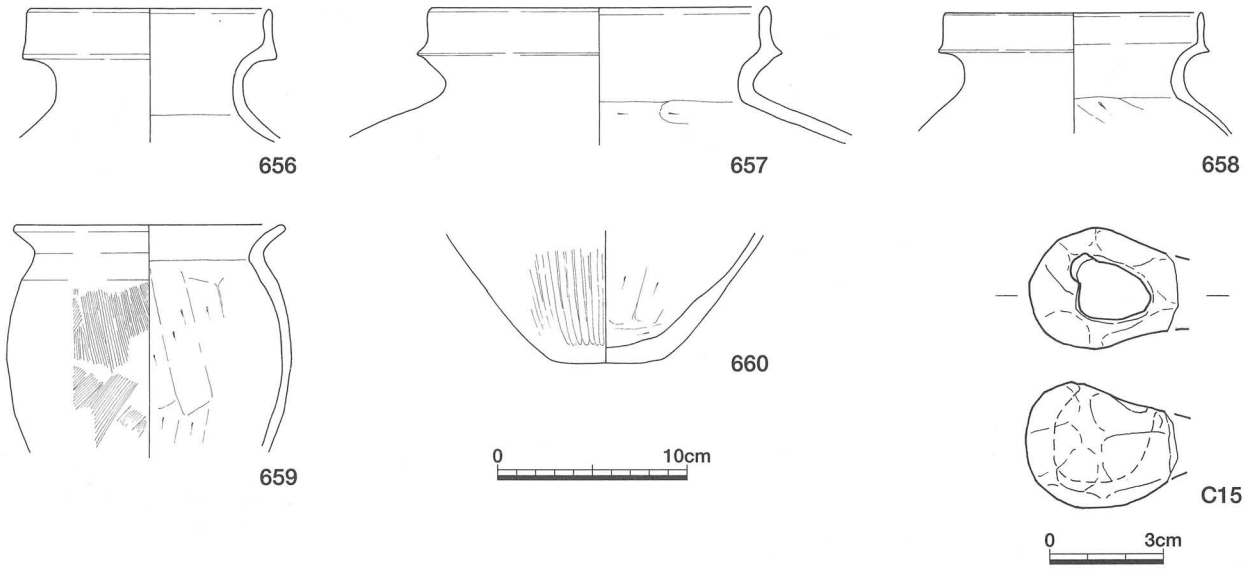


1．暗褐色粘性砂質土　　2．赤褐色粘性砂質土



1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）　　2．赤褐色粘性砂質土

第103図　土壙97・98・99（1／30）・出土遺物（1／4）

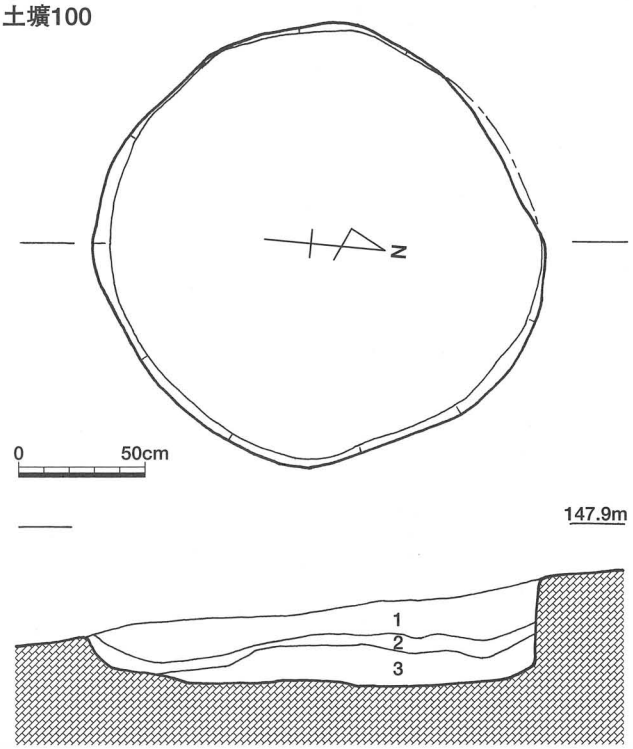


土壙100（第４・104図）

調査区の中央、南斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.8m、最大底径1.7m、中央での深さ0.3mを測る。出土遺物には、弥生土器の**661～667**、鉄器の**M40**、土製品の**C16**がある。**661～665**は甕で、口縁端部を三角形になるよう拡張している。**666**は甕の底部と考えられる。**667**は高杯の脚部で、端部を三角形になるよう上下に拡張している。**M40**は鑿状の工具と考えられる。**C16**は土玉で中央に穿孔の痕跡が残る。これらの遺物から土壙100は弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。

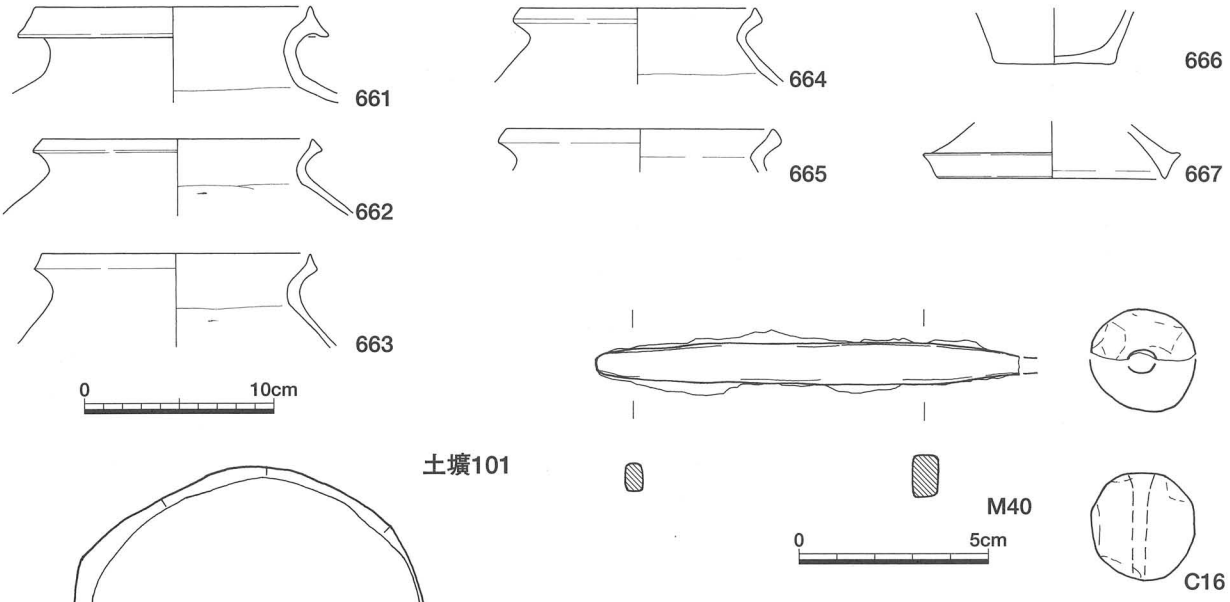
土壙101（第４・105図）

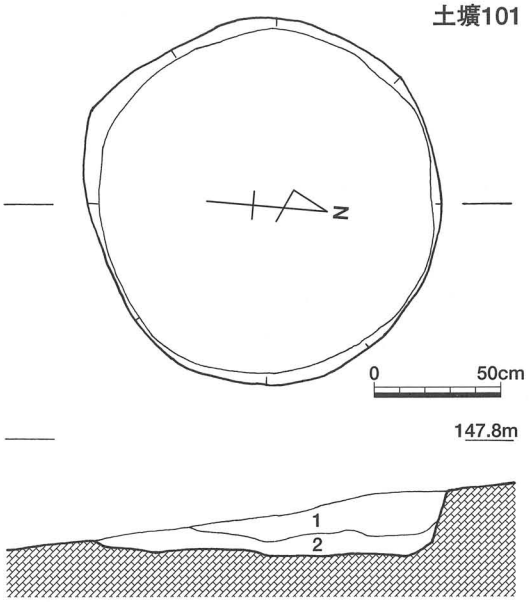
調査区の中央、南斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。比較的浅く、斜面の谷側では平坦になっている。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.4m、最大底径1.3m、中央での深さ0.15mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。



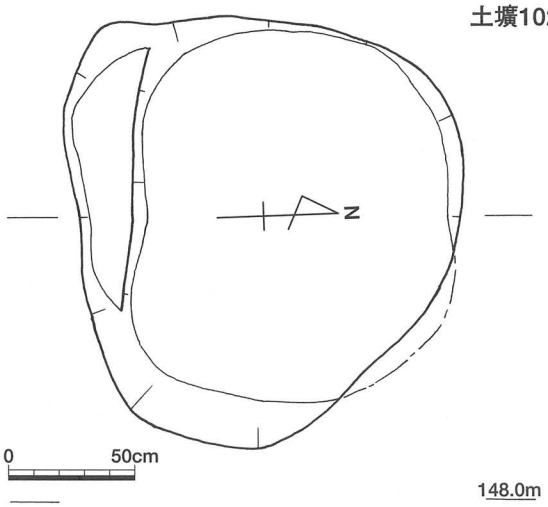
1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．暗褐色粘性砂質土（地山ブロックを多く含む）

第104図　土壙99出土遺物（1／2・1／4）
・土壙100（1／30）





1．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）



1．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．黄褐色粘性砂質土
3．暗褐色粘性砂質土
4．黄褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
5．黄褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）
6．赤褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）
7．黄褐色粘質土
8．赤褐色粘性砂質土

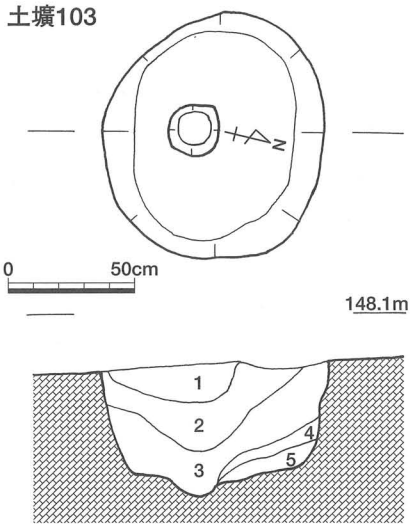
第105図　土壙100出土遺物（1／2・1／4）・土壙101・102（1／30）

土壙102（第４・105図）

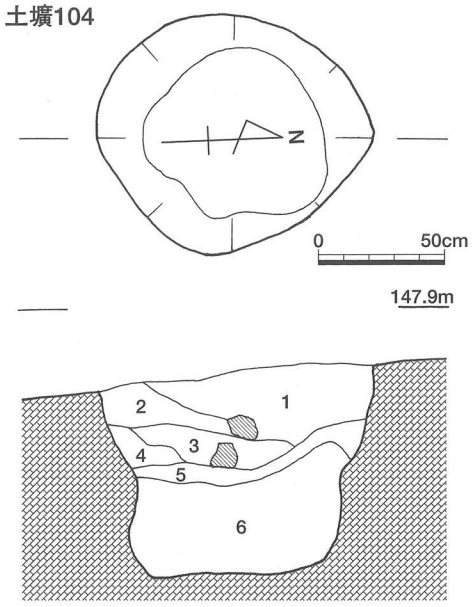
調査区の中央、南斜面に所在する。平面形は、楕円形を、断面は方形を呈している。南側にテラス状の平坦面がある。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.7m、最大底径1.45m、中央での深さ0.65mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙103（第４・106図、図版15）

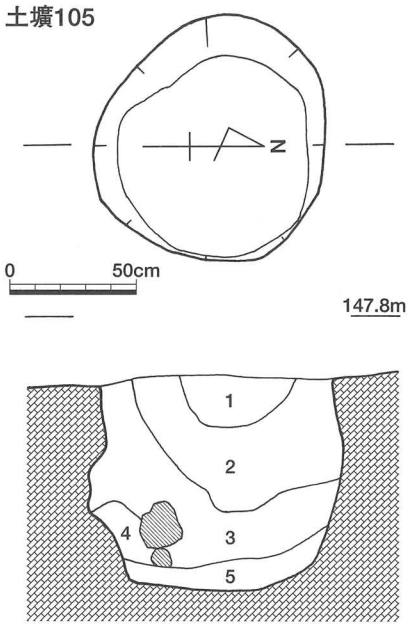
調査区の中央、南西斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。底の中央に柱穴状の遺構が認められた。土壙の中では、小型の部類で、最大径0.95m、最大底径0.8m、中央での深さ0.5mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。



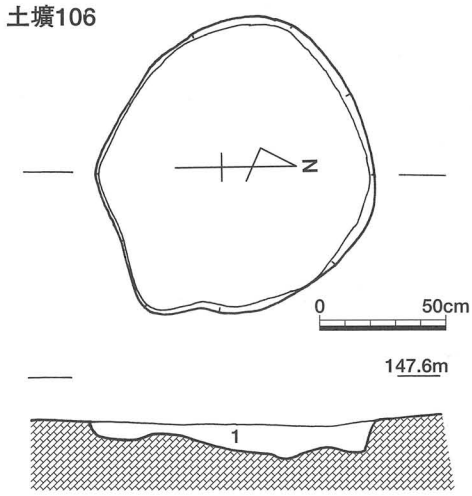
1．黄褐色粘性砂質土　4．赤褐色粘性砂質土
2．赤褐色粘性砂質土　5．黄褐色粘性砂質土
3．黄褐色粘性砂質土



1．赤褐色粘性砂質土
2．黄褐色粘性砂質土
3．赤褐色粘性砂質土と黄褐色粘性砂質土のまざり土
4．黄褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
5．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
6．灰褐色粘性砂質土



1．黄褐色粘性砂質土（炭化物を含む）　4．灰褐色粘性砂質土
2．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）　5．黄褐色粘性砂質土
3．赤褐色粘性砂質土



1．赤褐色粘性砂質土

第106図　土壙103～106（1／30）

土壙104（第４・106図）

調査区の中央、南西斜面に所在する。平面形は、円形を、断面はやや底が狭くなるが方形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.1m、最大底径0.7m、中央での深さ0.8mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙105（第４・106図）

調査区の西側、西斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、小型

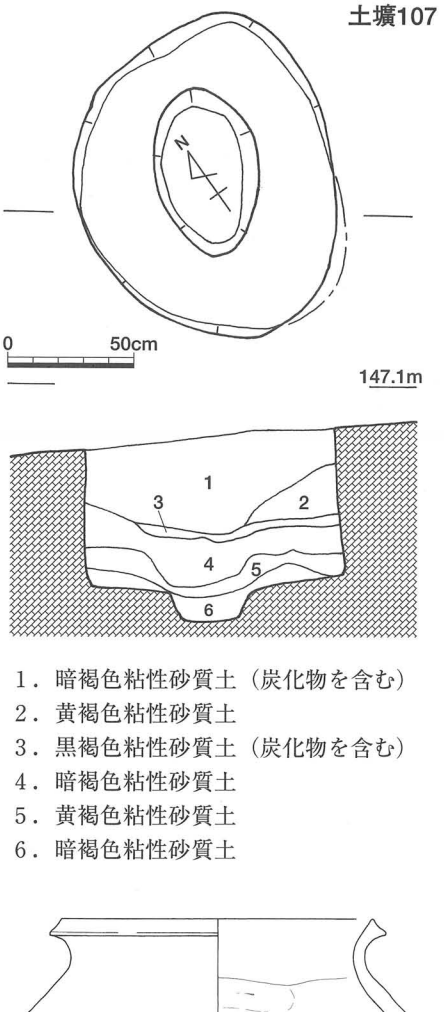
の部類にはいり、最大径0.95m、最大底径0.8m、中央での深さ0.85mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙106（第４・106図）

調査区の西側、西斜面に所在する。平面形は、円形を、断面はレンズ状を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.3m、最大底径1.25m、中央での深さ0.1mを測り、非常に浅い。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙107（第４・107図）

調査区の西端、西斜面に所在し、竪穴住居13に隣接する。竪穴住居の埋土の検出状況から土壙を埋めて竪穴住居をつくったことが考えられる。平面形は、楕円形を、断面は方形を呈している。底の中央に柱穴状の遺構が残っている。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.25m、最大底径1.2m、中央での深さ0.7mを測る。出土遺物には、弥生土器の**668～673**がある。**668～670**は甕で、口縁端部を三角形になるよう拡張している。**671・672**は甕または壷の底部と考えられる。**673**は高杯の杯部で、口縁を段をもちながら垂直に立ち上げている。これらの遺物から土壙107は弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。



第107図　土壙107（１／30）・出土遺物（１／４）

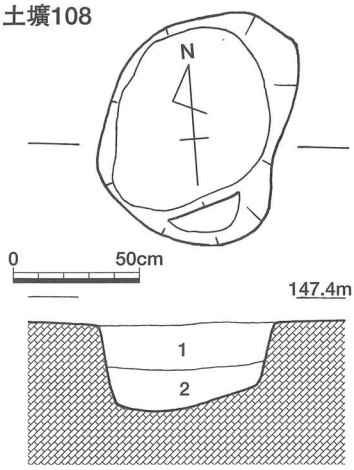
土壙108（第４・108図）

調査区の西側、南西斜面に所在する。平面形は、楕円形を、断面は方形を呈している。南側にテラス状の平坦面がある。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径0.95m、最大底径0.75m、中央での深さ0.3mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙109（第４・108図）

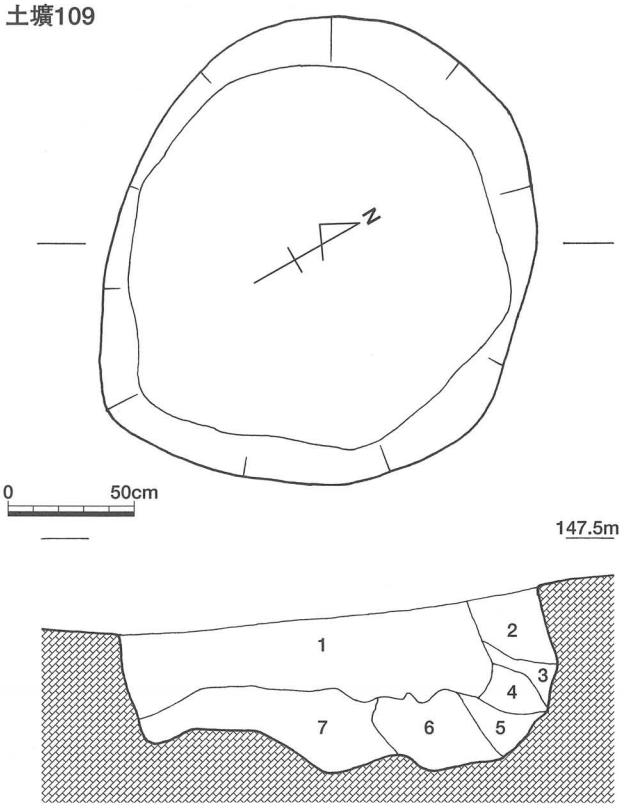
調査区の西側、南西斜面に所在し、竪穴住居14に隣接する。平面形は、円形を、断面は袋状を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径2.0m、最大底径1.55m、中央での深さ0.6mを測る。出土遺物には、弥生土器の**674**がある。**674**は甕で、口縁端部を内傾させながら立ち上げている。この遺物から土壙109は弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。

土壙108

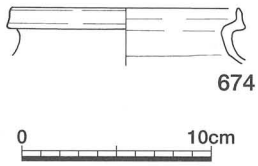


1．黄褐色粘性砂質土
2．灰褐色粘性砂質土

土壙109



1．赤褐色粘性砂質土
2．赤橙色砂質土
3．赤褐色粘性砂質土
（地山ブロックを含む）
4．赤橙色砂質土
5．赤褐色粘性砂質土
（地山ブロックを含む）
6．赤橙色砂質土
7．赤褐色粘性砂質土



第108図　土壙108・109（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙110（第４・109図）

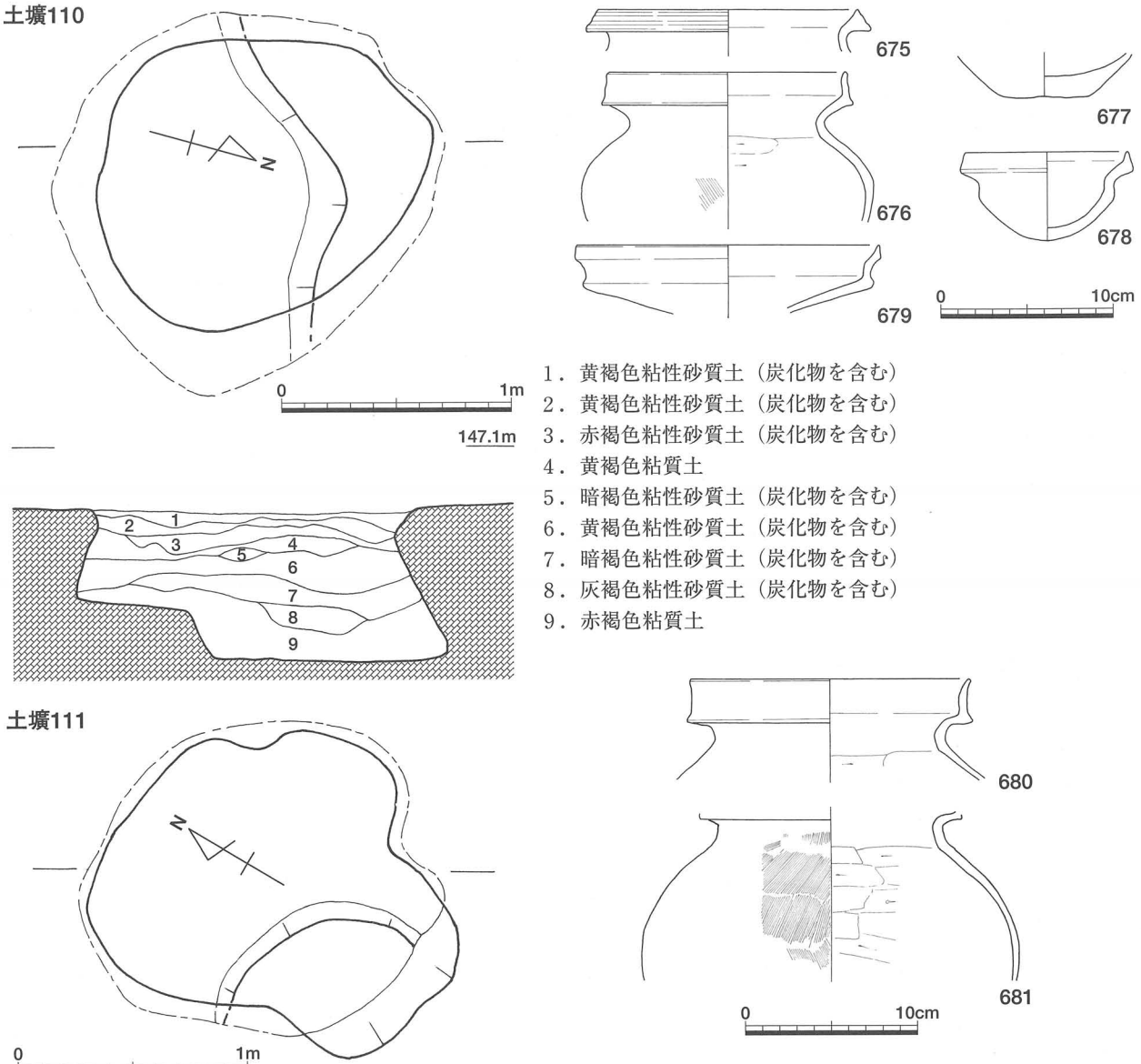
調査区の西側、南西斜面に所在し、竪穴住居14内につくられている。竪穴住居の埋土の検出状況から土壙を埋めて竪穴住居を建てたと考えられる。平面形は、楕円形を、断面は袋状を呈している。底の北側にテラス状の平坦面をもっている。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.5m、最大底径1.7m、中央での深さ0.65mを測る。出土遺物には、弥生土器の**675～679**がある。**675・676**は甕で、**675**は口縁端部を三角形になるよう拡張している。**676**は口縁端部をやや内傾させながら立ち上げている。**677**は甕と考えられる底部の破片である。**679**は高杯の杯部で、口縁を段をもって立ち上げている。これらの遺物から土壙110は弥生時代後期後葉につくられたと考えられる。

土壙111（第４・109図）

調査区の西側、南西斜面に所在し、竪穴住居14内につくられている。竪穴住居の埋土の検出状況から土壙を埋めて竪穴住居を建てたと考えられる。平面形は、不整形な楕円形を、断面は袋状を呈している。底の南側にテラス状の平坦面をもっている。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.5m、最大底径1.6m、中央での深さ0.55mを測る。出土遺物には、弥生土器の**680・681**がある。ともに甕で、**680**は口縁端部を垂直に立ち上げている。これらの遺物から土壙111は弥生時代後期末葉につくられたと考えられる。

土壙112（第４・110図）

調査区の西側、南西斜面に所在し、竪穴住居14内につくられている。竪穴住居の埋土の検出状況から土壙を埋めて竪穴住居を建てたと考えられる。平面形は、長方形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、長径1.2m、短径0.8m、中央での深さ0.5mを測る。出土遺物には、弥生土器の**682～686**がある。**682**は壷で、口縁端部を三角形になるよう拡張しており、頸部には斜め方向の刺突文が施されている。**683～685**は甕で、口縁端部を三角形になるよう拡張している。**686**は高杯の脚部で、端部を三角形になるように上下に拡張し、その外面に沈線を施している。また、脚部の裾にも縦方向の沈線を施している。これらの遺物から土壙112は弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。



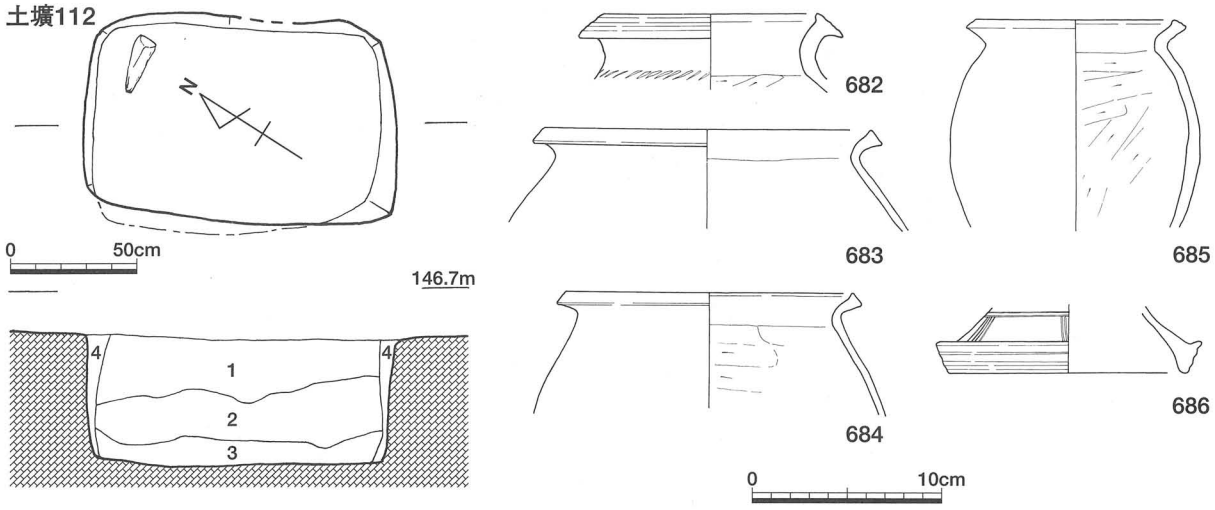
第109図　土壙110・111（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙113（第４・110図）

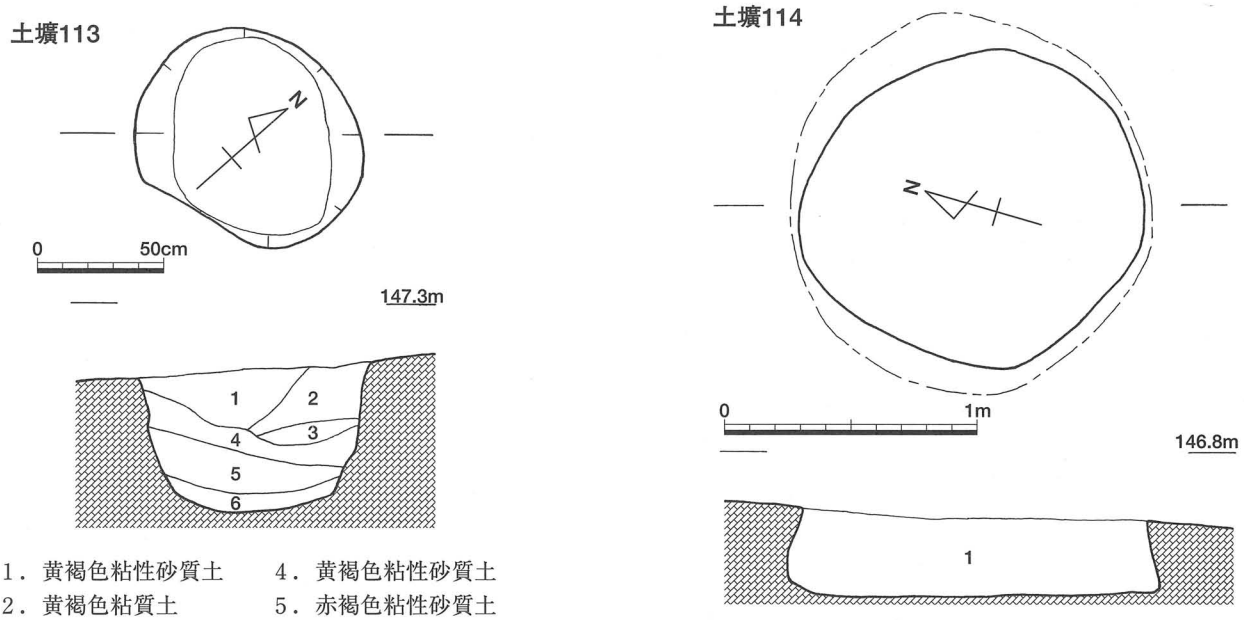
調査区の西側、南西斜面に所在する。平面形は、円形を、断面は底がやや狭くなるが方形を呈している。土壙の中では、小型の部類にはいり、最大径0.9m、最大底径0.75m、中央での深さ0.55mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙114（第４・110図）

調査区の西側、南西斜面に所在し、段状遺構２内につくられている。段状遺構の埋土の検出状況から土



1．黄褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．灰褐色粘性砂質土
3．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
4．赤褐色粘質土



1．黄褐色粘性砂質土
2．黄褐色粘質土
3．赤褐色粘性砂質土
4．黄褐色粘性砂質土
5．赤褐色粘性砂質土
6．黄褐色粘性砂質土

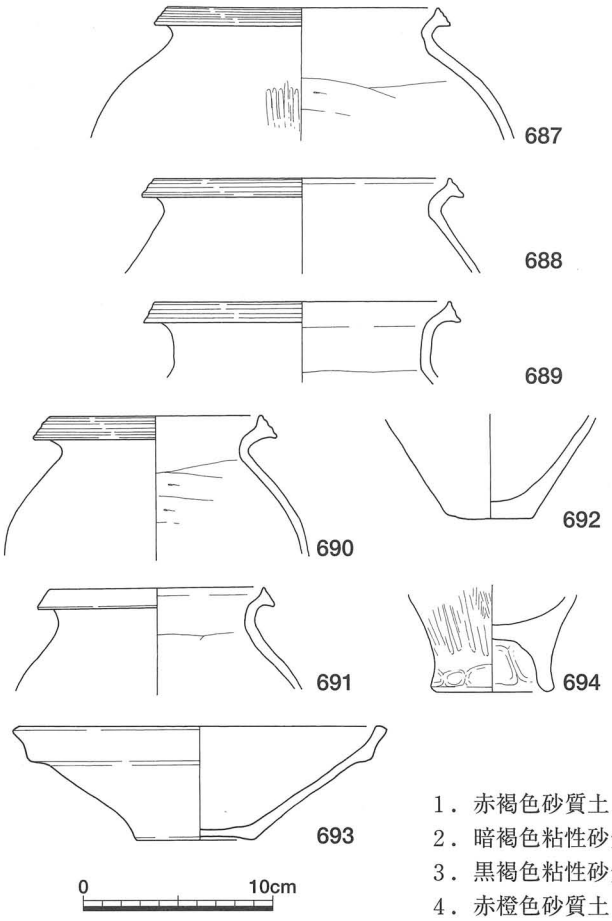
1．黄褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）

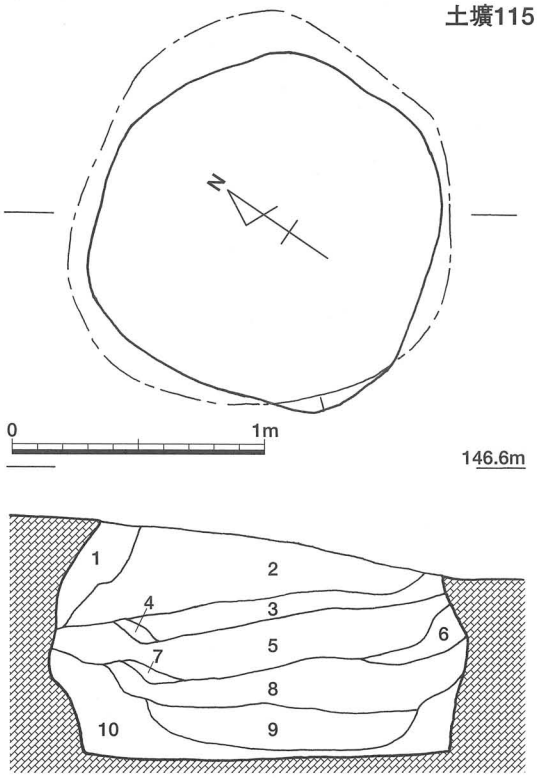
第110図　土壙112～114（1／30）・出土遺物（1／4）

壙を埋めて段状遺構２をつくったと考えられる。平面形は、円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.35m、最大底径1.45m、中央での深さ0.2mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。

土壙115（第４・111図）

調査区の西側、南西斜面に所在し、段状遺構２内につくられている。段状遺構の埋土の検出状況から土壙を埋めて段状遺構２がつくられたと考えられる。平面形は、円形を、断面は袋状を呈している。土壙の中では、中型の部類にはいり、最大径1.4m、最大底径1.6m、中央での深さ0.9mを測る。出土遺物には、弥生土器の**687～694**がある。**687～691**は甕で、口縁端部を三角形になるよう拡張している。**692**は甕の底部と考えられる。**693**は鉢で、口縁端部を厚くし、やや内傾させながら立ち上げている。**694**は脚付の甕と考えられる。これらの遺物から土壙115は弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。

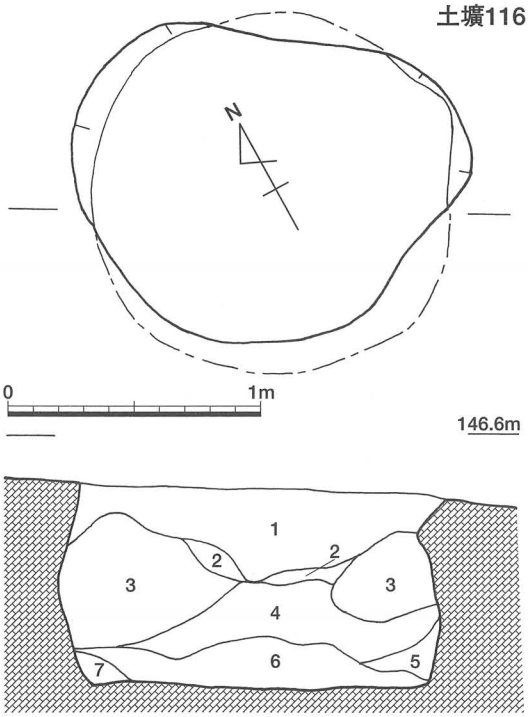




1．赤褐色砂質土
2．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
3．黒褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
4．赤橙色砂質土
5．暗褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）
6．赤橙色砂質土
7．赤橙色砂質土
8．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
9．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
10．赤橙色砂質土

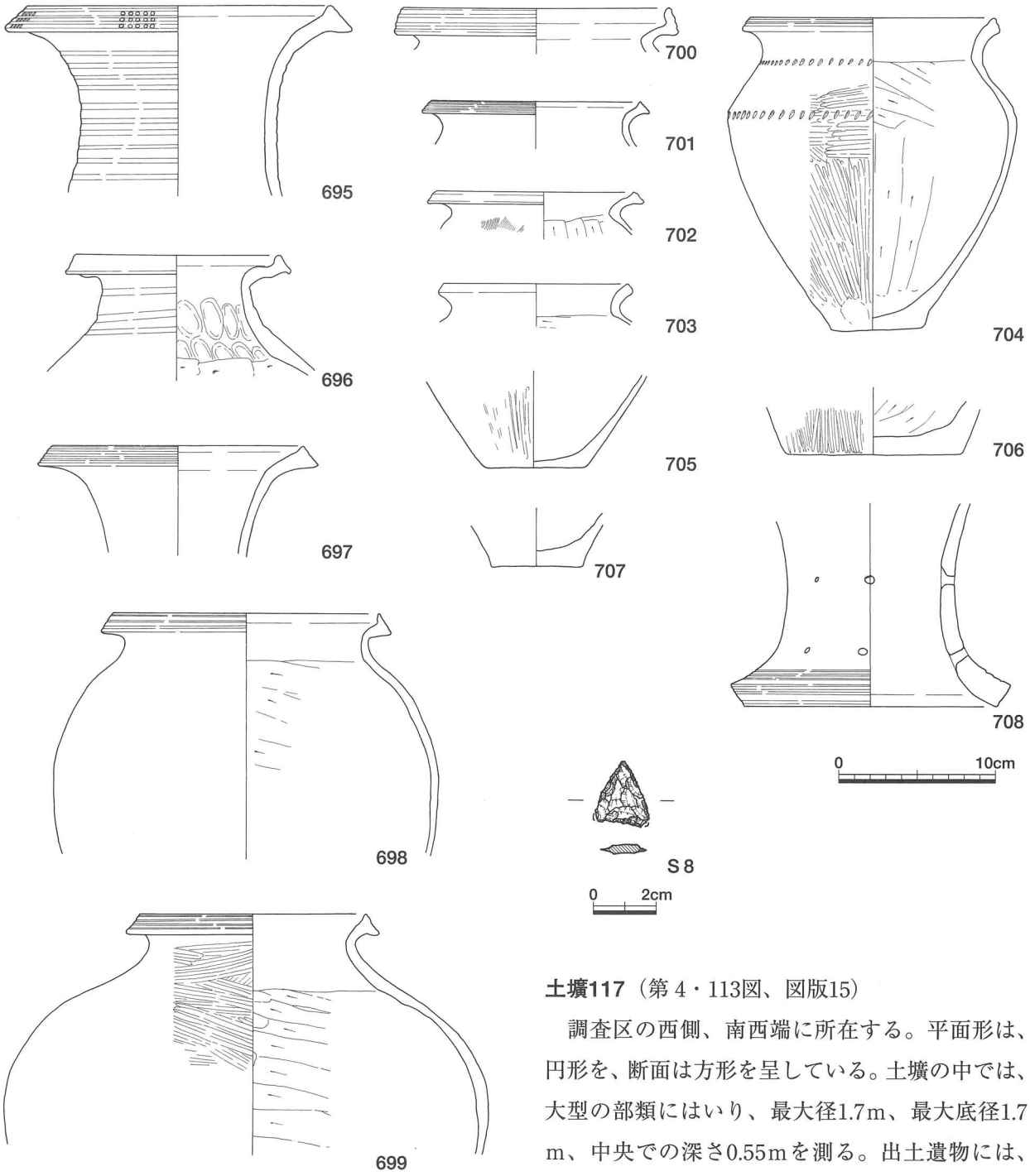
土壙116（第４・111図）

調査区の西側、南西斜面に所在し、段状遺構２内につくられている。段状遺構の埋土の検出状況から土壙を埋めて段状遺構２がつくられたと考えられる。平面形は、楕円形を、断面は袋状を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.6m、最大底径1.5m、中央での深さ0.8mを測る。出土遺物には、弥生土器の**695～708**、石器の**Ｓ８**がある。**695～697**は壷で、口縁端部を三角形になるよう拡張しており、**695・696**は頸部に沈線を施している。**695**は口縁外面に沈線を施し、その間に竹管文を施している。**698～704**は甕で、口縁端部を三角形になるよう拡張している。**704**は頸部と肩部のところに刺突文を施している。**705～707**は甕の底部と考えられる。**708**は器台の脚部で、スカシ孔が２列認められる。**Ｓ８**は鏃である。これらの遺物から土壙116は弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。



第111図　土壙115・116（1／30）・出土遺物（1／4）

1．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．赤褐色粘性砂質土（炭化物・地山ブロックを含む）
3．赤褐色砂質土（地山ブロックを含む）
4．暗褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
5．暗褐色砂質土
6．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
7．赤褐色砂質土
8．灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
9．赤褐色粘質土
10．赤褐色粘質土



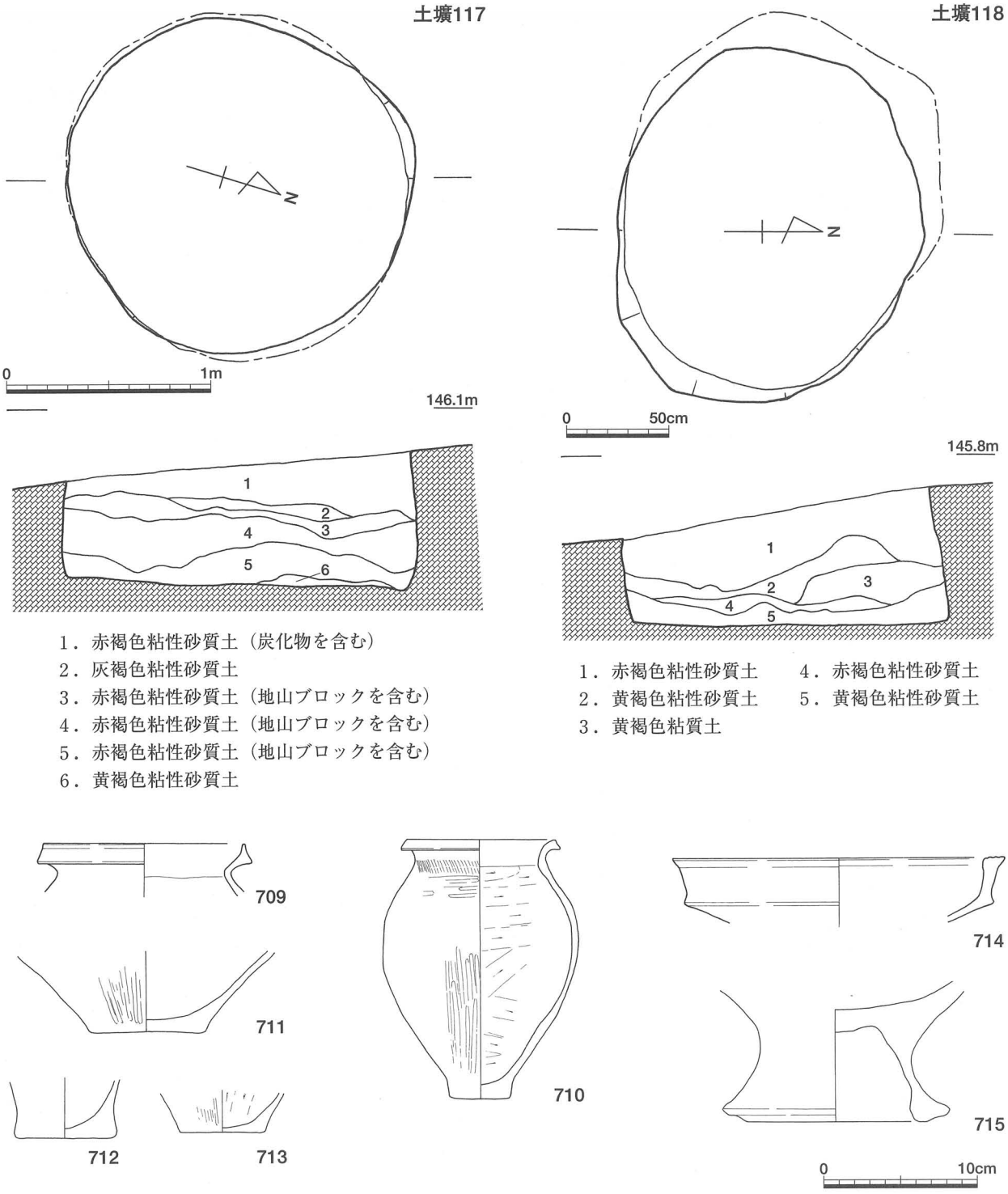
第112図　土壙116出土遺物（１／４）

土壙117（第４・113図、図版15）

調査区の西側、南西端に所在する。平面形は、円形を、断面は方形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.7m、最大底径1.7m、中央での深さ0.55mを測る。出土遺物には、弥生土器の**709～715**がある。**709・710**は甕で、口縁端部を三角形になるよう拡張している。**711～713**は甕の底部と考えられる。**714**は高杯で、杯部を屈曲させ、やや反るように立ち上げ、その端部を平らに仕上げ、その上面に沈線を施している。**715**は脚付の大型の鉢と考えられる。端部を三角形になるよう上下に拡張している。これらの遺物から土壙117は弥生時代後期前葉につくられたと考えられる。

土壙118（第４・113図）

調査区の西側、南西端に所在する。平面形は、楕円形を、断面は台形を呈している。土壙の中では、大型の部類にはいり、最大径1.8m、最大底径1.8m、中央での深さ0.6mを測る。遺物が出土していないため時期が特定できないが、周囲の状況から弥生時代後期と推定される。



1．赤褐色粘性砂質土（炭化物を含む）
2．灰褐色粘性砂質土
3．赤褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）
4．赤褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）
5．赤褐色粘性砂質土（地山ブロックを含む）
6．黄褐色粘性砂質土

1．赤褐色粘性砂質土
2．黄褐色粘性砂質土
3．黄褐色粘質土
4．赤褐色粘性砂質土
5．黄褐色粘性砂質土

第113図　土壙117・118（1／30）・出土遺物（1／4）

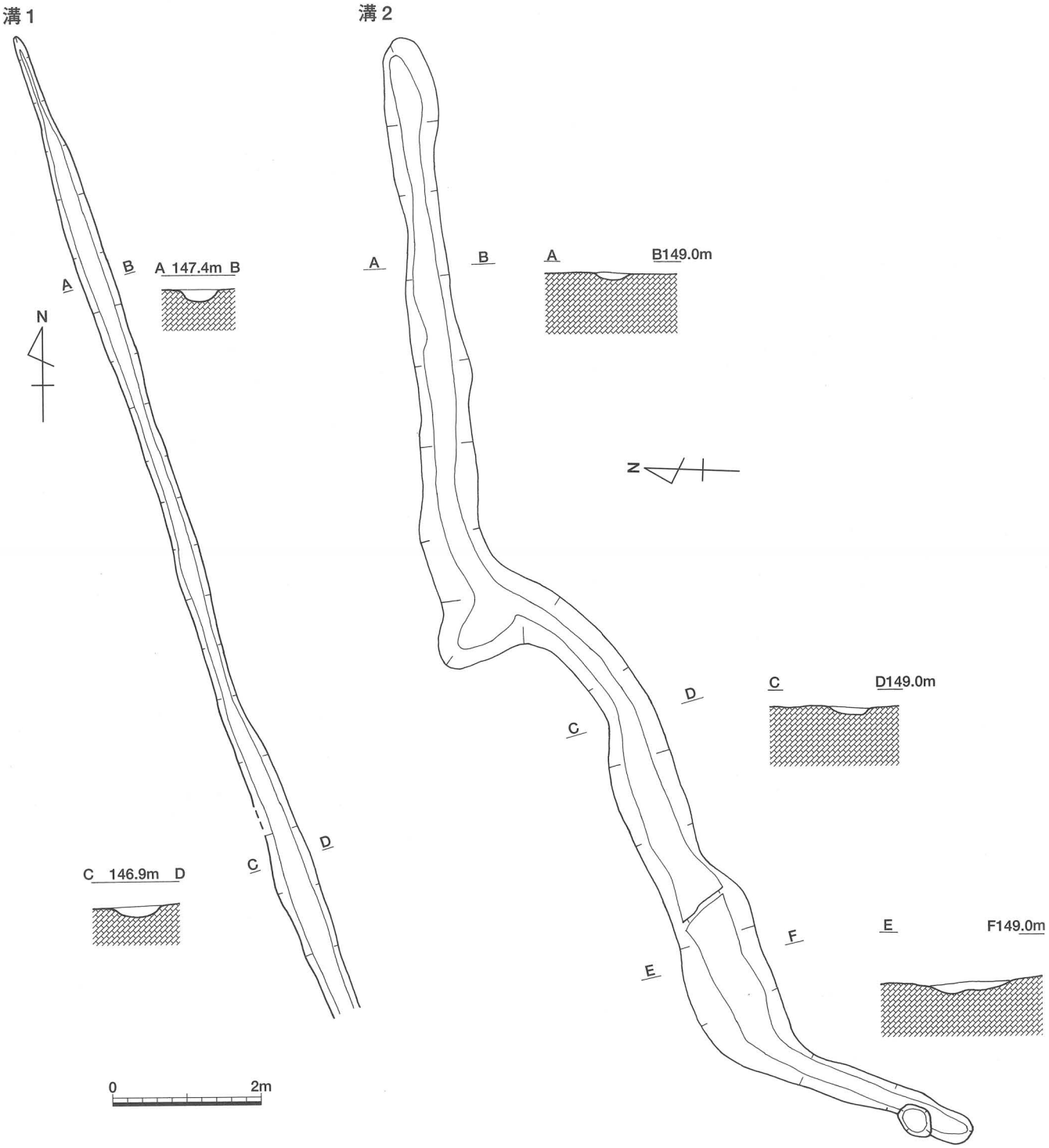
4．溝

溝１（第４・114図）

調査区の南東部、南東斜面に所在する。竪穴住居２から土壙34まで、等高線に直行して、ほぼ直線状に流走する。竪穴住居から出ているため住居の排水溝の可能性もある。規模は総延長14m、幅0.4～0.6m、深さ0.2mを測る。遺物は出土していないが、竪穴住居２から派生していることを考えると弥生時代後期末葉と考えられる。

溝２（第４・114図）

調査区の西側、西斜面に所在する。丘陵頂上部より竪穴住居14へ向かって、等高線に直行するように流走する。規模は総延長18m、幅0.8～1.0m、深さ0.2mを測る。遺物は出土していないが、周囲の遺構の状況から弥生時代後期と考えられる。

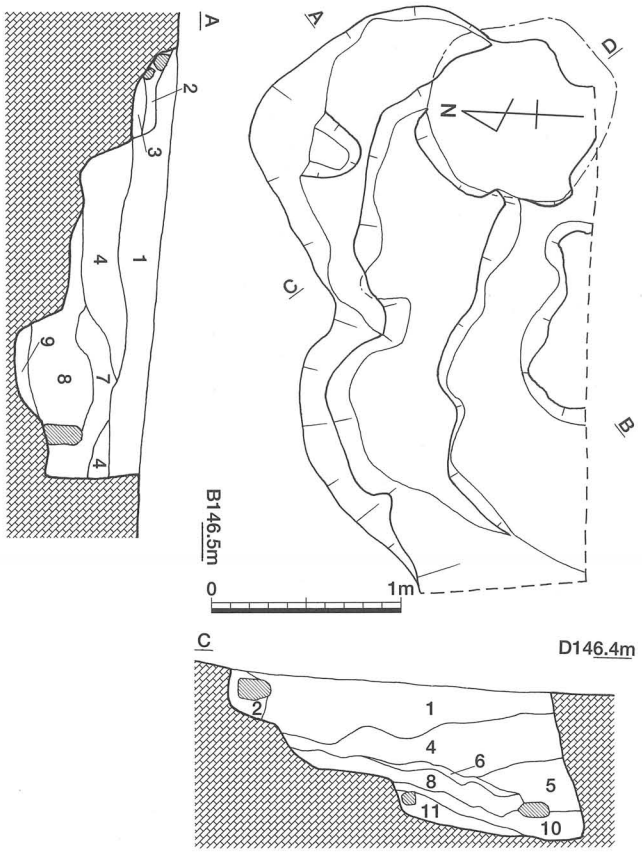


第114図　溝１・２（１／80）

５．不明遺構

不明遺構１（第４・115図）

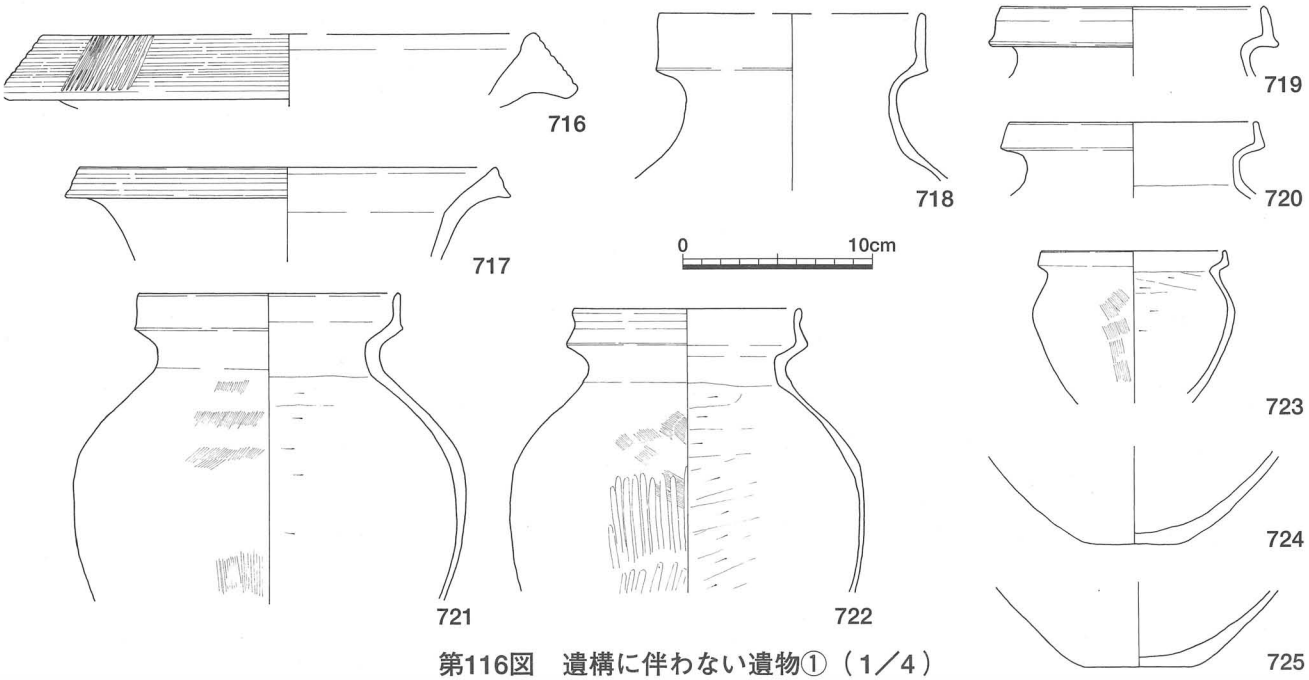
調査区の南西端、南西斜面に所在する。一部が調査区外にあるため遺構の様子が判然としないが、平面形が楕円形を呈する。長径3.1m、短径1.8mを測る。出土状況から複数の土壙が重複した遺構の可能性がある。遺物は出土していないが、周囲の遺構の状況から弥生時代後期と考えられる。



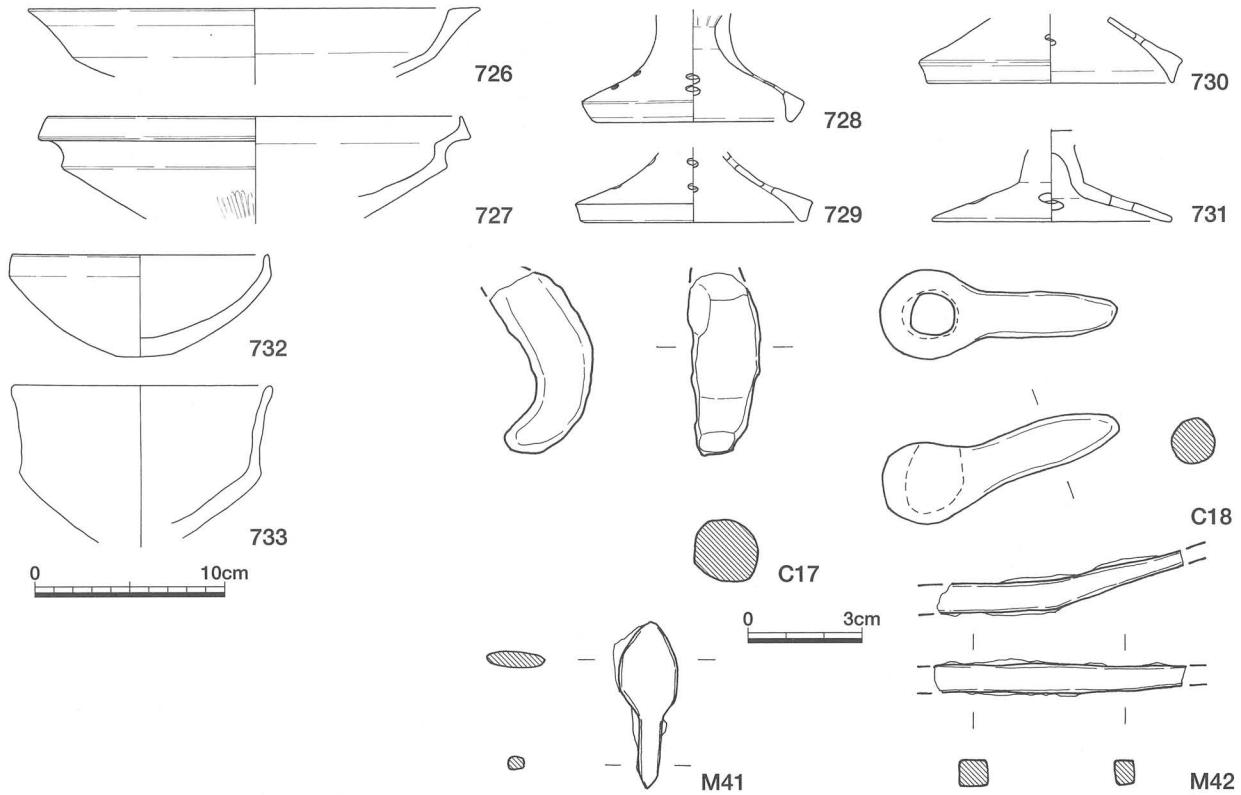
第115図　不明遺構１（１／40）

６．遺構に伴わない遺物

表土中及び遺構検出中に、土器及び鉄器が出土している。**716～718**は壷で、**716・717**は口縁端部を三角形になるよう拡張している。**718**は口縁端部を垂直に立ち上げている。**719～723**は甕で、いずれも口縁端部をほぼ垂直に立ち上げている。**724・725**は甕の底部の破片と考えられる。**726～731**は高杯で、**726**は杯部をややそるように屈曲させ、上端部を平らに仕上げている。**727**は杯部を段をもって垂直に立ち上げている。**728～730**は脚の端部を三角形になるように上下に拡張している。**731**は、短脚で端部を薄く丸くなるように仕上げている。**732**は椀で、端部を上方向に引き上げている。**733**は脚付の椀と考えられる。**C17**は土製の勾玉で上部を欠いている。**C18**は匙形土製品で、匙部が袋状を呈している。**M41**は鉄鏃で、**M42**は工具の一部と考えられる。中央で屈曲しているが先端部が欠けているため用途は不明である。



第116図　遺構に伴わない遺物①（１／４）



第117図　遺構に伴わない遺物②（1／2・1／4）

第１表　土製品一覧表

（　）内は推定、もしくは現存値

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種	計測値（㎜）			重量（g）	色調	胎土	焼成	備考
				最大長	最大幅	最大厚					
5	C１	竪穴住居１	勾玉	47	15	17	14.4	にぶい黄橙 10YR7/3	粗	良好	完形
13	C２	竪穴住居５	勾玉	46.5	15.5	15	15.8	にぶい黄橙 10YR6/3	粗	不良	完形
13	C３	竪穴住居５	勾玉	(46.5)	15.5	15	10.3	明赤褐 2.5YR5/6	粗	良好	上部欠損
13	C４	竪穴住居５	匙形土製品	(46)	41.5	20	19.6	橙 2.5YR6/8	粗	良好	匙部のみ、赤色顔料塗布
13	C５	竪穴住居５	土錘	64	55	55	186.4	明赤褐 2.5YR5/6	粗	不良	完形
17	C６	竪穴住居７	土玉	11.5	12	12	2.3	明褐 7.5YR5/6	精良	良好	管玉状、完形
24	C７	竪穴住居10	勾玉	49	20	20	17.8	灰黄褐 10YR6/2	粗	良好	完形
39	C８	土壙3	勾玉	38.5	14	14	8.2	灰黄褐 10YR4/2	精良	良好	完形
41	C９	土壙6	勾玉	11	39.5	11	6.4	にぶい黄橙 10YR6/3	精良	良好	完形
44	C10	土壙９	紡錘車	44	(33)	3	7.9	にぶい褐 7.5YR5/4	精良	良好	円形、一部欠損
56	C11	土壙26	分銅形土製品	(26)	44.5	15.5	19.3	にぶい黄橙 10YR6/4	精良	良好	上部のみ
56	C12	土壙26	勾玉	49	17.5	18	16.6	黒褐 10YR3/2	精良	良好	完形
84	C13	土壙64	匙形土製品	(44)	43	18	71.9	明褐 7.5YR5/6	精良	良好	匙部のみ、赤色顔料塗布
102	C14	土壙95	匙形土製品	100.5	29	20	21.6	黒褐 10YR3/1	精良	良好	匙部欠損、赤色顔料塗布
104	C15	土壙99	匙形土製品	(40)	33	33	23.2	黒褐 10YR3/2	精良	良好	匙部のみ
105	C16	土壙100	土玉	28	27	14	9.0	にぶい黄橙 10YR6/4	精良	良好	球形、半分のみ
117	C17	表採	勾玉	(62)	23	12	12.5	橙 5YR6/6	精良	良好	上部欠損
117	C18	表採	匙形土製品	48	17	17	14.7	暗灰橙 2.5YR5/2	精良	良好	完形

第２表　石製品一覧表

（　）内は推定、もしくは現存値

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種	計測値（㎜）			重量（g）	石材	備考
				全長	全幅	厚さ			
9	S１	竪穴住居４	石包丁	49	89	14	81.5	泥質片岩？	打製、完形
26	S２	竪穴住居12	石斧	(121)	76	71	821.2	砂岩？	刃部欠損
34	S３	竪穴住居15	石包丁	54	139	8	92.7	サヌカイト	打製、完形
51	S４	土壙17	石包丁	(39)	50	5	13.2	粘板岩？	打製
67	S５	土壙45	石包丁	39	77	12	56.6	粘板岩	打製、完形
85	S６	土壙65	石包丁	(41)	69	8	32.9	砂質片岩	打製
86	S７	土壙68	砥石	102	55	20	169.6	頁岩？	完形
112	S８	土壙116	鏃	21	17	3	0.9	サヌカイト	完形

第３表　金属製品一覧表

（　）内は推定、もしくは現存値

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種	計測値（㎜）			重量（g）	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
7	M１	竪穴住居２	鎌	(157)	30	4	47.8	鉄	直刃、先端部欠損
7	M２	竪穴住居２	鎌	149	21	3.5	33.1	鉄	直刃、完形
7	M３	竪穴住居２	鏃	(59)	27	3	5.8	鉄	柳葉状
7	M４	竪穴住居２	工具	(32)	12	3	3.9	鉄	端部を折り曲げている
9	M５	竪穴住居４	鎌	(64)	19	2	10.9	鉄	曲刃、先端部のみ
9	M６	竪穴住居４	鏃	(39)	4.5	3	2.9	鉄	柳葉状、茎部欠損
13	M７	竪穴住居５	鎌	(57)	17	4.5	9.6	鉄	先端部のみ
13	M８	竪穴住居５	鏃	99	13	4	7.9	鉄	柳葉状、完形
13	M９	竪穴住居５	鏃	75	20	9	9.3	鉄	柳葉状
13	M10	竪穴住居５	鏃	(57)	29	3	14.1	鉄	鏃身のみ、返りがつく
13	M11	竪穴住居５	鏃	(36.5)	14.5	3	3.8	鉄	茎部欠損
13	M12	竪穴住居５	鏃	(41)	11	6	2.9	鉄	茎部欠損
16	M13	竪穴住居７	不明	(42.5)	44.5	2	16.9	鉄	鏃身欠損
16	M14	竪穴住居７	工具	(36)	9	2	2.2	鉄	茎部欠損
18	M15	竪穴住居８	鏃	(35)	14.5	3.5	3.8	鉄	柳葉状、茎部欠損
18	M16	竪穴住居８	鏃	(47)	20	3	6.1	鉄	鏃身欠損
24	M17	竪穴住居10	鏃	72	17	4	9.7	鉄	柳葉状
24	M18	竪穴住居10	鏃	61	15	3.5	7.0	鉄	柳葉状
24	M19	竪穴住居10	鏃	50	12	3	3.1	鉄	柳葉状
24	M20	竪穴住居10	鏃	(50)	16	3	10.3	鉄	柳葉状、茎部欠損
24	M21	竪穴住居10	鏃	52	22	4.5	5.5	鉄	柳葉状、茎部欠損
24	M22	竪穴住居10	鏃	(43.5)	6	3.5	2.6	鉄	鏃身欠損
24	M23	竪穴住居10	鏃	(31　)	5.5	4	1.7	鉄	鏃身欠損
24	M24	竪穴住居10	鏃	(21.5)	17.5	3	1.8	鉄	鏃身・茎部欠損
24	M25	竪穴住居10	不明	(32)	19	3	5.5	鉄	鎌か刀子？
24	M26	竪穴住居10	不明	(35)	16	2	3.8	鉄	鎌か刀子？
31	M27	竪穴住居14	鑿状工具	(60)	13	5	12.2	鉄	茎部欠損
34	M28	竪穴住居15	鏃	(46)	11	2.5	3.3	鉄	柳葉状、茎部欠損
34	M29	竪穴住居15	鏃	(41)	11	3	2.9	鉄	鏃身欠損
34	M30	竪穴住居15	鏃	(34)	9	3.5	2.7	鉄	鏃身欠損
34	M31	竪穴住居15	鏃	(43)	10	3.5	4.0	鉄	中央で直角に屈曲
56	M32	土壙24	鑿状工具	(65)	11	3.5	9.1	鉄	茎部欠損
61	M33	土壙34	鉇	(33)	11	3	2.8	鉄	茎部欠損
61	M34	土壙34	工具	(37)	18	3	5.2	鉄	茎部欠損
64	M35	土壙42	鏃	37	24	1	2.7	鉄	鏃身のみ
85	M36	土壙65	鉇	(47)	12	2.5	3.4	鉄	先端部を屈曲、茎部欠損
90	M37	土壙76	鏃	(35)	15	3	5.2	鉄	柳葉状
94	M38	土壙85	鏃	43	9	3.5	3.5	青銅	柳葉状
97	M39	土壙86	鎌	(69.5)	24	3	12.0	鉄	摘鎌か？
105	M40	土壙100	鑿状工具	112	11	7	25.0	鉄	完形
117	M41	表採	鏃	(44)	15	4	5.4	鉄	柳葉状、完形
117	M42	表採	工具	(66)	7	7.5	8.6	鉄	中央で屈曲、先端・茎部欠損
	M43	竪穴住居5	不明	(40)	10	5	2.8	鉄	工具の茎部か？
	M44	竪穴住居5	不明	(23)	15	6	2.7	鉄	鏃身か？
	M45	竪穴住居6	不明	(24)	22	11	11.1	鉄	
	M46	竪穴住居6	不明	(48)	16	3	2.9	鉄	工具の一部か？
	M47	竪穴住居7	不明	(35)	11	8	3.4	鉄	工具の一部か？
	M48	竪穴住居7	不明	(54)	36	12	28.9	鉄	
	M49	竪穴住居10	不明	(30)	8	7	2.2	鉄	工具の茎部か？
	M50	竪穴住居10	不明	(31)	15	5.5	2.7	鉄	鎌の一部か？
	M51	土壙34	不明	(29)	6.5	5	1.3	鉄	鏃の茎部か？
	M52	土壙35	不明	(24.5)	11	3	1.3	鉄	

第４表　小玉一覧表

（　）内は推定、もしくは現存値

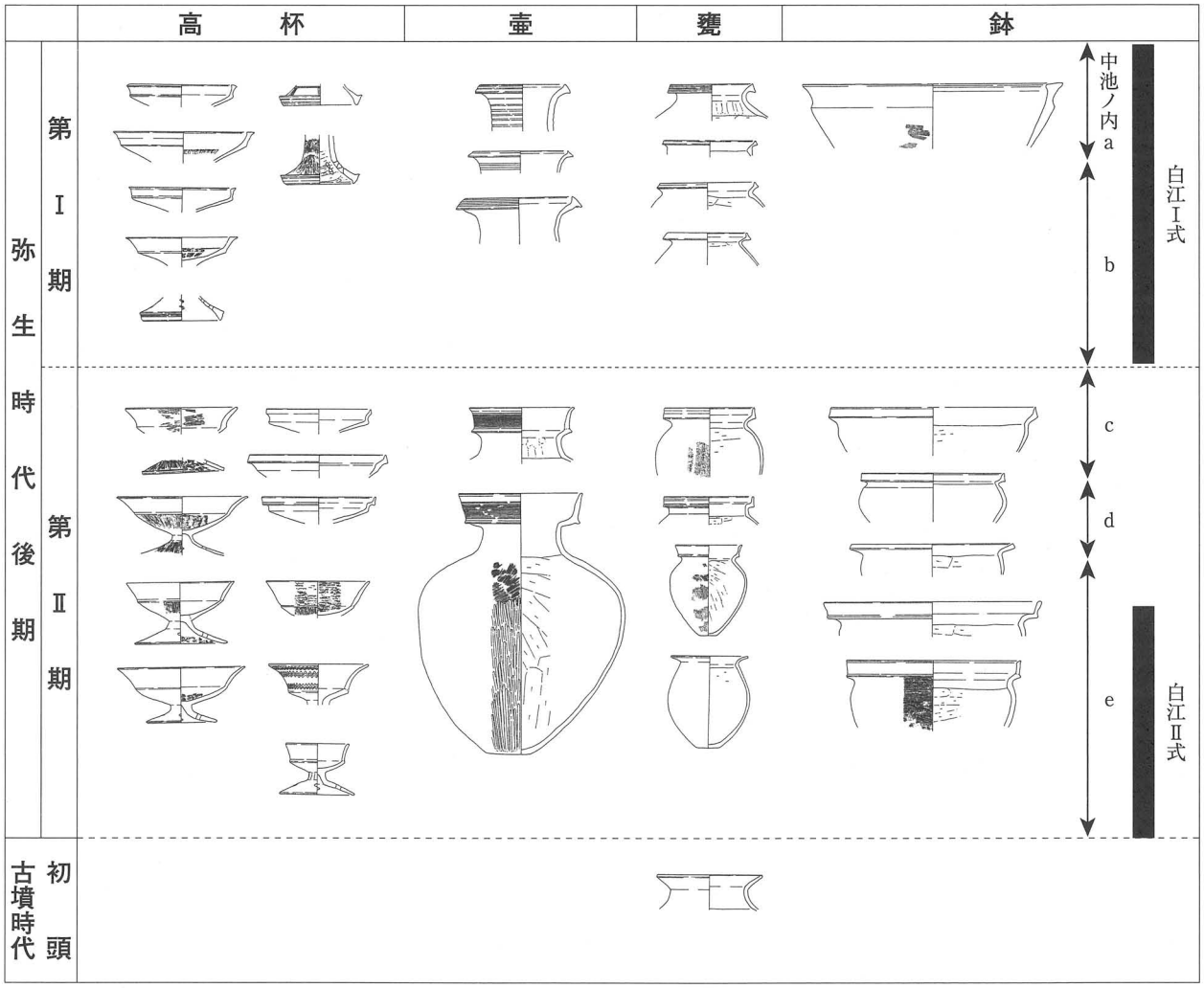
挿図番号	遺物番号	遺構名	計測値（㎜）			重量（g）	材質	色調	備考
			直径	厚さ	孔径				
31	J１	竪穴住居14	65	35	17.5	0.1	ガラス	シアンブルー	
31	J２	竪穴住居14	40	30	7.5	0.2	ガラス	シアンブルー	

第4章　ま　と　め

今回、井原市内において初めて弥生時代の集落の調査が実施され、弥生時代後期を中心に遺構、遺物が比較的まとまって出土し、弥生時代後期を中心にこの丘陵に集落が営まれていたことが確認できた。今回の調査結果を、時代の変遷の手がかりとなる弥生土器、遺構の変遷、遺跡の立地と性格についてまとめてみたい。

（1）遺物について

調査の結果、弥生時代後期を中心に竪穴住居や土壙に伴う多種の遺物が出土した。弥生時代の遺跡の調査自体が井原市において初めての事例となるため、土器を中心にこの時代のこの地域の一括した資料となった。岡山県南西部の弥生時代後期の集落遺跡で調査されたものは、小田郡矢掛町の白江遺跡（1）・中池ノ内遺跡（2）・清水谷遺跡（3）、小田郡美星町の五万原遺跡（4）があげられる。そのなかで、土器の編年について考察している白江遺跡、中池ノ内遺跡を参考にしながら土器の変遷をまとめてみた。



第118図　高越遺跡出土の弥生時代後期土器の変遷（1／12）

第Ⅰ期　弥生時代後期前葉

高杯は、杯部の端部を上方向に屈曲させ、その上端を外方向に拡張している。その上面に沈線を施しているものもある。脚部は、端部を上下に拡張している。壷は、頸部を緩やかに反らしながら立ち上がり、口縁端部を三角形になるよう上下に拡張している。頸部外面と口縁外面に沈線を施すものが多い。甕も壺と同様に口縁端部を三角形になるよう上下に拡張するものが占め、その外面に沈線を施しているものもある。内面は頸部の直下、またはやや下方までヘラ削りが施されている。鉢は、数量が少ないが、端部を垂直に立ち上げ、高杯同様、上端を外方向に拡張している。この段階のものは、白江Ⅰ式、中池ノ内遺跡のａ・ｂに近いものと考えられる。

第Ⅱ期　弥生時代後期後葉から末葉

後期中葉の土器はほとんど確認されていない。高杯は、端部を外反しながら、薄く仕上げるものと、垂直に段を持って仕上げるものとに分かれる。この段をもつ器形は備中南西部や北西部に多くみられるもので地域的な特徴となっている。この端部の段が明瞭になるほど新しいと考えられる。しかしながら、この器形は後期末葉になると消滅し、ほかの備中地域と同様に外反するものが中心となり、短脚化、小型化し、脚の端部も素縁となる。壷は、口縁端部が上下へ拡張し、上方向に垂直に立ち上がる。口縁外面には大型のものほど沈線が施されている。甕も壷と同様に口縁端部が上下へ拡張し、上方向に垂直に立ち上がるものと、口縁端部をく字状に屈曲させるものが出てくる。鉢も壷、甕と同様に上下へ拡張し、上方向に垂直に立ち上がる。この段階のものは、白江Ⅱ式、中池ノ内遺跡のｃ・ｄ、五万原遺跡の出土土器に近いものと考えられる。

また、わずかであるが、古墳時代初頭のものと考えられる土器が竪穴住居15より出土している。甕の頸部がハ字状にひらいているのが特徴で、本遺跡が古墳時代初頭まで存続していた可能性をうかがわせる。

以上、本遺跡で出土した弥生土器をもとに、近隣の同時代の遺跡の弥生土器と比較しながら大きく２期に分類した。その結果、第Ⅰ期と第Ⅱ期の間に少し空白期間が考えられるが、県南西部の同時代の遺跡と同様の土器の変遷をとっていたことが確認できる。

また、遺物で注目されるものとして鉄器があげられる。本遺跡では、鉄器が図化できたもので42点、図化できなかったものも含めると52点にものぼる。時期も弥生時代後期前葉の土壙から出土したものもあり、鉄器の使用は後期前葉から始まっていると考えられる。器種構成は、鏃が25点、鉇などの工具が９点、鎌５点、用途不明の鉄器13点を数える。本遺跡では、石包丁を中心に石器も出土している。このことから、本遺跡の時期がちょうど石器から鉄器への切り替わり時期、または併用時期にあたることが考えられる。

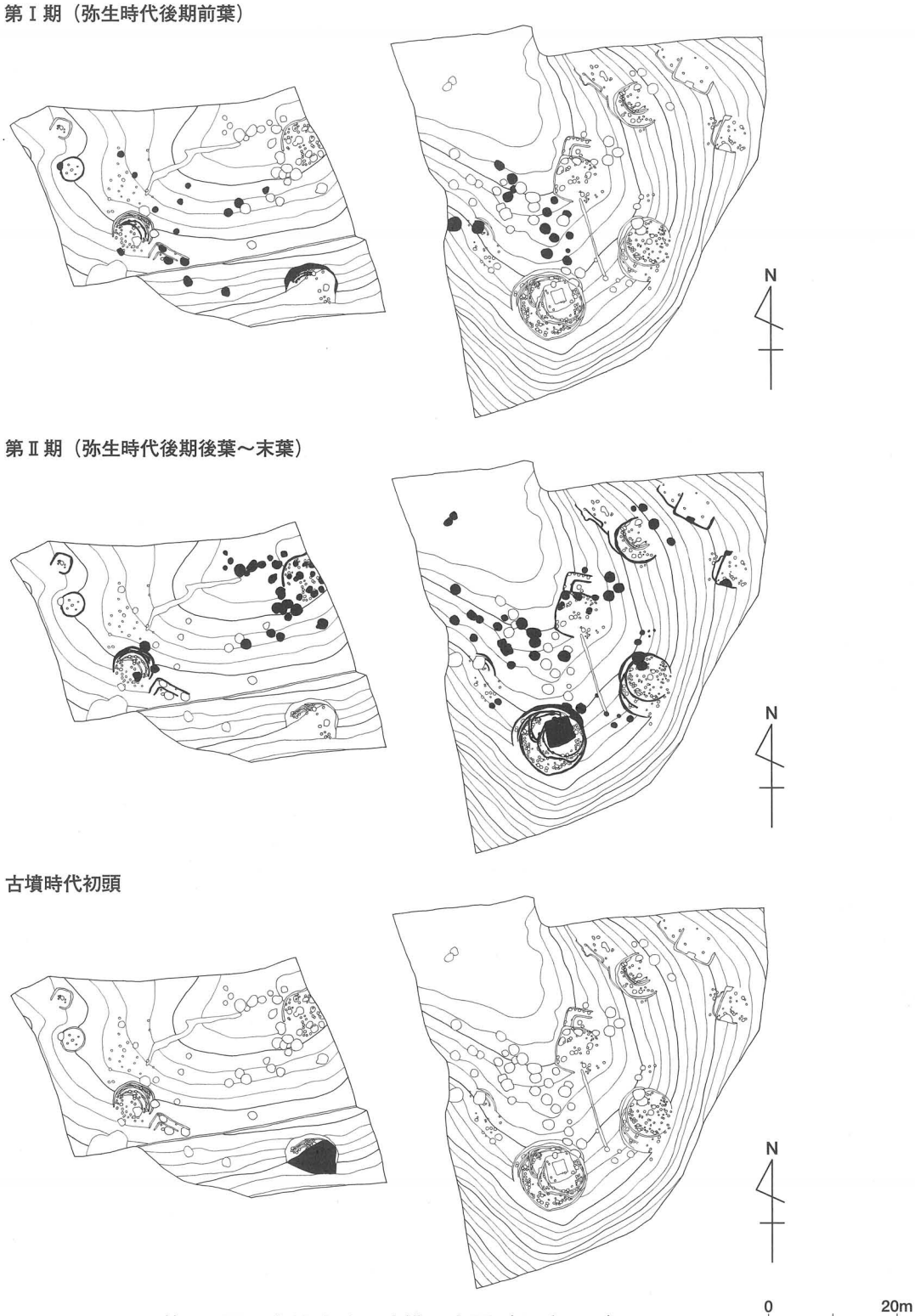
（２）遺構について

今回の調査で確認できた弥生時代からの遺構としては、竪穴住居、段状遺構、土壙などがある。これらから出土した遺物を前述の弥生土器の変遷を参考にまとめてみた。

本遺跡で集落が営まれ始めるのは弥生時代後期前葉からである。土器の時期でいえば第Ⅰ期にあたり、この時期の遺構としては、竪穴住居13・14・15、段状遺構２、土壙25～31・103～108・112～118などが考えられる。このことから本遺跡の形成は、南西斜面に所在する竪穴住居13・14・15を中心に始まったと考えられ、周囲にある土壙群はそれらに伴う貯蔵穴と考えられる。また、遺跡中央の南斜面にこの時期の土壙が所在する。これは、竪穴住居10にこの時期の土器がいくらか確認できるため、竪穴住居10はこのころつくられ、それに伴う土壙である可能性もある。

続いて、弥生時代後期後葉から末葉にかけては遺構が調査区域全域に広がる。土器の時期でいえば第Ⅱ期にあたり、竪穴住居１～７・10～14、段状遺構１・2、それらに近接する土壙群が考えられる。竪穴住居は同じ場所で建て替えや拡張をしながら継続して存在し、この集落の最盛期を迎えている。

古墳時代初頭になると竪穴住居15でこの時期の遺物がわずかにみうけられるが、それ以外には確認できず、以上のことから、本遺跡の集落は、弥生時代後期中葉に少し空白期間があるが、おおむね後期全般で



第119図　高越遺跡の遺構の変遷（1／1000）

営まれ、古墳時代にはいると、丘陵裾の微高地に移ると考えられる。

（3）遺跡の立地と性格

前述のとおり、本遺跡は弥生時代後期後葉から末葉を中心に中葉のころに空白期間があるがほぼ後期全般にわたって営まれていることが確認できた。本遺跡は、標高148mの丘陵上に位置し、眼下には沖積平野が見渡すことができ、平地との比高差100mを測る。周囲の同時時代の遺跡の立地状況をみてみると、散布地も含めて弥生時代中期から後期の遺跡はほとんどが丘陵上にある。発掘調査例が少ないため一概にはいえないが、この地域の弥生時代中期から後期にかけての集落は、小規模なものが丘陵上に営まれることが一般的であったことが推測される。そして、古墳時代に入ると集落が丘陵裾の微高地や沖積平野に移っていくと考えられる。丘陵上のため生産方法が問題となるが、石包丁や鉄鎌、炭化米が出土していることから稲作が生産の中心と考えられる。丘陵上のため陸稲や谷水田などが考えられるが調査例がなく不明である。

また、多くの鉄器が出土しているが、鍛冶炉などは確認されておらず、製品になったものを搬入した可能性が高い。しかしながら、これだけの鉄器が出土するということは、弥生時代後期から末葉にかけてはかなり鉄器の流通が進んでいたことが考えられるとともに小規模な丘陵上の集落にもかかわらず、有力な集団であったことが想像できる。

註

（1）間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第1号　倉敷考古館　1966年

（2）尾上元規「中池ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』108　岡山県教育委員会　1996年

（3）藤江　望「清水谷遺跡（一本木地区）」『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告』1　矢掛町教育委員会　2001年

（4）間壁忠彦・間壁葭子「岡山県美星町五万原遺跡（住居址群）」『倉敷考古館研究集報』第5号　倉敷考古館　1969年

高越遺跡出土土器の胎土分析
—土壙60・61出土土器について—

岡山理科大学自然科学研究所　白石　　純

分析目的

高越遺跡の弥生時代後期土壙60、61から出土した壺・甕には、形態・技法・胎土（肉眼観察）などの観察から在地品（遺跡周辺で生産された）と搬入品に分類されている。そこで、理化学的な胎土分析により在地、搬入土器が、どのように分類されるか検討した。

分析方法は、蛍光X線分析法により胎土中の成分（元素）の量を測定し、また、実体顕微鏡による肉眼観察では土器表面の砂粒構成、大まかな岩石、鉱物の含有量について検討した。

分析結果

分析した土器は、表1に示した土壙60、61内から出土した壺、甕、高坏の合計21点である。

【蛍光Ｘ線分析法による胎土分析】

この分析で測定した元素は、主要元素であるSi、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、Pと微量元素のRb、Sr、Zrの13元素である。このうち、弥生時代の土器で胎土に違いがみられる元素としてSi、Ti、Al、Fe、Ca、K、Rb、Sr、Zrなどの元素があげられる。ここでは、K-Ca、Rb-SrのX-Y散布図を作成し、違いについて検討した。

その結果、第１図K-Ca、第２図Rb-Srの各散布図でみると、以下のように大きく２つのグループに分類が可能であった。

Ａグループ……試料番号２・５・９・12・13（土壙61）
　　試料番号16・20（土壙60）
Ｂグループ……試料番号１・３・４・６・７・８・10・11・14・15（土壙61）
　　試料番号17・18・19・21（土壙60）

なお、肉眼観察で土壙60内出土の土器は在地品で、土壙61内の土器は搬入品と分類されていたが、蛍光Ｘ線分析では両方の土器が土壙に関係なく２つの胎土に判別された。

【実体顕微鏡による胎土観察】

実体顕微鏡では、土器表面を10倍～30倍で砂粒観察（岩石・鉱物）を行った。その結果、今回観察した土壙60、61出土の土器は以下に示した大きく３種類の胎土に分類できた。

１類……１㎜以下の石英（多）・長石（少）を含み、0.5㎜以下の角閃石（多）・黒雲母（少）を含む。
　　試料番号２、９（写真１）、12、13

２類……１㎜～３㎜石英（多）・長石（少）を含み、２㎜以下の角閃石（多）・黒雲母（少）を含む。

試料番号５、16（写真２）、20

３類……1㎜～３㎜石英（多）・長石（普通）を含み、２㎜以下の黒雲母（少）を含む。希に花崗岩の岩片を含む。

試料番号１、３、４、６、７、８、10（写真３）、11、14、15、17、18、19、21

以上の、観察結果から１、２類は閃緑岩起源、３類は花崗岩起源の砂粒で構成されていると推定される。なお、１類と２類は石英および角閃石の粒径が異なり、１類がより細かな砂粒で構成されている。また、３類も石英や黒雲母の粒径や含有量の違いで複数の胎土に分類できる可能性がある。

まとめ

高越遺跡の土壙60、61から出土した壺・甕・高坏の胎土分析を実施したところ、以下のことが明らかとなった。

形態、技法、胎土の肉眼観察から、在地と搬入に分類されている土器が、胎土分析では、同様な分類にならなかった。蛍光Ｘ線分析では２グループに、実体顕微鏡による胎土観察では３グループに分類できた。つまり、蛍光Ｘ線分類のＡグループは顕微鏡観察の１・２類に、また、Ｂグループは３類にそれぞれ対応した。そして、顕微鏡観察では、１・２類が閃緑岩起源、３類が花崗岩起源由来の岩石・鉱物が観察された。そしてＡグループ（１・２類）の閃緑岩起源の砂粒は、遺跡周辺および井原市内はもとより岡山県西部の地質基盤層では産出せず、高梁川以東の足守川下流域、つまり弥生時代後期の中心地域で産出する砂粒であると推定される。従って、現段階の分析結果から検討すると、同遺跡に持ち込まれた土器は、足守川下流域の粘土を使用した土器と推測される。また、Ａグループのなかでも１類と２類のように砂粒の大きさに違いがあり、足守川下流域でも複数の地点の粘土を使用しており、複数の地点から持ち込まれたと推定される。

Ｂグループ（３類）に関しては、石英、黒雲母の含有量・大きさなどから複数の胎土に分類が可能であった。また、遺跡が立地する丘陵基盤は花崗岩であることから遺跡周辺でも産出する粘土を使用していることが考えられ、非常に粗い砂粒を含む土器は在地で生産されたものと推測されるが、それ以外の土器は搬入の可能性がある。考古学的観察（形態、技法など）と併せて生産地について検討する必要がある。

今回、時間等の関係で一部の試料しか検討することができなかったが、高越遺跡のような一地域の限られた土壙内のほぼ同時期のまとまった土器でも複数の胎土の土器が観察され、土器を通じての当時の交流などが解明できると考えられる。今後も、試料の蓄積を行い、前述したことが再確認できるかどうか検討する必要がある。

この分析を実施する機会を与えていただいた、高田知樹氏および井原市教育委員会の方々にはいろいろお世話になった。記して感謝致します。

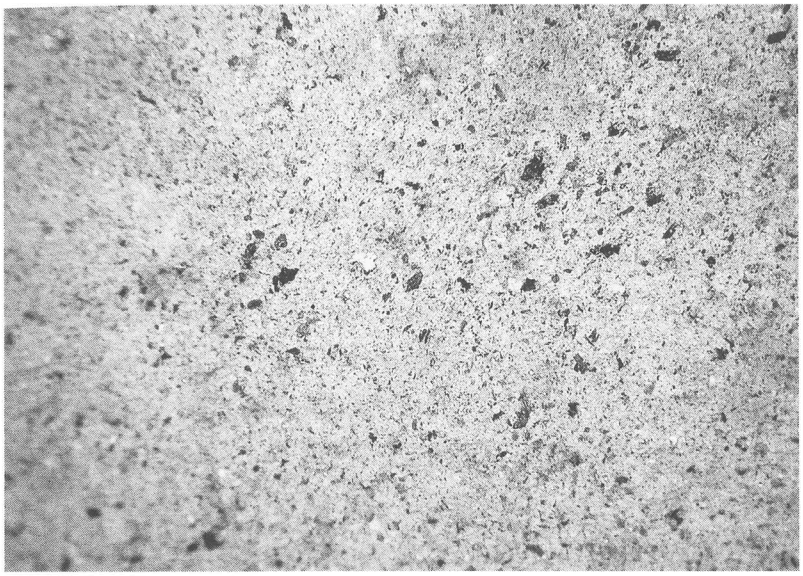


写真１．試料番号９（１類）
角閃石の砂粒が多い

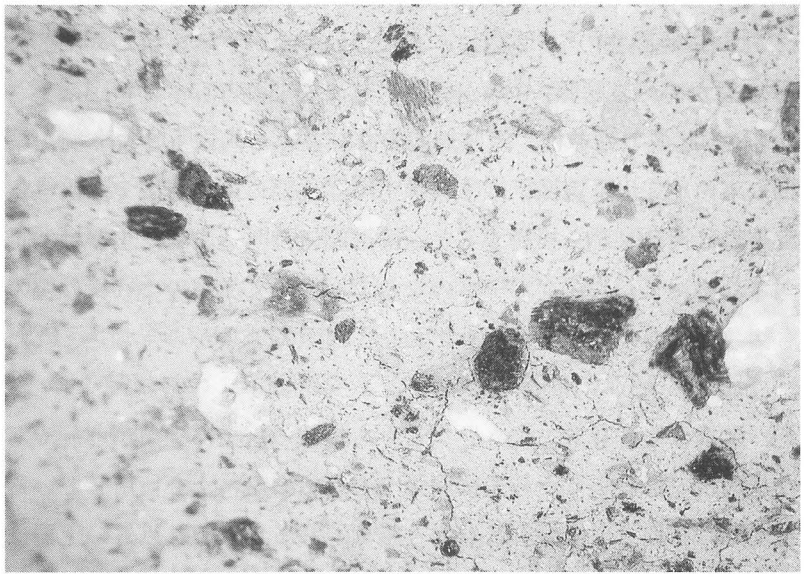


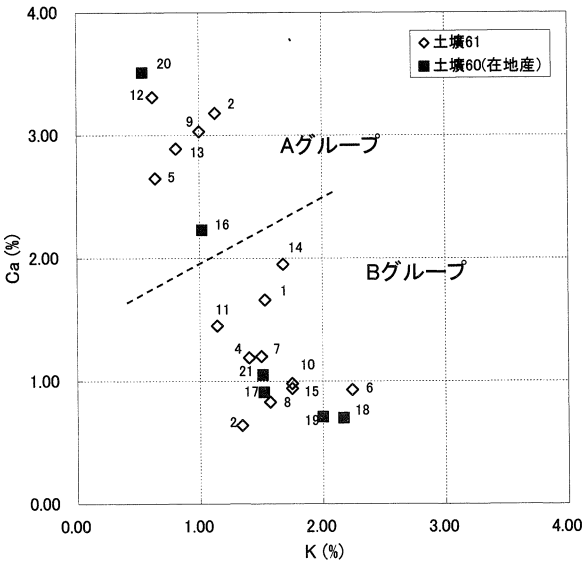
写真２．試料番号16（２類）
角閃石の砂粒が大きい

写真３．試料番号10（３類）

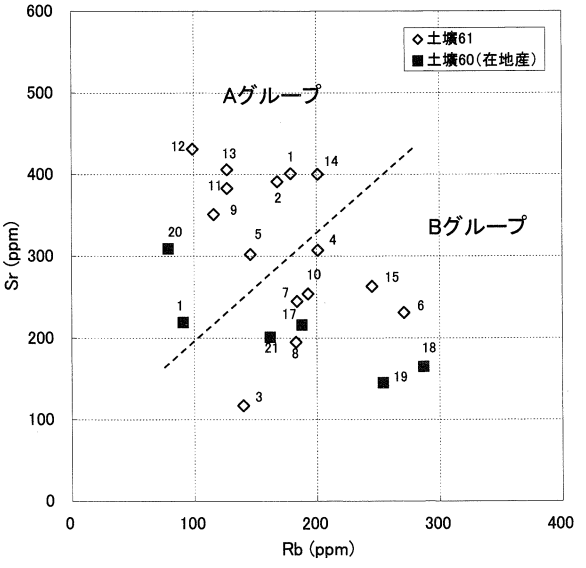
土壙60、61出土土器表面の実態顕微鏡写真

試料番号	遺物番号	遺構名	器　種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	479	土壙61	甕	62.22	0.76	17.64	8.44	0.16	1.94	1.66	2.64	1.53	2.28	179	401	329
2	442	土壙61	壺	58.38	1.05	20.63	10.45	0.22	2.27	3.18	1.64	1.13	0.80	168	391	167
3	480	土壙61	壺	70.98	0.86	15.47	5.89	0.05	1.79	0.64	1.92	1.34	0.90	140	117	274
4	493	土壙61	甕	56.82	1.01	20.87	11.36	0.14	2.08	1.19	2.08	1.40	2.40	201	307	243
5	490	土壙61	壺	54.76	1.21	21.18	13.17	0.21	2.52	2.65	2.47	0.64	0.86	146	302	161
6	513	土壙61	小型壺	68.24	0.49	19.04	3.49	0.03	1.81	0.93	2.47	2.24	0.81	271	231	268
7	472	土壙61	甕	63.27	0.96	18.48	8.93	0.15	1.82	1.20	1.99	1.50	1.35	184	245	345
8	438	土壙61	壺	60.44	1.07	20.02	9.88	0.14	2.01	0.83	2.54	1.57	1.17	183	195	272
9	457	土壙61	甕	56.53	1.04	21.12	10.88	0.23	2.20	3.03	2.56	1.00	1.14	116	351	119
10	448	土壙61	甕	65.43	0.82	16.87	7.79	0.26	1.65	0.98	2.21	1.75	1.84	193	254	366
11	474	土壙61	壺	68.14	0.81	17.33	6.53	0.07	1.56	1.45	1.56	1.14	1.01	127	383	247
12	499	土壙61	高　坏	55.62	0.76	22.09	10.89	0.17	2.58	3.31	2.59	0.62	1.06	99	431	97
13	447	土壙61	壺	56.85	0.97	20.69	11.62	0.20	2.14	2.89	2.12	0.81	1.24	127	406	160
14	478	土壙61	甕	64.07	0.77	17.70	8.25	0.12	1.78	1.95	2.00	1.68	1.08	201	400	347
15	476	土壙61	高　坏	70.18	0.49	16.71	4.53	0.04	1.77	0.94	2.27	1.75	0.95	245	263	261
16	428	土壙60	甕	57.92	1.03	20.06	10.62	0.18	2.16	2.23	2.27	1.02	2.26	91	219	217
17	420	土壙60	壺	64.90	0.95	17.57	7.46	0.08	1.94	0.91	2.72	1.52	1.93	188	216	283
18	423	土壙60	壺	63.56	0.93	18.90	7.67	0.07	1.82	0.70	1.96	2.17	2.06	287	165	318
19	426	土壙60	甕	63.77	0.90	19.53	7.38	0.07	1.93	0.71	1.90	2.00	1.53	254	145	328
20	419	土壙60	甕	53.64	0.98	24.13	10.61	0.17	2.37	3.51	2.66	0.54	1.22	79	309	114
21	421	土壙60	壺	62.85	1.11	18.42	8.59	0.12	1.80	1.05	1.83	1.51	2.41	162	201	331

表1　高越遺跡出土土器の胎土分析一覧表（%）　ただし、Rb・Sr・Zrはppm.



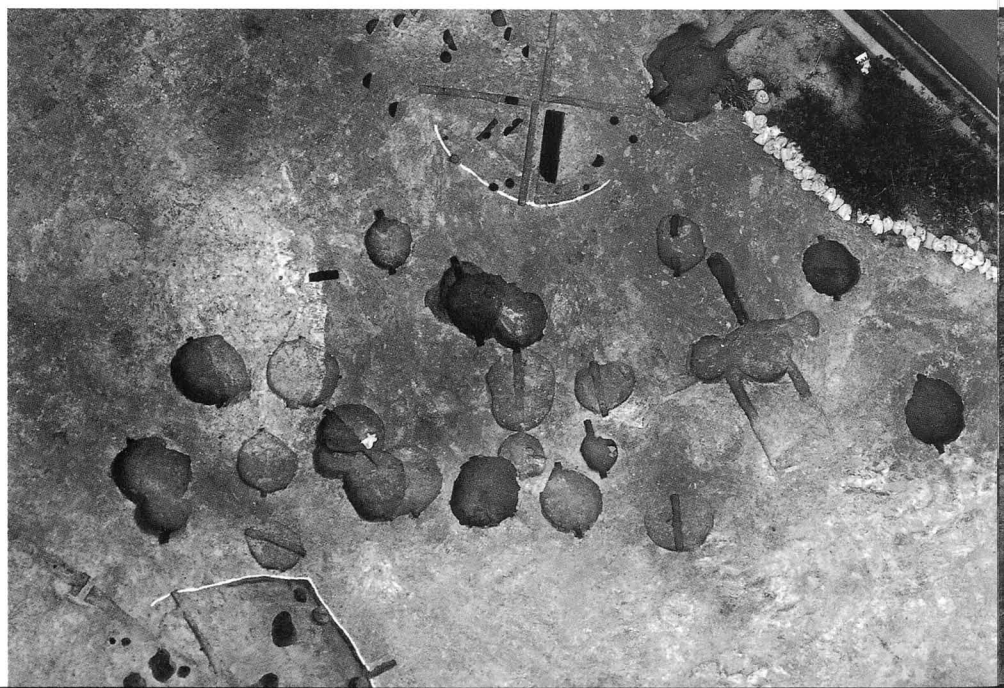
第1図　土壙60・61内出土土器の胎土比較(K-Ca散布図)



第2図　土壙60・61内出土土器の胎土比較(Rb-Sr散布図)

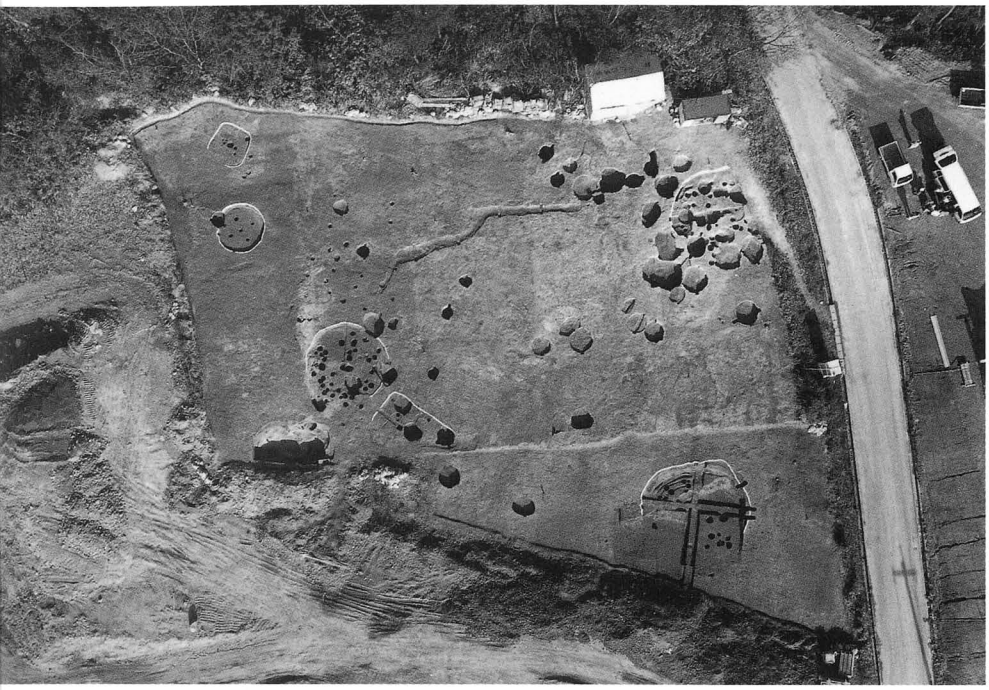
1　遺跡遠景（西から）

2　調査区（東）全景

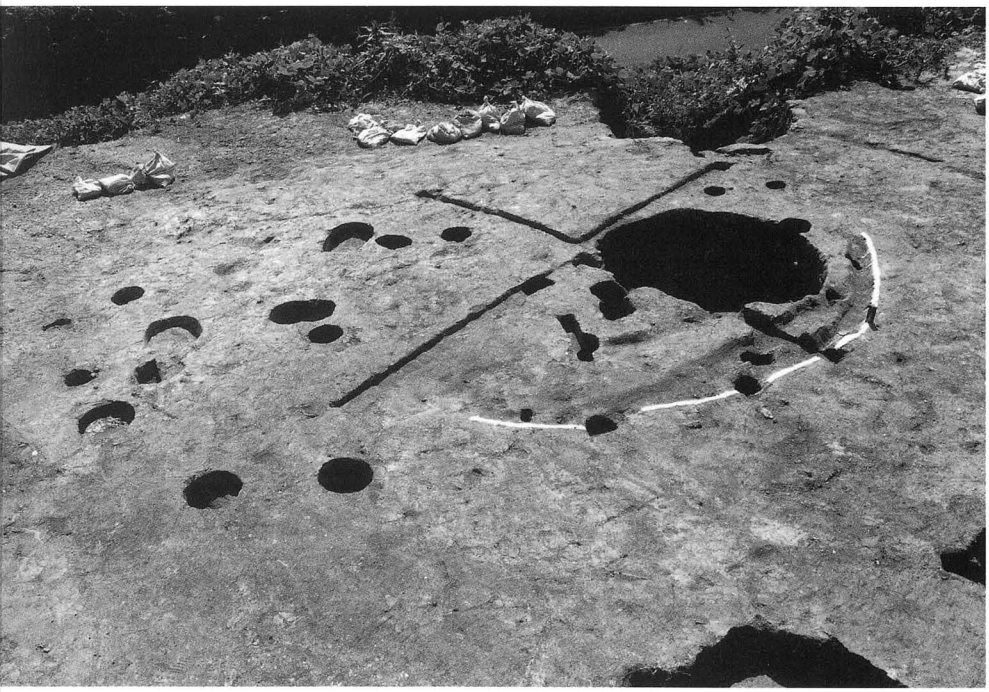


3　調査区（東）土壙群

図版２



1　調査区（西）全景

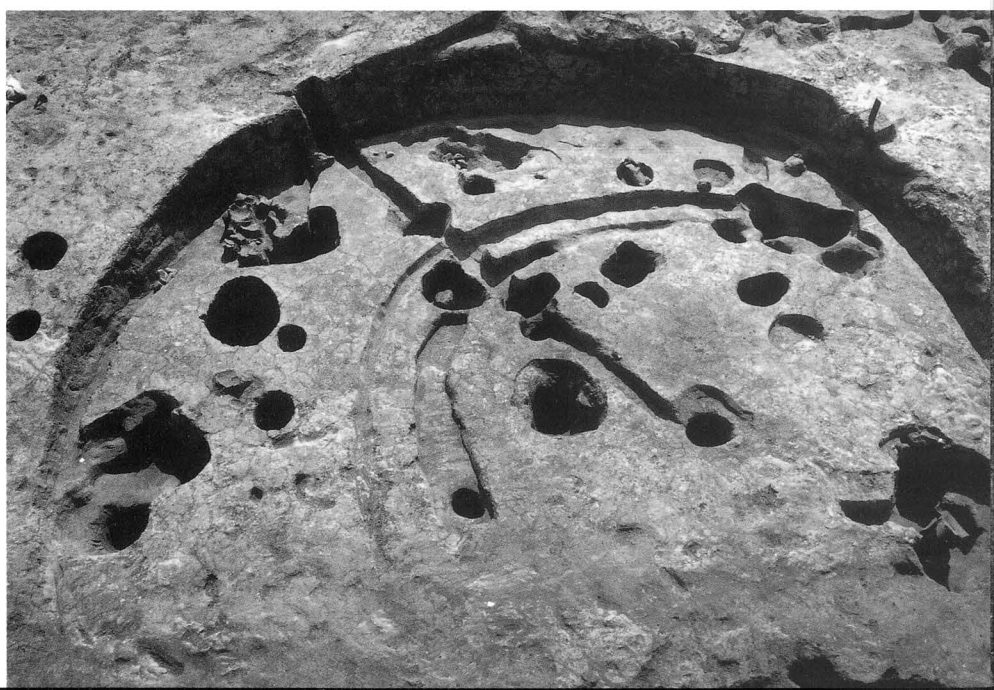


2　竪穴住居１（北東から）

3　竪穴住居２・３（西から）

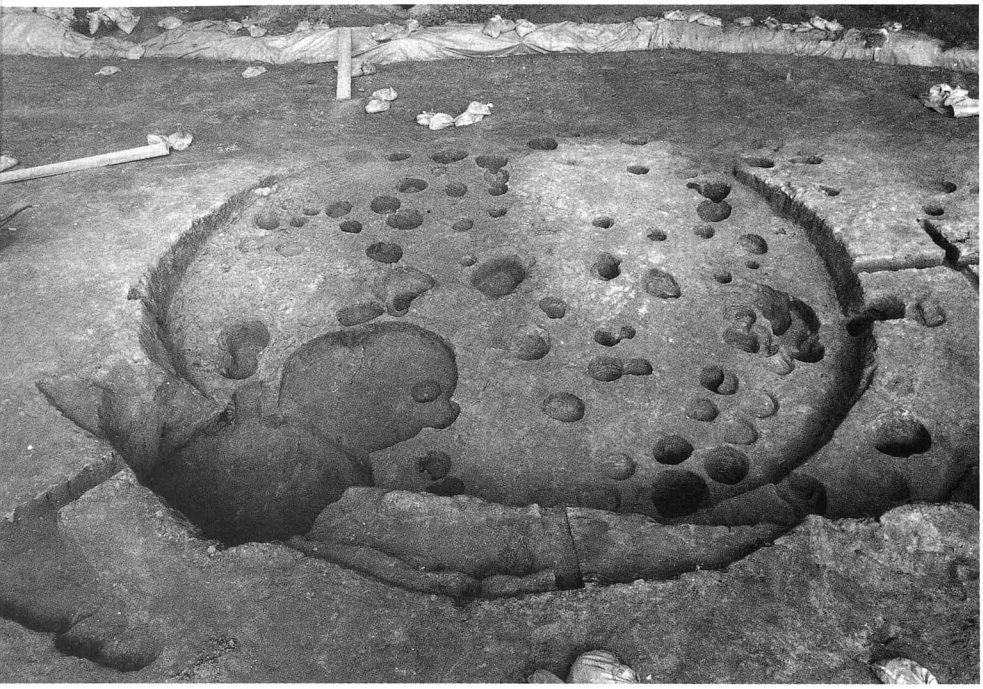
１　竪穴住居2
　　鉄鎌出土状況（東から）

２　竪穴住居２
　　鉄鎌出土状況（南から）



３　竪穴住居４（北から）

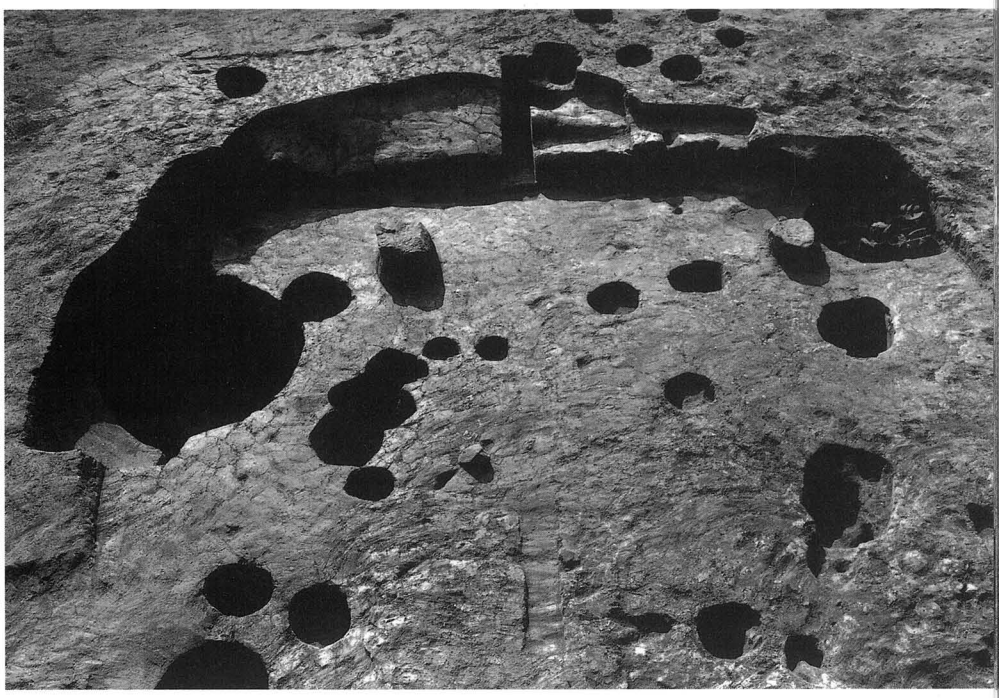
図版４



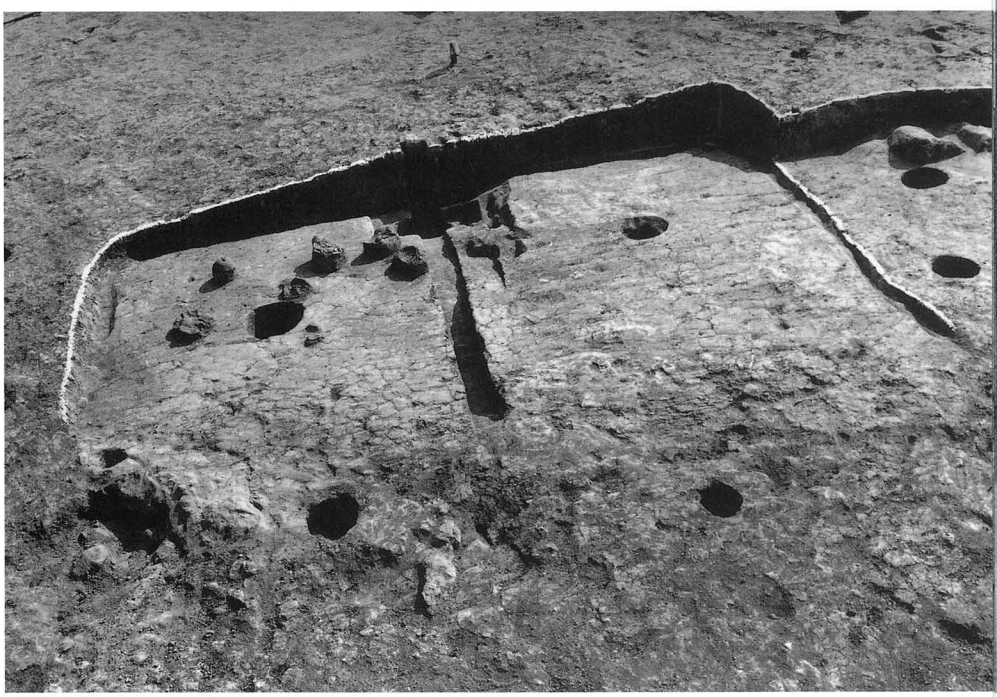
1　竪穴住居５（西から）

2　竪穴住居５
　　炭化材検出状況（東から）

3　竪穴住居６
　　炭化材検出状況（北東から）



１　竪穴住居７（東から）

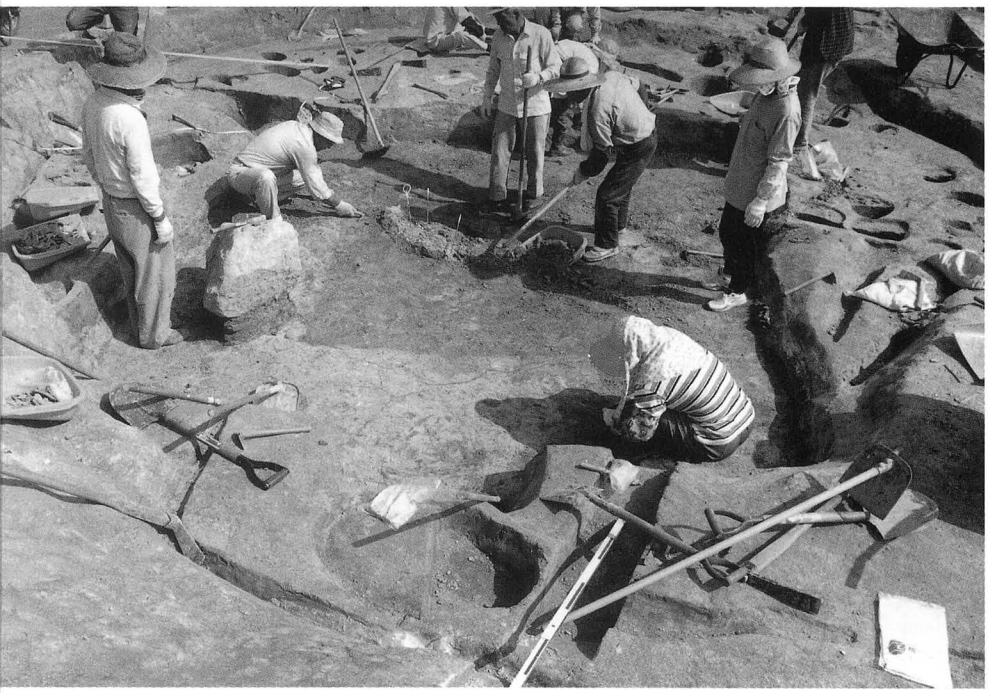


２　竪穴住居８（北から）

３　竪穴住居９（北東から）

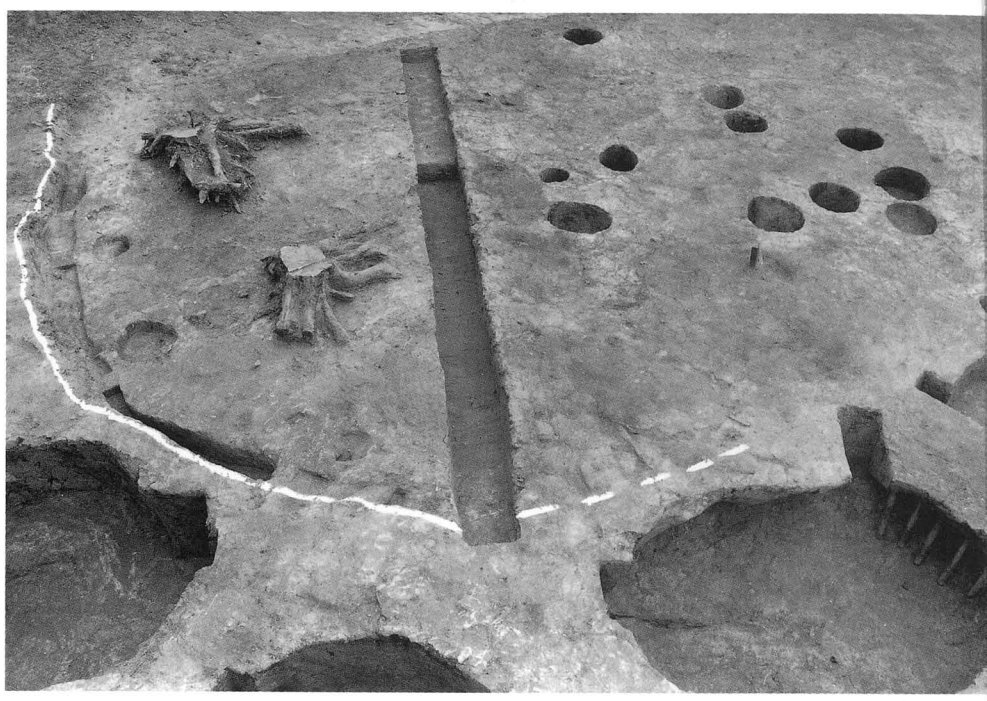
図版６

1　竪穴住居10作業風景
（北から）

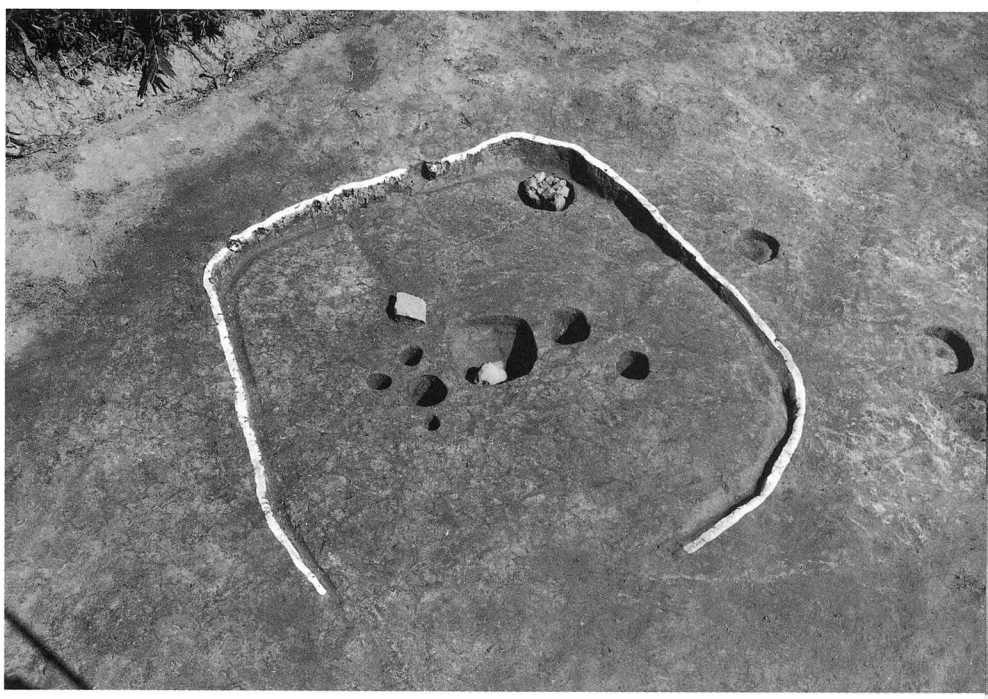


2　竪穴住居10
段状遺構検出状況（北から）

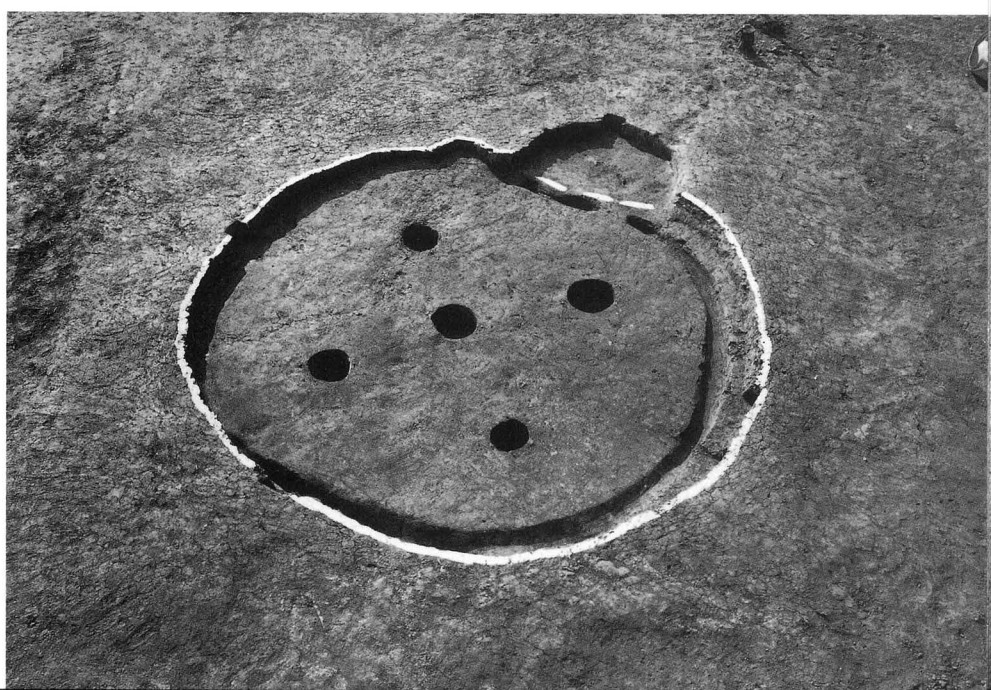
3　竪穴住居10方形住居
（北から）



1　竪穴住居11（西から）

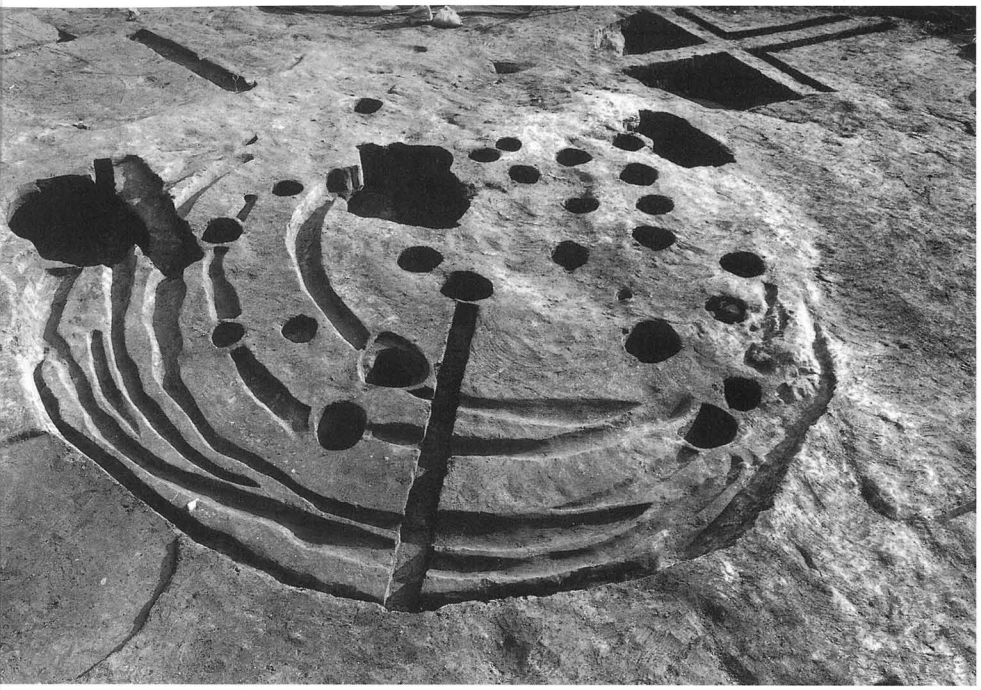


2　竪穴住居12（南から）

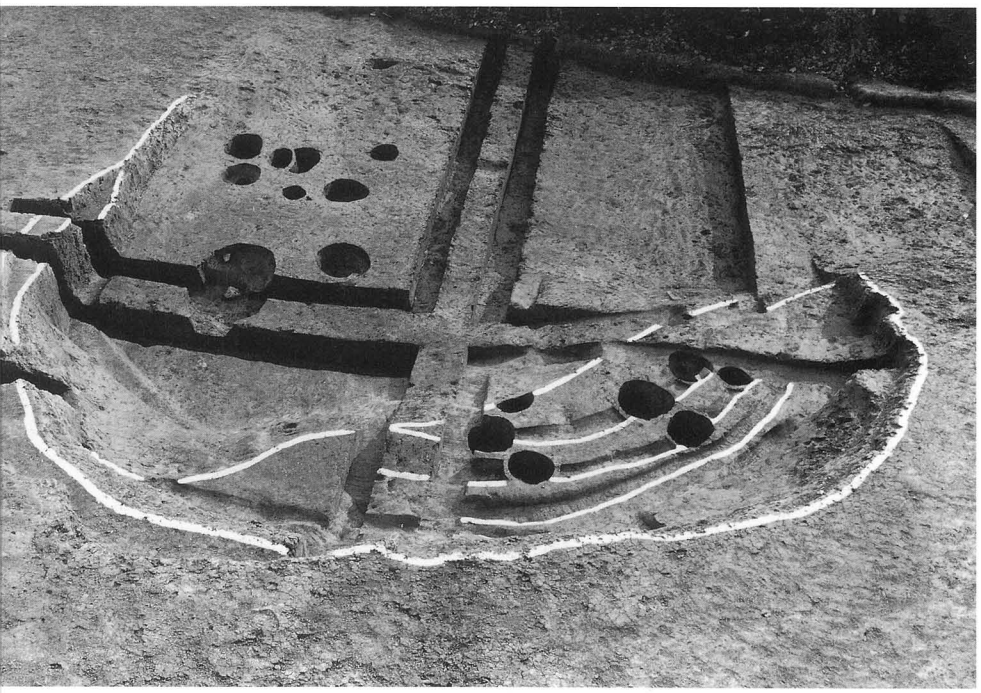


3　竪穴住居13（北東から）

図版８

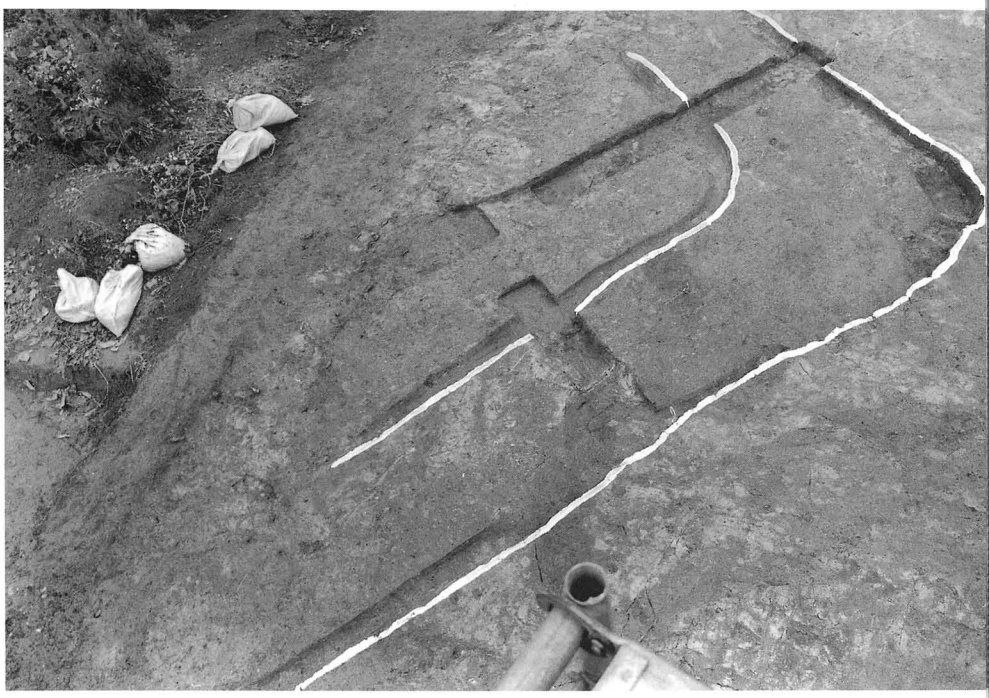


1　竪穴住居14（北から）



2　竪穴住居15（北から）

3　段状遺構１（東から）



１　段状遺構２（東から）

２　土壙１（北東から）

３　土壙５（南から）

図版10

1　土壙11（南東から）

2　土壙13（北から）

3　土壙30（南から）

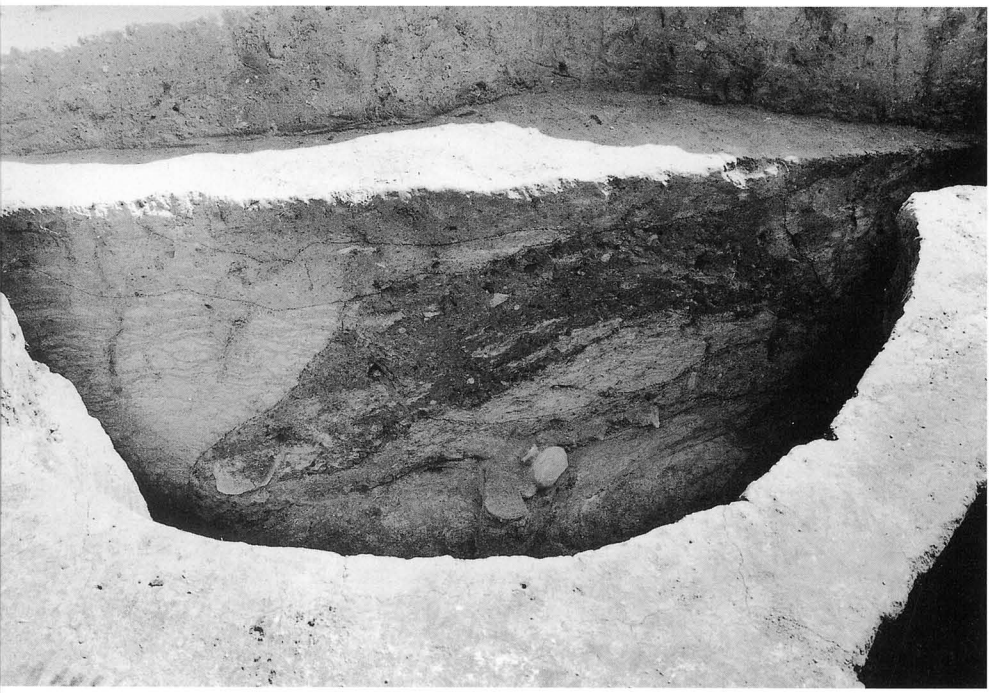
1　土壙34（南から）

2　土壙50（南から）

3　土壙52（北から）

図版12

1　土壙60遺物出土状況
（南から）



2　土壙61土層断面（北から）

3　土壙62遺物出土状況
（北東から）

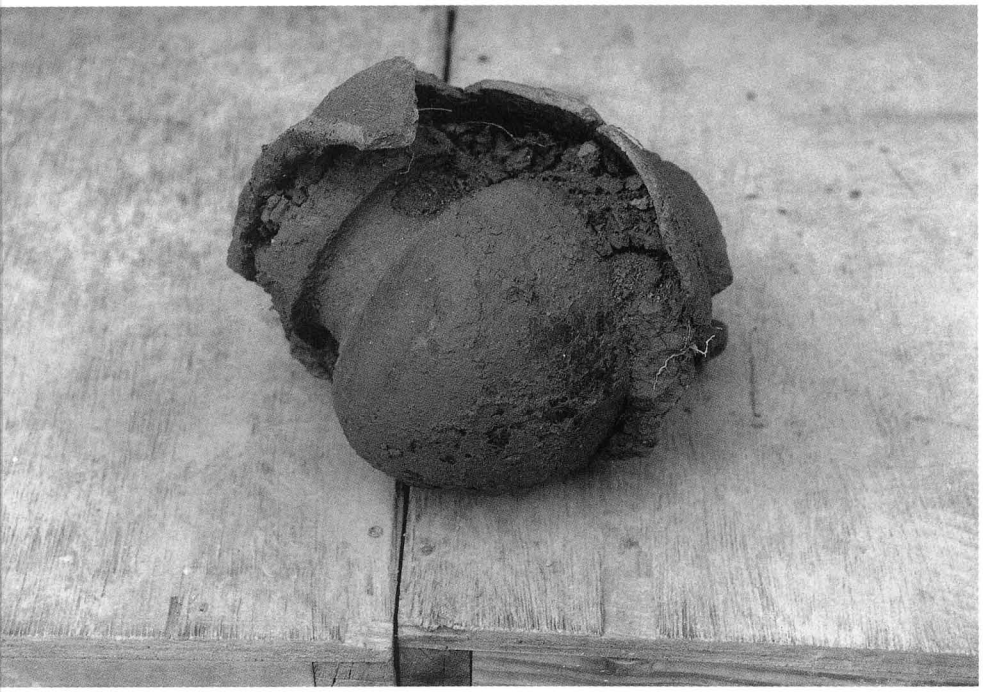
1　土壙65遺物出土状況
（東から）

2　土壙85遺物出土状況
（南から）

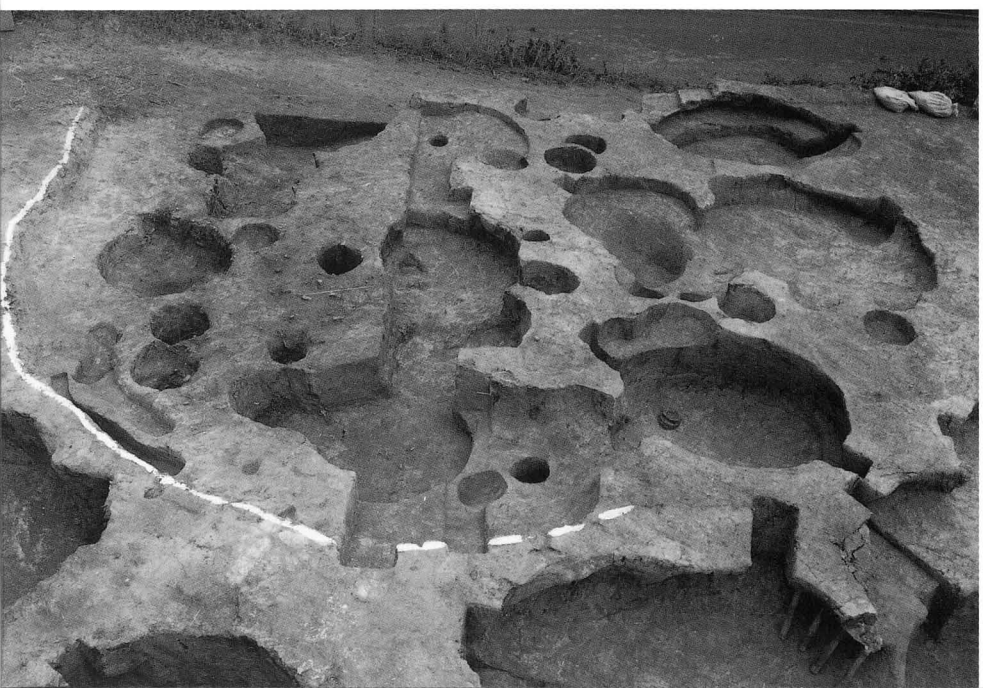
3　土壙86遺物出土状況
（北西から）

図版14

1　土壙86炭化米出土状況
（北から）

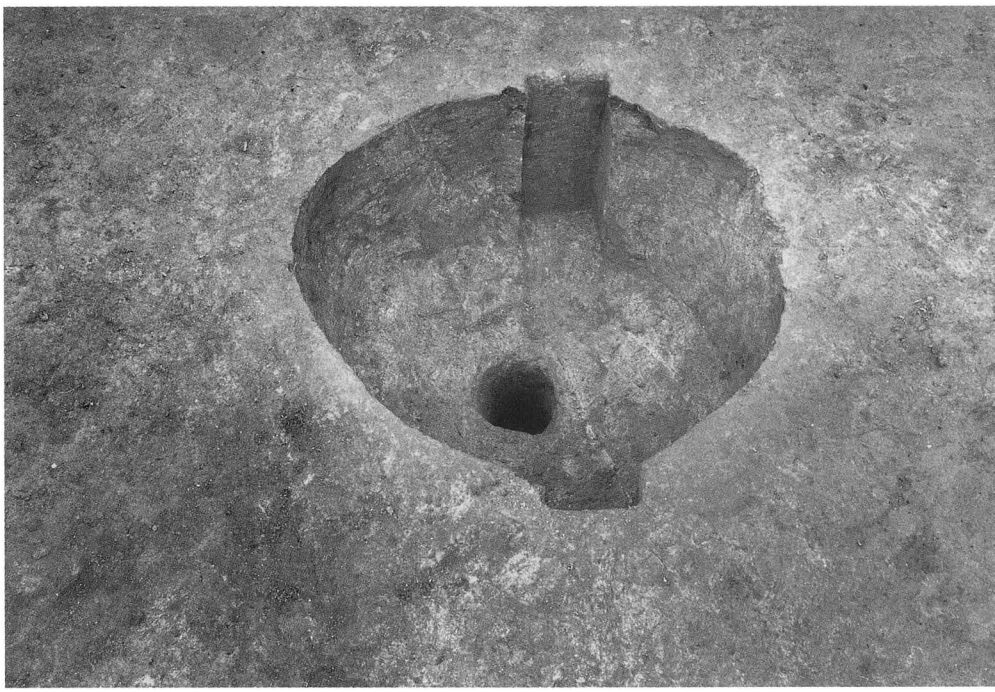


2　土壙87出土土器入れ子状況



3　竪穴住居11内土壙群
（西から）

1　土壙96（南から）



2　土壙103（南から）

3　土壙117（南から）

1　竪穴住居出土土器

2　土壙出土土器①

土壙出土土器②

687

285

704

363

369

505

316

227

308

528

638

597

512

560

508

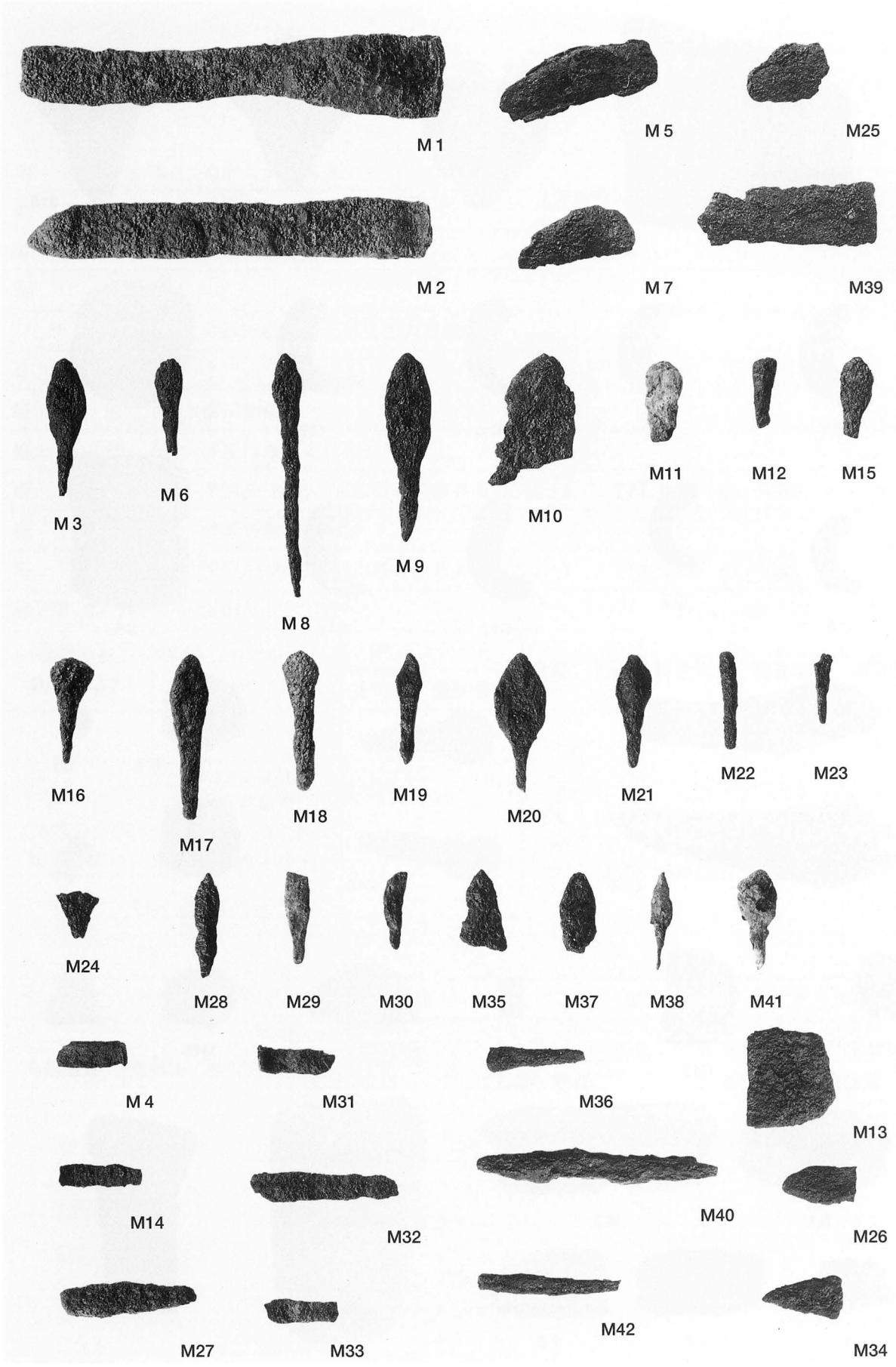
514

515

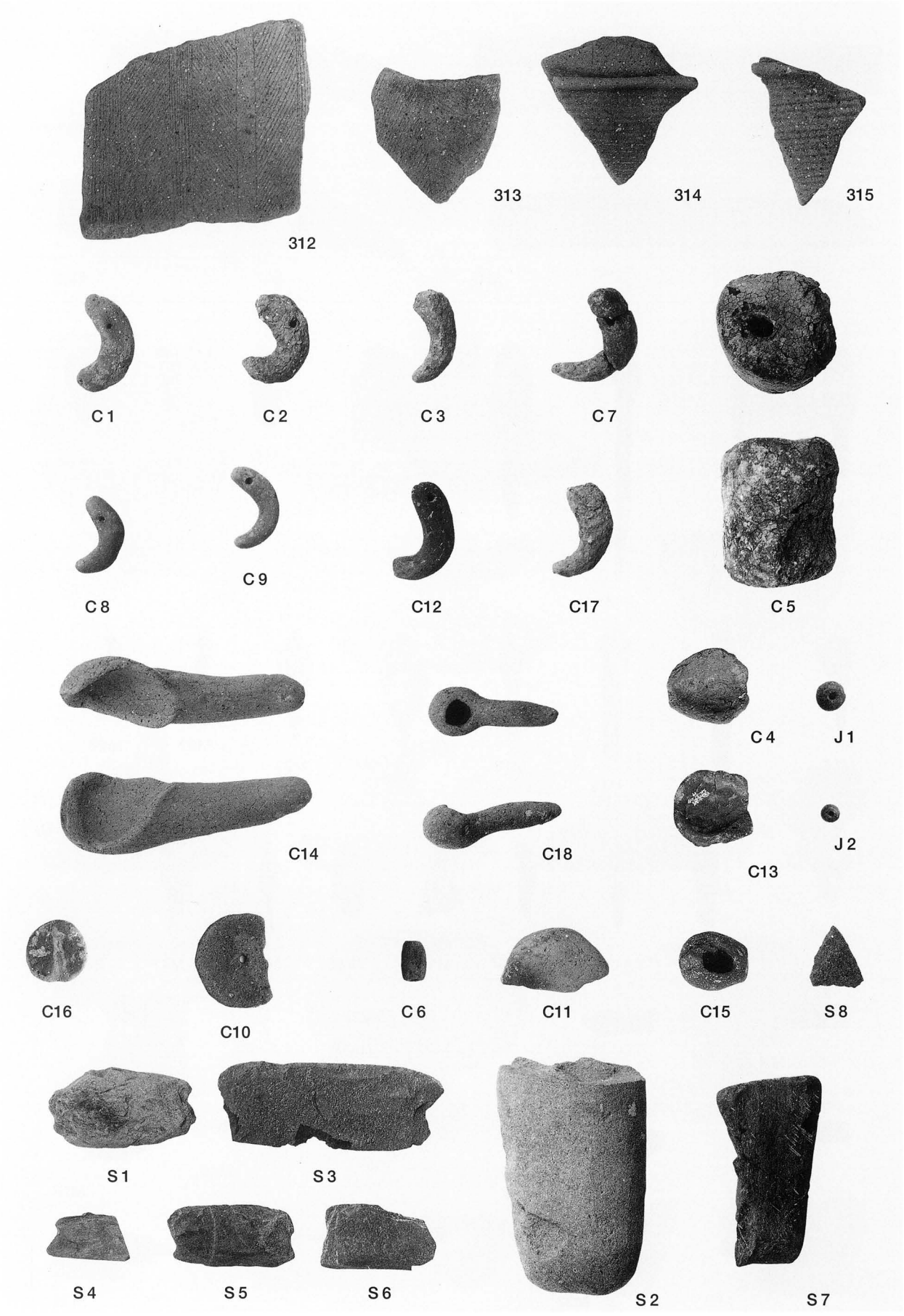
516

365

土壙出土土器③


M 1
M 5
M25
M 2
M 7
M39
M 3
M 6
M 8
M 9
M10
M11
M12
M15
M16
M17
M18
M19
M20
M21
M22
M23
M24
M28
M29
M30
M35
M37
M38
M41
M 4
M31
M36
M13
M14
M32
M40
M26
M27
M33
M42
M34

出土金属器



出土特殊器台・土製品・石器・玉類

報告書抄録

ふりがな	たかこしいせき
書名	高越遺跡
副書名	高越城址整備事業
巻次	
シリーズ名	井原市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	2
編著者名	高田知樹
編集機関	井原市教育委員会
所在地	〒715－8601　岡山県井原市井原町311－1　　TEL 0866－62－9533
発行機関	井原市教育委員会
所在地	〒715－8601　岡山県井原市井原町311－1　　TEL 0866－62－9533
発行年月日	2004年3月31日

ふりがな 収載遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかこし いせき 高越遺跡	おかやまけんいばらし 岡山県井原市 ひがしえばらちょうあざこまる 東江原町字小丸 1745－1外	33206	10－37	34° 36' 32"	133° 31' 20"	19990121 ～ 19991228	3,600m²	高越遺跡 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高越遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居15軒・ 貯蔵穴118	弥生土器・土製品・ 石器・鉄器	市内で初めて調査した 弥生時代の集落跡

井原市埋蔵文化財発掘調査報告2

高越遺跡

高越城址整備事業に伴う発掘調査

2004年3月27日　印刷
2004年3月31日　発行

編集・発行　井原市教育委員会
岡山県井原市井原町311－1
印　刷　西尾総合印刷株式会社